



說 小

富士

第三卷

德 富 健 次 郎
愛



原宿

PL817.04

F83

1925

v.3

る。舊藩臣の藪といふ四十年配の人が差配をして居た。熊次夫妻の家も、其借家の一つ。先には佐官級の軍人が借りて居たさうだが、其後久しく空屋になつて、「庭は犬の糞だらけでした。」と先日掃除に來た本宅の書生が笑つた。

角の櫻が氣に入つた。花時が思はるる可なりの大木である。落葉しはじめた其梢に、秋蟬がまだしきりに鳴いて居た。櫻を目標の此家、櫻の家と名をつけても好ささう。東と北は通りに向ひ、西と南は隣に接し、すべて杉籬で圍ふた小ちんまりした角屋敷。家は瓦葺の平屋が一棟ずつと西寄りに建つて居る。門は北向き。がらりくぐりをあければ、ヒバの二列が小さな玄關の式臺につづく。向ふさまにのめつたやうな建物は可なりふるび、打見には頗陰氣臭く鬱陶しいが、内は案外さうでもなかつた。庭の南東の隅が小高くなつて、此處に赤松が一本下枝を長々と此方へさしのべて居る。空屋時代、此邊の子供がよく其枝を鐵棒がはり、遊動圓木がはりに飛んだり跳ねたり腰をかけたり落しくらをしたもので、枝はつるつるに光つて居る。赤松を要に、庭は此方へ扇の三角形に開いて居るので、實際よりも潤く見える。梅、楓、茶山花、榎、椿さまざま常緑木を程よく植ゑ散らし、落ちついた庭である。庭に向ふて 西から數へ、床押

東京は赤坂、青山北町六丁目に、善光寺といふ尼寺がある。寺の門を入つて、本堂前から右に折れ、裏へぬける小路を行く。右は木柵でしきつた師範學校の運動場、其處にはよく午後の日を浴びて紅い顔の青年達が盛に球を投げ受けして居る。小路の果は靜かな屋敷町。此處はもう市内ではない、東京府、豊多摩郡、千駄ヶ谷村、宇原宿である。市内に屬する青山とは背合はせの邱つづき、西へなだれて明るく打開いた郊外の一區。此原宿の一帶を南北に長く青山線兵場の方へ貫いた大通りは、屋敷の間々に小さな店などあつて、やや町らしい容子をして居る。善光寺裏から大通りを突切つて西すれば、穩田田甫に下りる。此四辻の南西の角に、大きな櫻が一樹枝をひろげた二百坪そここの小さな屋敷があつた。逗子のあらめ屋を引きあげて四年ぶりに都へ歸つて來た熊次駒子の巢がそれであつた。此邊はもと藝州侯の下屋敷、維新以來追々開かれて、侯爵家の貸家が建ち、地所を借りての家も建つて、今は相應の屋敷町をなして居

庭だと云ふたり、八疊裏に小ぢんまりした四疊半が潜んで居るを見つけて、「如何して此様な室があつたらう？」と怪しむだりした。善光寺をぬけ、青山の通りを突き切つて、南町六丁目の兄の家は近く、歩いて十五分程には過ぎなかつた。夜、熊次夫婦が往つて二階に父母と話して居ると、兄が上つて來て父に向ひ、

「熊次さんの家の立派なのにびつくりしましたよ。」

と言ふたものだ。

全く、氷川町三年、逗子四年の後に、夫妻が興へられた原宿の住居は、過ぎものと傍目に見られて、月十四圓の家賃は可なり荷重であつた。然しやつて行ける自信は熊次にあつた。肥後熊次と墨黒々の札を門にうつて、熊次は大びらに一人前の心地になつた。南隣は筆勢見事な桑原醫院の大看板を玄關にかけて、桑原さんは醫師である。立木の多い西隣は、隠居ぐらしの山本さん。向ふ隣は、大通に向いた長屋建の側面で、角店はあき屋になつて居る。大通りにも碌な店はなかつたが、それでも近くに蕎麥屋があつた。紋付にあらためて熊次は兩隣に挨拶に行き、正式に引越蕎麥をくばつた。八字髯四十男の桑原さんは、羽織袴で答禮に來た。山本さんも來

入つき座敷が八疊。次が六疊。次が東へ廻り縁になつて、半床押入つき茶の間六疊。座敷と次の間の間は襖、六疊と六疊の間は壁で劃しきられて居る。以上南向き。それから座敷の北裏に細いぬれ縁つき四疊半が一室。壁を隔てて、玄關側の書生部屋が二疊。玄關二疊。臺所。これだけが北向き。茶の間から縁つづきで東向きに浴室。臺所から半間の土間を越えて女中部屋が三疊。座敷と茶の間寄りとにW.C.も二つ。物干し場は廣々して、滑車の箇所だけ小さな板屋根をかぶせた井の水もわるくない。井も浴室もなく、便所も一つしかなかつた最初の氷川町の家などとは、お話にならぬ比較である。九月末見に來た時、差配の藪さんが雨戸をあけてくれるにつれ、あかあかとさし入る日影を踏んで、室から室へあるきつつ、「やア、此處にこんな室があるー」「おや、此處にもー」と夫妻は驚喜の聲を放つたものである。柳行李二つ、蒲團包み一つで新橋から乗り込んだ時、

「此お邸にこれつばかりのお荷物ぢやアー」

と車夫が怪訝けげんの貌をした。父が來て見て、逗子別荘の安普請には見られぬ縁桁の太いのに驚いて居た。兄も來て見て、赤松を要にした三角庭を眺め、含雪さんの南禪寺の別荘がやはり三角

かつた。あらめ屋の室借り生活の熊次を、ちぢれ毛の濶額、人を馬鹿にしたやうな細い眼でちろちろまきも見た。暗闘は可なりつづいた。逗子の末期に、熊次は到頭癩癧を破裂させ、まきを呼びつけ母の前でしたたか叱つた。それ以來まきは熊次に對する態度をあらためた。而して今出世の新世帯に、彼女は駒子を助けて何くれとまめに働くのであつた。

逗子で書きはじめた「おもひ出の記」を、熊次は原宿で書き續けた。原稿生活の今日は、一日もなまけて居れなかつた。如何に忙しくも、仕事は休まぬといふ自負もあつた。引越し當座卓がないので、柳行李の蓋を卓にして、其上で原稿を書いた。而して出來た其日の分を青山の通りまでポストに入れに往つた。近くもない原宿のポストより市内のそれが早くて確實に思はれた。然しいつまで行李蓋の卓でも居れぬので、熊次は烏森の西洋家具店に往つて、大型のデスクを買つた。鏡板に緑の羅紗張り、抽斗が大小十もあつて、ニス塗梶製の頗立派なもので、約一ヶ月分の家賃をそれに抛つた。空恐しい氣もしたが、堅固な仕事の基礎が置かれたやうな満足之感もあつた。デスクに對しても、しつかり働かねばならなかつた。熊次はまた新坂下の古道具店で檜製の頗岩丈な餉臺ちやうだいも買つた。出るたび何かしら新生活の必要品を買つて歸つた。あ

たが、顔は見なかつた。然しずつと後で、正月の年始に往つて二三日すると、ばつたり門前で出會ふて目禮を交はした。六十過ぎのでつぷりした爺さんである。湯歸りの手拭を坊主頭にのせ、横目にちろり熊次を見て、「着物がありませんから」とにやり缺禮の詫をいふた。

本宅出入の御用聞きが、早速原宿にもやつて來た。米屋はふるい取りつけの芝西久保から、炭薪はおかみが氷川町時代隠宅の女中であつた關係で四谷から、魚屋、八百屋、酒屋は青山の通りからそれぞれ新規通帳を持參に及んで御用を承はつた。船送りの諸道具が未だ着かぬのでがらんとした臺所に朝々立ち出でて久しぶりに八百屋のツケギを手にしたたり、盤臺の中を覗くも駒子にうれしい事であつた。近所の八百屋酒屋など後れ馳せに新しい通帳を持つて得意とりに來るのを、先口があるからと斷はるのも氣の毒な思ひをした。返子の四年は女中無しで通した。原宿の新世帯には、東京逗留中だけ父母が女中のまきを貸してくれた。まきは返子も山手の農家の勝氣な娘であつた。親が亡くなり、兄弟が勝手に身代を使ひへらすを、まきは黙つて居なかつた。割前に與かるまでは抗議をやめなかつた。海水浴に來る東京女などが細帶姿であるくを、「田舎と思ふて侮^{あな}づる」とまきは憤慨したものだ。男を男くさくも思はぬまきを熊次は好かな

未だ住みつかぬ新居を驚かして、ある日二つの顔が玄關先にあらはれた。匂やかな眉のよく動く鴨志田君の浅黒い顔と、船津の甥嘉一郎が赭黒い、眼のぎよろりした顔。鴨志田君もあの痛手から四年過ぎ、新に戀人を得、此頃はもう父であつた。文壇では然し不遇の無籍者、親友の丁君がH館に居るところから鴨志田君の書くものも時たま其處から出る通俗雑誌のガラクタまじりに出ることはあつても、人目を牽くことなしに過ぎて了ふた。先には此原宿に居たさうな。今は穩田田甫を流る小川の上流に沿ふた霞ヶ丘町に住んで居る。熊次がまだ返子に居る内、甥の嘉一郎は大病をした。何とも知れぬ發熱を、剛氣の彼は眞裸になつて釣瓶の水を矢鱈浴びたりして病勢を募らし、東京病院ではすでに危篤に瀕し、牛の生血を飲まされたりしてやつと生命を取りとめた。返子の祖父母（實は大伯父母）が見舞つた時、嘉一郎が聲をあげてわんわん哭いた事も、一切の世話をした青山の叔父（實は再從兄）に向つて「親と思ひます」と

る日芝佐久間町の古道具屋から手鋤を一挺車の蹴込みにのせて歸つた。又はつぶれ、ドブでも浚つたらしく泥がくつついたままの鋤を見ると、「こんなふるものを！」と駒子は顔を疊らせた。熊次は頭を搔いた。然しその古鋤を遊ばせては措かなかつた。浴室の東側は、軍人時代の厩が取り拂はれて、後は潤い空地になつて居た。熊次は件のふる鋤で大まかに土をうなつて、無造作に菜の種を蒔いた。十月初旬とは云ふ條、菜は中々生えなかつた。然し終に緑の點々が赭黒い土の表にあらはるる日が來た。まきが旦那の買つた古鋤で畑に手を入れた。手を入れつつくづくと見て、まきは駒子に曰ふた。

「旦那様の土のかけやうが深過ぎました。随分苦しんで出て居ます。」

苦しんで土から出て來たは、若菜のみではなかつた。作り主自身が其若菜であつた。随分長いこと彼は土中にもがいた。三十三といふ齡をして、今年はじめて彼は世の中にいで、人がましく日光にあたつたのである。おくれ馳せの維新の活氣が熊次の衷に漲つた。良人が活活するにつれて、駒子も結婚七年はじめて面おもてを起す心地であつた。

かつた。其色白のおたよさんと共に、病後の嘉一郎は今赤坂は榎坂の小さな家にぶらぶらして居る。鴨志田君は海、嘉一郎は陸、共に日清戦争にK新聞従軍記者であつた關係から、二人は懇意であつた。浪人同志の話も合ふた。鴨志田君の才分には、嘉一郎も心酔し切つて居た。

「あぎやんすばらな男ですばつてん、書くものはそら鋭利なものを書きます。」

と熊次に曰ふたものだ。

住居近くに蒲焼があるといふ事は、食道樂の熊次に望外の福音であつた。二人の珍客を機會に、熊次は鰻井を命じた。相應の出來である。客人達は振舞の鰻井を食つて、餉臺の丈夫さをほめた。熊次の頭には、まだ返子から持ち越しの空想があつた。元寇の小説を書きたい、と謂ふのである。其話をほめかすと、二人は顔見合はせて晒つた。熊次が手作の畑を見ると、嘉一郎はやをら手鋏を押とつて、上手に土をうなつて見せて、土は慇^かう深くうなつて日に曝す程よい事をあべこべに叔父に教ふるのであつた。一つ年下の彼は、昔から叔父よりよろづにオトナであつた。

鴨志田君の來訪後間もなく、H館のT君が手紙をくれた。擔當の雜誌に寄稿の依頼である。美

感謝した事も、熊次は聞いて居た。嘉一郎の父は先年亡くなつた。父は次男であつたが、明治も三十になつていまだに丁髷を結ふて居た祖父は嘉一郎の父を自分のかかり子にして、生涯子の家に頑張つた。子は父に一生を捧ぐる外はなかつた。嘉一郎が父の臨終に歸つた時、父は嘉一郎に問ふた。

「逗子の祖父ぢいさんな、何てち言ひなはつたかい？」

「『阿爺ととさんと心中たい』てち言ひなはりました。」

「吻おん」

と嘉一郎の父は笑つた。而して死んだ。

嘉一郎の父の妹が天草に嫁いで居た。丁髷の父其ままの妹を、兄は好かなかつた。妹はわが女の一人を是非甥の嘉一郎にくれたがつた。嘉一郎の父が存命中は刎ねつけ刎ねつけして居た。父が亡くなると、天草の叔母は縁談を迫つた。母子相談の結果、嘉一郎はそれを断はりに往つた。断はりに往つた嘉一郎は、却て貰つて來て了ふた。嘉一郎は漁師そのけの赭黒い男であつたが、従妹のおたよさんは天草生れに似ず色が白かつた。黒が白に魅せられたのかも知れな

二人水入らずの自炊生活をして居る。極彩色の襖も古びきつた薄暗い一室に、老夫婦は喜んで熊次を迎へた。相變らずの豆十六盤をのせた經机にはづした眼鏡ものせてお爺さんが貰の烟を立てれば、お婆さんはまめまめしく茶を汲むで出す。大勢の子女はありながら、此家彼家と世話するだけは世話をして、用がなければ若い者の世話にはならず、悠々と斯様なお寺に室借りのめをと生活をして居る。しやんとした偕老夫婦の生活ぶりを、熊次はつくづく好ましいものに眺むるのであつた。

熊次はまた虞初子を訪れた。赤坂は福吉町のもと筑前侯の邸内に虞初子は住んで、舊藩侯家の歴史編纂の仕事をして居る。それは米鹽の爲、魂を打込む仕事は別にあつた。虞初子は近年追々文藝に遠ざかり、特質の熱をもてひたもの宗教に没頭して居るのであつた。年久しい基督信者、牛込教會の長老であつた虞初子は、ある機縁から浸禮派の教義にうたれ、玉川でふたたび新に浸禮を受けたりして、到頭牛込教會を出されて了ふた。同教會は女子學院で立つて居るやうな教會である。女子學院の卒業生で教師株のM女史が虞初子放逐の發頭人と聞いて、熊次は憤慨したものである。新聞社を出され、教會を追はれ、只管孤獨の途を辿る虞初子は、新約聖

しい手跡で切々の情を寄せたT君の手紙は、熊次を喜ばせた。もう十年も以前、「サカナヤさん」の紹介でK新聞に「落花村」といふ小品が出たのを讀むで以來、T君の名は始終熊次の頭にあつた。紀行文は殊に愛讀したものである。雑誌に書く事は斷つたが、熊次は得意であつた。來合はした父に手紙を見せて、

「黙つて居ても、先方から來ます。」

といふ熊次に、

「應」

と笑顔でうけた父は少し考へ、

「大家は來まい。」

と誇り貌の子を正した。

熊次も引き込むばかりは居なかつた。愛宕下の額縁屋に、不如歸の口繪の油繪の額縁を頼むついでに、芝山内のある坊に、逗子のあらめ屋で永い間室隣りであつた山野のお爺さんを訪ねた。お爺さんは熊次夫婦より少し早く逗子を引上げ、今は此坊の一室を借りて、お婆さんと唯

の水彩スケッチを貼つた。紅い苺の花に秋の日のあたつた頑固啓造が家、田越川の中洲で折つた赭百合、撫子の寫生、足跡残る新宿濱の凹い砂路から白波立つ緑の海のほの見ゆる、それ等の景色がデスクをめぐつた。座敷の八疊には、氷川町から逗子、逗子から船便で東京と持ちまはつた、あらめ屋の太兵衛爺さんの釘と金鎚で修繕済みの栗色の卓を据ゑた。駒子は茶の間の六疊に簞笥を据ゑ、机を据ゑた。餉臺も此處に据ゑた。逗子で拾ひ溜めた貝の陳列棚は、客間ときめた中の六疊に飾つた。K畫伯の浪子の油繪も美しい金縁の額になつて、これも客間の壁に挂つて居る。引越し當座は、手拭さげてつひ鼻先の露路を入つた處に煙突立てて居る錢湯に通つた。ある時父を連れて往つたら、腫物だらけの男を見かけて顔をしかめ、歸ると早速眞裸になつて頭から淨めの湯をかぶる騒ぎをした。そんな事から風呂桶も買つて、内湯を立てる事にした。買ふものは買ひ、來るものは來、新居もやや折り合ふて、おくればせの手作の若菜がそろそろ汁の實になる頃、十月二十五日が來た。熊次の三十三誕辰である。赤の飯、小鯛の煮附、庭の茶山花の三輪を食卓に飾つて、新居第一主人の誕生日は清々しく祝はれた。

書を原語で讀み直す可く、希臘語を始めて居た。聖書改譯の志を懷いて居るのであつた。薄暗い書齋の机を背にした長髪の方は、机の上から一冊の書を取つて、膝の上に開き、藪睨みの流し眼に見て、時々蹶くたびに「呔？」といふ間投詞を入れつつ熊次には不可解の音讀をして聞かすのであつた。手にとつて見ると、兩の頁は紅の雪を散らしたやうに不審紙が貼つてある。熊次は自分十四の昔史記を讀んで、ちと怪しい處には片つ端から不審紙を貼つて往つたら書一面眞赤になつて、

「そぎやん貼つて、どうしなはるか？」

と年長の一人に怪まれた事を思ひ出した。珍らしい客を喜んで茶を汲むで出た夫人は、四年前の夏山王下で見たよりずつと老けて見られた。評判の不如歸を未だ見ぬと虞初子が曰ふので、歸ると早速郵送した。日ならず虞初子の一書に接した。「文學に死にたる躬も、流淚禁する能はざりし。これ人情の眞を穿てる故と存じ候。」とあつた。

熊次は日々「おもひ出の記」を書いた。其内逗子から船送りの荷物一切も無事に着いて、からあきの室々に實が入つた。熊次は北裏の四疊半にデスクを据ゑた。而して小壁にぐるりと逗子

第二章

信濃の秋

め、氣に入るまではいくらでも出して来る。此店になければ、彼店にはある。足一たび日蔭町に入れば、誰しも何か相應のものを見つける。店の片隅にミシンの二三臺は据ゑて、ちよつとした直しは瞬く間にやつてくれる。熊次が社に日勤した頃、新入りの外交部員など、男振りは兎に角、くたびれた單衣一着、兵兒帶姿の尾羽うち枯らしたのが居れば、肝煎の朽原さんが引張つて出て行く。日吉町から日蔭町はただ一步である。一時間たたぬに編輯局の扉があいて、黒メルトンか何かできりつとした洋服姿の若紳士が少々きまりわるさうに然し嬉しさうに入つて來たものだ。それを思ひ出した熊次は、早速日蔭町に往つた。店から店と擇りあるくは柄がない。最初の店で熊次は一着の背廣と揃ひの外套を買つた。藍鼠スコツチのぐりぐりした、然しさしてふるくも見えぬ代物である。靴、帽子、手套、襪、ワイシャツ、ネクタイ一切の附屬品もそれぞれ日蔭町で埒をあけた。洋服は駒子の氣に入つた。着るも着するも大騒ぎの後、兎も角も出陣の装成つて車に乗る夫の凜とした姿を送り出す駒子は、うれしかつた。父が泊りに來てくれることになつて、留守の懸念はなかつた。

十月も末のある午后、熊次は澁谷から瀛車にのつて、其夜は高崎の岩原の義兄の留守に一泊

新聞賣込みの都合上、信州は南佐久地方の名勝を見に往つて書いてくれ、日當は三圓、汽車は青切符を上げる、といふ社の久野さんの話に、熊次は二つ返事で引受けた。原宿に未だ霜は下りぬが、庭の楓の二葉三葉染めかけて居るのを見ても、信濃の秋は思はれる。「おもひ出の記」も、旅先きで稿を續けられぬ事もあるまい。行くにきめて、早速仕度にかかつた。賣り出しの文士青切符で地方へ出向くに、いつもの見すばらしい着流しでもあるまい。洋服に限るところで洋服の持ち合はせは、十年前につくつたスコツチの詰襟が唯一着、それもふるびにふるび、胸のボタンはとくに合はなくなつて居る。狂人の着せらるる狹窄衣の用にしか立たぬ。新調といふ處だが、時日がない。斯様な時の日蔭町だ。名にふさう芝のあの狭い通りには、古本刀劍色色あるが、就中洋服の古着店は三軒置きに鼻つき合はせ、一着三圓五圓の廉物から金モオル附大禮服の眞新しい出物に到るまで、あらゆる種類を店先につるし、棚に積み、倉に藏

みを覺えた。「自然と人生」にも佐久新報の記者は並ならぬ同情を寄せて、「著者は畢竟詩人に候。」と書いた。熊次は其時初めて記者の名の河邊君を知つた。今度の遊も河邊君を當にして來た。然し彼は持前の大東から、河邊君について何等知るところ無しにやつて來たのであつた。宿に着くなり河邊君の事を問へば、其人は現に宿の下座敷に居るのであつた。風をひいて寢て居た河邊君は、起き上つて熊次を迎へた。痘痕のある、土佐辯の三十左右の人である。獨身の宿屋住居らしく、薄暗い宿の下座敷を風雅に住みなし、小屏風に錦繪を張り、机に「明星」などのつて居る。政黨關係の人かと思ふたら、日本基督派の傳道師で、年來白田に傳道しつつ、かたはら佐久新報に主筆をして居るのであつた。やがて其社主といふ眼鏡をかけて色白の若いYさんも來て、話の少ない熊次は途切れ途切れの應對にしばらく時を移した後、二階の一室に導かれた。掛物の七絶が先づ熊次の眼についた。それは先年から兄の肝煎で長野の新聞主筆で來て居る友山君の筆である。此地方遊歷の際書いたものと見える。

翌日は河邊君、Yさん、若い醫師のTさんと閼伽流山の奇勝を見に往つた。白田から馬車で一里半も北へ後戻りして、それから小一里東へ徒歩するのであつた。朝寒の後にはほかほか暖い小

し、あくる日は大分染めた碓氷を眺め眺め信州さして上つた。信州も輕井澤までは結婚前年の春と秋とに來た事がある。春は碓氷のアパート式鐵道開通の試乗に、濛々とした雨の中を社の挿畫擔任のK僊君と來、秋は今高崎に居る岩原一家が秩父の大宮から上州へ移つた卽下、母と藤岡まで來たついでに、熊次は單身碓氷妙義の秋色を採つたものである。然し二度とも信州の玄關から歸つた。座敷へ上るは初めてである。信濃は好い國だ。輕井澤へ上ると、頭が輕くなる。氣が颯る。淺間裾野は草皆猪毛の如く霜枯れた高原を、凜車は驀地に西へ走る。それを御代田で下りるも惜しかつた。

乗合ひのがた馬車は、蹄先下りに南へ一里岩村田の町を通り、千曲川を渡り、野澤町を経て、白田町に着いた。御代田から四里弱、南佐久郡役所、警察署などもあつて、所謂佐久平の中心、田舎には賑かな町である。馬車を下りて、白田一の宿についた。

不如歸が出た當時、好意の紹介をした都鄙新聞の中に、佐久新報といふ小さな田舎新聞があつた。逗子のあらめ屋でそれを見た熊次は、「佐久」が信州のある郡の名である事すら知らなかつた。筆者の名前も知らなかつた。唯田舎の小新聞には珍らしくのびのびした溫かい筆致に親し

と熊次も口を添へた。河邊君は下りておとなしく群に入つた。

閼伽流はただそれだけの山で、他に見所ある山でもなかつた。歸つて來た住持の相伴で、庫裡でとろろ汁の馳走になつて、日の未だ高い頃白田に歸つた。Yさんの家業は藥種屋である。熊次は河邊君と共に茶と呼ばれ、更に旗亭に名物鯉料理を味はうた。

次の日は松原湖に往つた。それは甲州境に近く、八ヶ嶽の裾にある。白田から南へ四里強、千曲川の上流に沿ふて石ころ路を馬車はひたのぼり行くのであつた。一行は、河邊君T君がぬけ、新報社の青年が加はり、三里行くと川向ふの東馬流に開業して居る醫師のKさんが東道として加はつた。昨日のTさんは好人らしい相をして居たが、今日の醫師は眼が光つて居る。一里行くと馬車を捨て、山坡を上つて、戸毎に湖の水をひいて水車のかかつた部落の中に、Kさんの本家に立寄つた。蕎麥の馳走が出る。佐久間象山、竹内式部、英一蝶の書畫が出る。到頭扇面、短冊、唐紙白紙の類が筆墨と共に出て來た。生涯に初めて晴れがましく字を書かざる熊次は得意であつた。然し惡筆を詫びて、扇に舊詠を一つ書いた。

蛙鳴く

小川の水に

影見えて

春日和になつて、一行皆外套を脱いだ。日蔭町仕入れの外套を左の小脇にかかへ、熊次は先頭に立つてずんずん歩いた。

「評判が好いものだから」

といふ囁きが後に聞こえた。熊次は步調をゆるめ、浅間裾野に黄ばむ落葉松の成育についてYさんの話を聞いた。やがて目的の地點に來た。閼伽流山は荒川をぬきにした甲州昇仙峽の一部を見るやうな花崗岩の山で、明泉寺は其山に據る天台宗の草葺の寺であつた。住持の留守を、栗茸、濕地茸などの松葉を擡げて簇々と出て居る山徑傳ひに裏山を歩るき廻はるも興があつた。今にも崩れ落ちさうな絶壁の根もとで、Yさんは一行に向つて寫眞機を据ゑた。河邊君が突と群をはなれ、一丈餘りも頭上の岩に攀ち上つた。熊次は息を呑むだ。黒布からYさんの顔が出て、眼鏡がきらり光つた。

「河邊さん、其處ぢやレンズに入りませんか。」

「さうですか。」

「一緒が好いですね。」

二輛の車が北へ白田の町を出た。前の車に熊次、後の車に河邊君が乗つて居る。野澤町を過ぎ、千曲川を渡り、淺間裾野を上る程に、眼界は次第に開けて来る。熊次は饜かず當面の淺間を眺めた。火山に似げなく圓つこい頭をして、何といふゆつたりした山の姿だらう！今日は小春の薄曇りして、赭黒い山の膚はふわり碧紗をまとひ、立つ烟もあるか無きかにほのかである。熊本育ちの平生見馴れた阿蘇よりも見榮えがする、と熊次は思ふた。然し淺間は眼界唯一の山ではない。千曲川を隔てて淺間と背くらべをする一座の山がある。頭は失つて、純碧色の大塊を聳立てて居る。

「彼は何といふ山ですか？」

「立科です。」

と後の車から、河邊君が答へた。

一叢咲けり　　雛菊の花

雛菊は嫁菜の花を意味したのである。

松原湖は人里近い丘の上の小湖であつた。周圍一里、深さ二百尋の水青々と、諏訪の社は年古りて、紅葉散りしく湖畔の路も流石に捨て難い風致はあるが、それは昨日の関伽流山も同じく、東京からわざわざ見に書きに来る程のものでもなかつた。歸途は馬流の甲信屋といふ小旗亭に一行鍋をつついて久しぶりに鹿の肉がうまかつた。それは十二の昔、京都で一斤六錢の鹿の肉を食ふた以來であつた。

関伽流と松原湖を見れば、南佐久地方で紀行文の材料になりさうなものはもう見盡したことになる。切符の有効期限がまだ三日もあるので、熊次は小諸から長野へ廻はることにした。小諸までは河邊君も送るといふ。白田を立つ朝、宿の主が例の唐紙、白紙を持ち出した。漢詩は出来ず、大字の假名は困る。白紙を半紙大に切つて、熊次は歌ともつかぬものを書いた。

大海原　八重の汐路の　末かけて　飛ばむと思ふ　眞鶴の

羽うちふるひ　鳴く聲高し　高砂の松。

つた。S君がもと熊次の甥の大江の益雄や熊次には畫の師匠の垂水君などと同時にM學院に居た事も、従つて自分より年齢の四五歳も若い人である事も知らなかつた。S君が木曾の生れである事すら知らなかつた。然しS君が信州小諸に居る事を知つて居たので、此機會に訪問を企てたのである。河邊君は相識で、熊次の爲に今日も東道の勞をとつた。

S君が出て來た。小作りな、きりつとした人である。思ひがけない遠客の來訪を喜んで、いそいそ二人を請するのであつた。高い上り框を上つて、書齋に通つた。西向きと覺しい半障子の下に机を据ゑた薄暗い書齋である。火鉢を中に、主客對座した。ゴワゴワした洋服の膝を正して危座する熊次に、

「どうぞお平らに、何卒お平らに。」

と主はひたもの勧むるのであつた。

佐久へ探勝に熊次が來た話を河邊君がする。S君は曰ふた。

「佐久はパノラマを見るやうな景色で、御覽になる處もありますまい。それに紅葉もまだ少し早いですね。尤も青葉より若葉といったやうに、紅葉の浅いのもわるくないものですが。」

立科も好い山である。立科の南東には、八ヶ嶽が浅間立科にまさるも劣らぬ雄姿を見せて居る。去年の秋の甲州行に、富士川の碛からつくづく眺めて心を牽かれた山である。此等の山山に迎へ送られ、車は浅間裾野を西へ上つて、小諸の町に着いた。小諸は浅間の膝にしがみついたやうな山の町である。兩人は車を下りて、古城址の旗亭で午食を済ますと、町の方へ上つて往つた。柿の葉の黄ばむだ蔭を音立てて落ち来る小さな流れに沿ふて、急勾配の阪路を上つて、町も場末の唯有る草葺の家の前へ來ると、

「此處です。」

と河邊君は熊次を顧みた。

それは詩人S君の住居である。S君の名は、熊次の耳にも久しく響いて居る。「文學界」に「琵琶法師」の悲曲を讀むだは、もう餘程以前の事である。M社出版十二文豪の中の「エマアソン」は、北村透谷著となつて居るが、完成に到らず急に逝いたので、S君が面倒を見てあれだけにしたといふ事を熊次も聞いて居た。詩集も追々出版されて、詩人S君の名は藉甚して居る。音律研究の爲、一時上野の音樂學校に入つた噂も聞いた。然し熊次はS君の詩集を讀んで居なか

「何しろ十九の年書いたのですから。」

「小説も近頃お書きのやうですね。」

S君は先頃新小説に短い小説を書いた。其小序に、S君は書いて居た。ある人物畫家が旅行に出る時、ラインの景色を眺めな、と警められた。ラインの風景に魅せられ、風景畫家になつて了ふ恐れがあるからである。自分も到頭ラインの景色を眺めて了ふた。さうS君は書いて居た。高名な詩人の作として、小説はあまり好評でなかつた。東京朝日の丸田君なども、作者の本領はラインの風景を眺めて然も描かぬ所にあらう、と評したものである。熊次も序文は記憶しながら、本文はよくも讀んで居なかつた。題名すら覚えて居なかつた。S君は顔を曇らし、

「親子三人があれでしばらく支へたのです。」

と懽然とするのであつた。

河邊君が「文學界」の話を聞きはじめた。一葉女史の噂が出る。非常に伶俐な、連中では圖ぬけたオトナで、

「何だか馬鹿にされてるやうでした。」

詩人らしく、洗練された口の利きぶりである。

夫人が茶を持つて出た。S君が紹介する。秀麗な詩人の妻は、夫にふさう美しい人である。熊次は硬くなつた。

「何卒おらくに」

斯く言ふて夫人が立つた後も、まだぎごちない客の態さまに、主も河邊君も呵々と笑つた。

S君は不如歸を見て居た。本文よりK畫伯の畫に興味をもつたらしく、

「油畫ですか？」

と問ふのであつた。油で描いてある。然し着彩ではない。

「否、Black and White だよ。」

と答へた。而して少し變であつた。

「獨逸の現代もの、如何です？　ハウプトマン、ズウデルマンなど——」

熊次は英譯も見て居なかつた。

話が少し途切れる。隣の室には、赤兒の啼聲がする。悲曲琵琶法師の話を熊次は持ち出した。

黙つて聽く。

話がまた途切れる。

「習字をおやりですか？」

河邊君が机の上の法帖を目した。

「ええ、煙草ばかりふかすものですから。」

書齋が暗くなつた。熊次は河邊君と告別の胸むくはせをした。

「どうぞ御ゆつくり。また何時お目にかかれるか分かりませんから。」

それはしんみりと身に沁むやうな調子であつた。然し客は終に立ち上つた。

小諸には水彩畫家の御池君も居る。河邊君は相識である。

「丁度御池君も留守なんです。」

と主は上り框に送りながら言ふ。

二人は辭別して、停車場近くの宿に往つた。

*

*

*

*

*

其頃は、

「丁度眉山君の『暗潮』が出来た時分です。——眉山君のもの、如何です？」

とS君は熊次に顔を向けた。

熊次は「暗潮」を未だ見て居なかつた。然し硯友社出の中では全く異色ある詩人肌の眉山君に好ましいものを熊次は感じながら、非力な物足らなさも併せ感じて居た。

「眉山君は好いですが、何かかう物足らぬ感がします。」

「物足らぬ感がしますか？」

驛の強い駒の如つんと頭を上げたS君の口から、七首のやうな一句が熊次を目がけて飛んだ。始終慇懃に、用心深く、下手下手とつとめてつましく出て居たS君も、然し意氣と抱負は隠せなかつた。現下の文壇に對する意見を熊次の間に對し、S君はのみさしの巻煙草を火鉢に突きさし、

「ゲエテが今日に居るとしてですね、何と謂ふだらうと思ひますね。」

ぽつりぽつり一句も濫にせぬといふ調子の主の話は、次第に熱を帯びてしばらくつづく。客は

永い荷を下ろして、すべてめでたく收まる。其様な筋であつた。T女史は虎列刺で亡くなり、明治女學校も女學雜誌もT女史の志を嗣ぐ石本さんの手に經營された。Kさんの息子のYさんは父肖であつた。父肖のYさんを母の子にすべく、石本さんは躍起となつた。「随分ひどい事を言ふ」と石本さんの宅に居た片貝が熊次に話したものである。然し優柔のYさんにも武士の血は流れた。ピストル強盜が押入つた。Yさんもピストルを以て應戦し、負傷しつつ強盜を走らせた。「元氣者だ。」とK新聞の編輯局でも噂し合ふたものである。T女史の歿後、熊次はKさんの消息を知らなかつた。ある時不圖沼山の又雄さんが、

「Kも信州の田舎で、水蜜桃の栽培をさせたり、村夫子をして居る。は、は、は。」

と笑ひ話を傍へ聽きした事があつた。其信州の田舎は小諸で、Kさんは何時の程からか此處に來て小諸義塾を興し、第二の夫人と新しい生涯を開いて居るのであつた。

淺黒い、瘠せた、五十左右の人が匆惶と出て來た。朝つばらからの來客に寝ごみを驚かされたKさんである。熊次の顔を見るなり、

「お、熊次さん」

翌朝宿を出た二人は、人を訪ふには早過ぎた時間を、今は留守といふI別荘を見に千曲川邊に下りた。政界に相應の名を成し石油で一時富を致した人の力の盛りに風景の地を擇んで建てた別荘である。雪を吐き雷を鳴らす川を見下ろす層樓には、大禮服姿の主の油畫肖像をかけ、斷崖から斷崖へ架した木橋には、第一智橋、第二仁橋など墨黒に銘うつてある。屋後の引込線には、石油のタンク車が二つ三つも置きはなされて居た。

I別荘からやや上つて、兩人はKさんの玄關に立つた。舊幕秀才子弟の一人として明治の初年に早く洋行したKさんは、同窓縁者の多くが名を成した中に一人あまり振はなかつた。明治女學校の創立者として女丈夫の名があつた夫人T女史にKさんは始終押され氣味であつた。Kさんは其學校も助け、また女學雜誌などにも書いて居た。熊次は餘程昔女學雜誌にKさんの書いた小説を読むだ事がある。洋行した男が破船して消息不明になる。故國では死んだものと詮めて、婚約の女はある著述家に嫁ぐ。死んだと思ふた男が生きて成業して歸つて来る。男と女と其夫と、三人三様の苦悶がある。然し女は夫を捨てない。新歸朝の男は世間に花々しく乗り出す。女は寂しい著述家の妻として、靜に夫を助けて行く。其内歸朝の男は結婚し、女も初めて

上である。空鞍の馬がひよこひよこ歩いて来る。少し往くと草の上に抛り出されて長々と人が横たはつて居る、それは色眞蒼のKさんであつた。『何でも餘程きつくやられたらしかつた』と河邊君が笑つた。然し眞顔のKさんは、一本調子の低聲に時々空咳を交ぜつつ、話はとりとめもなく跑廻つた。

「近頃漢詩は如何ですか？」

河邊君の言に、Kさんは卷紙にさらさらと古詩一篇を書いて見せた。漢詩にふさう伏櫪の慷慨が出て居る。河邊君が呵々と笑ふ。

話の中に午鶏が鳴き出した。まだ若いK夫人が出て、主客の前に蕎麥の饌が据わつた。蕎麥は本場、鶏肉入りのつゆがうまい。

「此邊ではね、蕎麥のシタジを上手につくる事が、嫁入りの大切な資格でね。」

且つ啖り且つKさんは話すのであつた。眼鏡をかけた油繪の婦人が、なみし梶からぢいと見下ろして居る。先夫人T女史の面影であつた。

河邊君が見たいといふ幅が塾にあるといふので、二人はKさんに跟いて小諸義塾に往つた。細

違つたといふ顔をした。一度信州に来て淺間の秀色を愛した熊次の兄は、近頃Kさんを介して御池君に淺間の水彩畫を求めて居た。河邊君が「肥後」とのみ通したので、Kさんは兄のつもりで出て来て弟を見出したのである。

彼から此と客の顔に眼を走らせながら、やや皺噓れ聲のKさんの話は、江戸から東京の昔話に何くれと涉つた。

「あれは何ですか？」

河邊君の眼は床の間の置物に注いだ。

「此かね、これは」

取り下ろした土焼の人形を客に手渡しながら、Kさんは話すのであつた。

「これは乾也の作さ。左様、乾山系の者でね、中々面白い、きつい爺さんでね。」

名人肌の乾也の話は、熊次にも面白かつた。話の次に未だ東京に生きて居る乙骨太郎乙といふ人の珍らしい名前も出た。(乙骨の音から、熊次は白田での話を思ひ出した。河邊君とY君と馬の話から、落馬の話をして居た。河邊君が小諸のKさんの落馬の話をした。何でも、川堤の

圖眼を上げた熊次は、ぐつと息を呑むだ。西南の方、立科山の北へつづく連山の絶間から、白金の光眼を射るものがある。雲の塊のやうだ。否、雲では無い、確に山、雪の山山である。山、然し山にしてはあまりにいみじく物凄い白光の塊である。

「河邊さん、彼の白いのは？」

「飛驒境の山です。」

やはり山であつた。山の國信濃の脊椎を、熊次はちらと見たのであつた。淺間でなく、立科でなく、八ヶ嶽でなく、其處にはもつと高く深い神秘の世界が蹲つて居る。其片影を今彼は見たのであつた。

熊次は眼を瞪つて、再たび彼白光の幻を見つめた。

い阪路を、Kさんは草履はたはた小走りにひよいひよいとのぼつて行く。塾に來た。木造の二階の一室は、簡素な椅子テーブルを据ゑて、塾長の室である。其板壁に河邊君の望む幅を掛けて、塾長の椅子に倚つたKさんは、流石に所を得て居た。創立者Kさんは日本基督派の耆宿の一人、其派のM學院出の緣故からS君御池君も此處に教鞭をとつて居るのであつた。事務員に聞けば、S君は午前の授業を終つて歸つて居た。年配の事務員が、塾長のKさんに心易い口を利いて居るのが氣になつた。

Kさんに辭別した兩人は、更に阪を上つて、S君に立ちながらの告別をした。上り框に膝をついて、匆惶禮を返へすS君の若さが、今日はあらためて熊次の眼に映つた。

小諸も濟んだ。次は長野である。切符の日限の切れぬ間にと、熊次は直ぐ停車場に往つた。河邊君も汽車まで送つて來る。白田以來、行き届いた河邊君の主振りを、熊次は心苦しく唯厚意を受くるのみであつた。宿の拂ひも車も、熊次が勘定を呼ぶ頃は、いつもそれはすでに濟まされて居た。

昨日曇つた北佐久の高原に、今日は午後の日があかあかとあたつて居る。停車場に行く行く不

居る。それ等の山屏風に圍はれた犀川、千曲の造つた谷は、黄ばむだ田の中に、此處に一簇、彼處に一團の青黒い村や杜を點して、すべてが春のやうにほいやりとして居る。熊次は持參の寫生道具を取り出して、此行にはじめて水彩のスケッチを作つた。

宿には友山君の手紙が待つて居た。宿帳から知つたのであらう。新聞に何か一文書いてくれと謂ふのである。熊次は沈吟して短文一篇を草し、使に附した。

「信州に入りてより、巨人の膝下にあり、巨人を仰ぎてわが心樂む。

余が所謂巨人は、怪むなかれ、淺間の山を謂ふ也。」

と書き起した淺間禮讃の文であつた。熊次の眸子に飛驒境の山山の白光は熬りついて居る。然しそれは淺間の像をかき消しはしなかつた。

熊次はやがて友山君の家に客であつた。兄の弟に致す友山君の厚意を、熊次も無下に躲はす事は出来なかつた。友山君がよく其文に「拙荆」と書く夫人は、ミツシヨンスクウル出のさらさらして少しも氣の置けぬ主婦であつた。熊次は友山君や其新聞社の若い人人と、車で犀川を渡つて、川中嶋の古戰場を見に往つた。

三

駒子はお茶の水を卒業前年の秋の修學旅行に、同窓と教師に連れられ、日光から長野へ廻つた。荻萱堂往生寺略縁起、川中嶋一覽圖の刷物など、其時の紀念に今も持つて居る。弘化四年の大地震に、信州も死傷夥しく、善光寺に逃げ込む者は皆助かつたが、本堂入口の大柱が今猶一尺も礎石の上をすつて居る話や、城山館の見晴らし、鏡臺山に鏡のやうな月が實際のつかつた話など、熊次も毎々聞かされたものである。

長野に着いて、大門町舊本陣の藤屋に宿をとつた熊次は、翌朝早速善光寺參詣に出かけた。其處の大本願は、熊次夫妻が住む原宿に近いあの善光寺の本寺である。本堂では、型の通り戒壇めぐりをして、難なく鑰を探り當てた。駒子が話の地震にすつた柱も見た。それから城山館に往つた。二百疊は敷けさうな客一人居ぬ大廣間から、熊次は心ゆくまで善光寺平の秋を眺めた。今日は薄曇つて、謙信が陣した妻女山も、佐久間が名のつた象山も、茫と唯輪廓ばかり見せて

た。然し客分の紋付羽織ゆつたりしたMさんが居た。神官出で、國文の造詣遂く、H館にも居たさうな。其夫人は先に「懷にしたる嬰兒の夢驚かさじと聲低ふ讀みたる朝」と名を署して不如歸の評を書いたを、友山君から轉送して來た事もあつた。「武男の君は最早終生再び娶らざるべし。」とそれには書いてあつた。

友山君の家に泊つた熊次は、學校歸りの惣領の嬢が日暮れても歸らぬと心配顔にあらはれて涙聲になる父親振りを見た。夫人と互に友達同志書生同志のがらがらしたざつくばらんのめをと振りも見た。凍てた路上に下駄とられじと小刻みに歩かねばならぬ長野の冬、木木枝枝の雪が其まま氷になつて水晶宮さながらの美觀、信州名物蜂の子のうまい話なども聞かされた。到る處梁山伯をつくる友山君の家に、青年の來客は多かつた。

「方で御講演でしたか？」

と青年の一人が熊次に問ふた。

「否。」

と熊次は答へた。

それは熊次が十六の秋であつた。「ますら男が太刀風寒し筑摩川」といふ俳句を作つた。雄渾悲壯、と自ら許し得々としたものである。母もほめた。雄々しい調といふた。兄が聞いて、「何だ、快劍斫陣腥風生といふ山陽の句の糟粕ぢやないか」とけなしつけた。熊次は不服であつた。山陽の其句より自分の方が餘程好い、と彼は獨できめて居た。鬼もあれ、「鞭聲肅々」や「西條山、筑摩河」や山陽のお蔭で年少熊次の血が川中嶋に沸いたは事實に違ひなかつた。一行は八幡の森まで往つて、車を下りた。霜枯れた桑畑の中に眞新しい木標が立つあたりが、三百三十九年前最後の川中嶋決戦に、虎の越公が蛇の峽公と揉み合ふた跡である。朽葉色の鍔頭しころ巾に眼ばかり出して、黒馬を跳らせ、小豆長光の大刀で七たびまで謙信は切りつける。將几にかけたまま軍配で信玄は打ぐ。あはやといふところを、原大隅が青貝柄の鎗に馬の三頭を突かれ、其まま物別れになつたは、何の邊であつたらう、と秋風わたる桑畑の彼方此方を熊次は見廻はすのであつた。

夜は西洋料理で友山社中の歡迎會があつた。食ふ事の外には滅多に口を開かぬ主賓の前に、歡迎會は友山君中心の編輯會議であつた。三日に涉つて不如歸を紹介した記者のR君は居なかつ

借りた紅樓夢と、林檎の籃と、大束な二日の印象を帯びて、熊次は長野を後にした。小諸を過ぎ、御代田を過ぎる。浅間裾野の落葉松は、熊次が信州逗留のしばらくの間に黄ばみに黄ばみ、水のやうな空に浅間の煙が勢よく立騰つて居た。

信州は好い國である。

「東京から来れば、誰もえらい者に思ふ。」

と友山君がぶつきら棒に言ふた。青年は苦笑し、熊次は悄氣た。

「電話で喧嘩する」と云はれた友山君は、齒に衣着せぬ人である。猪首大頭、がつしりした體格それ自身が、戦鬪の人を標した。地方の新聞に嶋を負ふ今も、持ち前の覇氣はあたりを拂つた。帝大のふるい哲學教授で曲學阿世の目ある博士が、曾て長野に来て大風呂敷をひろげた。待つて居ました、とばかりに友山君が跳り出たか博士をとつちめたものである。

然し苦勞人の友山君は、人をそらす事をしなかつた。客が辭し去ると、熊次は廣々した二階の書齋に伴なはれた。ランプの下に、友山君は天長節のK新聞に寄する原稿を書いた。熊次は高崎でも白田でもつとめて「おもひ出の記」の續稿を書いた。河邊君が見つけて同情したものである。小諸以來書かずに過ぎた。友山君が書くので、熊次も去年の天長節夜會の記憶を喚び起して、「余が最初の燕尾服」の一回分を書いた。枕についても、友山君はしばらく讀書をつづけた。惺々曉齋の繪傳、零本の紅樓夢などを熊次の爲には出してくれた。明くる日、みやげの林檎の世話から停車場の見送りまで、友山君の主振りに届かぬ限はなかつた。

白田からYさんの撮つた寫眞が送つて來た。あるものは信州遊記の挿畫にしたが、藥の加減か寫眞は日ならすいづれも黄ろにぼけて了ふた。河邊君のたよりには、明星張りの歌が幾首も書きつけてあつた。「さびしくもあり蘆の花」といふ俳句もあつた。

歸ると直ぐ熊次は「自然と人生」を小諸のS君に送つた。程經て熊次は左の手紙を受取つた。

ゆつくり御返事認むる積にて、かへりて彼是にとりまきれ、今日まで失禮致候。先頃は時
も處も思ひがけぬことのみにて御清容に接し、たゞさへ友ほしき山家にてのめつらしき御
物語、このことかのこと伺ひもし又御話も致度はかりにて、後にて思へは辻褄の合はぬこ
とのみ申上、恥入候。自然と人生早速御惠贈にあつかり、めてたき御筆のあと感賞と嫉妬
の外無之候。すぐさま御池子にも一讀をすゝめ申候處、同子も御觀察の精しきと新しきと
には胸をうたれ候様子に有之候。御池子はあとにて御來遊のことを聞き、拜眉を得ざりし
を残念がり居られ候。尊兄はコロオの紹介者、御池子はコロオの崇拜家、小生はまた門外
漢なれとも大のコロオびいき、この一事のみにても既にたゞならぬ交情のいとくちのこと

四

熊次が信州から歸ると程なく、父母は女中をつれて逗子に歸つた。桂庵の手から代木のもとといふ女中も來て、駒子の手許に不足はなかつた。眞黒い顔に二皮眠のきよりりした、下唇の厚い娘。ある夏の夕暮、友達と二人涼んで居ると、通りすがりの學生達が、何處の女學生だらう？ と私語した事を一期の思出にして居る女であつた。使に往つた嘉一郎の宅で蕎麥の馳走になつて、「よくしゃべる女ですなア」と嘉一郎に後で云はせたものである。逗子に歸つた父からは、忙しからうが運動を怠るな、自分の經驗によれば、穩田から宮益へ廻つて歸る位が適度の運動と思ふ、と細々注意を與へて來た。

熊次は執筆を怠らなかつた。友山君の二階で書きかけた「燕尾服」の續きも書いた。「人參午夢もなくちやア」と父が悦んだものである。氣乗りはしないが、約束だから信州遊記も書いた。日課の「おもひ出の記」は殊に馬力をかけた。

笑つた。「豚でも輕業をするぢやないか。」と友山君は苦笑したものである。友山君は直ぐ雪の信州へ歸つて往つた。

原宿の秋は暮れ、冬になつた。怠らず日課を書く熊次は、然し父の注意を空しくしなかつた。散歩は先づ界隈からはじめて、原宿は隈なく表札を見て歩いた。杉籬内に車井の軋る家がある。建仁寺籬から散り残りの紅葉の一枝ゆかしくさし出た家がある。諺の家、琴の家、子供の復習の爽やかな家、式日の朝には白毛の前立、金モオル、劔の鞘を鳴らして若い陸軍士官の出て來る家、家もさまざまである。稀には知名の家もあつた。熊次の門前から穩田田甫へ下りる傾斜のあたりは、幾段にも屋敷どりして、家はこれからといふ空地が多かつた。其處まで出ると、白茶に熱れた田甫の向ふ、駒場野代代木野につづく雜木山の一帯が長堤をなして、其上に相武甲の連山が青く高低して居る。連山の上には、白頭の富士がのつかつて居る。霽れた日曜の佳日には、寫生道具を持つて近郊を歩るき廻つた。西が開けた處へ來ると、富士が必顏を出す。それは四年間、逗子で日夕見馴れた海越しの露あらしはな全身の富士ではなかつた。連山を台にした半身の富士であつた。然し富士である。逗子で馴れた富士は、東京までも熊次の後を趁ふて來た。

き心地せられ候。何卒この山里にてのかの一夜を相知るのはしめとして、新しき御交りを開きたく、呉々も御導き被下、且は御屬まし被下度、願入候。只今日曜のゆふべ、あたりに人もなく候まま、御地の空なと想ひうかへつつ、御禮まで筆とりて、失禮なることのみ書きつけ申候。當地はすてに初雪、しかもまれなる大降の由にて、けふは一日雪に暮し申候。草々。

十八日

藤 生

蘆 花 様

心靜に法帖を玩味する人の、一字苟くもせぬゆつたりした筆の跡は、熊次に書外の多くを語つた。間もなく友山君の上京を聞いた熊次は、澁谷の其家を訪ひ、打連れて霞が丘町に鴨志田君を訪ひ、最後に二人の客人を原宿の家に伴なうて、吉例の鰻井に話の間をふさいだ。鴨志田君は瘠せて居る。熊次は逗子の四年に體格を造つた。然し友山君が犀を敷く肥胖ぶりは絶倫である。歩くも臆劫、自轉車の稽古をしやうかといふ友山君の話に、熊次は鴨志田君と聲を揃へて

第三章

思出の記

熊次の小さな屋敷からも、隣の木立の間からちらちら富士の影が見えたが、思はしくは見えなかつた。ある夕近火があつた。火元を見るべく、熊次は屋根に攀ち上つた。火元は見えた。然しそれより尙好いものを見つけた。富士がはつきり見えた。原宿の南の端に廣大な藝州侯の別墅がある。其處の杉の森の梢から西に朱を刷^はいた夕空に倚つて、紫の富士が悠然と此方を見て居る。

「おい、よく富士が見えるよ。」

熊次は叫んで、ころぶやうに屋根から下りると、寫生道具かかへて大急ぎでまた屋根にのぼり、消えてしまはぬ内といつたやうに急いで紫の富士を小さく寫生した。然しそれは消えてなくなる幻の富士ではなかつた。ちらちらと隣の木立の隙からも見え、高くに上りさへすればわが家からでも存分に眺めらるる現在の富士であつた。

子規門下の俳人で洋畫家のSさんが挿畫を描いた。モデルなど探して苦心の作であつた。「眞砂に大海の縁よちをつくらせ、葉末の露に月日の影をうつさせ玉ふ」といふ序の文句を、舊約聖書の句かと駒子は思ふた。靈筆恐れ入り候。」と臼田の河邊君は書いてよこした。然し世評はやはり舊年から續いて居るおもひ出の記の方が好かつた。熊次も心地よくその日課を書いた。少しだれ氣味になると、思はぬ刺戟が來て興を喚び起した。

「新報にかねて中瘋と聞こえた福翁の「瘡我慢の説」が出た。二年前亡くなつた海舟翁等明治に仕へた幕臣の出處進退に對する論難であつた。卅一谷人と稱して偏ひとへに平民道を鼓吹した其人が珍らしく士魂を發揮した其一文は、世を駭かした喜ばせた。當初福翁が私にそれを海舟に送つた時、海舟は答こたへなかつたさうな。それが新聞に公に出た時、海舟はもう千東池畔の土に入つて二年になる。海舟の知遇を受けた肥後寅一は黙つて居れなかつた。彼はわが新聞の全面を擧げて海舟の爲に雪冤の文を掲げた。其當時外國の干涉が來さうな由々しい恐れがあつた事實を力説して、日本全國の爲私を捨てて大勢に順應した海舟の苦衷を陳べたものであつた。十代から記者を志した彼寅一に、福澤は標的の一人であつた。彼の同志社時代、「學問のスス

熊次駒子は原宿の新巢に明治三十四年を迎へた。熊次三十四歳、駒子二十八歳である。西暦は千九百〇一年、第二十世紀は今年に始まる。めでたい今年を記念すべく、夫妻は正月早々新シ橋の丸木に往つて寫眞を撮つた。二人きりの寫眞は、新婚當時丸木で撮つたのと、翌年結婚満一年紀念に麴町の武林で撮つたのと、手札形のが二枚しかなかつた。今度はカビネにした。出來て來たのを見れば、素通眼鏡に口髭を立てた熊次は、日蔭町洋服外套で納まつて、右手にステツキをつき、左手に帽子手袋をつかむで立ち、駒子は新婚八年初めて大一番の丸髻に結つて、小紋縮緬は母譲り、帯は新婚當時のをしめ、澄して椅子にかけて居る。寫眞は早速逗子の父母に送られ、近くの兄夫婦にも一枚を贈つた。

新年の新聞に、熊次は「除夜物語」を書いた。白痴にも愛の光が通へば思はぬ人助けの奇蹟をする、といふ作意であつた。舞臺は信州に、實話體に書いたが、すべて架空の物語であつた。

私を捨て、公に殉し、先後する所を知らしむ。世教に裨するの大文字、豈海舟先生の爲に掃するのみならんや。」

使が歸ると、追つかけて兄の使が越後から到來といふ珍らしい大蟹の茹でたのを齎らした。來客で、後程席畫を描かすが、見に來ないか、と書き添へてある。あまり長いので使を如何したものかと駒子がとつおいつ思案にくれた程使を待たせて、熊次は苦吟の一首を酬ふた。

越の海の 心の いかに深ければ

さすかに かにの そたつなるらん

往つて見ると、三人の客の二人は郷里の熊本からで、若い方の一人は熊次も面識の田子さんであつた。少年時代熊本目貫の洗馬の橋を渡つて向ふ角の文林堂といふ大きな文房具店で熊次は時計折筆を買つた。でつぷり太つて眼鏡を光らした其處の主翁を、押柄で少し恐い人に熊次は思ふたものである。田子さんは其次男であつた。早くから時計工を修業し、父兄の二階で開いた店は追々繁昌して獨立の店を張るまでになつた。熊次がまだ社に日勤して居た頃、田子さんが上京すると、社の栃原君などが「開業以來餘十年、澤山儲出云云」と詩でからかつた。其後熊

メ」は一冊出る毎に購ふて、批圈で眞黒にしたものである。十五六の彼は、坊間賣つて居る福澤の寫眞の裏に「君コソハ我畏友ナリ」と書いて居た。彼の家塾の課外讀本には福澤の文があつた。彼が雜誌には「文字の教を讀む」と題して特に福澤の文を論じた。「文字の教」は明治の初年に福澤の書いた初學讀本である。兄が此論文を書く爲に、熊次は東京中の古本屋を漁りあるいて漸く其一冊を求めたものである。一時東京日々の論壇に據つて彼の論敵であつた碌堂居士が、肥後でなくては書けぬ、と折紙をつけた論文であつた。兄弟の父はまた福翁百話の愛讀者で、新報に出るかつかつ日々丹念に切つては古雜誌に貼つたものである。然し機縁は其子と其子の「畏友」を筆陣の間に相見えしめねば止まなかつた。K新聞の反駁に對して、福翁は努めて答の矢を放つた。それは最後の努力であつた。やがて福翁の訃が傳はつた。寅一は圖らず先覺の「畏友」の爲に引導をわたす役をつとめさせられたやうなものである。

論戰は大分世間の興味を唆つた。智慧と意氣の間に、團扇は好み好みにあげられた。寅一の反駁が新聞に出た朝、讀んで感激した熊次は、直ぐ一翰を飛ばさずに居れなかつた。

「海舟先生も必地下に笑を含むべく候。

は墨のまだよく乾かぬ獅子の頭を一つもらつて歸つた。襖に張つて見ると、肝腎の威嚴が缺けた獅子であつた。後さる展覽會で熊次は晩香さんに會つた。其畫も數々出て居る。熊次が默つて居るので、晩香さんは別室から一幀を出して來て、熊次の前に立てた。それは阿兄が詩囊からぬけて來たかと思ゆる天女玲瓏玉を弄する美しい畫であつたが、氣品がやはり缺けて居た。熊本の銀行騒ぎにつれて、熊次は思ひがけない「おもひ出の記」の愛讀者を舊師にもつ事を知つた。兄が市川先生の來書を見せた。眼科醫が本業で、詩文の達者、父の社中の共立學舎で十四の熊次は物理小誌の講義を先生に聞き、十五の春までは作文の添削を先生に仰いだものである。先生が朱を入れた作文帳を熊次はいまだに持つて居る。酒が好きな先生は、素の時でも酔つたやうな紅い唇無しの顔をして、眼鏡をかけてゆつたりとした溫厚長者の風があつた。それで自由思想の持主で、「任他」といふ題に「刈りもせず植えもせぬ野邊の八千草はおのがまにまに花の咲きけり」といふ詠があつた。兄も師事して、漢詩など見てもらうた。今以て忘年の交は續いて居る。先生の手紙には恁う書いてある。「おもひ出の記」を日々樂にして居る。熊本も銀行騒ぎで、來る客も來る客も其話ばかり。「おもひ出の記」は關西學院で主人公の切羽つまつ

次の逗子時代に、田子さんは徒弟を一人連れて父を訪問に來た。上京毎に男振りを上げる田子さんは、最早熊本でも若手の實業家として口利きの一人であつた。舊臘から熊本は重要な銀行の破綻で、西郷戦争以來の騒ぎをして居る。中央の援助を求めに、田子さん達は上京し、兄も郷里の爲に一骨折つて居るのであつた。小作りな東京辯の人は、席畫を描く爲に招かれた日本畫家の長山晚香君、詩人透谷の弟とは兄の紹介で知つた。熊次は阿兄を知らぬ。然し阿弟は思ひつめて世を蚤くする人の弟とも思はれぬ人である。長山さんは達者に席畫を描いた。小幅の山水を書く、「雪村張り」と田子さんがほめた。田子さんは餘技に漢詩を作り、畫なども鑑賞する。兄の紹介で初めて會ふた丁子爵から贗物の雪舟を見せられ、「これが雪舟ぢやア——」と苦笑すると、丁子爵が笑つて、それが分かるか、それぢや、と眞物を出して來た話をした。眼鏡はかけぬが、田子さんは追々文林堂の昔の主翁に肖て來た。丁子爵は贗物の貯藏家としても拔群の一人である。以前兄の家の床の間によく挂つて居た探幽の紙雛と公卿の二幅對なども、一向畫を識らぬ父すら「怪しいもんだ。」と胡散な眼を向けたものである。贗物の雪舟より、眼の前で描かるる雪村張りの畫は未だしも新味がある。勞に酬ふ一封を得て畫家は歸り、熊次

なる理論の人をして嫌厭せしむるの比に非ず。即ち不如歸の愛情をして高尚深厚ならしめ、思出の記の學生をして憤發興起せしむる、其效力親切にして且大なりと云べし。將又記事中妙に危急困迫遲疑踟躕の態を描寫せらるるの間、勇往獨進の氣象は自づから楮上に踊躍して、通篇を一貫せり。起手西山塾より基督に入る、往々令兄少年の行爲に彷彿する所あるを覺ふ。非なる耶。呵々。世上習俗の猥褻懦弱を醫治する爲め、努力之に従事せられんことを懇祈仕候。貴酬旁匆々不一。

一月九日

拙軒

熊次様

「おもひ出の記」を待ち詫ぶる者は、遠い熊本に限らず、身近にもあつた。岩原の姪のお君は、女子學院の圖書室に其日の一回を読み終るまでは、日課も手につかなかつた。五歳で亡くなつた唯一人の弟の名が主人公と同音であるところから、小説は弟の復活の如くさへ感ぜらるるのであつた。女主人公の松村敏子が巻中に出て來ると、「あ、叔母さんが出て來なすつた。」とお

た場面、所詮出奔の外あるまいと思ふて居た。早く見たくてたまらぬが、客が絶えない。やつと客足が絶えたので、急ぎ新着の新聞を出して見ると、果して其通り。如何にもよく書いて居る。殊に「残念なやうな、免れたやうな。」の二句、何といふ簡潔、何といふ含蓄。したたかにほめてある。熊次は悦んで直ぐ禮狀を書いた。折り返へし先生の答書が來た。二十年前の作文帳に入れた朱筆を其ままの右上りの瘦勁な文字で斯く書いてある。

貴書拜誦。先以新年御同慶に御座候。御兩尊益御多祥、欣喜々々。老拙頑健、幸に御放念是仰。貴著小説毎々拜讀、感服仕候。特に彼の造語の簡にして着想の密なるに驚き、鳥渡一言を呈候處、無存懸御腆情の芳翰に接し、唯々慙汗仕候。如命御幼少の時、御文章を添刪致候事も記憶仕候。其折にも一種異彩ありしは、故緒方（註、緒方直清、狷堂と號す。熊本の人。巨口矮軀、漢詩を得意とす。兄の家塾を助け、共に上京し、明治二十一年の夏鎌倉に病死す。）等にも追々噂致し居、今日の上進は曾て期せし所なるも、如斯小説界に雄飛せられんとは、實に意外に御座候。善哉、小説は弊風を矯正する一の手近き好方便にして、他の窮屈

見廻つて、午餐に東屋に寄つた。東屋には、正直正太夫のRさんが肺病で静養に来て居る。K雑誌がまだ出て居た頃、社に來た事もあつて、よそながら顔は識つて居る。刺を通すと、快く迎へられた。がらんとした二階の一室、角火鉢に双手を翳してきちんと座つた頬のこけたRさんは、靜かな調子でぽつりぽつりと紅葉露伴論を聞かすのであつた。「幸田君は時々こんなものを幸田君が書いたかと思ふやうなものを書くですね、尾崎君にはムラがない。」畢竟露伴は名人で、紅葉は「上手といふんでせうな。」とRさんは曰ふた。熊次はRさんが見たいといふ自然と人生を歸ると直ぐ鵠沼に送つた。左上りの特色ある字で禮のはがきが來た。其内小田原に移つたさうで、轉居知らせのはがきには「ミドリシンドウ緑新道」と假名をふり、「花は不斷の都を尙々遠く離るる事と相成候」と書いてあつた。「僕今月今日を以て死去仕候」の廣告が新聞に出たのは、三年の後である。

小説は終近くなつて、ますます評判が好かつた。弟の兄、新聞の社長の耳には、新聞小説の評判が作者自身よりも早く多く聞こえた。兄が熊次に話した。友山配下のRといふ記者が長野から上京して居る。「あなたは偉くも一時的、熊次さんは永久的」と云ふた。Rといふは先に不如歸

君は曰ふた。「傳道師とか貧乏師とか」と叔父の筆が滑ると、貧しい牧師を父にもつ彼女は、顔を疊らした。社中の評判もととりであつた。甲府の新聞をやめて歸社したY君は、面白いには面白いが、もつと信仰上の煩悶があつたら曲折があつてよからう、と言ふた。關西學院のリヴィブルの記では、丁度其様な光景を目撃した事もある社説記者のH君が馬鹿々々しさに同感を表した。やがて主人公を信者にしてのけるつもり著者に、それは撥つたい同感であつた。

女主人が追々顔を出すにつれ、熊次は興に乗つた。作者が興に乗れば、讀者も興に乗つた。一度評判のはがきを新聞にのせると、それは投書の洪水を惹起した。一人で二度も名を更えて投書した者もあつた。ある日其投書家が原宿に來訪した。客間に請うると、少し金を貸してくれ、と云ふは眼鏡をかけてしよぼしよぼ眼をした二十二三の青年であつた。金談をする程懇意な仲でない、と熊次は斷つた。

兎もあれ人氣が立つた小説の作家は、瓦斯澤山の氣球の如、氣も心も輕かつた。いよいよ鵠沼の Love Scene に來た。返子生活の四年に江の嶋は兎に角、鵠沼を未だ見て居なかつた。熊次は鵠沼を見に出かけた。麥二寸の砂畑にから風の寒い二月のある日であつた。一わたり其處ら

春季皇靈祭から花にかけて、父母が出京した。父母が昨日着いた其明けの朝、おもひ出の記がめでたく新聞の上に終つた。熊次はおもひ出の記を書き終へた。逗子の初秋にあらめ屋で書きはじめ、原宿の秋から冬と年をあらためて、梅が香の春に成つた。半歳も新聞を賑はした仕事を終へて、熊次は身輕になつた。ステツキをふつて、穩田田甫から源氏山をのぼり、山の手線の陸橋を渡り、氷川祠から宮益へ廻つて歸る常例の散歩も、一合上つた努力のあとの清々しい心にかかる隈もなかつた。あたりは日に日に春であつた。

然し熊次はまだ暇ではなかつた。彼はそれを單行本にして世に送り出さねばならなかつた。「おもひ出の記」は可なりの長物語であつたので、新聞紙上の好評を力に、最初は既出の分をかつがつ分冊にして出さうと意氣込むだ。分冊はいけぬ、完結の上で一冊にして出すに限る、といふ兄の意見に、熊次は直ぐ分冊を思ひ止つた。

「直ぐ負けておしまひなさる。」

と駒子がこぼした。然し熊次は強ても分冊にして出す自信はなかつた。

兎に角小説が完結したので、熊次は早速出版仕事にかかつた。書き終へる。新聞の切りぬきに

をほめた記者である。去秋熊次が長野に往つた時、Rさんは居なかつた。Rは某の旅館に居る、電話でもかけたら、と兄の言に、熊次は直ぐ兄の家の電話口に出て、R君を原宿の晩餐に招いた。兄も来やうと言葉をつがへた。丁度陽暦の三月三日の節句で、「旅にありて雛の座敷に呼ばれけり」とうち興じて原宿にやつて来たRさんは、雛一つ飾つてない落ちつかぬ六疊に、話の少ない主人と對座して窮屈な二時間を過す運命を強いられた。Rさんは同じ信州出の洋畫家F君を訪問した話をした。F君は此頃本色の畫よりも書道に凝つて、話は書の事ばかりであつたさうな。晩餐が出た。吉例の鰻井が唯一品。飲物はお茶ばかり。雛の白酒すら出て来ない。兄が車でやつて来た。Rさんは俳人で、信州が出した特異の俳人一茶の研究も大分積み、近くに其結果の單行本を出すさうである。「何卒お手柔かに」とRさんは豫かねて兄に曰ふのであつた。洋服の膝を窮屈さうに座つた兄は、

「運座でもやりませうか。」

と云ふたが、物にならなかつた。話は榮えず、座は白らける。身を起して、兄は匆惶と車で往つて了ふ。Rさんもやがて暇を告げた。

原宿の瑞々しい若葉の中から五月の鯉が跳つて、熊次駒子が結婚第八回の五月五日が來た。

それから十日目に「思出の記」は出版された。新聞には「おもひ出の記」と題した。單行本には「思出の記」とあらためた。菊版五百六十七頁、分厚な一冊を手にして、熊次は流石に莞爾とするを禁じ得なかつた。それは不如歸と同じく紙表紙の廉本で、表題は明朝活字、表紙が薄紫の曙色にぼかされただけが著者の意匠である。然し不如歸を夫妻の長女とすれば、これは五月の鯉にふさう長男の誕生であつた。熊次は見返へしに「呈愛妻、著者」と書いて、一冊を駒子の机上に齎らした。駒子も得意であつた。私には妻に贈つたが、公には父に献げた。父は今年正に八十の齡を重ねた。誕生は九月、然し熊次は此機會を逸するを好まなかつた。「思出の記」の父は、物語の始まる前に已に死んで居る。思出の記の主人公は「父を愛し、母を敬して」居る。母が勝氣で、父がよく負けた、と書いて居る。熊次の父はそれを讀むで流石に悄氣た顔を

最初から眼を通す。朱を入れる。直ぐ社に送る。校正が来る。櫻が見頃になると、校正も大分抄取つて居た。

小金井の花見に、父母が行く。熊次駒子がお伴をする事になつた。仕度ととのへ青山へ行く。と、出勤がけの兄は花見どころでないと云ふ風をして、俯いて玄關に靴をはいて居る。熊次は濟まぬ氣がした。父は一倍氣になつたらしく、花見の人ごみに揉まれて花の堤を歩るきながら、其方の懸念ばかり口にして、折角の花見も興ないものになつて了ふた。

父母は直ぐ逗子へ歸つた。

と朗讀をやめた。

「そりばつてん、書くからにや。」

と母が抗議をしたものである。巻の始ではすでに死んで居て、主人公の結婚式後にやつと寫眞で現はるる「おもひ出の記」の父は始終蔭になつて居るに、「野田伯父」が母の兄津森大作の倅を見せて活躍するも、父にさびしく、母にうれしいに違ひなかつた。その思出の記を父に獻するも、思へば異なものである。然し本文で母を榮えさせた子は、せめて獻詞に父を生かさねば氣が濟まなかつた。

父は獻詞の色紙をまさくりながら、

「こら俺のにばかりついてるのかい？」

と熊次に問ふた。

「否、何れにも皆ついとります。」

「應、さうか。——あつ」

と父は正に受納の辭儀をした。

したものである。全く思出の記は父を無いものにし、母に花を持たせてある。思出の記の母は、必しも熊次の母ではなかつた。然しやはり何處か肖て居る。熊次の長姉が熊本に居る。

「東京の祖母さんな、どぎやんした方でつしゆう？」

と姉の女が其母に問ふた。

「逗子の祖母さんかな、逗子の祖母さんな、思出の記を見ればよかたい。」

「思出の記の阿母な恐ろしかごたる。」

こんな問答が交はされた事を熊次は後で聞いた。全く熊次の母は、思出の記の母よりもつと大まかな、自然な、可愛氣のある人であつた。然し多くの人は思出の記の母を著者の母に看做した。母も違ふとは謂はなかつた。兎まれ不如歸の川嶋未亡人で氣を悪くした母は、思出の記で機嫌を直した。小説は母の老人會仲間でも評判が好かつたので、母の鼻も高かつた。「おもひ出の記」が新聞に出て居る程は、耳の遠い父が高聲に朗讀する、眼の悪い母がぢつと聽いた。鵲沼が出ると、父ははたと當惑して、

「どうも讀めん。」

郎から聞いたといふ鴨志田君の言も耳に入つた。あれは好い加減に事實を書きなぐつたもので、大した事はない。さういふのであつた。信濃のS君からはがきが來た。「思出の記を拜見、深大なる感動にうたれ、嫉妬と美望の外なく。」然し後で熊次はS君の言として、眞面目に書く事の困難、調子にのつて上滑りする危険を警戒したい、といふたのが聞こえた。健全な讀物といふのが一般の評判で、淺薄が具眼の折紙であるらしかつた。熊次は少し萎れた。

思出の記は定價六十五錢で、初版千部五十圓、二版以後は一部四錢宛といふ條件を社の専務理事久野さんから言ふて來た。熊次は少し不快を感じた。久野さんを差措き、直接兄に手紙で申出でた。再版以後は組版の費用も減する筈、初版一部五錢で二版以後四錢は不合理と思ふ、全部一部五錢といふ事に願ひたい。願は聽き届けられた。然し鼻明かされた久野さんは腹を立てた。熊次が足を遠くして居る間に、社内も追々組織立つて、理事の傳票のよろづきちんとした事になつて居た。きちんとした事が大好きの久野さんに、すべてを無視した熊次のやり方は癢に障つたに違ひない。自身兄である久野さんは、熊次の要求を弟らしくもないと響きしたかも知れぬ。兄弟のくせに利を爭ふ、と久野さんが誹つた事を餘程後で熊次は知つた。

思出の記を出した熊次は、しばらく評判を待ち詫びた。不如歸の後、新聞掲載中の人氣で思ひ上つた熊次は、追々の反響に決して満足しなかつた。「旭日瞳々として東天に上る、衆星の光淡として夢の如し、明治文壇の大作として歡迎す。」と東京日々の桐谷君は評し、「深き信仰あり、高き道念あり、詩趣また乏しからず。」と太陽の高山樗牛は書いた。鵜沼の清風明月を賞し、後世の史家此小説によつて明治思想の混淆雜糅せし跡を卜すことも得やうと、「新人」にU文學士は書いた。然し大分後で、ほめ過ぎと人に云はれた、とUさんは自白して居た。H館のT君は、文章は不如歸より數等上だが、上滑りして深刻味がない、と書き、ブライトコブデン時代はさばかりの代物とも見えなかつたが追々に佳作を出すやうになつた、然し思出の記には随分いやな秀句もある、と書いたは帝大出の漢文に遠いK學士。「清新にして悠久の意味をもつきぬいても置きたいやうな句があるが、駄洒落が多過ぎる」と「文庫」は評した。浪六の草枕も同じ事だ、あんな身の上話なら、何程でも長く書ける、と評したのも目についた。明治の大作といふ思出の記も、戀から見れば零、とある人は曰ふた、と明星の女詩人は書いた。嘉一

第四章

ゴルドン將軍傳

思出の記の景氣は相應に好かつた。去年の十一月匿名で出した探偵異聞は當然賣れなかつたが、思出の記の出た時不如歸は十版を重ねて居た。自然と人生もやはりぼつぼつ出た。新聞を休んでも、印税だけで當分の生計は出來た。思出の記を出して、熊次はしばらく新聞の筆を休んだ。他からの依頼も大抵斷はつた。明星から再三の依頼の末に、速記者をよこすといふ手紙にも、「舌はまはらぬ筆よりも尙廻はり兼ね候間、速記者の御出張は御斷申上候」と斷はつた。

熊次は其處で育つたK新聞以外舞臺を求むる必要を感じなかつた。其K新聞にも當分書かぬ彼は、毎日とりとめもなく讀書に日を過した。少し生活に餘裕が出來て以來、熊次は丸善の二階に英文の文藝物を漁るを道樂にした。結婚八年、駒子は殆んど平生着一枚つくつたこともない。熊次も日蔭町洋服で外出着は濟して居る。然し貯金は一向出來なかつた。入る程の金は大抵書になつた。舶來の新版物が着くたびに丸善に走せつける。目ぼしいものを選びどりにして、書は其まま持ち歸る。拂ひは其月の原稿料を當に社に振りむける。傳票を書く久野さんが、「熊次さんの原稿料は、大部分書が喰ふてしまひます」と笑つた。其昔月給十一圓の當時も、破れ着物で、書ばかり買ふのを父が心配するのを、「資本ですから」と兄が宥めたものである。

新聞に、幹部の一人として入社した事を聞いた。其新聞の記者連であらう、若い洋服の一群にまじつて鴨志田君が談笑して居るのを新橋停車場に見出したのは、大森蒲田の梅がそろそろといふ頃であつた。鴨志田君はいそいそして、新著出版の近きにあるを告げた。

「表紙の畫もよく出来て」

とうれしさうであつた。

思出の記出版の前々月、鴨志田君の「武藏野」が出た。M社出版である。自然と人生と同型の袖珍本で、うち見たところ自然と人生より餘程氣が利いて居る。表紙の上部に細長く野路の月の出、荷馬車の歸りを描いてある。熊次も好んで散歩する源氏山の陸橋を渡つて直ぐの野景らしい。鴨志田君の子分の一人、醫學修業に上京して好きな畫の道に深入りして居る小山といふ若者の筆である。其若者は原宿にも一二度遊びに來た。蒼白い顔、聲低にものを言ひ、睫毛の下から人の顔を偷み見るやうな青年であつた。熊次が好い顔をしなかつたので、彼は直ぐ遠のいた。然し「武藏野」の表紙畫は、鴨志田君が喜んだやうに、確によく出来て居る。表題の活字もすつきりして居る。内容は、巻頭の「武藏野」をはじめ、「忘れ得ぬ人人」などの名篇が満

河邊君が信州を引きあげるさうで、佐久新報主筆の後任の世話を熊次は頼まれた。浪人して居る鴨志田君が直ぐ頭に上つた。早速手紙で其意向をただした。鴨志田君には親友のT君も、往けと慫慂したさうである。然し鴨志田君はすすまなかつた。鴨志田君がまだK新聞に居た頃、彼は社長に書を致して曰ふたものである。自分の見る所を以てすれば、社中の諸子いづれも一方に偏して居る。あなたの後を繼ぐ者は、自分の外にない。其様な抱負の人に、田舎の小新聞主筆は甚しい侮辱であるに違ひなかつた。鴨志田君から左右の返事はなくて、河邊君から催促が来る。出嫌ひの熊次も到頭返事を聞きに出かけた。此頃は鴨志田君も霞が丘から氷川町へ越して居た。熊次夫婦が最初の家を持つた海舟邸内とは一丁餘はなれて反對の阪下であつた。鴨志田君は居なかつた。六十左右の老人が來意を聞いて、うれしくない顔をした。鴨志田の父君である。それは舊臘の事であつた。間もなく熊次は鴨志田君が新に興さるる星享の機關

御池君がわれから畫を描いてくれた。思出の記を紀念の畫を描いてくれた。思出の記の著者たる者、得意にならざるを得ない。熊次は好い氣もちに膨れかけた。トタンに彼の眼は兄の卓上に注いだ。ふくれかけた熊次は、忽ちじゆうと縮むだ。卓上には他の一枚の畫がのつて居る。同じ畫家の筆、同じ型の小額で、ほぼ相似た趣構の畫である。其中央には小型の「武藏野」が描き入れてある。「武藏野」の著者への贈物に相違なかつた。熊次の得意が半分になつた。半減された喜を以て、彼は御池君の贈物を原宿に持ち歸つた。

贈物について、贈り主を熊次は間もなく識つた。ある日原宿の玄關に突立つた髭なしの洋服姿、下から廻つて來た主と顔見合はして、かすれ聲に挨拶の言葉もどぎまぎと何の飾り氣もない武骨な人が御池さんであつた。御池さんは今度小諸を引きあげて、新宿郊外に住居を定めたさう。熊次の畫を見たいと言ふままに、彼は臆面もなく御池さんを北裏の小書齋に引張つた。其處の小壁にはずらりと逗子のスケッチが貼られて居る。

「お、これは。」と興味の眼を彼方此方走らした畫家は、畫のとり方が面白い、色もわるくない、近景をもつとしつかり描いたら、と評を下した。

ちて居る。然し卷末のモウパッサンの翻譯を入れる程なら、熊次が名文帳に切り貼りして居る「豊後の國佐伯」や多良一抱が「鴨志田兄長の文は泰西名家の二流どころに比して遜色なし」といふた従軍の思出なども入れたかつた。全く虞初子が鴨志田君は僕より新しいと曰ふたやうに、「武藏野」は清新なものであつた。熊次は妬ましかつた。鴨志田君も協同の一人としては已に「抒情詩」を出し、また米鹽の爲には少年傳記叢書の數冊を書いたが、文壇に掲げた最初の旗幟は、實に此「武藏野」であつた。旗幟は翻つた。然し認むるは少數の眼でしかなかつた。それは同型の自然と人生程評判にもならず、賣れもしなかつた。

思出の記が出た後幾程もなく、ある日兄の家に往くと、兄の爲に淺間山の水彩を描いた御池君から熊次に贈物の畫が來て居る、氣の毒なといふて、兄は一面の水彩を手渡した。わくわくする胸に、熊次はそれを受取つた。寫眞の臺紙に貼つた九寸に七寸程の淡彩畫。物の影がまざまざうつる程拭き込んだ床の間の、上手に淡朱の重箱に煎茶器の盆を重ね、中央に淡紅の薔薇と翁菊を生けた硝子カップがあつて、其蔭に一冊の思出の記が横はつて居る。あつさりして然も手堅い畫である。垂水君から水彩の手本にと其人の芝浦曉晴の畫を貸されて以來七年目に、其

「あなたが小説を書かうとは思はなかつたね。」

ブライト、コブデン、グラツドストオンと泰西政治家の傳記で始めた弟は、少なくとも兄の足跡を踏むものにMさんはきめて居たのだ。

熊次は黙つてMさんの言を聞いた。然し黙り切りには濟まされなかつた。彼は二日に涉つて、「何故に余は小説を書くや」を新聞に書いた。

「ポウロ曰く、われは福音を恥とせず、と。余は小説家たるを榮とする者なり。」と書き、

「然らば何故に余は小説を書くや。他なし、小にしては……大にしては一頓挫せる維新の風潮に鞭たんと欲する而已。」

と書いた。

それには逍遙鷗外露伴紅葉をはじめ、目ばしい作家の名は盡く舉げた。唯一人まだ生きて居た山田美妙を忘れた事に氣づいたは、大分後の事である。言文一致の創始者、熊次がまだ熊本に居て其「夏木立」を読み「武藏野」に嘆服し、「都の花」の才筆に眼を削つた才人、上京後M社

思出の記の後、熊次はしばらく新聞に書かなかつた。不如歸思出の記で贏ち得た健全な讀物、光明小説の作家、家庭小説家などいふ名目は、彼を満足せしめなかつた。兄が旅行して某縣知事を訪ふたら、其令嬢が不如歸をお書きになつたお方かと騒いだといふ話や、大阪の若い本屋が上京來訪しての話の中に、不如歸にさんざ泣かされた若い女性の話をして、「罪ですなア」と囃した事や、鴨志田君が其友人の妹が熊次の愛讀者である事を取り立てて彼を揶揄したなども、わるい氣もちはせぬまでも、むづ痒い感を彼に懷かせた。熊次は兒女子の征服を越えて、更に大膽の飛躍を考へて居た。

先輩の牧師上りに、Mといふ人がある。元氣な才人、文筆も達者である。青年立志の爲に書いた書が大當りに當つて以來、矢つぎ早に著作を出して、いづれも相應の歡迎をうけ、さる基督敎書店の寶の庫と大切にされて居る。ある時、Mさんが熊次に曰ふた。

ばならぬ。斯くして熊次は逗子時代に引受けたゴルドン將軍傳を先づ書いて了はうと思ふた。
蟬しぐれ屋をめぐつて、原宿の夏が來た。青山の子女、京都東京から深水の一族、上州から岩
原一家、例年の通りうちつどふて、逗子の夏は今年も割るるやうな賑合であらう。父がたより
をよこした。

物たらぬ こゝ地こそすれ 燈火に

つとふ夏虫 數はあれとも

右 原宿夫妻に寄する

蝸廬結得夏涼郷 子女兒孫到四方

頑老童心何願處 秋風遲涉相州洋

右即事

即今心に浮候まま供笑覽

辛丑八月十二日

の編輯局で秀麗な其風貌に接し、而してそれが自分と同年の明治元年生と知つて驚き且羞ぢた其山田美妙を故人扱ひは、全く彼の不念であつた。

熊次が思ふさま溜飲を下げた此一文は、少なくとも一の反響があつた。Y新聞に早稻田社中のN君が啓蒙批評の文をのせた。

「小説家たるを榮とする者よ、何ぞ遊戲文字をつくるを榮とせざる？」
とNさんは書いた。

それは以前頼山陽論に友山君が「文章、人生に相渉らずんば益無し」を書いたに對し、「文學界」の透谷君が批を入れた繰り返へしのやうなものであつた。然し友山君の反駁で賑やかな論戦になつたそれに引易へ、熊次の煮え切らぬ答辯は唯駒子の耳に向つてなされたので、Nさんの挑戦も物にはならなかつた。實學を奉ずる父の子、兄の弟として、世道人心が憑物つきものになつて居る熊次は、中々「遊戲文字をつくるを榮とし」得なかつた。彼は家庭小説家の名目を一蹴して、「維新の風潮に鞭つ」大作をものせねばならなかつた。仕事はこれからである。それについて、一切の邪魔を先づ拂はねばならぬ。あたりを奇麗にかたづけて、専心其大作にかからぬ

めた男。パレスチナに基督の足跡を踏んで瞑想と検討にしばし世をはなれた男。それから三百十七日にわたる蘇丹の籠城と、人知れぬ其最期。書いて行く行く熊次は此男がたまらず好きになつた。

熊次は初めて原稿の淨書を駒子に頼むだ。熊次が書き飛ばす春蚓秋蛇の原稿を、駒子は半紙に奇麗に清書した。それは駒子に楽しい仕事であつた。夫の好きなゴルドンは、彼女も好きであつた。熊次の頭字をとつて、K、H、ゴルドンなどと彼女は戯れた。書かる人と書く人との間に少なからぬ共通のものを彼女は見出した。仕事は面白く進出した。淨書はやがて終り方の蘇丹引拂に到つて、敵役のマアヂに對するゴルドンの意思がはつきりせぬ、と駒子は言ひ出した。邪魔をするなら撃ち潰すつもりであつたに違ひない、と彼女は言ひ張つた。書き方が不徹底と難を入れた。熊次は赫となつた。いつも愛讀者の第一人である妻が、夫の書くものに批を入れる。斯様な事は今までにいざあつたためしがない。これが最初である。むらむらとした瞬間に、熊次は駒子の淨寫した原稿をつかむで疊に投げつけ、足で蹴散らし、蹴飛ばし、忿々して口も利けず其處に突立つた。折も折、夏休果てて逗子から歸途の岩原の義兄が立寄つて、

洪水

蘆華生夫妻

雜沓の逗子には無沙汰して、熊次は日日汗を揮ふてゴルドン將軍傳を書いた。十二文豪の「トルストイ」にも思出の記にも口語體をとつたが、斯様な傳記物は昔ながらの漢文崩しがやはり勝手が好かつた。好きな男を傳する事は、愉快な仕事である。「僕を奈何しやうと云ふんです？」と造物者に言ふかのやうに泣目立つた笑止な貌からが、所謂英雄らしくも豪傑らしくもない、赤子のやうな男だ。軍人の子に生れながら砲聲にびちりとする神経質の子供。士官學校では教師に叱られて、憤然と肩章引ちぎつて投げ出した肝癪もち。支那政府の長髮賊征伐に、不識庵の如く青竹を揮ふて常勝軍を指揮した飛將軍。降伏した敵將等を約に背いて殺戮したといふて、ピストル持つて李鴻章を追かけ、支那政府から賞與の感狀に、信義を破る者の感狀など受納難致、と裏書きして突返へした男。故國の要砦司令官で居て日曜學校を教へた男。ナイルの上流、鰐とマラリアと奴隸の巢窟の赤道州にまた蘇丹に總督として、或は一絲を掛けぬ素裸の蕃女を憐み、或は照る日烈しい熱砂漠を縦横無盡に駱駝で跑け廻つて、奴隸賣買の剿絶に努

九月二十四日は父の誕生日、秋季皇靈祭の當日で、肥後の家では父の誕生祝をかねて其日に先祖祭をする慣例になつて居る。今年は父の八十誕辰で、青山で其祝をする爲、父母も出京した。熊本の父の舊門人子弟から、八十の賀の祝に、一面の古硯が贈つて來てあつた。半月形に鑿つた湍溪の額部に「峨眉」の二字を刻し、紫檀の圓蓋には「峨眉山月半輪秋、影入平菴江水流」と李白の句が金字で隸書されて居る。「峨眉硯」の箱書きは、思出の記をほめた市川先生の筆であつた。市川先生は父の七十の賀にも、「先生有子皆賢才、齡及古稀嬰鏤哉」といふ詩を贈つたが、八十の賀の硯の箱書きも先生の手に成つた。親類縁者の祝物もそれぞれ到來した。八十の祝は、この春の「思出の記」の献詞で逸早く済してしまふた熊次夫婦は、手ぶらで青山の賀筵に出かけた。

内輪の賀宴は、隱宅、本宅、新宅の家族ばかり、外に客といふ客もなく、唯一人二十歳左右の

座敷から客間まで足の踏み所もなく撒き散らされた原稿の狼藉に、

「こらア！」

と眼を圓くしたものである。

義兄の顔出しは、一服の解熱劑であつた。負け腹が癒ゆれば、妻の言は勿論正しかつた。熊次は機嫌を直して、更めるものを更めた。餘は滞りなく淨書も濟んで、ゴールドン將軍傳の原稿は、依頼者の基督教青年會幹事Nさんの手からK書店に渡された。即ち熊次に「何故に余は小説を書くや」を書かしたMさんの根城の其基督教書店である。出雲町の其書店の二階には、熊次が同志社時代の同窓、主人には主筋に當る大坂の基督教印刷會社々長の一時養子分であつたS君が以前居たこともあつて、主人の顔は熊次も識つて居た。

した顔の、はしつこい青年である。

澁谷の往復に、兄は少しも打解けなかつた。然し兄が不快の原因を突きとめやうと思ふ熊次は、書齋にまでも追隨をやめなかつた。

「阿母が俺に無斷でお糸さんば呼^ようだりするもン。」と兄がはじめて口を開いた。

それに嘉一郎は嘉一郎で、まだぶらぶらして居る。北海道の新聞に口を見つけて、彼が友人の手から勧めさして見たが、嘉一郎は動かぬ。それもあのごく道がついてゐるからだ。ごく道のおたよがついて居るからだ。病後同居はよくないから、餘程國へ歸さうとしたが、鴨志田に運動したりして、到頭歸らぬ。

兄は憤々して嘉一郎夫婦の吾儘を熊次に指摘した。

其昔嘉一郎が鹿兒嶋に新聞記者をして居た頃は、「嘉一郎が一番此方の事は解^わつとる。」と兄は言ふて居た。身近に置くと、思ふやうではなかつた。而して大病したりして、夥しい世話をかけた。「詮方がなかない。」と言ひつつ世話するだけは世話をして、「親と思ひます」と嘉一郎

頼骨の隆い娘が居た。船津の嘉一郎には三番目の妹お糸である。永らく熊本の大江の家の世話になつて居たが、此夏返子へ上つて來た噂は、原宿でも聞いて居た。

兄は散々の不機嫌であつた。書齋へ通ふ廊下で、惣領の貞雄を叱る聲は、やがてドタンバタンの響になつて、貞雄がわんわん泣き出した。飲み食ひの席も、白けきつた。直ぐ寫眞が庭で撮られる。忿々とまだ眞黒い顔の兄、泣きあとの不快げな貞雄、氣まづい一同は、義務的に唯レンズに向ふた。

「お糸さんが親類總代で」

といふ義姉の取倣しも、何の興も喚び起さなかつた。寫眞が済むと、兄は一人の青年を連れて、去年買つた澁谷の地所の萩を見にさつさと出かける。熊次も同伴を申出でた。

「熊次さんも行くてつたい。」

と苦笑した兄は、それでも否とは云はなかつた。青年が熊次にひよこひよこ辭儀をして、口早に初對面の挨拶した。去秋熊次が信州南佐久の遊に一度ならず通つた田舎町の豪家の忤、父親の勘氣を受け、兄を頼つて來た青年である。名は林。碓氷先生の甥正義さんを思はすのつべり

に違ひなかつた。此夏兄が逗子へ行くと、隱宅に見知らぬ娘が居た。

「彼は誰ですか？」

「澁谷の看護婦さんたい。」

と母が突慥食に言ふた。赤十字社の看護婦にでも、と母はかねて謂ふて居たのである。

兄の不快は一々尤である。熊次は何を措いても嘉一郎問題から型をつけねばならぬと考へた。直ぐ其足で榎坂に往つた。

昔肥後の一家も、また駒子の母兄も住んだ赤坂は榎坂町、其處の小さな家にランプを圍んで居る嘉一郎の家族を熊次は見出した。兄の所謂ごく道のおたよさんも、白い顔をして其處に居た。嘉一郎の次妹お敬が親類同士嫁した岩城の初雄さんによく肖た十七八の青年も居た。それは岩城の叔父の末子道雄君であつた。岩城の叔父は、熊次夫婦の結婚式に上京歸國して以來兎角不幸が相ついだ。火事で丸焼けになり、熊次も少々ながら見舞の金子を送つたりした。それは氷川町住居の當時であつた。父の三弟岩城の叔父は、祖母の實家を嗣ぎ、少壯の昔は三人の兄諸共一同沼山先生に師事し、維新の初年に同門の先輩長谷部さんが令であつた東北の縣の要路に

を感激したものである。嘉一郎の母は、肥後兄弟の姉分になつて居るが、實は兄弟の父の弟の遺孤である。嘉一郎が心配かけるを氣の毒がつて、乏しい生計の中から二十圓兄に送つた。

「二千圓にも値る。」と兄が曰ふた。「嘉一郎の事は早く處置せんと、後が面倒ばい。」と母が兄に警告した。其嘉一郎が尻重く北海道へも行き澁つて居る矢先き、そんな警告をした母が無斷で嘉一郎の妹を上京さすなんか、兄が腹立てるも尤であつた。

昔流儀の大東な親分肌の母と、きちんと差別を立てる兄の間には、經濟問題で時に衝突を見た。牧師くらしの乏しい岩原の姉に父母が窃と貢いだ事が分かると、「さうさうは私は私は背負ひきれません。」と兄がぢれた。「きつがらすもん」と母は笑止がつた。嘉一郎の妹が何で上京したか、熊次は知らなかつた。大江の家に預つた船津の姪共の中、姉のお敬は先年嫁いで、妹のお糸ももう年頃であるに、大江の三男の氣のやさしい進の素振が目立つので、お糸が學問したがるを幸ひ、進の母が返子の母と打合はせて兎も角も上京させたのかも知れなかつた。「貞一さんがあんまりむづかしい時や、わたしやすんずん自分の思ふ如^{ごと}くしてしまふもん」と大江の姉の照子が曾て自白した。お糸の上京も、畢竟薄面倒な男を押まくる勝氣な母子の馴れ合ひ仕事

「さうちござりますか。岡邊敬徳が北海道行を勧めちやりましたが、寅一オツサンの何だつたんでござりますか。へえ。」

のみさしの巻蓑をぐいと火鉢に突きさしながら、今始めて聞くといふ風をして嘉一郎は苦つた。彼は婉曲な青山の叔父の仕方を好まなかつた。彼とても叔父の難題にばかりなつて居るを心苦しく思はぬでもなかつた。北海道行も否ではなかつた。唯一つ氣がかりは、おたよさんを置いて行く事であつた。先にもすでに覺えがある。夫婦仲を裂かうとするかのやうな叔父の仕方はうれしくない。此まま北海道に往つたら、後が懸念される。其保證なしに、北海道行は出来ぬ。加之世話になるにしても、厄介拂ひのやうな仕方は、ありがたくない。先に嘉一郎の子供が死んだ。葬式には青山の書生が来て、青山墓地でも一番劣等な賤い墓地を買つて、捨て埋めにするやうな仕方をされた。さう謂つて、世話になりなり嘉一郎夫婦はいまだに不快をいだいて居た。

嘉一郎の言ひ分を聞くだけ聞いた熊次は、彼に曰ふた。おたよさんの事は心配いらぬ。自分夫婦が引受ける。安心して早く北海道へ行け。何よりも先づ青山の叔父に往け。

居たり、歸縣しては縣會議員などして居たが、其後は田舎に埋れ、家道振はず、村切つての豪家も家倉田地一切を人手に渡し、祖父終焉の水俣に移り、そこでまた火事に會ふたのであつた。先妻腹の嫡男は久しい肺病で長崎に居、次男は大隅の志布志に住み、後妻出の嫡女は長崎の病兄の許に、其下に男の子が四人、一人は早世して初雄、誠、道雄の三子は國に居た。上二人は父や叔父同門の醫師齋藤さんの世話になりつつ醫學修業をして居るといふ事で、父は叔父を慰め、杏林開花の時を待て、と詩を贈つたものである。熊次夫婦が逗子に引越したその春、初雄君は卒業して獨立開業し、叔父には二番目の兄熊太叔父の忘れ形見船津の安子の其二番目娘のお敬と結婚し、今は天草に開業して居る。杏林の花咲き初めて叔父も悦び、水俣の川で手釣りの香魚など逗子に送つたりしたが、其内眼が悪くなり、熊次が出した見舞の返事に、最早五ヶ月もはつきりせず、此頃は天草の方へ往つて居る、と少年の筆跡で知らして來た。名は道雄と署してあつた。それはまだ逗子住居中の事であつた。其道雄君が何時上京したのか。熊次は少しも識らなかつた。

道雄君が去るを待ちかねて、熊次は本題に入つた。

四

ゴールドン將軍傳の校正が來はじめた。淨寫を手傳ふた駒子は、校正も手傳ふた。逗子から引越しの一周年も來て、十月の日は靜に忙しく過ぎた。

ある夕、熊次の家は不時の客來に驚かされた。薄暗い玄關先にドヤドヤと押しかけた一群の先導は、和服姿の御池君で、御池君につづく一人は小諸のS君であつた。S君から新版「落梅集」を贈られ、詩は兎に角、「雲」「利根川たより」などの全く垢ぬけした散文に感嘆して、小諸へ禮狀を書いたはつい此程の事であつた。其S君を今宵の來客に見出すのは、思ひがけぬ事であつた。餘の二人は知らぬ人である。熊次は遽々と四人を座敷に請じた。

S君を上座に、御池君、次の一人は鴨志田君をややごつくしたやうな人で、末座は故人の林田格軒さんによく肖て居る。ランプの光に見れば、皆和服のくつろいだ姿で、いづれも好い色をして、はしやいで居る。

熊次の疏通は、效を奏した。嘉一郎は一度青山で玄關拂ひを喰つた後、熊次に力づけられて再度青山の叔父を訪れた。ばたばたと話の埒があいた。一週間を出です、留守をくれぐれも頼み置いて、嘉一郎は北海道へ立つた。

ならぬ。

「『武藏野』がありますか？」

熊次は四疊半から、「武藏野」を出して來た。M君はそれを手に頁を繰つて居たが、やがて軀を側めて、「源おぢ」の一節を朗々と誦しはじめた。

「『……………夜は更けたり。雪は雲と變り、雲は雪となり、降りつ止みつす。灘山の端を月はなれて雲の海に光を包めば、古城市はさながら乾ける墓原の如し。山々の麓には村あり、村々の奥には墓あり、墓は此時覺め、人は此時眠り、夢の世界にて故人相まみえ、泣きつ笑ひつす。影の如き人今しも廣辻を横ぎりて小橋の上をゆけり。橋の袂に眠りし犬頭をあげて其後影を見たれど吠えず。あはれ此人墓よりや脱け出でし。誰に遇ひ誰れに語らんとて斯くはさまよふ。渠は紀州なり。』

「奈何です？」

熊次は黙つて居た。鴨志田君の前に立ちふさがる罪を一に熊次に歸すやうなM君の憤慨を、熊次は尤ともまた無理とも思ふた。

「Mです、兄貴の玄關に居た頃、あなたが阿母の藥取りに見えたりしました。」

と鴨志田君に肖た一人が黒目がちの眼を熊次に注いだ。「抒情詩」以來名を聞いて居るM君であつた。母の眼藥を下谷の眼科醫で歌人のIさんにもらひに往つた事はある。然し其弟のMさんは、少しも熊次の記憶になかつた。

末座の梧軒似の人は、新進詩人のKさんであつた。Y新聞に出たKさんの「松浦あがた」を、熊次は名文帳に貼つて居た。其話をする、Kさんは悦んだ。

Mさんは原宿から程近い宮益のほとり、釣堀のある、靜かな好い家に住んで居るさうな。小諸から所要で出て來たS君をはじめ、一同M君の宅に落ち合ふたを幸ひ、案内知る御池君の先導で斯くは押しかけて來たのであつた。M君宅で大分聞し召したらしく、中にもM君は肩を颯げて熊次を睥睨し、

「どうも人の頭を痛くするやうな文學は、感心しませんア。」

そんな淺薄な文學を世間が歡迎して、鴨志田君のやうな高級藝術に無感覺なのは馬鹿らしい。鴨志田君の「武藏野」なんかちつとも賣れないさうですね。それはもつと世間に紹介されねば

と御池君がS君の顔を見かへす。

東京は何方へ膨脹しつゝあるか、品川あたりから見ると中川尻あたり一帯の蘆花が空に浮いて見ゆるは何故か、そんな雑談の末、S君は先頃帝國文學に出たU君の「大野のながめ」を「彼は面白いと思ふね」と言ひ出した。それはゴオゴリのタラス、プルバの節約で、熊次も讀んで居た。日清戦争後間もなく熊次が譯した「老武者」も其タラス、プルバであつたが、磨ぎのかかつたU君の手だれの翻譯に比べては、お話にならぬ生硬な直譯に過ぎなかつた。果して其「老武者」をM君は言ひ出でて、熊次を鼻白ませて了ふた。U君の噂になる。

「Uさんは繪も精はしいさうですね。」

熊次の言をM君が直ぐ引きとつた。

「ええ、ええ、英でも佛、獨逸、伊太利語までやつて居ます。」

「いや、英ではない、繪、繪畫。」

「U君はアアトの方は趣味が汎くて。」

S君が話のかたをつける。

「鴨志田君はああした快活な人とは思はんかつたね。T君の親友といふから。」

とS君が上座から言ふた。

「僕も友人だもの。」

とM君が抗議する。

「さうさう、鴨志田君が云つて居ましたよ、日光に居て、其『源おぢ』を書く時、『T君は今日
は二十枚書いたなんて云つて居た。僕は二三枚がやつとだつた。』つて。」

熊次はやつと口を利く隙を見出した。

皆が呵々と笑ふ。

風景の話になる。人があまり言はぬ信州の杏花の趣を、M君は語る。多摩川谿谷の話になつて、
碌な處ではない、と御池君がけなす。

「畫にならんからつて、つまらぬといふ事はないよ。」

とS君が曰ふ。

「畫になる處は澤山あるですよ。」

「肥後君も立關を設けて了ふた。」

とS君の言を傳聞したのは、大分後の事である。

* * * *

十月二十五日が來て、熊次は三十四誕辰を迎へた。ゴルドン將軍傳の校正も、月末には終つた。最早次の仕事との間に、何の障るものもない。其仕事にかかる前に、然し熊次は一休養を欲した。新聞は藝州宮嶋の紅葉美を報ずる。三景といふ中にも、松嶋は明治三十一年の春に駒子と見に往つた。天橋も宮嶋も未だ見ない。天橋は兎に角、宮嶋は此機會に見て置かう。歸りに京洛の秋も見やう。新聞の天長節の爲に小品一篇を書き、ゴルドン將軍傳の序文を書き終ると、其校正は駒子に委ねて、天長節の翌日熊次は飄然西行の汽車に乗つた。

話が途切れる。

「Sさん、何か好い小説の種はありますか？」

卒爾として熊次は上座の方を見やつた。

腕組して居たS君は、

「種屋さんか。」

と苦笑ひする。

「『種』は好いですな。」

と末座からK君が救つて出る。

「『材料』と云ふより、『種』は餘程好い。」

やがて一同はどやどや歸つて往つた。W・C・は當分酒臭く、而して色色に小突かれて熊次がほてつた顔、ほてつた體は、中々冷え切らなかつた。

S君は直ぐ山へ歸るさうで、重たい書籍の包を提げて居た。熊次の英譯タラス、ブルバも其中に加へられた。程なくそれは返つて來、スラヴの氣風が面白かつたといふはがきも來た。

第五章

舊都の秋

母の紀念に、又雄さんは西洋で近頃流行の亞布利加はコンゴオ產のステツキを「これが本當のコンガウ杖」と笑つてくれた。熊次はそれを父の散策に譲つた。又雄さんは米國に居た時、トルストイと文通して、基督教と愛國心につき大分論争したさうだ。ある米人が又雄さんに曰ふた、トルストイの説はもう生れかけて居る赤ン坊をまた母胎に押戻すやうなものだ、と。又雄さんに對面は、それ以來であつた。熊次の日蔭町洋服を、ランプの光の下に眼鏡越しにちらちら見て、

「其大繩目の鎧は何です？」

と又雄さんは笑つた。何爲に來たの乎。

「紅葉見だらう。」

と圖星をさした。

大阪立寄りの目的は、實は又雄さんではなかつた。駒子の兄に會ふ爲であつた。此兩三年函館商業會議所の書記長として北海道に居た清人君が、友人の藤原君に引張られて大阪へ出た噂を熊次夫婦は聞いて居る。大阪をしくじつて逗子にしばらく籠つた藤原君夫妻は、熊次等より一

大阪に着くと、土佐堀のスリ硝子の赤丸に白く「西村家」とぬいた軒燈の宿に往つた。其處には從兄の沼山又雄さんが陣どつて居る。昔の熊本洋學校出、同志社第一回卒業の基督教傳道師仲間で、正統派の信仰から自由神學に移り、更に政界に足踏み入れて新聞記者となつた人人の先登第一は高森さんで、二番が又雄さんであつた。高森さんは以前星享の自由新聞に據つてK新聞に喰つてかかつた時代もあつたが、此頃は幾何學で練り上げた頭と獨特の熱を以て、筆に舌に貯金の獎勵をして居る。一足おくれた又雄さんは、大阪毎日の主筆に聘せられ、家族も連れず、旅館から日々出社して居る。強い魂、強い體、強い神經がなくて新聞記者は出來ぬと謂ふ從弟の肥後寅一は、又雄さんの大阪行を危ぶみ、警告したものである。それに對しても又雄さんは頑張らずに居れなかつた。十八九から二十歳にかけ、今治京都と又雄さんの世話になつた熊次は、其後追々遠くなつてしまふた。第二回の洋行歸りに、亡くなつた母者、熊次の叔

と笑つた。

熊次は海つきの宿に泊つた。瓦斯をつけた二階座敷。夜あけ方に眼ざめて、何か臭いやうで頭が重かつたが、其ままたうとうとなつた。

「む、臭い！」

叫ぶ女中の聲で再び眼をさました。がたがた、びしやり、女中は狂氣の如く障子雨戸を引きあけて居る。

「あなた、何ともありませんだか、瓦斯が斯様に燻つて居るのに？」

頭が重い、臭い、と思ふた。然し消えた筈の瓦斯が夜すがら煙つて居たとは知らなかつた。日本室で仕合はせ。西洋間なら宮嶋で一人心中をしてのけるところであつた。後年ゾラ夫婦が瓦斯窒息で思はぬ心中をしてしめた時、熊次は直ぐ宮嶋の彼一夜を思ひ浮べた。

宮嶋から廣嶋へ往つた。日清戦争は最早七年の昔である。當時の征清大本營所在地、今はさり氣なく明治三十四年の秋の日を浴びて居る。然し熊次が泊つた陸軍御用宿の溝口には、將校連が徹宵はしやぎ騒いで居た。茶代の禮に顔を出した藝者めいた女將が、實は將校連の玩物であ

足先きに逗子を引拂ふて東京に移つたが、其後また大阪に舞ひ戻つて、何かまた始めて居る。其藤原君に引張られて北海道を見捨て、大阪に出てどうせ山氣仕事を共にする兄を駒子も懸念せず居れなかつた。兎に角大阪に寄つて、義兄の容子を見る約束を熊次は駒子にして來た。自分自身と大分仲よくなつて來た熊次は、仲違ひした義兄ともわれから進んで握手する氣分になつて居た。

車に揺られて、あくる日近松で知る天の網嶋町へと川沿ひの路は長かつた。漸く其家を探し當てた熊次はがっかりした。義兄はとくに引越して居た。行く先きは江州大津であつた。義兄訪問は歸途ときめて、駒子に其たよりをすると、其日の瀛船で熊次は宮嶋へ立つた。

*

*

*

*

*

宮嶋の紅葉谷は、人顔も照る紅葉の盛りであつた。人近い鹿の群、海にさし脚する廻廊も好く、千疊敷では夥しい大小の飯杓子の數に驚いた。いづれも征清役に出征軍人や家族の奉納である。不審うつ熊次に、茶汲み婆さんは、

「支那をメシトルといふんでがんす。」

水の橋の上につくねんと立つのが、熊次は好きであつた。泉邸の秋を見つつ、熊次の魂は東に
馳せた。

廣嶋は一泊にして、上り瀛車に乗つた。山陽一路は、木木色づき、田熟れ、豊に明るい秋景色
がつづく。七年前の駒子と熊本歸りのあの時の事共を思ふと、すべては夢のやうである。

京都を素通りして、日の暮れ方に大津に下りた。宿をとつて、直ぐ義兄の家を訪ねた。三井寺
下の、上方式にずつと土間の通つた暗い家である。女中の取次で、熊次は義兄が銃獵留守であ
る事を知つた。然し明日は歸るといふことである。再訪を約して宿に歸つた。夜半に使が義兄
の手紙を持つて來た。獵から今歸つた、明日は早朝此方からお訪ねする。

あくる朝、宿の二階で熊次は六年ぶりに駒子の兄と顔を合はせた。熊次の兄の洋行送別會に、
日本橋俱樂部の庭で互に白眼で別れた以來である。義兄の眼に熊次が何と映つたか知らぬが、
熊次の眼に映つる義兄は幾分ふけて和らいだ外にはさして昔に變らぬ彼であつた。昔の事は二
人共噎にも出さなかつた。それはもう過ぎ去つた事である。家が手狭で珍客を自宅に請じ得ぬ
遺憾を、清人君は繰りかへし詫ぶるのであつた。

る事を新聞で知つた熊次は、苦々しい思ひがした。

廣嶋では舊藩侯の別墅泉邸を見た。秋は此處にも美しく照つて、林泉の趣流石に見るだけのものはあつた。然し手入れの届いた泉邸より、同じ侯の別墅でもわが住む原宿の近くにあるのが遙に好かつた。それは原宿の南端にあつて、いくつもの小さな丘があり、丘の間に湧き水の池があつて、小さな板橋がかかつて居る。櫻も多く、赤松の間に楓も多い。最初は四阿すらなくて、一年に一兩度、侯爵家の姫達が花見に來たり栗拾ひに來たりする位、すべて荒るるに任せてあつた。門番がはりに其地境に小舎を建てて住む仕事師の二家族は、熊次も時々雜用を頼む懇意な間で、熊次はよく無斷でわがもの貌に其處に逍遙した。駒子と往つたり、父を連れた事もあつた。

巷街行盡處 一路入林中 澗底湛清水

松間錯錦楓 人縱名苑趣 鳥趁吟虫叢

相伴同魂侶 曳節興不窮

といふ詩を父が作つた。秋も暮るる頃、大きな朴や栗の落葉をかさ／＼踏んで、楓散りしく泉

寺といふ字は大き過ぎる庵である。傘をさした二人は、秋雨にびしよ濡れの本曾殿の墓にも、蕉翁が墓にも、慇懃に追吊の頭を下げた。

二人は熊次の宿に歸つた。晚い松茸と鶏肉の鍋をつついて、夜ふくるまで四方山を二人は語つた。熊次は義兄の今の仕事を問ふた。それは藤原君や名だたる今天一坊と組んでの仕事で、先づ地方の一銀行の株に多數を制してそれを呑み、其力で次の銀行を呑み、要するに信長流に關西の小銀行を併呑して、それから大仕事の素地をつくるといふので、義兄が大津に來たのも其着手の第一歩であつた。話の筋は立つて居るし、うまく行けば華やかな目論見ながら、さて實地の運用は素人眼にも疑問であつた。そんな Jay Gould 式の惡辣な仕事を、根が正直で淚脆い義兄が成しおほせやうと思はれなかつた。やはり山氣澤山の友人にかぶれて見て居る夢の一つに過ぎぬと思はれた。駒子も心配し切つて居る話をして、熊次は義兄に注意を求めた。大津に來ての仕事は、思はしく運んで居るやうでもなかつた。時々出かけるといふ餘徳の銃獵が、實際の獲物らしかつた。太湖をめぐる、好い獵場が澤山ある。先頃も犬をつれて、船不行といふ所に往き、雁の大獵をしたさう。義兄は函館で銃獵の道樂を始めた。函館で住んだ家は、野

秋雨が降つて居る。兎も角も遊んで來やう、案内しやう、といふので二人は宿を出て、相乗車で、先づ唐崎に往つた。琵琶湖に何回か來て、唐崎は未だ熊次に初めてであつた。撞木杖あまたついて、老ひた松はそれでもまだ翠の色を見せて居る。樹肌は雨に黒く、葉末の雫はぼたぼた砂に小さな孔を掘つて居る。蟒蛇の如く横這ふた大枝に、清人君がやをら攀ぢ上つた。枝の茂みを頻りと物色して居たが、やがてひらり飛び下りて、熊次に松葉の一房を手渡した。

「夫婦仲好しのまじないうち、皆が採るです。」

見れば松葉は一對四本が一房になつて居る。尋常の唐崎の松に、稀には斯様な四葉のものもあつた。清人君はそれを探し出して妹の夫に渡したのである。熊次はそれをポケットに納めた。大津へ引返へす頃は、烈しい雨になつた。構はず今度は波止場から小蒸氣に乗つた。瀬田の橋をくぐつて石山に上つた。石山も初めてである。石山の石も融けよとばかり漲る雨に、見物どころでない。水畔の旗亭に上つて、雨の瀬田川を眺めつつ、名物蜆と鯉の料理で午餐を食ふた。やんごとないあたりの御嗜故鯉といふ字も出來たヒガイは、食ふてうまいものでもなかつた。石山からまた相乗車で歸る途、粟津を過ぎて、古風な巷の中に嵌まつた義仲寺の前で下りた。

居た。義兄に送られて、熊次は疏水乗船場に往つた。それは義兄の宅から何程もない處であつた。水量を自由にすべく堅牢な閘門がある。高く築き上げた石垣の段を下りて、熊次は舟に乗つた。舳艫に赤い提灯をつけた乗合舟である。お婆、中婆、眼鏡をかけた若者など、六七人乗つて居る。熊次も仲間に入つた。

「それぢや。」

「ぢや又。」

石段の上下で、熊次は義兄と告別の語を交はす。やがて舟は疏水の流れに乗つて、滑るやうに江州を後に、直ぐ長い長い隧道の闇に入つた。

原つづきで、座敷から鶉や鳴が撃てたさうである。函館で生れた嫡男に、其父は彈平といふ名をつけて居た。母の名はお照さんといふさうである。熊次の姉の名と同じ名が、先づ彼に好感を與へた。正式な結婚によらぬ妻、「學問もない田舎女」を義兄は佗びる容子である。然し母子の顔見て行かねば、熊次は駒子にみやげがない。明朝を期して、義兄は歸つた。

翌日はからりと霽れた。早朝手荷物をもとめて熊次は宿を立つた。義兄の宅の土間に立ちながら、義兄の引會はすお照さんと子供に熊次は初對面の挨拶をした。朝のほの明りに、上り框近く膝ついて丁寧に辭儀する義姉は、二十四五の、じみな、やはらかな物ごしの人である。誕生過ぎた彈平はにこにこして、母の肩にとりつきながら此方を見て居る。清人君は駒子へみやげに寫眞を二枚くれた。雁三羽竿にぶら下げ、獵裝した義兄の脚下に、ポインタアが腹這ひになつて此方見て居るのが一枚。一枚は寫眞屋の椅子につかまつて無心な立姿の彈平であつた。熊次がこれから京都へ行き、深水の宅を訪ふと謂ふので、義兄は獵の獲物の鴨、鳴などを一括り、そつくりそのままみやげにくれた。

異つた道をとりたい熊次は、疏水の乗合舟で大津から京は南禪寺の近くに出られる事を知つて

此方に一派清淺の流れを見するばかりで、潤々した中洲の草は色づき、虫の音絶え絶えに、嫁菜の花が薄紫に咲いて居る。その流れと中洲とを横ぎつて、北に見ゆるが荒神橋、南が丸太町橋である。比叡の山から夜は明けそめて、浅い流れにぼいやり水蒸氣立つ朝、上流の方を見れば、一叢濃い下鴨の森から鞍馬貴船の山山青い靄に茫として居る。入日のあとに下流を望めば、東山一帯紫になつて、夕榮は水に流れ、「山紫水明」は山陽の昔其ままであつた。熊次は間もなく自分の借りた四疊半が、多分梁川星巖の書齋である事を聞き知つた。と思へば、古色を帯びた入念の鼠壁、質素な天井、簡単な床柱も、何しろただの四疊半ではなかつた。温かい山陽程、冷たい星巖を熊次は好かぬ。旅行詩なども、山陽のがよく地方色を出すに、星巖の麗句は浮泛である。然し意地惡の彼星巖にも、熊次は相當興味はもつて居る。兄の藏書を借りて昔寫し抄した一冊の「星巖詩抄」は、今此旅には携へぬが、大部分頭の中にある。晩年垢脱け脂脱け自然の眞味が大分出て來た日支峰影集の鴨水寓棲雜吟は、取りも直さず此四疊半で出來たのである。偶然に好い下宿を探し當てたものだ。

二十歳の暮に京都を飛び出して以來、十四年ぶりに熊次は落ちついて舊都の秋を味はうのであ

熊次は東三本木の鴨河邊にしばしの宿を定めた。東京はなれて京都は蛤御門前に最早十年も住む深水の姉は、平生はあいて居る二階に熊次を置きたがつたが、熊次は出入りの自由を擇んで、鴨河邊に静な下宿を探がし出したのであつた。それは頼山陽の最後の佳居に近かつた。東三本木の狭い通に向ふ千本格子、がらりと開けて入れば土間に大中小と三つも釜をかけた朱塗の竈が据わつて居る。其土間をすつと奥へ入る。薄暗い板敷から上つて、右へ少し折れる。重い板戸をあけると、小ぢんまりした明るい四疊半に出る。西は板戸、南北は壁、然し東正面は障子一重で直ぐ鴨河である。河向ふは比叡山から大文字山へかけ東山を一目に見晴らす。比叡の山下に見るあたりは、まだ青青した川添ひ柳の高低に美しく裾とられて居るが、大文字の山下は煙突が立つたり、汽笛が鳴つたり、川堤を車が走つたりして居る。然しそれは川向ふの事、河其ものには昔ながらの情調が残つた。時は十一月中旬、鴨河も水瘠せて、向岸寄りに一帯、

がまづい故もあつた。此小室の先住者星巖さんに、熊次は少なくとも一つの共鳴點をもつ。食道樂のそれである。星巖詩集を見ると、彼は山陽のやうなアルコホル中毒はなかつたかはり、食意地はしたたか張つて居た。太眞乳と牡蠣をほめ、鮑を食つて眼養生するの、「絶佳風味集我郷、白首歸來滿意嘗」などと鰻や松茸を賞美したり、長崎に遊んでは支那通辯の男に豚ばかりでも好いからと支那料理をせびつたり、到頭死ぬにも疫痢か何かで死んだ。徹底したものである。熊次は珍らしいもの好きではないが、うまい物好きである。うまい物なら、うんと喰ふ。鴨河の眺望は好くても、夢のやうな豆腐のつゆ、甘つたるい麴の煮つけ、たまに御馳走は薄氣味わるく青光りする肴の切身の煮附、そんなものばかり食はされてはたまらぬ。漬物茶漬ですます時が多かつた。毎々手つかずに下つて来る饌を流石に女將も氣の毒がつて、「せい肉はお上りやすか？」と問ふたものだ。せい肉は精肉で、牛肉の尊稱である。牛肉は好きだが、下宿の精肉は考へものである。それすら滅多に顔は見せぬ。下宿の不足は大抵外で補ふ事になつた。熊次は外出がちの日を送つた。洛中洛外、興の赴くままにぶらりと出て、ぶらりと歩いた。舊都の秋は今正に闌に、何處を歩るいても畫の中を行くのであつた。初めての處へも行き、ふる

つた。瀛車ではいつも京都素通り、七年前の熊本歸りに病後の駒子と來た時は、博覽會の雑沓に二日泊つて、唯焦焦と過ごした。其時の喧嘩相手、氣まづく物別れになつた駒子の兄とはこのたび兎も角も和らいで、駒子にはあらましの次第を報じ、重荷の一つを卸したやうなものである。不如歸、思出の記は出版し、ゴルドン將軍傳の稿も終へた。次に來る努力の仕事の前に、彼は今心靜に舊都の秋に浸るをゆるさるのである。夜深に眼ざめて居ると、びつびつびつびつ、枕頭で何か鳴く。千鳥だ。千鳥が鳴いて居る。「鴨河の堤を行くと見し夢のさめし枕に千鳥鳴くなり」。それは京生れの税所敦子が鹿兒嶋に下つての歌である。京都を飛び出した熊次は、昔鹿兒嶋の宿で其歌を思ひ出した事がある。今は其鴨河邊に千鳥の聲を聞いて居る。日間聞こえぬ水音も、夜は千鳥の聲共に枕に通ふ。戸を一枚あけて見ると、月は將軍塚の上のあたりに靜にかかつて、鴨河の夜はふけた。

水の音も 心も共に 澄み行きて

月靜なる 鴨の夜半かな

熊次は然し此巢に唯ちつとしては居なかつた。毎日のやうに彼は出あるいた。一つは下宿の飯

奈良へも初めて往つた。奈良どころか、京都に前後四年近く居て、宇治すらも初めてであつた。宇治を歸途の樂に素通りして、直ぐ奈良へ往つた。熊次が熊本から上京した年の櫻月に、父母は上方漫遊をして、奈良から吉野へ廻つた。奈良では猿澤の池のほとりの三景樓といふ宿に泊つたさうである。其三景樓に熊次も泊つた。案内された二階座敷の障子をあけると、熊次は大急ぎで寫生道具を取り出さずに居れなかつた。言語に絶えた佳景が彼を待つて居た。夕である。春日の山は紺靛の色に黯く、嫩草山は白茶色に明るく、而して春日の山から今まさに十五夜の團々とした月が出て居る。阿部仲麿以來の月がまん丸に出て居る。東福寺の晚鐘が殷々と鳴る。天平以來の響である。それは何とも云へぬ佳い夕であつた。一人見るのが惜しかつた。興に任せて、熊次は畫はがきに

青丹よし 折りもまたよし 奈良へ來て

まさに みかさの 山の端の月

とざれ歌を書いて駒子に出した。

明くる日は、春日神社から鹿の群の中を大佛様に初見參し、瀛車で法隆寺から龍田へ廻つて、

い親しみの處へも往つた。南禪寺は天授庵の沼山先生の墓の側には、熊次夫妻が結婚の年の暮に神戸で息又雄さんの洋行留守に亡くなつたおちせ叔母さんの墓が出来て居る。沼山夫妻の墓の斜向ひに星巖紅蘭夫妻の墓があるのも面白い。沼山先生は星巖を識つて居た。先生の上國漫遊中に、星巖の炯眼は沼山の英物を見てとつて、京都に居れと頻りに引とめたものであつた。石川丈山の詩仙堂の秋も好かつた。遺物の種々を見て、庭つづきの山をあるくと、白沙を流るる色無き水に濃い紅の落葉が眼にしみじみと美しかつた。高尾へ往く途、時雨に降られ、梅が畑の農家に寄つて簀を借りた。婚禮着の羽二重紋付羽織を着て居た。

「おべがだいなしになるやろ。」

と其家のおかみに云はれ、羽織を裏返へしにして、其上に簀を被た。紅葉歸りの連中が興がつて、

「ホウ勘平猪打ちか。」

とはやしたものだ。高尾へは往つたが、十四年前其處で京都を飛び出す前の苦しい三週間を籠つた清瀧へは、ついに往かなかつた。

ねた。丁君は文壇先覺の一人である。逸早く泰西文學を咀嚼し、生活の餘裕あるままに、氣の向くまま詩を作り、小説を書き、劇を草し、時々凝つた装釘の自費出版を出して居る。熊次などがやつとトルストイの名を識つた頃、丁君はすでにトルストイの著書を全部讀破して、「トオストイの福音」など雜誌に書いて居た。熊次の眼に觸れた丁君の作品は、確に新しいものがあった。然し世評の如く、生硬で獨合點に墮ちる憾はあつた。それは書齋の產物と云へば云はるるものであつた。然し世評に頓着なく、悠々自ら楽しみつつわが行く道を行く丁君の生活振りを、熊次は羨んだものである。

鴨河に臨むだ明るい書齋に客を請じた主の丁君は、熊次と年配も同じ程の、髯のない、氣さくなもの言ひの人であつた。蕪村の文臺を寫眞に撮らしたものを見せたり、水死した詩人 Shelley の死容の版畫を見せたりした。イブセン劇の翻譯に、如何はしいところを唯一句削つた話、詩人星巖の哲學詩の話などもした。博覽にしてよく談ずる丁君の前に、熊次は唯聽く人であつた。丁君の机上にのつて居る獨逸文のごつさうな哲學書は、獨逸語を讀まず哲學を厭ふ熊次を脅かした。熊次の寓が多分星巖の書齋であつた事も、丁君から聞かされた。「山紫水明處」の所

引返へして宇治に泊つた。宇治はしたたか熊次の氣に入つた。すべてを洗ひ流し、心身を梳くしけつ

つてくれるやうなあの川瀬の音がたまらなく好かつた。好きな川魚の料理もうまかつた。「萬碧樓」と山陽の額をかけた晴れの座敷に、紫縮緬の夜のものなどに寝かされて、熊次は少し不安になつた。今は世にない母方の伯父、思出の記の野田大作は、其昔此萬碧樓でしたたか川魚料理を喰ふて財布の底をはたき、淀川の三十石舟にも乗れず、頰冠りして川堤を大阪までてくてく歩いたさうである。紫縮緬の夜具に恐れをなして、熊次はあくる日宿には無斷で墓口を満しに京都に歸つた。中一日置いて宇治へ行くと、菊屋はてつきり喰ひ逃げにきめた客の歸來を白い眼で迎へた。少し茶代をはづむでも、甲斐はなかつた。紫縮緬は影を隠くし、新しからぬ木綿物で寝かされた。それでも宇治は本當に好きな處である。

預けた金や郵便を受取りに行く外、熊次は減多に深水の姉の家を訪はなかつた。最初往つた日に、深水の義兄は熊次を連れ出し繪畫の展覽會に案内したきり、大津から持參の獵の獲物の會食に今や案内が來るかと思ひに待つ熊次を到頭待ちぼうけさしてしまうた。自然に熊次の足は蛤御門に遠かつた。姉の家ばかりか、彼は誰をも訪はなかつた。唯同じ三本木に住む丁君を訪

訪は、熊次に一の刺戟であつた。學生時代から學課のすべてに落ちついた研究態度をとつて、早く學者の素質を見せたN君は、卒業後渡米研學理學士の學位を得て、今は母校に教鞭をとつて居る。歸途は歐羅巴に廻はり、露西亞に理學の大家を訪ふたさうな。トルストイ、ツルゲエネフ、ドストイェフスキイなどを熊次の爲に有つ露西亞は、クロボトキンのやうな血の氣の多い革命家の科學者も持てば、N君をわざわざ米國から牽きつけるそんな純理學の泰斗ももつて居る。N君は其人を訪問の爲、わざわざ露西亞語を研究して往つたが、英語で事足りた、と笑つた。熊次の仕事の話から、N君は曰ふた。何も無い時だから、ちよつとした建物が立つても人目に立つ。京都には、N君の外に、昔の同窓も居る、先輩も居る。少し出かけては奈何だ、とN君は誘ふのであつた。熊次は煮へ切らぬ返事しか出来なかつた。知つた人に會ひたくない。飛び出した同志社にも、行きたくない。いづれ其時もあらう。然し今は其氣になれぬ。

ある日、外出から歸ると、おかみは留守に女客が二人あつた事を告げ、置土産の菓子包を出した。包紙の名前を見ると、熊次ははつとした。客の一人は中田の咲子さん。熊次夫妻がまだ逗子に居る内、咲子さんは東京から京都に来て、今母校の同志社女學校に教鞭をとつて居る。今一

有者たる頼家の當主の住處も、T君が教へてくれるのであつた。

「山紫水明處」は熊次の寓のつい近くにある。同じ鴨河の流れに臨んで、二三軒隔てた南隣になつて居る。磧に下りて見れば、石垣の上に茅葺の小さな家がのつかつて、戸はしまつて居る。隣の板塀越しに梅檀の一樹、葉は落ちて黄ろい實が鈴生りになつてゐる。瀟洒とした外觀、其内容を見る機會は今だ。熊次はT君に教へられた祇園の頗分かりにくい「ぼっこり袋町」に頼家を訪ねて許諾の名刺をもらひ、「山紫水明處」を見た。狭い庭に、石段を下りて汲むやうになつて居る淺井がある。本家から片廊下づたひに、行きどまりが二疊の板敷、並んで四疊半がある。天井は葭簀張り、欄外は鴨河、三十六峰の眺めは潤くも、室は手狭で質素なものである。山陽没後に小田海仙の書いた「山紫水明處」の額が挂つて居る。古來日本の文人中、恐らく誰よりも人を動かし世に働きかけた男の此生活よりは、兎もあれ筆をとつて同じく世に立つ肥後熊次に、語らずして多くを語らずには措かなかつた。

外出がちの熊次が巢にも、稀に訪客があつた。深水の義兄が義理に顔を見せたり、其實弟の芳夫さんが圓い額とふくれた頬を見せたりした後に、十四年前の同志社同窓N君の思ひがけぬ來

て熊次の室から飛び出す男があつた。下宿の息子であつた。それ以來熊次は氣をつけて、餘分の金などは蛤御門の姉に預けて置くやうにした。

熊次の京都逗留も三週間近く、鴨の河原も朝々の霜白くなつた。東には駒子が待つて居る。次の仕事も待つて居る。熊次は歸り仕度にかかつた。然し歸り前にまだ一仕事残つて居る。此三週の滯留に、熊次はつとめて同志社に近寄る事を避けた。碓氷先生の寺町の舊宅も、昔ながらの栗色格子の門を唯傍目に見て通つた。其處には先生の未亡人も居る筈である。然し熊次は其門の格子戸に手をかくる事もしなかつた。知邊の一人を訪ふ事もしなかつた。然し京都に來たからには一度訪はずには濟まされぬものがある。それは山下榮さんの墓である。其墓は東山の若王子山にある。榮さんより三年前に大磯で亡くなつた碓氷先生は、若王寺墓地の開山であつた。碓氷先生の特別な知遇を受けた兄寅一は、日清戦争の忙しい中にも、廣嶋への往復によく墓參に來たものである。熊次は若王子の地點もよくは知らなかつた。

秋も暮れ方の晴れて乾いた日の午後、熊次は落葉を踏んで其若王子山に上る自分を見出した。碓氷先生以來、若王寺山は殆んど同志社の専用墓地である。やや登つて墓の區域へ來ると、知つた

人の客は、三木松子さん。十三年前熊本で英文典を教へた女生の一人、生涯の伴侶にと上京間際に打出すところを、偶然の故障から其ままにしてふた。求めらるる寫眞も送らなかつた。すべては過ぎた事である。然し何處かに先方を欺いたかのやうな濟まぬ氣が熊次にあつた。京都に來る時、熊次の念頭に絶えて其人の事はなかつた。今卒然とわれを熊本時代に引戻す其名を近々と見せられて、熊次は少しまごついた。

おかみの話によれば、女客は留守と聞いて残念がり、お座敷だけでもと此室に案内してもらひ、しばらく遊んで、好いお座敷、とほめたさうな。また來ると云ふて客は歸つた。菓子紙包に「また參ります」と松子さんの筆で書いてあつた。

包を披けば、渦卷のカステラが二本。一本をおかみにやると、喜び、疊に落ちた粒々を指で一つ残さず舐めとり、愛想して立つて往つた。眉を落して白齒丸髻の中年増、

「お一人で淋しうおすやろ。近所に姉妹の娘はん居やはりまつせ。言ふたると、直ぐ來やはりまつせ。」

と、いつかも熊次の氣をひいて見たものである。ある時、熊次が不意に外出から歸ると、遽て

熊次は一段高く坦々と拓き夷した一區に入つた。突當りに赤松が三本、下に自然石の墓がある。碓氷先生の墓である。墓銘は先生が昔師と仰いだ海舟翁の筆である。一拜して、熊次はあたり見廻はした。正面きつた碓氷先生の墓に向つて左側に、切石の立派な墓が間隔を置いて二つ並んで居る。上手の方は山下勝馬翁の墓。熊次は一度其家で親しく話を聞いた事もあつた。碓氷先生に後るる二年、明治二十五年に翁は歿して居る。熊次は一拜し終つて次の墓の前に立つた。而して「山下榮之墓」と讀んだ。明治二十年十二月のある夜、碓氷先生の客間で、叔父先生と叔母夫人の間にはさまれて横向きに椅子にかけた其人を憎惡の眼で見つめてから十四年目、東京は赤坂氷川町の夏の夕に門の郵便箱をあけて其人の計を受取つてから八年目で、熊次は今其名を帶ぶる石の前に立つた。

熊次は一禮した。

背に廻つて見た。「明治二十六年七月二十日」とばかり。

しばらく石を眺めて立つた熊次は、やがてまた一拜すると、墓地を出た。

少し下ると、見晴らしに出る。京都は一目である。御所の北手に、赤い煉瓦の建物のちらばつ

名前が直ぐ熊次の眼をとらへた。Kさんの墓がある。筑後の人で、最初の同志社では熊次の二年上級であつた。十二の熊次と、これも今は故人になつた十四の須田のMさんは、此Kさんに連れられて又雄さんの傳道地伊豫の今治に夏休に往つたものだ。白の後鉢巻をして、球戦に横矢を飛ばすのがうまかつた。深水の太郎君そつくりの眼をして居た。後年熊本で、Kさんの同級Oさんは「Kも女を二人汚した」と熊次に話した。其Kさんの墓である。明治二十年の夏休の末に、熊次が東京から同志社に歸つた其夜、熊次と知らずに、加之年下のくせに、熊次に妙な事をしかけたS君の墓がある。熊本の女髪結を母にもつて、そばかすだらけの握飯のやうな顔をして、和歌の上手であつた。「小嶋百代子之墓」と讀んで、熊次は微かな心の痛を覺えた。下ぶくれで好い血色をした上品な百代さん、許嫁の男の洋行中に、他の洋行歸りに關係し、許嫁が歸つて女學校の門に頻々車を寄せたりする由を聞いたが、何時の間にか亡くなつて居る。級の集會で、熊次が其人の事を *Senseless being* と其冷靜を罵り、其くせ後では又雄さんの夫人の葬式に穿く袴を其人から借りた、ポストのやうに丈高い、哲學者のMさんの墓もある。且つ上り、且つ見ると、知つた墓だけである。

あくる日の夜嵐車で、熊次は京都を立つた。而して其夜の明けて日が高くなる頃は、もう逗子の隠宅にさまざまみやげを取りひろげて居た。朱塗の小さい香爐臺、鹿の水入れは奈良。玉露一斤、茶の木の茶盆、太閤様のお茶の水汲み釣瓶に擬した煎茶碗は、宇治橋の袂の通圓で買ったみやげ。其他くさぐさ。外に一本小さな槭もみぢの木もあつた。其昔同志社に居た甥分の青年に托し父が取り寄せた高尾のもみぢの苗は、今逗子の庭に可なりの若木になつて、海邊相應の紅葉を年々見せて居る。奈良へ往つたら手向山の槭の苗を、と父が熊次に注文した。肥後家は菅原姓と言ひ傳へて居るので、「もみぢのにしき神のまにまに」と菅家が詠んだ手向山の紀念を父は求めたのであつた。父の注文を忘れず、熊次は手向山の苔蒸す石垣の間からもみぢの芽生を五六本ぬいて來た。京都滯留中も下宿の庭に假植して置いたが、立つ前日見ると無慘や枯れて居る。熊次は残念であつた。到頭附近の植木屋を物色し、成る可く小さな盆栽のもみぢを一本買つて

た一區、それは同志社である。やや久しく眺めて居た熊次は、やがてくるりふりかへつて、總まくりの上に一拜すると、ぼつぼつ山を下りて行つた。

熊次は匆々に逗子を立つて、原宿に歸つた。

留守は無事であつた。岩原の口入れで來る事になつて居た上州の娘が來て居た。姓は岩井、名はたづ子、高崎の教會員で呉服屋の通ひ番頭の娘、母は繼母で、岩原の家に來ては泣いてばかり居るといふ事で、日蔭育ちのいたいたしい小娘を期待した原宿の夫妻は、十六には大柄な、顔は黒子澤山の、何處か剽輕なところもある娘にいささか案外の思をした。丈高で驚いたと駒子の手紙にもあつたが、歸つて見て熊次も驚いた。然し家が賑やかになるのは惡くない。それに彼女はすべてにはきはきして居た。

大津の直たより、二枚の寫眞は駒子を喜ばせた。兄妹の母は、生前よく兄の眼を注意しては、眼ざしがしつかりして來たと喜び、よくないと云つては憂へた。駒子は獵銃を手に、犬を足下に侍らせた兄の眼が柔和に、而してしつかりして居るのを見た。父母の亡くなつた當時熊本で菊池の兄諸共撮つた寫眞のそのの瞋恚に満ちたのに比ぶれば、同じ人とも思はれなかつた。未だ見ぬ兄の妻の好い人柄である事を夫から聞かざる彼女は、やや安堵の思をした。お茶の水時代姉のやうにして居た平田の吟子さんを兄にと思ふて居たが、すべては縁で、事實の前には

歸つた。父は喜んで所謂手向山の槌を手にとつて見て、胡散臭い顔をして、

「太いもんな。」

と云ふた。熊次は冷やりとした。直ぐ熱くなつた。然し彼は父に自白する勇氣がなかつた。父は後で禮の辭をくれた。

錦楓吟咏一千年 報道即今山欲然

厚意携歸釋小樹 舊都秋色看階前

其日は日曜であつた。熊次が上方みやげを列べて居る處へ、兄が東京から來た。彼は信州青年の林を連れて居た。熊次は上方から兄にも社にも一度のたよりもしなかつた。白らけた仲を繕ふかのやうに、青年は皆が熊次の新小説を待つて居る、と言ふのであつた。宇治みやげの煎茶器などいぢくつて居た兄は、突と身を起すと、青年を連れて裏山の四阿へと往つて了ふた。熊次はぽかんと残された。

「捨石も要るけん。」

と母が宥むるやうに言ふた。

んで、千駄ヶ谷の基督教青年會幹事Nさんに齎らした。而して身輕になった。

新聞雜誌の評判は、「傳記に手馴れた」著者の作として相應に好評であつた。K新聞の評者は、カアツウム籠城から最期にかけての淋漓悲壯をたたへた。三分の二讀んだ熊次の父は、「もう死ぬのだらう」と、後を讀むをつらがつた。讀みはじめたらやめられなかつた、と同志社教師の一人の言を傳へたは中田咲子さんで、ゴルドンの身輕にして世に出たのが氣もちの好い生涯の秘訣とは、昔の兄の門人、今田舎で鑛山掘りに身を窶して居るM君の評であつた。

ゴルドン將軍傳の稿料は、三十圓の約束であつた。不如歸、思出の記で著者の聲價が上つたと謂ふので、色をつけるといふNさんの話であつた。K書店が持つて來たは四十圓と、外に校正料五圓を添へてあつた。熊次は少し物足らなかつた。經濟上、それは逆戻りである。然し無慾な主人公に對しても、此上望むは氣恥かしい。それに果された義務の快感が彼を慰めた。

ゴルドン將軍傳の獲物は別にあつた。ゴルドンは耶蘇基督を熊次に連れて來た。K書店の廣告に基督の肖像額を見た熊次は、手紙してそれと呼んだ。稿料と共に、K書店主人はそれを熊次に齎らした。一目見て熊次は氣に入つた。それは今まで見た多くの耶蘇像の中で、一番耶蘇ら

順ふ外はなかつた。幼ない甥の彈平に亡い祖母の面影が何處か残つて居るも、なつかしかつた。唐崎の松の一房は殊に嬉しかつた。それには兄の祝福が籠つて居る。熊次が京都から買つて來た美しい半襟の二かけも、彼女を喜ばせた。

*

*

*

*

*

京都行の留守に駒子が校正を済したゴルドン將軍傳が、歸つて間もなく十二月中旬にK書店から出版された。熊次は其見返へしに、

此傳の主人公の嘆美者

此傳著作の慇懃者

此傳の校正者なる

吾愛妻

に此書を献ず

著者

と書いて駒子の机上に置いた。次に其十部を、永々借りた材料參考書の數冊諸共大風呂敷に包

星巖などもほめて居る八十翁の老勁な筆跡は、仰いでも氣もちが好かつた。沈んだ油畫の浪子も、御池君の明るい「棕の秋」の水彩も、座敷や客間を賑はして居る。金壹圓で迎へ取つた新來の耶蘇基督は、それ等の間に畫龍の睛の如く挂つた。デスクから眼を上る毎、熊次は恐いやうでやさしい彼男の、今にも電の火が迸り出さう涙の雨が降りさうな二つの眼と眼を見合はすのであつた。

しい耶蘇、基督らしい基督であつた。九寸五分に一尺二寸の神代杉の額縁、銀で縁とつた鼠色の臺紙の中から、半身の耶蘇が現はれて居る。獨逸の畫家ホフマンの筆である事を、熊次は二十四年後に知つた。兎もあれ其基督は全く熊次の氣に入つた。それは確に人、而して人間ばなれがして居る。人類人で、然も猶太人である。男で、何處かに女性を具へて居る。哀の人である。狂人じみて居る。要するに生きて居る。それはラファエルの *Sistine Madonna* に抱かれた *Baby Jesus* の成人したのである。眼で分かる。熊次はそれを四疊半の書齋に挂けた。

氷川町で父の額を踏み破り、沼山先生の幅を引き裂いた以來、熊次の家は久しくこれといふ掛物なしに過ぎた。米畫伯の驟雨山水は其前切りぬいて駒子の父の病氣見舞に送つた。逗子の晩年に、父が「千秋積雪放祥光」と竹亭伯の七絶を幅にしてくれたが、勿論さしてありがたいものでもなかつた。これも譲られ物の肥後の畫家矢野良恭の三保の富士は、富士が馬鹿大きく膨れ上つて見つともないので、ある時熊次自身筆をとつて少々緊縮を與へた程のものだが、時のふるびがついて居るのが取柄であつた。原宿に居を定むると、熊次は薩摩の書家鮫嶋白鶴の「梅花書屋」を額に仕立てさせて客間の六疊に挂けた。父の書道の師、「李陵章句右軍書」と梁川

第六章

黑潮

て牛鍋を食堂に持ち出した。牛鍋が何より好物の兄も

「朝から！」

と顔を歪めたものである。

其牛鍋の朝から三年目で、小説黒潮がK新聞に出はじめた。「黒潮」とは何乎？ 熊次は本文の前に、「黒潮の解」を書いた。

ある時われ飄々然として一孤島の上に立ちぬ。島人の眼は閉ぢ、手に鎖あり、足に械ありき。悚然去らむとするに、四周の海は堅氷に封せられたり。

『吁、此氷何時か融く可き？』

憫焉として佇むこと多時。忽ち聞く千萬里外いとも幽かに遠雷の響に似たるあるを。島人の一人二人、不圖起き上り、耳傾け、眼を摩り、他を呼びさまさむとせしに、他の島人は怒つて之を殺し、縛し、口を封じ、また臥しぬ。

『あゝ、島人の眠何時か醒む可き？』

明治三十五年の正月から、熊次は小説黒潮を新聞に出し始めた。

それは熊次が逗子住居中の事である。ある時、出京して兄の家に泊つた。義姉は軽い肺炎加答兒で逗子に轉地し、母が主婦どころをやつて居た。兄は機嫌よく朝から色色話し込むだ末、斯様な小説を書いたら如何だ、と言ひ出した。明治政府に反感を持つて、落魄して死んだ志士がある。其子が父の志をついで明治政府と闘ふ。追々時代が移り、子の眼界が開け、反感が消ゆる。同時に世間の誤解を浴びる。然し融けるものは融け、光るものは光り、畢竟めでたしめでたしに落ち着く。敵方に可憐の女性があつて、戀愛が絡んだら面白からう。

熊次は直ぐ同じた。

「それは面白いでせう。書きませう。モデルは直ぐ傍にある。」

兄弟の珍らしい打とけ話を母が悦んで、自身臺所に出張し、朝つばらからちゆうぢゆう云はし

此騒ぎは甚長かりき。余は且倦み且忌み、久しく瞑して、怒號の音を聞けり。良久しくして眼を開きたる時は、島を封せし堅氷融けて、漫々たる黒潮自由に島を洗ひ、點々の残氷は猶其上に絶叫する幾多の盲を載せつゝ遙かに流れ去るを見たり。島に残れる者の眼は開けて、鎖と械とは手足より落ち、丈夫の如く立ち、獅子の如く歩めり。

『不思議なる海流よ、恐るべき力よ！』

斯く獨語して、不圖傍に人あるを見ぬ。鬚眉雪の如く、面には少年の色あり、右手に一枝のペンをとり、左の脇に大なる冊を挟めり。余を麾きつゝ、一躍して塔の如き高巖の頂に立ち、語なくして阿那の邊を指す。見よ、島外島あり、萬萬千、我島を洗ふ彼黒海流は、無邊際の彼方より來りて分派百道、島より島にのたうち、岸より岸を洗ひ、汪洋澎湃、盡きず、休せず。

『驚く可き海流よ！』

猶佇むこと多時。聞け、幽かなる彼轟々の響次第に近寄りぬ。何時しか潮の香強き暖風の南より吹き來ぬ。島を封する堅氷の海、布を簸あふる如くに搖らき始めつ。風はいよ／＼吹き募り、轟々の響はいよ／＼鳴りまさり、きゝ、きゝ、と響して一條二條の龜裂氷盤の面を走るよと見れば、白泡嚙める黒駒の勢より疾き一道の黒潮島も轟どろに奔注し來れり。

余は斯前後に於ける島の騒ぎを名狀する能はず。いち早く醒め他を醒さんとする叫び、さては醒されじとすまふ者、鎖を切る者、はた繋ぐ者、鎚を揮ふて氷塊を碎く者、杯土をもつて磯邊に下り立ち湧きかへり來る海流を堰かんとする者、裂けかゝりたる氷に鋌うつて繋け留めむとする者、明盲醉醒組むづほぐれつ混戦すれば、敵か味方か、勝か敗か、眩じたる眼に見分け難く、聾せる耳に聽き分け難し。

『あゝ此騒ぎ何時か止む可き?』

聞雜誌で目星しい新刊が出ると、科學哲學法制以外は追さず彼は讀んだものである。熊次は早速丸善に往つて、「The Crisis」を買つた。リンカン、グラント等の歴史人物も出て、きびきびと書かれた米國南北戰爭小説である。トルストイの戰爭と平和のやうな大手筆ではないが、現代向きの手取早い要領を得た書きさまである。然し熊次は自分の行き方で行かうと思ふた。

黒潮は一年に涉るといふ豫告を以て、堂々と出はじめた。黒潮の題下に「羅馬は一日にして成らず」と Motto を書いた。鹿鳴館の演藝會から書きはじめた。其頃は鹿鳴館がまだ其まゝに立つて居たので、わざわざ往つて外形のスケッチなどしたものである。主人公を舊幕士人の子にした。女主人公を小さな大名華族の女に求めた。熊次夫婦が逗子住居中に、A 子爵夫人が葉山の別荘で自殺した。熊次は一度も夫人を見なかつたが、母にはなれたい氣のおかつばの姫が老女に連れられ緋の緒の草履をはいて森戸の濱を歩いて居るのを見た事がある。駒子がお茶の水の教生時代の教へ子の寫眞の中に、稚子髻の端麗な大大名華族の姫のがあつた。それからある公卿子爵の姫が小さい頭をまろめさせられてつい近くの善光寺に居るのがあつた。圓い頭

老翁莞爾として余を顧みて曰く、余は彼海流の流れ初めしより其を注視するこゝに六千年なり。驚きて、名を問へば、答へずして曰ふ、余は人間の在らん限り在る者なり、余は彼海流が上帝の聖座の下より流れ出づるを知る、大なる流よ、此に順ふ者は生き、逆ふ者は亡ぶ、汝が見る所を汝が國人に告げよ、
「眼ざめよ、起きよ、努めよ、失望するなかれ、解脱の日遠からず」と告げよ。』

醒むれば、机上半時の夢なり。老翁の言に従ふて、詳らかに夢中の所見を書かむとするに、唯飛塵の如く閃めきて捉ふ可からず。歎じて筆を抛ち、また抛ちたる筆を拾ひ、記臆の一節を糊塗して小説『黒潮』を作る。

*

*

*

*

*

思出の記の後に、半年の餘も新聞を休んだ熊次の黒潮が出はじめると、寅一は喜んで、新刊の小説 Winston Churchill の「The Crisis」は参考になると一讀を熊次にすすめた。歐米の新

使ひルビをふつた。K新聞の編輯を久野さんの弟のMさんがやつて居る。N新聞の非難を氣にして、Mさんがつとめて熊次の原稿の假名使ひを正すやうにしてくれた。

兄の口から斯様な事を聞かされた熊次は、然しひるまなかつた。書きかけたら決して一日も休まぬと云ふ決心を以て、熊次は頑固に日日の稿を續けた。

の姿で小學校に通ふたり、附近の子女と遊んだり、白松時子とまだ俗名のままを書いた蛇の目の傘が本堂前に干してあつたりするのをよく見かけたものである。それ等をどつちやにして、反抗の魂を吹き込み、斯くして女主人公の卵を造つた。

小説は熊次の手に餘つた。見たもの、知つた事、感じた事しか書けぬ熊次、人遠い、人嫌ひ、見聞の狭い熊次、「人と話した事のない人の會話」と社中の皮肉家が云つたやうに、また田舎は兎に角都會の小説は所詮書けぬとある雑誌が折紙をつけたやうに、小説を書く資格の缺けた熊次に、生きた小説を書くは中々骨であつた。訪客に熊次が駄洒落れた如く、「黒潮」^{くろしほ}でなくて、それは「苦しい」であつた。然し乗り出した船は、行く所まで往かねばならぬ。熊次は脂汗を流して日々其日の分を書いた。

新聞紙上の黒潮は、一向人氣がなかつた。編輯局で人氣釣りの投書を出して見ても、思出の記の場合と異つて、反響は少しも來なかつた。N新聞に子規門下の俳人H君が假名使ひの亂暴を指摘したくらゐが世間で唯一の反響であつた。熊次の假名使ひは少しも格に入らぬものであつた。駒子が持參の言海や字音假名使ひ法の筆記を参照する場合は稀で、大抵は出鱈目に假名を

なつて、中々止めないので、上州の強情娘がしくしく泣き出したものである。其娘の岩井たづ子も郷里の女子師範に入る事となつて、世の中で一番好きの餅菓子を立ち振舞に、上州へ歸つて往つた。「此家は子供が無いから、それは可愛がる」と女中に言ふたりして居た彼女も、それが繼母の許へでも、歸るとなればいそいそと飛び立つ浮々した容子に、駒子は腹を立てたものである。たづ子が去つても、お君はよく來た。ある時、八つか九つ位の女の子を連れて來た。鈴を張つたやうな眼で其子は熊次を見つめてはなさなかつた。それは女子學院の津森叔母の末女おたみさんの女のすみ子であつた。おたみさんは熊次と同年の早生れ、西郷戦争の頃、熊次の一家が熊本を距る四里、杉堂の山村にある母の實家の津森家に避難した時、其處に集つた親類縁者の子供の中に、頬のぶたぶたした、人を馬鹿にしたやうな眼をして、ゆつくりものを言ふ娘が居た。それがおたみさんであつた。其後は津森叔母の妹で子供の無い春竹叔母の家に居て、手紙にも「春竹たみ」と書く噂を耳にした。熊次が同志社から夏休に東京に來た時、おたみさんは其頃まだ櫻井女學校と云つた女子學院の高等科に居て、手紙なども英文ばかりと兄が噂をして居るのを耳にした。熊次は其後絶えておたみさんの消息を聞かなかつた。おたみさん

黒潮が無人氣の中を黙つて淋しく日々の紙面を流るる間に、著者の身邊にも多少の出来事はあつた。舊臘生れた兄の男の子の忠が死んだ。其時後産が下りかねてすでに死にかけた義姉は、醫師が必死の努力で生きたが、子は終に肥立たなかつた。それを葬る爲に、青山墓地の幾坪か求められた。東京に越して十六年、死がはじめて肥後の家を言づれたのである。眼もまだよくあかぬ赤子の臨終の啼き聲は、熊次の頭を痛くした。七夜の中に亡くなつて今故山の墓地の小さな墓になつて居る寅一の弟、熊次の兄友喜ともきの事が思ひ合はされた。熊次の家も、最初の代代木の色黒娘が暇をとつて、此頃は澁谷の八百屋の女が女中であつた。それは北海道に今往つて居る嘉一郎が妻のたよ子に肖た色白の、名も同じくたよと云つた。原宿に越して以來は、岩原の姪のお君がよく女子學院から遊びに来ては泊つて往つた。學校から木香ばらの枝を挿木の用にもつて來たりした。冬休には、一同で夜深までトランプをした。負けると主人が意地に

が癪に障つて、其後は打絶えて居た。然し不幸を聞いては、知らぬ貌は出来なかつた。熊次は葬式に往つた。虞初子の家は筑前侯の邸内の彼住居から、同じ人の貸家と後で知つた靈南阪町の小さな家に越して居た。羽織袴でうちしほれた虞初子君の容子が笑止であつた。「歸省」を出して文壇に花やかな門出をした其年に故郷から迎へた戀妻であつた。それはK新聞發刊の年である。十年餘の間に、虞初子は文藝から宗教へ深入りして、生活は次第に^{くすぶ}燻つたものになつて往つた。筑前侯の邸内の住居を熊次が訪ふた時、「女はどうしても貧乏には耐えられぬ」と虞初子は嗟嘆したものである。而して今其戀妻も亡くなつた。

小さな家の小さな葬式は、しみりしたものであつた。女子學院の津森叔母も來て居た。牛込教會の長老を以前虞初子がして居た關係で、其教會に屬する女子學院長の叔母は虞初子を識つて居た。虞初子の信仰が別派に移ると、教會は彼を追ひ出した。然し流石に昔馴染の叔母は舊識の不幸を看過しにはしなかつた。虞初子が叔母の前に座つた。

「お年寄は御達者で、若い者が亡くなつたりして。」

と心のままを打出すと、叔母が會釋して、

は其間に結婚し、子女をまうけ、而して其夫は妻子を捨てて姿を隠して了ふた。お君が連れて来た子は、父に生き別れした其女であつた。すみ子が熊次から眼をはなさぬのも、父を見失ふた彼女が、父の年配の男に父を探がすのではないかと語り合ふて、熊次夫妻は胸を痛くした。津森の叔母は、酒亂の夫を見限つて、赤ン坊のおたみさんを抱いて夫の家を出て了ふた。其おたみさんが夫に捨てられる。業がらの中の此の女の子は傷ましい。世話をしやうか、と熊次夫婦は顔見合はせた。其心をお君が通じたと見え、やがて津森の叔母から手紙が来た。すみを引取つて下さるさうで、まことにありがたう、何程助かるか知れませぬ。夫妻は不快になつた。かりそめの心の動きを、きまつた約束にして了ふ叔母の仕方はうれしくない。それにすみ子の體にはわるい夜の癖があつて、一つ蒲團に寝かさうとしたらお君が溢つた事實がある。其様な事も手紙の上には知らぬ貌して、此方の氣弱を幸に厄介拂ひに孫を預けやうと謂ふ叔母は、二人にうれしい叔母ではなかつた。

虞初子の細君が亡くなつた。先に不如歸を送つた其禮に、讀過の小感を書いた手紙を虞初子がくれた。黙つて居たら程經て「不如歸閣了」の際手紙を上げたが云云と言ふて來た。「閣了」

果てはふたたび里川に 合はむものとは思へども

茅原萱原ちはるはると その行末を思ひやる

其新聞は出される。教會は追はれる。今また戀妻は亡くする。否でも應でもこれから一人で歩いて行かねばならぬ寺崎君の顰姿やもどが、傷々しく熊次の眼に映つた。

熊次駒子が結婚第九回の五月五日が過ぎて程なく、夫婦の家は珍客を迎へた。國許から駒子の叔母が上京して來たのである。駒子の母の妹、二木のおきな叔母は、熊本の北七里温泉湧く山鹿の町で活版業を營み、清朝活字で役所の刷物何角と刷つて、中瘋の兄と、母に捨てられた一人の甥を育てて居る。大阪まで活字仕入れに來たついでに、姪の駒子が容子を見かたかた初めての東京見物に來たのであつた。叔母は八年前熊本の病院で會つた時其ままの叔母であつた。

駒子の母より熊次は狭きやんな此叔母は好きであつた。逗留もさして苦にならなかつた。此頃は熊次の家も、餉臺を廢し、大工に造らした白木の食卓デユブルを使つて居た。夫婦散歩の歸りに、佐久間町の古物店から古物のナイフ、フォークや西洋皿を買つて歸つて、其食卓でライスカレエやフライも食ふたものだ。其食卓を客室の六疊に移し、叔母は心置きなく駒子の室に寝起きした。叔母

「済まぬやうでございますね。」

と曰ふた。自然の軽い皮肉が、此様な場合にも熊次を微笑させた。

兄も久野さんを連れて來て居た。場所柄に頓着なく談笑するを、虞初子の宗派の若い人達が不快の眼をもて見て居た。

「家内も上らなければならぬところですが」

と沈んだ聲で挨拶して居るがつしりした人は、T君でなければならなかつた。同じ友人の鴨志田君は、此頃鎌倉に居るので、姿は見えなかつた。

兄を睨めた眼鏡の人の司會で、式があつた。其人は起つて所感を述べた。昨日吊儀に來る途、辨慶橋を渡ると風吹き騒いで水は波立つて居つた。歸りには水靜かに、花の影も鮮やかに映つて居た。寺崎君の今攪された生涯にも、穏やかな時節は來やう。故人みつ子さんは、強い意志をもつて、感情の動搖烈しい寺崎さんを包んで居られた。

虞初子が昔あまりなまけるといふので一度新聞社を罷められた時、虞初子は身を小さな流れに譬へて、歌ふた。

にそれを買った。原稿はやはり社の原稿唐紙に毛筆で書いたが、美しいインク壺はデスクを飾った。綺麗なものには目のない叔母が、

「綺麗なものな」

と蓋をつまむ拍子に、インクがたらたらとデスクの上にこぼれた。駒子は叔母のいたづらのあと清めに汗を流したものである。熊次は此頃薔薇道樂を始めて居た。植木屋が持ち込んだ「白黄」の鉢が二圓もすると聞いて、

「あぎやんボタンば、二圓も出して、所詮金は溜まらんばな。」

と叔母が駒子に曰ふた。熊本では、薔薇をイゲボタンといふ。イゲはトゲである。

叔母はテエブルも厭はなかつたが、やはり餉臺が勝手が好かつた。生れて初めてライスカレエを食べて、叔母が駒子に曰ふた。

「あんた結構なものない。こぎやん御馳走ばかり食べる家ア、山鹿なんかや、どぎやん金もちだつちや、一軒だつてなかな。」

熊次夫婦は歌舞伎座に叔母を伴ふた。中瘋で引入つて居た菊五郎が久しぶりに出て「山中平九

は駒子の異母兄正太兄が隈府から山鹿に移つて、酒造業をつづけて居る話をした。大黒柱は鉛を埋めて、堅牢な普譜さうな。正太兄の細君は、小山工學士の妹で、夫婦の間には女一人。駒子が大きくなり、遊學に出たりした後では、昔の駒子がはりに、一同に可愛がられて育つたものである。其姪のおせいさんも最早年頃なので、養子問題が起つて居るさう。數學畑の先輩の小山さんを、熊次はあまり好かなかつた。結婚式に小山さんが列席した後で、兄の社では買ひ入るる小さな印刷器械を小山さんに見てもらつたり、小山さんが勤むる藏前の工業學校を觀に熊次は社からやられたりしたが、其後小山さんは英國に遊學し、歸つて工學博士になり、今は帝大に勤めて居る。熊次は遠くして居る。然し叔母が山鹿へみやげ話に、一度駒子に連れさせて其家を訪はすを否まなかつた。叔母が東京に来て一番氣に入つたものは、裾短に海老茶袴を蹴つて、靴で活潑に歩く女學生姿であつた。

「私やありが一番好き、袴は穿^{ひや}アち、靴でなア。」

と眼を細うして讚嘆する叔母であつた。熊次は銀座の店で切子の硝子の美しいインク壺を久しく目かけて居た。一圓五十錢といふに一寸手を出せなかつたが、黒潮を書きはじむる時、紀念

血は血を呼ぶ。おきな叔母の逗留中、思ひがけなく大津の清人君が出て來た。去秋の訪問後、熊次は「思出の記」を大津に送つた。主人公の親友、女主人公の兄、札幌出で農業で立つ卷中の松村清磨に自分のほのかな影を見出した義兄は、「清磨」など署名して喜ばしい手紙をくれたものである。銀行併呑も思はしく運ばず、家族を大津にとどめて、單身上京したのであつた。本郷のSといふ藥種醫療機械店の顧問を當分するさうである。兎も角も危険な棒組と手を切つて、自力の仕事に就くのは、駒子の喜であつた。清人君が姿を見せて幾程もなく、ある日熊本辯の大人しい、にきびの多い制服姿の中學生が叔母を訪れた。叔母の遠縁に當る町中といふ家の惣領で、父は叔母の町で金貸などして居る。子は先年來上京して、今青山學院に居る。寄宿のまづい話を聞くと、叔母は身を震はすやうにして、そんな所には置かれぬ、此家に置いてくれ、と熊次夫婦に打ちつけに頼むものである。誰しも學生は寄宿下宿のまづい飯を一度は喰ふものと答へて、熊次は明らさまに町中君の寄食を斷つた。其尾について、駒子も熊次の言を確めた。叔母は承服する外はなかつた。町中君の同居はおろか、熊次は清人君の足繁く出入するさへ喜ばなかつた。熊次の日日怠らぬ几帳面な仕事振りを目撃した清人君は、成る可く邪魔

郎」をやつた。葵の上に扮して、トントンと足拍子を踏むと、熊次も駒子も看客一同はつとしたものである。それは團十も出ぬ淋しい芝居ではあつたが、

「衣裳が何^{なに}ン角^{きやあ}ン！」

と叔母は田舎に見られぬ舞臺衣裳の美をたたえた。歸つて後も、寢ころんで昨日の番附を出して見ては喜んだ。

駒子は叔母を伴ふて青山から逗子へ挨拶に廻はり、鎌倉江の嶋を見物して歸つて來た。本宅隱宅の生活ぶりに比べて、姪夫婦の借家住居を叔母は不快に思ふたらしく、逗子の母が心易い扱ひぶりに腹を立てて、隱宅は遁げるやうにさつさと出て了ふた。江の嶋では、洞窟の奥の院^まで窮はめねば満足しなかつた。大きな蝶貝の根がけを買つてもらつて、駒子はうれしかつた。

日光へは一人で往つた。裏見の瀧への車代を値切り、行かねば歩くとさつさと反對の方向へ歩き出し、「其方ぢやありませんよ」と車夫に注意された、と叔母は笑つた。叔母は中禪寺道で國へみやげの躑躅の苗など探るとして、東京で買つたばかりの中挿^{なかさし}を片方落したりして來た。叔母は小さな丸髻に結ふて居た。

休暇日記

七月一日。「今年もなかばは過ぎにけり」と、隣の女兒うたふ。

三日。半夏生、却りて雨なり。籬の楓枯れしあとに、女竹五竿植う。

今植ゑた竹からも来る嵐かな

とは、古人の句。雨洒ぎて、婆婆婆婆。木には見られぬ趣深し。

八日。三日月清し。今夕、はじめて、近きあたりの大榎に、蜩の聲を聞く。

十三日。隣家の翁、杉籬ごしに、「泰山木の花咲きたれば、見に来よ」といふ。行きて見る。

葉は、ゆづり葉のそれに似、花は白木蓮を三つ四つも合はせたる程にて、芳香、たとへむ方なし。豊麗にして、しかも品高き花なり。

十六日。去年、近所の林より掘り来りし山百合、はじめて開く。逗子あたりは、六月の中旬を盛とするに、一月も後れたる、一は今年の氣候の故なるべし。盡日細雨煙の如く、原宿の

にならぬやうに足を遠くして居た。叔母は姪夫婦の容子に安堵したらしく、東京に出たいとせがむ國許の甥の典次に約束のみやげの銀時計など買ふて、歸國の途に上つた。熊次のデスクにのつて居るやうな切子のインク壺を餘程探したが無いので、滑つこい平べつたいのを買つて歸つた。熊次夫婦は清人君と共に叔母を新橋に見送つた。九年前には、丁度其様にして兄妹の母の歸國を送つた。涙を浮べて、叔母は東京を後にした。

斯様な出入りの中にも、熊次は一日も小説を休まなかつた。時々は全くだんやになつた。空疎な、力ぬけた感じに、筆が動かなくなつた。然し無理に書き通した。正月から新聞に出はじめた小説「黒潮」は、梅につづき、櫻につづき、藤につづき、躑躅につづき、花菖蒲につづき、到頭栗の花さく六月も末になるまでつづいた。熊次は女主人公の母を自殺させて十二の女主人公を尼寺に入れ、男主人公の父を盲目にし病死として、十八の男主人公を英吉利から歸朝として父の臨終の間にあはせ、茲に小説黒潮の第一巻を終つた。

ど、わが量狭ければ、異を嫌ひ非を惡みて、みづから世を窄うす。恥しき事なり。

二十日。朝の程、日影さしたれば、貝細工の花、いと美しく開きしに、やがて曇りたれば、乾びたる鱗々の花瓣、みるが内につぼみぬ。またの名を、萬年草といひて、盛の時に摘み藁をだに去れば、萬年も色を保つといふ花なれば、すこしの濕氣をも厭ふにこそ。心に染むことかな。誰か爾にかく自愛惜することを教へしや。

廿五日。晴。夙起、小園を歩すれば、虫の音清く、杉籬の蛛網、露を帯びて、白絹の光あり。撫子花・檜あふぎ・百日草・千鳥草・桔梗・日まはり・金蓮花など、露に濡れそぼちて、夢、いまだ醒めじと見ゆ。亞米利加白蘚、またの名、水蝶花を隅の方に捨植になし置きしに、何時の間にかいと大きくなりて、盛に花をつけたり。先年の夏、母上の此の花を見て、「西洋の花は、皆丈夫なり。他に頗著なく、己が咲くべき花を咲かせて、逞しきを見給へ」といはれし一語、耳に響きしより、此の花を見るごとに、其の語を思ひいでざるはなし。夕方、樺色の雲、西隣桔槔の上に浮びて、蜩の聲すすし。

夏、いと寂し。友人某より寄贈せられし「畫聖ラッファエル」を読む。眞面目の著作、ラッファエル及びその時代の一斑を窺ふに、倔強の手引草なり。

十七日。嫁菜の花、一輪咲く。こは、去秋京都に遊びて、山陽先生の山紫水明處の下なる磧より掘りて來しなり。立ちて見る程に、

水の音も……………

……………

と詠みし、その折の清興水の如く、湧きかへり來ぬ。午後、澁谷の川に、鮒釣に行く。水まさりて、青蘆を沒し、川柳の偃して小きアーチを作れるを、心得がほの水馬ついつい潜り行けば、犬蓼の花搖きて、小き蛙のさんぶと水に飛びこむも興あり。時々雨ざあとしおきて、風景みるみる淡墨の畫になりゆく。傘簑笠そここ見えたれど、獲物ありとも思はれず。吾も一尾を得ず。蛎ぶんに蝨さされて歸る。

十八日。菊に肥料をやる。花を愛しそめて、いつしか肥料もいとはしからずなりぬ。肥料を愛づるにあらず、花を愛すればなり。清濁併せ吞むといふこと、耳の痛きほど聞き知り居れ

第七章

社會主義

人の自由譯を出す、Y先生は遊びに來いと人傳に言ふてよこされた。熊次は往かなかつた。

其後「浮城物語」を出したり、新聞の隨筆に山陽の天草の詩の「篷窓」を「芳草」に誤つて「芳草先生」の物笑ひになつたりして居たが、何時しか文壇に遠くなつた。其間にY先生は支那公使、宮内官と云ふ段取を経て、今閑散の位置に居た。先には青山御所前の懸崖上に危げな洋館を建てて居たが、何時の程からか熊次が住む原宿にY先生も住んで居た。原宿に越した當座、其處此處歩いて居ると、不圖名札を見つけ、

「あ、此處にYさんが居る。」

と熊次は思ふたものである。熊次は南、Y先生は北、同じ原宿の其間五丁とははなれて居なかつた。然し熊次は一度も訪問しなかつた。「新社會」が出ると、早速讀んだ。Y先生は老いて居なかつた。依然先覺者であつた。Y先生の白日夢に現はれた「新社會」、それはおぼろげながら熊次の腦中に醗酵して居るものに似て居た。

熊次の同情は、昔から弱者敗者にあつた。十八の年、洗禮を受けた時、「少しも失はざるやうパンの屑を拾ひ集めよ」といふ耶蘇の言に感激し、世の屑と謂ふ屑を拾ひたい決心を以て受洗

熊次は小説黒潮の第一巻を終え、社には嘗分休む由を書き送り、七月一日から夏休の生活に入つた。其日に龍溪Y先生の「新社會」が出版された。

經國美談のY先生に隨喜した昔は遠い。明治二十二年の五月、熊次が熊本から東京へ歸參すると、兄が幹事をして居た文學會の例會が萬世橋のほとり萬代軒の二階で催されて、熊次は後でK新聞社員となつた飾磨君と紺續に兵兒帶姿で席末に列したものである。逍遙、美妙、學海、算村、碌堂其他燦爛たる文星の聚會の中に、窓下の椅子に紋付羽織袴ゆつたりと口髯黒く、顔蒼白く、後飾磨君が其主宰の時務評論に書いたやうに、「滿場の文學者を小兒視して殿様然と」構へて居る人がY先生であつた。兄に具せられて其前に一揖すると、Y先生は鷹揚に一禮した。食卓でもY先生は低いゆつたりした調子で饗庭算村さんに松浦佐用姫の故事を問ふて居ると、算村さんは恐れ入つた態度で何か答ふる狀が今も眼にある。翌年K新聞に熊次が初めて「石美

上天願はくは爾が僕を祝し、爾の爲に斯筆を用ゐしめ玉へ。」

東京に歸參して、受くる者、治めらるる者、使はるる者の立場に始終立つた熊次の同情は、自然日蔭者の側をはなれなかつた。日清戦争終つて大元帥陛下の御凱旋を迎へて東京は國旗林立、萬歳の聲湧く中に、檻褸に縄帶の立ん坊の一人が、

「何でえ、車力なんざ如何するい？」

と低く叫んだ其聲は熊次の耳を貫いて、彼はいつまでも其を忘れ得なかつた。支那に勝つた。然し本當の憂は内にある。此不平、此不滿の輩も陛下の赤子だ。如何したら好いか？

熊次はまた新聞社に日勤して居た頃、日吉町の河岸で偶然眼に觸れた一場の光景を忘るる事は出来なかつた。十五六の男の子、跣足で檻褸の、猿のやうな顔をしたのが向ふからやつて來た。唯見ると、いきなり芥箱の蓋をあけた。手を突込んで取り上げた竹皮包をあけて見ると、忽ち寒山拾得の笑顔を崩して、

「しめ——たア——しめ——たア」

片足がはりに足拍子をとつて踊つたものである。

したものである。伊豫の今治に傳道師見習をして居た時分、場末の漁師町を覗き、不漁で頭からくされ蒲團をかぶつて寢て居る白髪頭の漁師や、收税吏に鍋釜とられた家族を唯は見て居れず、叔母から借りた持ち合はせの二十錢で米や干鰯を買つて施したり、汚いおかみさんと握手したり、木綿羽織をぬいて裸の爺さんに着せたり、會堂に引張つたり、間歇的に色色やつたものである。

熊次の同情は虐げられるものにあつた。従て婦人が先づ熊次の同情を惹いた。次には貧しい人であつた。京都をしくじつて熊本に居た時、「爾が心の悲哀萬斛の泉、之を汲んで共に泣く者は誰ぞ」と婦人について書いた熊次は、また斯く書いた。

「ああわが不幸なる、あはれなる者よ。世は爾を虐げ、社會爾を捨つ。爾を扶くるの勇將は何處にある？ ……爾が僕、彼は財を有せず、彼は名を有せず、彼が有するところは唯一枝の筆あるのみ。

然れども爾が力の未だ足らず爾が訴の未だ競はざるに當つては、彼が持つ一枝の秃筆も亦寸效なきにあらざる可き歟。

「新社會」が出た。それが熊次を喜ばしたのは當然であつた。

熊次は惻然とした。斯様なのが帝都に何の位あるか知れぬ。

如何したら好いか？

其當座熊次は芝の新網や四ツ谷の鮫が橋を歩いて、彼等の生活狀態を他所ながら知らうとしたものであつた。それは何等具體的產物を殘さなかつた。然し持つて生れた同情は、熊次のあらゆる成長と共に其自然の方向に生長せずに居なかつた。

維新の宏謨は、五ヶ條の御誓文に盡きる。其第三條に何とある？

「官民一途、庶民に到る迄各其志を遂げ、人心をして倦まざらしめん事を要す。」

一飢民、一不平子が日本にあらん限り、維新の大志は遂げられぬ。其志を遂ぐ可く、日本は皇室を奉じて第二の維新、總建直しを経ねばならぬ。名をつければ、社會主義、日本を擧げて一家族の實を擧げねばならぬ。去年「何故に余は小説を書くや」の中に、「一頓挫せる維新の風潮に鞭たんと欲す」と書いた時、熊次は日本の惣建直しを社會主義によつて斷行し、維新の精神を徹底させねばならぬと考へて居たのであつた。「黒潮」に人道の流れを高調した下心も、それに外ならなかつた。其黒潮の第一巻が新聞紙上に局を終るをさながらのきつかけに、先輩の

日本は露西亞を忘れなかつた。露西亞も日本から眼をはなさなかつた。明治二十八年の春の三國干涉以來は、睨み合ひが格闘にうつるも、唯年月の問題であつた。明治二十四年の五月江州大津で日本の巡査に斬られた生疵のまま今の露帝ニコラス二世が皇太子として其起工式をした西比利亞鐵道は、長蛇の如くすすん東へ伸びて來た。日本も師團を倍加し、せつせと軍艦を造り、西を見い見い双を磨いだ。熊次が「黒潮」を出しはじめた今年の正月に、日英同盟が公布され、帝都は交叉した日章旗とユニオンジャツクの下に遼東還附以來の驪聲を揚げた。利捷い英吉利が支那を見限つて日本と握手した。光榮ある孤立を誇つた西の嶋帝國が、東の嶋帝國と進んで握手した。日本の爲には千人力の後楯である。英吉利がついて居る。日本は露西亞と人交へもせず闘ふ事が出来る。日英同盟は日露戦争の時期をぐいと間近に引寄せた。其勳功によつて、時の總理大臣太郞子爵は伯爵に昇叙され、壽太郎外務は男爵に叙せられた。肥後

ア、賄賂取つたつて好事ばする者な、爲ぬ者よりましてち言ひましたな。」

父は深く思案する容子もなく、

「應」

と言ふた。熊次は黙つて居た。

「曲りても杓子は物をすくふなり、直くて——何とか——つぶす摺子木」と云ふ歌を友山君はよく引く。友山君も兄も其點は同じで、共に力の福音の信者である。

「品性キヤラクトル」と「行狀コンダクト」

の別を、熊次は曾て寅一から懇々力説されたものである。惡く世間に

云はるる人間も、悪い爲に頭を出すのでなく、好い點の爲に出世するので、善人もなまけて居ては物の役に立たぬ、とよく言ふたものだ。「正を踏んで恐るるなかれ」のジョンブライトに昔共鳴した彼は、正義を眞向にふりかざす者を、「正義屋、正義屋」とけなす彼であつた。「正義屋が直ぐぐづぐづ言ふ。」「正義屋がうるさい。」昔彼が攻撃した相手の位置さながらに彼は今居るのであつた。彼は碎けた。熊次は彼の變化を半信半疑の眼を以て見守つた。兎もあれ、人は自己をはなれて同情し得るものではない。昔ながらに弱者の籍に身を置く熊次は、力の側に

寅一は帝國主義の旗幟押立て、其新聞を提げて一意時の政府を助けた。

日清戦争後の寅一は、最早戦前の彼ではなかつた。世界一周前の彼で、洋行後の彼はなかつた。世界を廻つて白人の壓迫を痛感した彼は、藩閥の、薩長の、官の、民の、内輪喧嘩の小ぜり合ひをする時でない、國を舉げて一國となつて外に當らねばならぬ事を痛感した。半歳でも官場に居た経験は、受身に立つ心得も學んだ。彼の執着と歎憤心は追々にとれて往つた。日清戦争の結末に切齒して、彼は當局の春畝山人に喰つてかかつた。七年後には彼の郷國に來る春畝侯の爲に先棒を振る一人であつた。昔民黨吏黨の警語を造り出した彼は、政府の機關新聞として公然立つ事を恥ぢなかつた。彼は其報いを得た。現在の力に依る彼には、現在の力が宿つた。松隈内閣の最後に失脚した當分は、三年前に亡くなつた日清戦争の智慧袋、日露戦争の計畫者、知己の參謀本部長から金五百圓を融通してもらつて一時活版職工の給料を拂つた。此頃ふつたり社に行かぬ熊次も、其處には昔無かつた新しい印刷機の幾臺か据ゑられた事を知つた。ある時、逗子の夜話に、寅一は父に曰ふた。

「喃、阿爺おぢいさん（肥後の家では、皆が父を「おぢいさん」と曰ふた。）あらたしか熊澤蕃山でしたな

べて他所事に見た。義姉の留守に駒子を本宅にやるなどは、堅く御免を蒙つた。母が當惑して、せめて花嫁づくりだけでも、と原宿に連れ來た。病院から義姉が駒子にたよりした。「今頃はペンキ屋さんで嘸お忙しいことせう。」白く塗られた花嫁は原宿を出て往つたが、やがて忘れ物を取りに使をよこした。それは駒子がやつた新しくはない木綿合羽であつた。熊次は顔をしかめた。翌日挨拶に來た新郎新婦は、芝に家を持つた。熊次の家の女中の妹が其家の女中に雇はれた。女客に汁粉を馳走し、鍋がもう空虚になつたを承知しながら、口ばかりはおかほりを強ひたりする新婦ぶりが、自然熊次夫婦の耳に入つた。ある時お糸が來て駒子に問ふた、紅茶を澤山もらつたのですが、如何したらしめらないでせう？ 駒子は逗子で幸野の未亡人から聞き覚えの煎麥いりむぎをいれて置けば、茶はしめらぬといふ事を教へた。而してお糸さんの家にはそんなに困る程紅茶があるのか、と驚いたものである。うまい物好きの夫に馳走はしても、臺所は引きしめて居る駒子であつた。彼女はある時こんな夢を見た、廣々した邸に住んで、馬なども飼つて居る大名ぐらしをして、ふだん着に黄八丈の着物で居ながら、竈かまどと戸棚の豚肉をへづつて置く夢を。

立つ寅一との差が日に日に加はり行くを感じないわけに行かなかつた。「黒潮」の出はじめに、幼ない甥の埋葬など熊次が世話をした時、玄關に送つて帽子をとつてやつたり寅一がしたが、「黒潮」の第一巻が終る頃には、熊次もふつり兄の家に足を遠くして居た。

去年の秋季皇靈祭の團樂を兄の不機嫌で散散にぶちこわした問題の女、嘉一郎が妹のおいとは女子高等師範の入學試験を受けた。多分出來たと思ひます、と當人は云ふて居たが、結果は反對であつた。行き處がなくなつたおいとを、社員の一人に妻はす事を叔父寅一は思案した。いふ言を聞かねば、最早構はぬ、と謂ふのであつた。相手は廣告事務の當間といふて、鴨志田君が豊後の佐伯から連れて來た青年の一人であつた。鴨志田君が社を出ると、當間君の心が二つに裂けた。鴨志田を離れねば社を出す、と社長に言はれて、當間君は鴨志田の子分を脱けた。今は廣告係で「何萬といふ金が當間の手から入る」と、今の親分は働き者にほめて居る。社長の姪をかさに被^きてはならぬと謂ふて、婚禮は叔母分の安子が手術の入院中に行はれた。「賣られたやうな」とおいとが言ふたと、駒子は驚いて熊次に告げた。熊次は船津の兄妹の中でも、此おいとが一番嫌ひであつた。しばらく彼女が原宿に居た間、熊次の機嫌は悪かつた。縁談はす

れを集中に採録した。江見牧師の「新人」に熊次はしばしば書く可く催促された。其編輯の一人の大學生が「熊次さんは御在宅ですか」と心易げな玄關の挨拶を、取次に出た女中は驚いたものである。癢に障つた熊次は、おきな叔母がみやげ話の一つを其まき書き飛ばした。それが「伴助七翁」であつた。巻頭の「五分時の夢」は黒潮の假名使ひなど正してくれた編輯のM君がほめてよこしたもので、巻尾の「吾初戀なる自然」は大阪の丸田君等が起した「小天地」に書いたものである。それには一つのウソがある。「十四の秋、江津湖の長堤に腰かけて、水の夕日を見て泣いた」と書いた。それは想像を詩化したに過ぎない。眞實は末節にあつた。

「余は猶小兒なり。余が耳目は未だ全く開けざるなり。余は見る事聞く事を未だ撰擇し能はざるなり。自然と人生の學校に於て、余は猶小學の最下級に幼稚なる頭腦を働かし始めしのみ。十五にして學に志す、と古人は云ひしに、三十越して猶いろはに逡巡するは恥づ可きかな。然れども余は決して急がず、寸々歩みて、何時かは此小兒の吾をば弊衣の如く脱ぎすて、正眼に自然を見、自由に人を愛する時あらん事を信ず。」

これは熊次の本音であつた。「青山白雲」の序に、「願はくは己を虚ふし、赤子となりて、伏し

夏休の仕事に、熊次は舊稿の二三を輯めて、小冊を造つた。「角ぐむ蘆」と題名をしやうかとしたが、「青蘆集」に落ちついた。「自然と人生」程氣乗りのした道樂仕事でそれはなく、云はば小使取りの仕事に過ぎなかつた。「甲州紀行はがき便」と「雨の水國」以外は、すべて二度目であつた。「零落」は逗子の末期にS雜誌の爲に書いた。呉れない稿料が氣になつて、東京に引出した後ある日ぶらりと神田のS社に往つて見たものである。S君に請ぜられて、澤山出版物を積むだ二階に上つた。丸鬚の婦人が傍に子供を寝かして裁縫して居たが、會釋して罷つた。紺縹の羽織を被た色黒の青年がにこにこして階段を上つて來た。それはS誌に元氣な文章を書いて居るB君であつた。文章で思ふたより餘程若かつた。面と向つては、熊次も稿料の事を言ひ出しかねた。店の出版物で御用のものは何なりとも、と云ふS君の言を幸ひ、T君の「故郷」を一冊もらつて歸つた。其因縁つきの「零落」であつた。K堂から新に「文藝界」が出た。下半面を黒髯で埋めた主任の醒雪學士が懇請默止し難く、社外のものには減多に書かぬ熊次も「慈悲心鳥」を書いた。拾圓の爲替がK堂から送つて來た。同封で版權譲渡の證書に捺印を求めて來た。熊次は心弱く求めに應じたが、書店の辛竦なやり方を心外に思ふた。彼は無斷でそ

の消息を知らなかつた。しがらみ草紙に文藝評の漢詩を讀んだも大分前である。漢詩に長けた東郭山人の名は、人遠い熊次の耳にも自然に響いて居る。今は熊本に居て、五高に教鞭をとつて居るさうな。去年熊次は不圖其人の手紙に接した。蘆花を一穗封入し、詩箋が二枚入つて居た。

蘆花君所愛 今日寄天涯 月下烟横艇

秋來雪擁沙 何堪時作被 不使夢歸家

故國吾客住 西風獨摘瓜

寄蘆花于

肥後仁兄 添以此詩

東郭散人

て造化の秘書の第一頁を披かん。」と書いた其連續であつた。讀者の一人無名氏が熊次に書いた。「不如歸は十八九、思出の記はせいぜい二十二三の人の作。」熊次はそれを否む事は出来なかつた。彼は事毎に自己の貧弱さ幼稚さを感じた。彼の心は遠くを望んで、足は中々それに追つかなかつた。然し彼は自分が踏む道は決して誤まらぬと思ふた。行く道が道なれば、成熟は時日の問題で、到達は自然の結果であらねばならぬ。

思出の記の印税で社の提示に異議を申立てた熊次は、「青蘆集」でわれから一割を要求し、其提議は容られた。十四行三十八字詰の二百二十四頁で、定價三十五錢であつた。それはあまり賣れなかつた。巻頭の「五分時の夢」にトルストイの俳ありなど見當違ひの評言やら、淺間の讚美を登山旅行家のU君にほめられた位で、格別評判にもならなかつた。「青蘆集」の豫告が出ると、熊本から東郭山人O君から期待の手紙をもらつた。Oさんは昔の小學校で二三級上の先輩であつた。沼山先生の友人東野先生には外孫に當る、高祿の家の生れで、雪のやうな白面、可愛い乳齒をした貴公子であつた。其人に手をとつて清書をさせてもらつた時、九歳の熊次はうれし羞かしでわなわな震へたものである。西郷戦争からはなればなれになつて、熊次はOさん

啞の叫び

余が近所に十二三の啞童あり。杉籬の外、日夕啞々鳴々の聲を聞く。他の兒童が聲をあげて笑譁驩呼する毎に、彼もどかしげに唇を動かして、啞々々と叫ぶ。其聲を聞く毎に、余が頭岑々として痛む。

曾て生れて三月なる孩兒の死するを見たり。彼れ眼いまだ父母を識らず、口いまだ言ふ能はず、末期の苦痛のさし來る毎に、其小さき齒なき口を開いて、啞々々と號ぶ。其聲を思ひ出づる毎に、吾曾迫る。

曾て吾小さき飼犬の病みしことあり。病痛の來る毎に、彼れ肥美を顧みず、愛撫を享けず、中庭に輾轉して、天を仰ぎて啞々と號ぶ。

哀は啞の叫びより哀しきはなし。啞の叫びは、唯天之を聞く。

耳を澄して一夜窮巷に立て。耳に滿つるは、悉く是れ知らずして苦しみ、明らかに言ふ能

蘆花淺水夢何如 一夜飛霜清有餘 京洛文章珠玉貴
江湖消息雁魚疎 竹亭月色獨吹笛 邨舍兒時同讀書
最憶燈前耽著作 城西境靜卜幽居

寄懷蘆花仁兄

東 郭

「自然と人生」を見ての寄詩であつた。熊次は喜んで答禮の短簡を飛ばした。「冬川の渚に残る枯蘆の花といふともたた名はかりそ。」と歌を書いた。青蘆集について、熊次は〇さんに對しても期待を裏切る羞恥を覺えずに居られなかつた。

小説を休んで居ても、熊次は讀者の前に居たかつた。一日書いても、一日の收入にもなる。七月に休暇日記を書き、「青蘆集」が出ると、八月の末にまた小品を書いた。

て上に白す様、

「今の世は古の世に候はず。現に外國には王政を覆して共和を建てたる國も候。陛下夙夜に民を赤子の如く思し、勵精治を求め玉ふにあらずば、臣竊かに天意の何處にあるやを危ぶみ候。」

上悚然として容をあらため玉ひ、滿廷の臣僚皆色を失ひぬ、と。

嗚呼松菊、彼は眞に國を憂ふる政治家なりき、帝室の純忠臣なりき。

「君王日御金華殿、誰誦周家七月詩」

我忠良なる民をして、苟くも不臣の心を懷かしむるあらば、是れ誰の過ぞや。

これが新聞に出ると、「本大臣」と署名したはがきが舞ひ込むだ。「社會主義は皇室を別にして唱へてもらひたい。木戸のは内諫、それを公表するは禮で無い。」と謂ふのである。

「本大臣」は社員の伴君でなければならなかつた。伴君は北海道に居た頃、中央を遠くはなれて兎角意氣騰らぬ土地の人人を鼓舞する爲に、好んで「本大臣」を代名詞に使つたさうであ

はずして悶ふる啞の叫びならずや。經世家よ、宗教家よ、學者よ、詩人よ、此聲汝の耳に達せざるや。

翌日の紙上に、熊次はまた斯く書いた。

疑 問

昨日信濃町に汽車を逸し、歩して麴町に到るとて、鮫河橋の貧民窟を通る時、不圖彼方の丘上に今まさに成らむとする東宮御殿の莊麗を仰ぎ、吾れにもあらで一の疑問生じぬ。彼處の民に此の疑問を起せしものありや。或は是れあらん。是れ何人の胸中にも一度は起る可き疑問なり。或は是れ無からん。我民は由來疑問なくして所謂運命に默從するに馴れたり。

然も此疑問は、早晚彼等の胸中に起らざるを得ず。聞く木戸松菊在世の日、曾て面を正し

れでも「本大臣」のはがきはやはり飛むで來た。

ゴルドン將軍傳の出版と共に、書齋に迎へた耶蘇基督の額は相變らず挂つて居た。十一で兄に京都の同志社に連れて行かれて耶蘇を愛する事を教へられた熊次は、十八で兄に背いて洗禮を受け、二十一の熊本時代には江見牧師の勧めで耶蘇を小説の中に取り入れた Benhur を讀み、自分もサマリヤの井のほとりで女と話す耶蘇の場面を書いて見たりしたものであつた。三十五歳の熊次は、祈禱せず、聖書を讀まず、教會などには勿論行かぬ人であつた。持つて生れた父母の正直、通つて來た信仰のほとり、Wordsworth の所謂自然の敬虔「赤子となつて伏して造化の秘書の第一頁を開かん」眞實心はあつた。然し彼の心には空虚があつた。彼には統一がなかつた。「賄賂とつても好い事をする」で兄は積極的に片づけて居る。父は一再ならず熊次の前に理想と實際のびつたり行きかねる遺憾を述べ、政治は几帳面にやれるものではない、と疑問の述懐を繰り返へした。然りとも同じかね、否とも判じかねる熊次は、何時も唯黙つて居た。宙ぶらりんの熊次は淋しかつた。淋しい心の告白が、「疑問」に次いで新聞に書いた「失へる信仰」であつた。

る。彼は肥後寅一の信者で、早くから其麾下に馳せ參する用意に、銀行に預金するかはりに、寅一に金を預けたりして下地を造つた。而してある時機に、家を舉げて北海道から出て來て、譜第の中にまじつて、幹部の一人となつた。熊次が原宿に越して來ると、時折顔を見せた。初對面に熊次の作物について思ひ切つた惡口をついて、熊次の度肝をぬいた。而して後は輕い笑に紛らして、友山君も此手で往つた、と云ふ話をした。海舟、彦左、曾呂利を小さな型にごつちやにしたやうな、睫毛の長い眼を眼鏡の下にしよぼしよぼさせて、鼻でもの言ふ小男の伴君を熊次は好かなかつた。寅一の歸朝以來社員の月給から天引にする事になつた積立金の割戻しがあつて、一昨年の夏までの熊次の分が七十圓に上つた。熊次はそつくり其まゝ寄附する事にした。當局の伴君から喜んだ禮狀が來た。それから伴君の足が原宿に繁くなつた。熊次が土いちりの最中に來ては、「そ、それでなけりや」とぼつを合はせたものだ。熊次駒子は結婚九年目で未だに子なく、伴君は子福者であつた。伴君の來訪にはよく子供を一人宛連れて來た。男の子も來た。女の子も來た。男の子はかしこさうに、女の子も醜くなかつた。謎は讀めたが、熊次も駒子もそれを伴君に都合よく解く氣になれなかつた。伴君の足は何時しか遠くなつた。そ

其を避くる程に、余は何時しか深き林に迷ひ入りぬ。あな堪へ難き此渴きや。歩をかへして、彼等の店の生溫きをまた飲まん乎。

否、唯往かむ。此處其處に見ふる人の足跡、吾れより前に泉を尋ねて人の行きけむ。

あな嬉し、涼し風吹く。水氣の遠く香り来るよ。いざ行きて泉に汲まむ、假令わが器は小さくとも。

* * * *

「失へる信仰」は、それ見た事か、と云はぬばかり「基督教世界」が轉載した。「泉」は讀者の一人が絹地に書いてくれと頼むだ。熊次は書かなかつた。早稻田派の文士G君は、「悟道めかして」と「泉」を罵り、社會主義を唱ふるなら「其成案を示せ」と紙上で詰め寄せた。「ありのすさび」を初めとし、G君の作物を熊次は好きであつた。「何故に余は小説を書くや」の中にも、相當の敬意を其名に表した。然し並び大名扱ひを、G君は不足に思ふたかも知れなかつた。G君主宰の新著月刊の下まはりに〇といふ青年詩人が薄俵を叩つた文をある機會に見た熊次は、奥州生れの「Burns」の爲に一面識もないG君に一書を裁してその注意を牽いたものである。

然し人生の歩みに、後戻りは出来ない。否でも應でも向ふに突きぬける外はない。熊次はまた斯く書いた。

泉

宇宙に一の大なる泉あり。生命の水こゝに湛ふ。ベツレヘムの廬より這ひ出でて、人の子會て其を汲みもて遍ねく世に傳へぬ。北印度の王宮の子も 其を汲みぬ。支那、希臘の聖も汲みぬ。

彼等が汲みし泉は清かりき。清かりしかど、久しく彼より此と傳ふる程に、手の溫味、器の臭、あはれ泉の水はぬるみて、異なる味をさへ帶び來りぬ。

吾のこそ正銘の泉の水なれ、他の店に賣るは毒、などと招牌掲げて喧しく呼はるを聞くもうたてや。泉の水は異らぬものを。

先醒

昨日青山善光寺内を歩し、此程建てられし高野長英の碑前に出でぬ。故海舟翁の撰文を讀んで佇む程に、日傾き、秋蟬の聲雨の如く、櫻の一葉碑を掠めてひら／＼翻る。低徊願望、影の消ゆるまでに到りて、猶去るに忍びざりき。

哀夫、志士の世に處すること。彼等先づ醒めて鹿の如くに呼べど、眠を食る世は之を捕へて、其肉を食ひ、其血を飲み、其皮に寝ねすむば已まざらんとす。進歩の階段は、毎に仁人志士の墓石によりて築かる。

曾て逗子に住みし時、しばしば濱に立ちて海山の曉を見ぬ。身は殘夜に立ちて、曙光の先づ富士の一角に動き、次に大山に及び、足柄に及び、箱根に及び、伊豆の連山を點火して天城に及び、次いで江の嶋に及び、腰越に及ぶを見、良久ふして漁村も鷄鳴を聞く毎に、余は「光は闇に照り、闇は之を覺らざりき」と云へる一句を想ひ、轉じて維新前史の先覺先

○君に不平あらば直接申出でらる可きだ、と云ふ當然なG君の返書を熊次は受取つた。それからのG君の不快であつた。熊次には社會主義の成案などは頭てからありやう筈はなかつた。彼の社會主義は理論でなく實感であつた。成案を出すは、他にいくらもあるにきまつて居る。而して「泉」は唯心の旅の途中の衷心披瀝で、「悟」でもなく、到達では無論なかつたのである。

第八章

獨立へ

醒の命運に想ひ及ぶを禁じ得ざりしなり。

闇きに眠る衆生の身こそ安けれ。健氣にも傷ましきは、先醒の身なり。吁、高野氏、彼も先醒の運命に會ひたる一人なりき。

新日本の曙光は、彼等が生血を抹せし紅なるを記せよ。

日は入りて、暮色寺に満ちぬ。藍色の空に星一つ光り初めたり。早や文字の形もおぼろの石碑に對して、余は不圖左の句——人間の最高峰、仁人の魁なる大工の子が言へる

「誠に實に汝等に告げん、一粒の麥若し地に落ちて死なずば唯一粒にてあらん、若し死なば多くの實を結ぶべし」

の一句を思ひ出でて、「不^{イムメルタリデー}死」の意義にうたれ、潜然として涙の下るを覺えざりき。

（明治三十五年 八月二十九日）

儘らしい六十男。眉を落した大きい眼、面長の四十女が生みの母で、母と一枚に入つて居る二少年一少女は異父の弟妹。兄の方はよくKに肖て居た。銀杏返へしに結つて意地者らしい二十四五の女は、本家に一粒種の異母姉であつた。其名が熊次の姉の一人と同じ「もと」であるのも興味を熾つた。あはれに駒子も泣いた。熊次はいよいよ物にするにきめた。

上州に來て小十年、岩原の義兄夫婦は其處で次女を亡くし、唯一の男の子を生んでまた亡くし、さまざまの悲喜を閲した後、去つて遠く海外に新しい境地を拓く事を企てた。昨年来東奔西走高崎に新會堂を築く資金も大概集つたので、それを置土産としていよいよ布哇へといふ事になつた。惣領のお君は來春女子學院を卒業後、後を追ふて行く筈である。家族は逗子に置いて、岩原さんは出發前の忙しく何角と奔走した。四十歳で初めてつくつた仕立下ろしの麻の洋服で、きまり悪さうに嬉しさうな岩原さんは、原宿に來ても眞新らしいカフスを氣にしながら手紙を書いたり、手紙を読んだりして居た。宣教師が避暑留守で、手紙の照會、返事の遅延、何かと岩原さんは氣を腐らして居た。其返事を原宿で讀んだ岩原さんは、宣教師連は瀛船も上等なのに、岩原さん夫婦に與へらるる傳道會社の船切符は下等である事を知つて、熱然と

社會主義の成案なしに社會主義を好む熊次は、小説の成案なしに小説を書く人であつた。一切の經綸結構を終へて着筆するかはりに、彼は水到渠成の法をとつた。そこで彼の書く長いものは、往々にして行き詰まり、尻切トンボになる事が多かつた。

小説黒潮の第一巻を書き終つた熊次は、當然第二巻を書かねばならぬ。

それは第一巻が未だ新聞に掲載中であつた、熊次は大阪商業學校在學の一青年Kから手紙を受取つた。自分の經歷は頗小説的だが、材料になるまいか、といふのであつた。送らして見ると、半紙三十枚程にべつた 書き流したそれは、色を漁る地方富豪と色を賣る京の婦の間に生れた多恨青年のあはれを語る情緒纏綿とした面白いものであつた。熊次はそれを黒潮の第二巻に取り入れやうと思ふた。而して更に寫眞を送らせた。數枚の寫眞が直ぐ届いた。二皮眠の才子らしい青年が當人であつた。父といふのは、赤十字の有功章を胸に帶びた和服の半身、髯短の吾

木曾川で夜が明けた。米原で乗り換へて、熊次は初めて北陸線を駛るのであつた。敦賀はK青年の物語發端の場所であるが、それは歸途に廻はした。越前から加賀に入り、大聖寺で下車すると、鐵道馬車で山中溫泉に往つた。熊次は此處に五日旅の疲れを休めた。蟋蟀橋こつらしやうつの潭は綠に、桂清水の片破月は涼しく、山中は好い處である。此處にもKの父の別莊がある事を名札で知つた。別莊は閉ぢられて居た。熊次は新聞に全然無沙汰で居るを好まなかつたので、「汽車の雜感」など山中から書き送つた。六日目に溫泉を立つて、大聖寺から車で日本海岸の橋立村に往つた。其處にKの本家がある。松茸の出さうな松山の間を西へ二里、橋立村に出れば、其處は大型の和船の桅が日本海の波に揺られて居る湊村であつた。昔から海産物の運漕で富を致したKの父の船であらうと熊次は思ふた。車夫はよく此邊の事を知つて居て、これもKの物語の下まはりに出て來る分家の家などを教へた。やがて村の殿様の如どつしり構へたKの父の家に

「わアしや止むる。」

と腹を立てた。然し高崎を去つて背水の陣をしいた岩原さんは、後戻りは出来なかつた。下等切符でも、指した布哇に行く外はなかつた。岩原さんが逗子に去つた後、九月中旬の船で横濱を立つにきまつた事を熊次は知つた。夏の雑沓を思ふて、熊次は今年も逗子には往く事を避けた。姉が出立の買物に出て來た。駒子が同道して帶を買つたりしに往つた。姉が擇んだのは燻カキんだ黒い帶地で、駒子は氣の毒に思ふた。熊次夫妻は心ばかりの二十圓を餞別に贈つた。それで姉が横濱で傘を買つてしまつたことを聞く夫妻は、嬉しくない氣もちがした。

八月もいよいよ盡くる。九月から黒潮第二編を出したいと云ふ社の要求に對して、熊次は猶豫を求めた。いよいよ書くについては、舞臺の北陸京畿、モデルの人人も一應見ねばならぬ。九月一日の夜汽車で、熊次は新橋を立つた。

次の小品を無比とほめて居た噂などして熊次を喜ばし、明日は病院にY學士の婦人科手術を見に行かうと誘ふたりした。沼山門下で父の友人、兄の知己、今は故人のY翁の嗣子で、不肖の子らしく云はれたY學士は、此處の病院に居るのであつた。前途を急ぐ熊次は、然し翌朝栃原さんに別れて金澤を立つた。

肥後の藩士ながら春嶽侯に知られ賓師の禮を以て待たれた沼山先生は、よく草鞋がけで木芽峠を越えて福井に往復したものだ。一度は熊次の叔父の熊太郎も、二十八で亡くなる前年師の伴をして越前に來た。母の季妹の春竹叔母は、また維新の初年夫が縣官で敦賀に居たので名物奉書織など傳習したもので、敦賀の名は熊次の耳に親しいものであつた。熊次は其敦賀に來た。

自然は美しい港、人は貧しげな町のさまである。熊次はK青年が預けられて居たといふ浪花町の小さな下駄屋を覗き、彼が初めて父の有と知つた千石船を見たといふ濱邊を歩き、父の妾宅で庭先からはじめて遠眼に父の顔を見て夜一夜泣きわめきし 歩いたといふ町はづれのあたりをぶらついた。太平記や日本外史で淋漓悲壯をきはむる金ヶ崎籠城の昔を偲んで、城址の神社にも詣でた。敦賀は好い所である。

來た。熊次の生れ故郷の本家酒屋など見るやうな土間の廣い、がつしりとした普請である。Kの友人と稱して、熊次は案内を請ふた。寫眞で面識るKの姉が出て來た。淺黒い、はきはきした女である。Kの父は居なかつた。Kは勿論大阪に居る事を熊次は知つて居た。

加賀に來たついでである。熊次は金澤に往つた。兼六公園を見、白山の雪を喰ひ、白山館といふ宿に泊つた。丁度大阪の雁次郎一座が同宿で、俳優だらけの風呂場に熊次は小さくなつて汗を流した。「親方は美しうおした。」と雁次郎の舞臺の姬姿を、宿の女中は下廻りに感にたへた聲音でほめて居た。狭い室につくねんと獨りぼちの熊次は淋しかつた。隣室にまた客が來た。「姐さん、蓆を買つてくれませんか、ええ、アキスでもよろしい。」開覺えある聲音。襖を開くと、果してそれは社の栃原さんであつた。新聞の販路擴張に北陸へ來て居るのであつた。

栃原さんを毛嫌ひした昔の熊次では最早なかつた。栃原さんは少しも圭角を見せず、腹はしつかりして居た。すばらなやうで、狷介な丈夫であつた。相撲も強かつた。新聞社に壯士が怒鳴り込んだりすると、栃原さんの物柔らかな扱ひに、壯士も亂暴の手が出せなかつた。君ではどうも要領を得んで困る、と壯士が兎を脱いだものだ。金澤の奇遇に、栃原さんは二葉亭が熊

に過し、前通りを掃いたりする毎に、川に臨んで涼しげな此座敷を眺めたものだ。二十歳の熊次は、脚氣で同志社を出て清瀧に籠る前の秋の十日を、此直ぐ裏の一段高くなつた座敷に居た。十五年前である。それ者上りといふおかみのお花さんは、やや太つて面に皺が少し見える外、大して變つても居なかつた。

「あなたは變りませんな。」

といふ熊次の言を、

「まあ、あんたはん、そないな事を、」

と吻々と笑つておかみは打消した。此家にはもと娘が二人居た。去年の秋熊次が弔ふた若王子山の墓の主山下榮さんと同窓で、其昔熊次との間に最後の文使ひをした事もある姉のおすまさんは遠方の牧師に嫁ぎ、妹のおくまさんは神戸に嫁いで居るさう。おくまさんの婿といふ若い人が泊り合はせて、熊次の座敷に挨拶に来て、最近に見た「汽車の雜感」から「遠距離は中等、近距離は下等にお乗りですか。」と笑つた。

駒子が着く前に、熊次は果さねばならぬ用の數々を果した。彼はKが生れた先斗町をぶらつい

あくる日、熊次は京都を志した。米原で乗り換へて、瀛車は湖東を南に駛る。湖天うららかに晴れて、湖畔は早稲が一面穂に出で、そよ吹く風に稻の香がする。熊次は不圖駒子を連れて來ればよかつたと思ふた。と思ふと、むらむらと彼女を呼びたくなつた。

「瀛車は今湖東を走りつつあり、此景獨り見るを惜む。」

都合して直ぐ來い、と駒子にはがきを書いて、草津の驛で出してもらふた。去秋は駒子の兄を大津に訪ねた。彼は今東京に居る。熊次はまた今明にも横濱を布哇へ立つ筈の岩原の姉夫婦を懷ふた。逗子にも寄らずに來た。せめて告別の一言はなくてはならぬ。京都に下りると、熊次は岩原さんに出彼の祝電をうつた。

駒子を迎ふる宿は、勿論蛤御門の姉の家ではない。去秋の三本木の下宿に行く氣にもなれない。三條小橋上ル木屋町の高瀬川に臨んで、昔ながらに禁酒旅館の看板を掛けて居る立川を擇んだ。疏水が出來て昔よりも水かさ増した高瀬の流れに面して、冷やりした簾を敷きつめた表座敷である。禁酒旅館だけに、折ふし熊次の外は客もなかつた。此宿は熊次に思出多い宿であつた。十九の熊次は、同志社に再入學前の一夏を、此向ふ側に其頃住んで居た又雄さんの借家

瀛車に乗れたか疑問であつた。今東から着いた瀛車を下りて大勢のドヤドヤ来る中に、莞爾莞爾した丸髻姿を見るまでは、熊次は不安であつた。駒子のはがきを見るより、「わたしは京都に往つて来るよ。」と女中に言ひ置いて、直ぐ其夜瀛車で今着いたのである。

東京はまだ銀座通りを鐵道馬車ががたがた走つて居るに、これのみは舊都に似合はぬ電車が京都には走つて居る。夫妻は其電車で木屋町の宿に往つた。駒子は涼しい宿をよろこび、午食の饌に出た平生はあまり好まぬ小芋の煮ころがしまで嬉しさうにほめて居た。少し旅づかれを休めて、夫妻は相乗車で南禪寺畔の疏水のインクラインなど見物して歸つた。京の九月は日間暑中の暑さ其ままに、朝夕は馬鹿に涼しかつた。日暮れてから、夫妻は鴨の磧を見に往つた。旅先きの身もかるう、舊都の夕べを心安げに夫と二人で袂をつらねてそぞろ歩く駒子はうれしかつた。然し熊次の眼にうつるそれはわびしいものであつた。川に架けた涼みの床は夏を其ままながら、其處此處に提灯の光は淋しく、單衣の袂に夜風冷たく、悲涼の氣が漂ふて居る。浮かぬさまの夫に促されて、二人は早々に宿に歸つた。

熊次は此行の主要を未だ果さずに居た。大阪に往つて、Kに會ふ事である。あくる日、駒子は

た。下京の家々に電燈がつく頃、彼は裏町の分かりにくい袋小路に、Kの異父姉が圍はれて居る家を探し當てた。Kの名を云つてKの在否を問ふと、眞裸で居た若い旦那は、「よく此處が分かりましたなア」と胡散臭い顔をした。Kと同じく先斗町に生れ、舞妓から藝者になつて今は圍者の境涯に居るKの異父姉は、寫眞で見たKの母によく肖た大きな眼、白い面をして、弟の知邊といふ突然の客に愛想した。

あくる日、熊次は車で大原に往つた。八瀬、大原も初めてである。秋蟬の音の降るやうな寂光院を熊次は訪ねた。黒潮の第一巻で洛西の尼寺に入れた女主人公を、彼は此寂光院に移すつもりであつた。而して第二巻で初めて出て来る新人物を若狭の出にして、間道から京へ出る途、此處で美しい少尼に邂逅の場面をつくらうと思ふた。院には十四五の弟子尼が居た。熊次は彼女を捉へて色色と問ひ試みた。名は智證、大津の町家の女で、此春尼になつたといふばかり、口もとに喰ひ過ぎの腫物を見せて、それは熊次が意中の女主人公とは、肖ても似つかぬものであつた。

あくる朝、時間を計つて熊次は七條に往つた。電報で打合はせた譯ではなし、熊次が指定した

を汐にKとの會見を打切った。

あくる日熊次は京都に歸った。深水の家に行き、駒子と打連れて木屋町の宿に歸った。

昨日は如何送ったか、との間に、駒子は答へて、昨日は中田のお咲さんと同志社女學校を見に行き、女教師のDさんから手製の珈琲入ゼリーの馳走になつた事を話した。

それから？

それから深水の姉上と同志社の日曜禮拜に往つて、説教も聞いた。

同志社に往つた？ 熊次が足踏みしない同志社に駒子が往つた？

「何で同志社なんか往つたんです？」

「姉さんがお勧めなすつたから。」

駒子は夫をはなれて出あるかうとは思はなかつた。ちつとして居たかつた。然し姉の誘ひを無下に斷りきれなかつたのであつた。禮拜に來て居た咲子さんに會つたら、咲子さんと女學校に行く氣にもなつた。咲子さんの室で話すつもりで居たら、女宣教師のDさんが自分の客にしてふた。英語は十分話せぬし、Dさんの客になつて居る事も嬉しくはなかつた。「肥後さんは

蛤御門の深水の姉に遣り、熊次は大阪に往つた。今春商業學校を卒へてKが今勤めて居る店は、上靱通りの海產物問屋であつた。薙の散らかつた、海の臭のする店先に、前垂の店員に聞けば、Kは留守であつた。熊次は置手紙して土佐堀の西村に往つた。又雄さんはまだ其處に居た。新聞社にも相變らず出て居るさうなが、去秋より餘程疲れて焦焦こいこいして居た。「どうせ其内にはカタがつく、は、は」と又雄さんは晒つた。熊次は云ふべき言葉を知らなかつた。

夜に入つて、Kが來た。寫眞よりふけて、伶俐さうな青年である、狭い室内があついたので、熊次は物干しにKを誘ひ、アイスクリームをのみながら話した。Kの實母は今東京銀座の罐詰商Nといふ人の妻になつて居る。この程Kは上京して、苦心して實母に會ふたさうである。「狗見たいに、方々に子供を生み散らして」と母を怨じたさうな。熊次が橋立村にKの父の家を訪ふた事も、京都の異父姉の隠れ家を訪ふた事も、それぞれの通知によつて、Kはすでに知つて居た。物干しは又雄さんの室に近かつた。去秋以來妙に頻繁に近寄る熊次を、又雄さんは不審にもうるさくも思ふらしく、麥酒を冷やし卷簾をふかす昔にかはる生活ぶりを見られたくない容子も見えた。又雄さんの意をうけたらしく、宿の女中が物干をしめに來たので、熊次はそれ

* * *

思ひがけなく京都歸りに立寄つた熊次夫妻を、逗子の父母は喜び迎へた。丁度仲秋名月の其日で、月が出ると、父の首唱で親子二夫婦は舟を前川に浮べた。父が氣に入りの植木屋の覺三が舟を漕ぎ、父は詩を作つた。

潮生牆外棹扁舟 月出丘陵山影浮

兒子夫妻到京洛 一航情話報仲秋

翠嵐雲散月輪清 舟載一家和樂行

萬頃金波棹無處 停橈俯仰寄吟情

岩原夫婦は留守に横濱を立つて居た。原宿に歸ると、姪のお君が女子學院から遊びに来て、電報の禮を言ふた。荷造りが不完全で、布哇上陸の際飯櫃がころがり出たりしたさうな。岩原の

識つて居ますが、あなたのハズバンドは知りません」といふDさんの言葉も、うれしいものはなかつた。

熊次は悶^ちれた。些も此方の氣もちも知らず、無頓着に振舞ふにも程がある。

「歸れ！」

突然熊次は叫んだ。駒子のはつと息を呑んだ。息苦しい沈黙がつづいた。

ぢりぢりと熊次の頭は熱くなる。果ては冷たい簀の上の寢床が熱火の床と寢苦しく、熊次は身もだえして齒をきりきりと嚙んだ。

先夜のあの鴨の河原の冷たい風、それに斯様な駒子の出過ぎ——最早京都がいやになつた。

「歸る。俺も歸つてしまふ。」

と熊次は叫んだ。

「歸りましょう。京都は何だか恐ろしい。早く歸りましょう。」

駒子のかすかな息をついた。

あくる日、夫妻は京都を後にした。

三

熊次夫婦が歸宅間もなく、父母は逗子から出京した。例年の秋季皇靈祭日に、父の誕生祝ひをかねて先祖祭をする爲である。父は逗子の隱栖を愛した。母は東京が好きであつた。月々の老人會に三圓を父から頂戴して出京するは勿論、何角と云へば父を唆かして諸共に出京の機會をつくつた。

父母は出京した。然し熊次は兄の家に行く事を欲しなかつた。黒潮の第二巻が未だ書けない。書かぬと兄は澁い顔をする。債主の顔は見たくない。熊次は最早社の月給取りではない。然し新聞に黒潮を書く間は、彼は未だ社を、従つて社長を脱けない。彼は全然たる自由人ではないのだ。熊次は眼に見えぬ桎梏を犇々と身に感じた。これを破らねば、彼はいまだに奴隸だ。

秋季皇靈祭日が來た。熊次は青山に行かなかつた。勿論駒子も遣らなかつた。

母が心配して容子見に來た。而して兎も角も祭には顔を出すやうに、と勧めた。澁い顔見にわ

姉の出立について、青山から百圓の餞別があつたさうである。やがて姉の手紙に、船に乗ると下等室のむさくろしさ、如何なる事かと思ふたら、出帆するとやがて事務長の心附で中等に移されて、やつと樂になつた、とあつた。其事務長に禮をしたいから紋羽二重一反送るやうに、と間もなく布哇の岩原さんからお君まで言ふて來た。熊次はすべてを苦々しく思ふた。

次も駒子の父の昔を趁ふて、庭に菊花壇を造つて見たり、往來で馬糞を拾ひ手づから下肥を汲んで、小書齋前の狭いあき地にさまざまの草花をつくつた。凝り性のせつかちで、苗の植更などにかかると、ランプをつけて夜晩くまで一氣に仕事をかたづけねば止まなかつた。花の盛りには雨中に傘をさしてぐるぐる家をめぐつたり、夜も提灯をつけて花を愛でたりさへしたものである。今年は花夕顔の數鉢が頗上出来であつた。未だ黒潮の第一巻を書いて居た頃、白く硬く牙のやうな其種子を水に浸したり馬糞で爆ぜさせたり面倒を見て發芽させたそれは、葉も蔓も隆々と茂つて、京都から歸つた頃は白光る芳しい大きい花を宵毎に開いた。すぐれた一鉢を熊次は父へと志して居た。然し祭日にも往かぬ彼は、自分其鉢を齎らして兄の家へ行く氣にもなれなかつた。車夫に持たしてやるも、氣が濟まなかつた。ある夕、縁に腰かけて熟々問題の鉢を見て居た熊次は、いきなり鉢を抱き上げて、大地に投げつけ、微塵にして了ふた。

熊次は猶黒潮の續稿に腐心した。晩くも來年一月の紙上から第二巻をのせねばならぬ。大阪のKからは其後度々手紙を寄せて、關係人物の新消息を報じた。Kの實母は銀座の東側に大きな饅頭商の主婦になつて居る事を知つた熊次は、其店頭をぶらついてそれらしい人の若しや出て

さわざ行く事は御免蒙る、と熊次は肯かなかつた。母も詮方なく、

「病氣とでも云ふち置かうたい。」

と歸つて往つた。

熊次は到頭先祖祭に不參した。

去年の先祖祭には兄が暴れた。今年の先祖祭には弟が駄々を捏ねる番であつた。父母は可なり長く兄の家に逗留をつづけた。然し熊次は一度も兄の家に父母を訪ふ事をしなかつた。

原宿に越して以來、屋敷に餘地があるままに、熊次は土いぢりを始めた。最初は附近の築地垣の芝生の往來へはみ出た部分を駒子とむしつて來て、芝の賊だからバシバゾク（土耳其の暴兵）と笑ひつつ手水鉢のほとりに植ゑたり、龜の子箆を持つて穩田向ふの丘で紫濃い堇や香の好いつぼすみれを掘つて來て植ゑたりして居たが、追々種苗店を訪ひ、近所の植木屋廻りをする本物になつた。西隣の山本さんは、老夫妻にもどりの娘が一人、小門に「午前謝客」の札を掛けて手習ばかりして居る人で、眞暗になる程木を植ゑて居る。籬越しに泰山木の花が咲いたから見に來いと案内したり、仙臺の悴が送つてよこしたといふて花の種子などくれたものだ。熊

ふた。「かうして兎や角暮らして居ます、随分勉強してくれますやうに。」と彼女は曰ふのであつた。別れて車にのつて少し行くと、哀しげな歌聲が後から響いて来る。それはKの母が歸り行く行く背の赤子をあやす子守歌であつた。Kの母自身も、京都である士の娘に生れ、父も母も亡くなり、預けられた京の田舎の農家で秋收の田の畔に籠に入れられて居たのを、お参り歸りの先斗町の娼家の女將にもらはれて、男から男と轉々して子を生み子を育てて今日に及んだのである。何といふ人生であらう？ と熊次はつく／＼車の上で思ひ入つた。

Kの母にも會ふし、後は唯書くばかりである。熊次は日口氣を新にしてデスクに向ふた。然し一向に緒が見つかからぬ。悶えに悶えて、熊次は日日を度つた。

あたりは一刻もちつとしては居なかつた。此春以來本郷S商店の顧問となつた駒子の兄は、このたび朝鮮に移住する事となつた。彼は東京屈指のS商店すら頗商賣には迂濶で、藥品や醫療器械の輸入なども仲介の手を経るので馬鹿な損をして居る事を見出し、直接獨逸の製造元に交渉して割安に仕入るる途を開いてやつた。店主はそれを徳として、駒子の兄が計畫の朝鮮拓殖に進んで資本を投ずる事になつたのであつた。利益は折半といふ條件であつた。「資本もたつ

來るか物色したものである。十月二十五日熊次の三十五誕辰も過ぎて、ある日大阪たよりはKの生母が一家近頃成田在に移住した事を知らして來た。主人が腦病で、商賣をやめ、田園生活を始めたと謂ふのである。秋も深く霽れわたつた日の午後、熊次は成田驛に瀛車を下りた。不動様には失禮して、彼は車を雇ふて田舎路を一里あまりも指す方へがたくらせた。追々淋しい雜木山に路は細くなつて、濕地茸などが探る人なしに澤山朽ちて行くのを見つ、N養鶏所の札がかつたあたりで車を下りた。大きな池がある。櫻の落葉を踏んで池畔の路を行くと、開墾地にふさはしい小舎がある。取り散らした土間に突と入つて、音のふと、四十餘の女が出て來た。Kの生母であつた。寫眞顔よりやや老けて、然し色白の眼は大きく、何處か權高なものが見える。Kの知邊と云ふ言葉に、彼女は少し顔を赧くした。其處に十一二の女の子を連れた丈の高い臘虎帽の五十男が入つて來た。それはNさんであらねばならなかつた。病の故か、窪い眼が嚮々して居る。熊次はNさんにつれられて風に荒された鶏舎など見て廻つた。歸りしなに、Kの母は女の兒を連れ、背にはまだ誕生前の赤兒を負つて、池畔の路を門まで送つて來た。熊次は折角其人に會ふても、何問ひ何話す事もなかつた。Kに何か傳言はないか、と熊次は問

でも、三番目の進は不運な子であつた。小學を卒へ、熊本英學校を出て、上京して錦城中學に入ると間もなく赤痢で歸國を餘儀なくされ、二度目に上京すると脚氣、三度目は結核性肋膜炎で歸國した。彼は文學を好み、耶蘇を信じて洗禮を受け、小學校教師などして居たが、四たび上京して早稻田入學を企て、失敗して歸國したは今年の春であつた。彼は縁無き東京を詮めて、一氣に渡米を企てたのであつた。東洋汽船の船は布哇に寄航する。進の好便に、布哇の父から言ふて來た紋羽二重を托するといふので、お君は原宿に來て荷造りの仕度をした。反物では税がかかる、メレンスの帶の心にして、といふ布哇からの注意であつた。熊次が横濱に往つた時、進は船に乗つて居た。彼が友人の二三人が見送りに來て居た。下等船客は、布哇に一時上陸は許されぬといふ事で、岩原さんへの掛け物は汽船宿に置いて來た、と進は叔父に告げた。船首の甲板に立つて見下ろして居る甥の小作りな洋服姿を見ると、昔米人の女兒に「Bad girl」と叫んで逃げたわんぱく少年から何程も大きくなつたとは見られなかつた。蒼い沈んだ顔して、彼は埠頭の友人と上と下で話を交はして居る。友人の一人が云云の事は初めてだらうと言ふと、甲板からは濕つた調子で、「否、ある。そら、富士に登つて、赤痢になつたあの時に。」

ぶり出来申候」と駒子への手紙に、彼女の兄の得意が溢れて居た。やがて原宿に來た彼は、熊次に中座してもらつて駒子に三拾圓の小使をくれた。清人君が有望の土地として着眼したのは、全羅北道の群山附近で、先づ單身渡鮮して土地を選定し、然る後家族を呼ぶといふ段取であつた。資本の一部千四百餘圓は駒子が預つて、彼女の名義で三菱に預けた。犬も預つた。それは北海道以來の彼が忠實なお伴で、江州に居た時分獵先で主人が足に踏ぬきをして起てなかつた場合にも、傷を舐めたり傍はなれずいたはつたものである。犬好きの熊次は喜んで預つた。然し犬は主を戀ふて、一刻もちつとしては居なかつた。繫いだ羽目を噛み破つたりして、熊次を手古摺らせた。それで近所の犬でも來ると、牝犬のくせに勢猛に飛びかかつて追つ拂つたものだ。熊次も困じて、犬を預る事を辭退した。清人君は朝鮮に立つて往つた。言ひ置いたと見え、留守のお照さんは彈平を連れて原宿に初入に來た。駒子は初めて自分より年下の嫂と、幼ない甥とに會ふた。お照さんは住居の容子を見て、成程犬は御迷惑でございませう、と仔細なく次の機會に犬を引取つた。

清人君が朝鮮に渡ると程なく、熊次は大江の甥の進が渡米を横濱に見送つた。大江の兄弟の中

霜枯日記

十二月一日 紫の春は夢よ。緑の夏は夢よ。黄なる秋も夢よ。露骨なる灰色の冬は來れり。庭に立てば、落葉木は裸になり、常緑木は烈しき冬と格闘すべく鎧一縮せるさま目にも見ゆ。野に立つれば、尾花枯れ、木落ち、満目の風物皆「慘不驕。」自然が剛健なる眞面目を露出し、沈痛悲壯の調をかなづるは此よりなり。余は冬を愛す。

二日 黒潮第一巻を訂正す。パツテリテすら自由ならぬ手に、一萬五千噸の敷島を乗廻さんとするは、難矣哉。著作の熱に浮かされては一廉讀むに堪へたる心地もすれど、熱醒めての後になれば、如何な最負目にも百出の檻褸に嘔吐を禁じ得ず。三年たちて見て吾が面白き作は、百年たちても人に面白き作と、或作家は云ひぬ。半歳たゝぬに自ら抛たむとする惡作の運命や知るべきのみ。

今日は風烈しく吹きて、満庭の落葉渦まき狂ひぬ。夕日の空の金屏を背に、富士黒く浮出

不吉な事を言ふ進が熊次の心を曇らした。

日本は動いて居る。多くの子女が國を出て行く。朝鮮に駒子の兄は移住する。亞米利加に牽かるるは、岩原さんや進ばかりではない。一昨秋官制で初めて相識つた河邊君が米國游學の暇乞に來たは、つい先頃の事であつた。米國東部の神學校に入つた河邊君は、こちらでは馬車の馭者すら立派な紳士、とたよりに書、よこしたものである。

動く周圍の中に、熊次は見せぬ黒潮第二卷の緒を捉へんとして煩悶の日を送つた。氣を勵まして卓に向ふても、筆は少しも動かなかつた。十二月も半になると、彼は到頭正月から黒潮の稿を新聞紙上に繼ぐ事を斷念し、却て第一卷をまとめて一冊とし先づ出版する事を企て、切りぬきを整理しはじめた。

黒潮の續稿が正月の間に合はぬまでも、熊次は新聞から姿を消してしまふ事を欲しなかつた。懷も寒かつた。押しつまつて彼は「霜枯日記」を新聞に出しはじめた。

過ぐるの嫌はあれど、作家其人の大理想を發揮したる新四福音の第二篇として、握力の大、氣局の雄、意志の剛、精力の強、今更に嘆美を禁じ得ず。十九世紀佛國第一流の小説家として、バルザック、ユゴー、フロオベル、ゾラの位置は動かざる可し。ゾラは想像を減じて科學を加味したる新式のユゴーなるべし。

九日 音羽護國寺に行く。梨堂公の墓碑殘楓血の如く紅なり。觀音堂に賽し、不圖故原田直次郎氏が龍頭觀音の油繪のかゝれるを見て、黯然。吁“Art is long; time short.”

十日 黒潮一の巻の訂正を終へて、民友社へ送る。過去をして過去を葬らしめよ。

十五日 連日の陰雲陰雨、今日は全くの小春日和と晴れぬ。地は乾きて、落葉と樹影と滿庭に伏したり。天の清さよ。空氣の晶あかるさよ。眼の到る所に遮ざる塵もなく、澄みに澄みて、千里磨く可き心地す。微風日光を揺りて、松の梢に銀針閃き、榎の梢に白金輝く。槎枒たる梅枝に光線の斷片と閃くは、蜘蛛の掛れるなり。長閑なる小春や。一丁ばかりあなたに、子供の友呼ぶ聲あり。聲の行衛に耳傾けて、吾を忘るゝ五分時。夜は十六夜の月白う冴えて、傘さしても出でたき程の明さなり。

て、琥珀の色せる楓葉の一つ二つ落ち残りたる梢に、天女の剪りし爪程の三日月挂りたる、いとめでたし。

東京あたりにて夕陽の尤も美しきは、天長節頃より春季皇靈祭の頃までなり。地上の榮の凋るゝ時が、天上の榮の高潮に達する時なり。

五日 今日も黒潮に朱を加へつゝ、三十五年の苦生涯に朱を加ふる能はざるを恨む。

牡丹の霜おほひを撤す。牡丹は霜掩ひせぬが花の色美しと聞きたればなり。牡丹のみならざる可し。

六日 隣の枯れ尾花の杉籬よりぬつと出でたるに、雀とまりて穂をつゝく。忽ち車井の軋る響に、雀飛び起てば、弓と撓みし尾花ははねかへりて、しばし揺々ゆらぐと靜まりかへりし空氣を揺りぬ。車井の響は、猶何處までもと廣がり行くなるべし。

夕方雷鳴あり、夕立の如き雨あり、須臾にして忽然歇む。此瞬時の靜寂に、無量の雄辯あり。「欲辯已忘言」れぬ。

八日 盡日雨。夜ゾラの「勞作」を讀む。所謂小説として、説教多きに過ぎ、感興少なきに

られて居る。熊次は苦笑した。新聞に書いたものを無断で削られるは、今日初めてのことである。

十二月十七日 連日の美晴、心下一悶字なし。筆とり倦みて、障子開けば、程近き稻荷の榎の大樹、赤裸々、前世界の灰色珊瑚樹の如く、無遠慮に大手を擴げて、碧空に突立ちたるに、小鳥と烏と數千百羽うち群がりて、啞々噪々何事をか議しつゝあり。籬頭の富士と、此大樹とは、吾家の富貴なり。

十八日 手水鉢に薄氷あり。曉月棲まんとして自由ならず。黒潮二の巻を書き始む。不相變まづし。引裂き、引裂き、果ては抛ちて、また掌大の庭をぶらつく。朝日煦々、鳥聲囁々、屋上の霜融けて、雫の落つる音ぼたぼた。

座に歸つて、貧しき書架より亂抽亂讀夕に到る。

鬢然卷を投じて吟じて曰く、抛却自家無盡藏、沿門持鉢效貧兒。是も非もなし、唯自己を發揮す可きのみ。

十六日 曉に起き出れば、隣家の冬木立の間より曉月ちら／＼覗きて、富士もやがて薄紅の光を帯びぬ。今日も美晴。

議會停會の報あり。

夜十時、八百屋の荷車挽きつゝ「漬菜々々」と呼ぶを聞く。年越の苦境知る可きなり。

* * * * *

原宿の歳暮は靜かであつたが、政界は騒いで居た。日英同盟の成功に氣を負ふた太郎内閣は、次第に迫る日露衝突の形勢に鑑みて、海軍大擴張を企て、地租増徴を十一ヶ年繼續して一億萬圓の資源をつくる豫算案を議會に提出した。後輩の太郎が成功した日英同盟に鼻明された日露同盟主張の春畝侯が率ふる政友會と、隻脚伯の憲政本黨は、聯合して政府攻撃の火の手をあげた。海軍の巨頭、軍兵衛大臣が槍玉に舉げられ、巨額のコムミツションをせしめたといふ嫌疑が彼の頭上にふりかかった。海軍大臣は瞋つてそれを刎ねつけたが、嫌疑の雲は中々霽れなかつた。到頭議會は停會になつた。

十二月二十四日の新聞を見ると、「霜枯日記」に熊次が書いた「コムミツション……」の句が削

統に屬すべきものなり。己と云ふ自覺ある青年にして、一度此悲哀の味知らぬ者あらむや。斯るものは人の世に憂のあらむ限り讀まるべきものなり。余は原文を知らざれど、譯者が身讀體察、深き同情もて味ひ且譯し、假つて自家の憂懷を遣らむとせるは、何人にも明なるべし。譯筆上田敏氏の其を趁ふて、極めて雅馴。たゞ少しく隔靴の憾あり。

二十二日 昨夜讀みし「哀調」より延いて「悲哀」を思ふ。不圖思ひ出たるは、故操山氏が「悲哀の快感」の末節なり。「人ハ悲哀ニ訓練セラレテ眞正ノ樂境ニ達ス、此ハ悲シキ人生ノ事實ナルベシ、然モ其事實ナルヲ奈何センヤ。」眞に然り。但、悲哀をして吾儕の訓練者たらしめよ、坳^あ塹^{たん}たらしめよ、吾儕を溺らすの淵たらしむるなかれ。

悲哀に浴して舊染の汚を落し、悲哀に導かれて人我の關を越えなば、悲哀も亦人生の祝福ならずや。然も注意せよ。空想は常に憂鬱なり。唯我は多く悲哀なり。憂鬱は久戀の地にあらず。悲哀は常住の場所ならむや。斯處實に一突貫を要す。活動に空想をかへ、他愛を唯我にかへ、而して後自由あり、自由にして初めて福。

人は何處まで奴隸にして何處まで自由なる乎。天に問へど、天答へず。地も知らず。唯内

出て、穩田の田圃を散歩す。暮靄と煙と谷に滿つ。水車の響も年の暮とて忙しげなり。

二十日 煤掃の響其處此處に聞こふ。家に正月を喜ぶ幼き者もなく、濟す可き文債の堆積に困する身は、唯斯年の何時までも暮れざらむことを祈るのみ。

教科書事件次第に大。余は世道の爲めに此事件の暴露を喜ぶ。我日本氏は破廉恥病に罹れり。唯利拜金の病毒は、社會の全體に充滿す。此事件の如きは、偶小さき腫物のふくれ出てたるなり。容赦なく截開せよ。少しは世間の眼も醒めむ。

夕近く、澁谷より代々木の方角を散歩す。風大に起る。楢屬の落葉は落武者の如くちりぐに舞ひ走り、ちぎれ雲は伏兵の如くむらぐと林端より飛び出づ。顧みれば、血の如く火の如き夕陽、富士を冠せる相武一帶の連山を焼いて、餘焰武藏野を掩はんとす。獨立、瞻望、悲壯の氣、骨に沁む。

十二月二十一日 午餐後、庭の枯萩を刈りて小園の枝折戸を作る。

初雪さらぐ、やがて雨となり、曇りて暮れぬ。燈下に「哀調」を読む。シヤトウブリアンの「ルネエ」を小嶋文八氏が譯せしもの。若き心の悲哀を描きて「エルテル」と同じ系

ば、岩谷工場に通ふ兒等の、松の内は仕事なければ、年の内に曉かけて通ふなりと。斯くて彼等は爺嬢の寒計を助け、斯くて彼等は岩谷君の富を作る。

逗子なる老親の許より茶、青海苔、小魚の類を贈りたまはりぬ。山陽先生の詩に曰く、老母頗健飯、未至艱臥起、念吾嘗桂玉、儒餐乏肥美、紅魚買疎曠、綠禽賒反嘴、剖解鹽鼓貯、拮据勞手指（中略）反哺吾未能、仍使母哺子。

眞に此感あり。

午後幼姪幼甥クリスマスの贈物としてカード、繪はがきなど持来る。

* * * *

二日経つた。二十七日の新聞を見ると、霜枯日記がまた削られて居る。反政府的の數句が。

熊次は赫となつた。K新聞編輯局に對し、無斷削除を詰問し、斯様な事なら今後一切新聞に執筆せぬ、と書き送つた。

來た、來た、到頭其時が來たのだ。熊次は斯く直覺した。新聞を去る、兄を脱ける、自立の時が來たのだ。

に省みて斯く囁くものあるを聴く。

「無心は盲なりき。目開き、自己の鐵鎖を見て哀めり。眼をあげて、起つて他の鐵鎖を解かんとし、見よ、吾鐵鎖は解け落ちたり」。

於是知る、ナザレの人の、其生其語萬古に朽ちざるを。ニイチエゴルキーの叫びは、門に入る、未だ其堂に上らず。

十二月廿三日 寒空白刃の如く冴えたり。簌々霜を踏むで丘端に立てば、秩父貳面を剪らむとす。眼を上ぐれば、白玉の富士寒林の上に秀で、富士を載せて天際に波の如くうねる武相甲の連山も、鹿の子斑に雪を被れり。 煤を掃ふ。

今日は冬至。天行乾々、斷えず、窮せず。庭を歩して、昨日かつ散りし楓の、枝毎に苞芽をつけたるを見て、欣然微笑す。

柚子なし。橙湯を喫し、橙湯に浴す。

夜孤燈に對して、鞆鞆たる風の大海の如く吼ゆるを聞く。戸を開けば、寒星一天。

廿四日 早曉猶床にあり、籬の外を見女五六人、展齒^{ゲキ}金石の響をなして行く。何ぞと問へ

「何か新聞の方に間違があつたさうだが」

と彼は云ひかけた。

「切つていただきましやう。所詮見込がありません。これから書くものは、どうせ社會主義に傾くのですから——」

「社會主義でも何でも構はん——Indecent(鄙猥)でさへなければ。」

「然しどうせ駄目です。」

「それぢや仕方がない。大きな(ど)穴(穴)だけでも——ところで黒潮の後は如何するかい？」
熊次は一寸詰つた。例の如く彼は其邊を考へて居なかつた。元はと云へば、兄に創まつた黒潮である。其一念が熊次を縛つた。

「新聞に書かぬと言ふなら、初めから一冊にして出す方法もあらう。」

「其事は考へて見ます。然し黙つて讀者を釣つて置きたくないものです。これを新聞に出していただきたい。」

熊次は懷中から原稿紙に書いた告別の辭を出して、暖爐の前のスタンドに置いた。

「おい、駄目だ、俺は出る！」

熊次は駒子を呼んで斯く叫んだ。

久野さんが挨拶に來た。編輯は弟のMさんがやつて居る。「Mが手落ちで」と、久野さんは言ふた。然し語をついで、「社の利益を害するやうな文言を削るは、普通の事ですから」と恵比須顔を赧くして久野さんは言ひ足した。

熊次は何も云はなかつた。久野さんもMさんも問題ではない。不快の第一爆發は編輯局に宛てたが、當の相手は社の魂にある。兄寅一の外には無いのだ。

熊次は即夜ランプの下に、新聞に對する告別の辭を書いた。それは滿ちたるものを傾くる如くたらたらと頭の中から紙の上に滴り落ちた。

翌朝早くそれを懷中して、熊次は白い息を吹き吹き青山に往つた。黒潮第一巻を書き終つて以來、家祭の日にも往かず、實に半歳ぶりに兄を訪ふのであつた。

寅一の書齋に、暖爐の火が赤く熾に燃えて居た。霜降りのドレツシングガウンの儘の兄は、新聞をさし措いて、熊次に椅子をすすめた。

第九章

黑潮社

「それは其時があらう。」

取り上げて見やうともせぬ。

熊次はそれを取り上げて、暖爐の火の中にほうり込んだ。

「それぢや。」

熊次は立上つた。

「それぢや。」

寅一も書齋の口まで見送つた。

風を切つて熊次は原宿に歸つた。

其日は十二月二十八日。歸るとやがて「號外、號外」の聲が耳を貫いて響いた。買はして見れば、議會解散の號外である。

直ぐ明治三十五年が暮れた。

熊次は正月になつて書き直し、駒子にも読み聞かした告別の辭を、栃原さんに渡した。一讀した栃原さんは、これなら差支はあるまい、兎に角預かつて行かう、とそれを衣兜に藏めた。

時分になつたので、熊次は天麴羅蕎麥を命じて、主客對食した。今は昔、熊次がまだ獨身で氷川町の夏の留守をして居た時、まだ信州の官吏であつた栃原さんが飯時分に兄を訪ねてやつて來た。少しも遠慮のない客人を、熊次は好まなかつた。一飯を振舞ふ氣にもなれなかつた。栃原さんは不快な客子であつたが、「茶漬を頂戴しやう」と手盛りでさらさら茶漬を掻き込んだものである。熊次は濟まなく思ふた。天麴羅蕎麥が十年後のお詫びであつた。

中一日置いて、栃原さんは久野さんと打連れてやつて來た。告別の辭を新聞に出す事を、兄は不承知であつた。

「肥後君の新聞ですから」

と栃原さんが諭すやうに曰ふた。

全くである。如何に花々しく踊つても、舞臺は役者のものではない。それは苦しい中を持ち堪へて來た座主の有である。如何に威張つても、使はれ人はやはり使はれ人に過ぎぬ。然し熊次

明治三十六年が來た。熊次駒子が原宿に移つて三度目の正月である。

松の内を熊次は兄の方からの沙汰を待つて焦焦と過した。何時まで待つても際限がなさうで、熊次は到頭手紙で問題の解決を促した。

二日目に栃原さんが來た。去秋金澤の奇遇以來である。熊次が立つた後で、雁次郎の弟子の一人が脚氣衝心で死んだり大騒ぎした事を栃原さんは笑話にして、それから本題に入つた。

熊次は猶黒潮の續稿を書く事を斷念しては居なかつた。一冊として社から出すにも異存はなかつた。K新聞をやめて、他の新聞に口を求めやう氣は勿論なかつた。然し手から口と入るに従つて出してゐた貯金皆無の彼が生活狀態では、黒潮の續稿を書く間何等かの収入がなければ支へられぬ。熊次は月々五十圓の手當を要求した。就中彼は無斷で讀者を釣るを厭ふた。告別の辭だけは否應なしに新聞に出してもらはねばならぬ。

あくる日、また久野さんが來た。黒潮第一篇の新聞切り抜きを、先づ熊次に返へし、それから服紗包みから熨斗水引をかけた一封を出し、社の寸志として差出した。奥に立つて封を披けば、百圓札が一枚出て來た。熊次の生涯に初めて見る百圓札である。熊次は一寸思案して、また紙に包み、

「折角ですが。」

とそれを久野さんに返へした。

「大方お受取りはなさるまい、てち伴君などは曰ふて居ました。」

と久野さんは曰ふた。

まだ印税の問題が残つて居る。百圓を受けて印税を辭すか、印税はもとのままにして百圓を辭すか、熊次は一寸惑ふた。同じくば百圓も印税も辭すべきである。然し印税まで奇麗さつぱり投げ出しては、収入は皆無になる。

「さう今日別れて、明日から挨拶もせんでち云ふやうぢやア何ですから」と笑ふ久野さんの言葉を力に、錢別は辭し、印税は受くる事にした。

にはまた熊次の立場がある。熊次は告別の辭なしに、新聞から姿を消して、黙々と黒潮の續稿を社の爲に書く事は出来ぬ。否でも應でも告別の辭は公にしなければならぬ。

話は窮處に來た。

枋原さんと久野さんは顔を見合はせた。

「ぢや、詮方がないな。」

而して二人は笑止な貌で手切れを宣告し、告別の辭を熊次に返へした。

「伴君なんか最初から駄目てち言ふたんですけれども、我々は如何かしてと思つたんですが。」と久野さんは沈痛な聲で云ふた。

大きな塊が熊次の胸をこみ上げて來た。眼が曇つた。不覺な涙が危く落ちさうになつた。彼はぐつとそれをのみ込んだ。而して二人を玄關に見送つた。

熊次は座敷に歸つて、卓の前に座つた。而して生欠伸を一つして、眼を瞑つた。

*

*

*

*

*

*

*

*

*

「原宿の叔父さん叔母さんてち皆が來たがるもん。」

と義姉は泣いた。

新聞手切れの事を聞くと、義姉は今後の心得を問ふたさうな。

「兄弟は兄弟たい。」

と兄は答へた。分離は是非もない。「時が好くなかつたけれ共。」さう言ふたさうである。

裏も表もない義姉や子供にわるい顔は出來ぬ。原宿の叔父叔母は、子供と一つになつて遊んだ。カルタ取り、羽子つき、喜び騒いで子供の去つた後は、淋しい事になつた。

岩原のお君は、原宿の叔父に心易く振舞ふたが、青山の叔父も恐れなかつた。父が會堂新築に奔走して居る時、彼女は一文も出さぬと謂ふ青山の叔父の書齋に押かけて、「其金時計を下さい」とせびつたものである。叔父叔父の手切れを聞くと、彼女は顔を曇らした。居合はした貞雄に、「あなたの阿父さんは腸が弱いから」としんみり言ふた。彼女は何時にない原宿の叔父の劍幕に驚いた。平和を勧むる彼女の言に、叔父は一切耳を貸さなかつた。

「平和？平和は俺も好きさ。然し平和は戦争の後で來る。先づ戦ふのだ。平和は來る時に來

* * * *

舊臘の交渉が始まつてから、熊次は三度逗子に往つて父母の了解を求めた。二度目に往つた時は、父母は衣を更へて葉山の御歌所長を訪問に出かける處であつた。父は黙つて居た。母は「月五十圓で云云と聞いて、心配して居た。」と云ふた。三度目に往つた時は、父も兄から熊次を手放した事を聞いて居た。辭退した錢別の百圓を、

「それは惜しい事をした。取つて置けばよかつたに。」

と父が曰ふた。

「然し此方から出るのですから。」

と母はつんとした。

「意見は意見、骨肉は骨肉」と父は熊次に曰ふた。「道不同、相爲に計らず」の古語が直ぐ熊次の頭に浮んだ。然し彼は黙つて居た。

* * * *

減多に來た事もない義姉の安子が、子供残らず引具して、歌かるたとりに原宿に押かけて來た。

る事を、彼女は永い間知らなかつた。「阿母は水臭い、まるで繼母のやうね」とつけつけ母に言つたさうだ。果して繼母であつたと知つた時、「がっかりしまひました」ともとは駒子に述べたものである。ある學生に教はつて、顔に似合はぬ好い聲で詩吟をした。それは「鞭聲肅々」の一首に限られた。彼女は約束の期限を勤め上げて去つたが、朱の絹糸の枝折など拵えて遊びに來たものである。横須賀の奉公先きで、朝の快い「お早ふ」を喜ばれた話をして、駒子を喜ばした。おもとが黒い程、おたよは色白のまる顔であつた。道玄阪裏の小さな八百屋の女ばかり四人の惣領に生れ、母は亡くなつて、自分は早くから小間使奉公に出た。彼女はさまざまの奉公經驗をもつて居た。部屋の障子に心張棒して、男の侵入を禦いだ事もあつた。おかつばを眼の上まで總々さして小さな可愛い里子歸りの嬢をキタながつて目の敵にいちむる小華族の奥方。山王下に宏大な新邸を構へて、寢室の周圍には鏡を張り、汚ない紙屑を提籃に入れて大びらに小間使に捨てさせる知名の實業家。ヘヲヒルさんといふ獨逸人は、「コツクさんが火をぼうぼう燃す」と手ぶりをして顔をしがめる人で、目黒の侯爵は上野の銅像に肖た太い眉を颯げ、兩の拳をのばして「う、う、う、う」と欠伸する癖のある好い殿様。W・C 歸りに彼女の

る。」原宿の叔父は憤々して言ひ放った。而して心の中で彼女を突放した。

切れるものは切れる。遠のくものは遠のく。淋しい熊次は、妻が唯一の力である。駒子が几に向つて手紙を書きかけて居る。何處へ書く？ 駒子の兄が丁度朝鮮から小戻りして郷里の山鹿に居た。彼女は兄へ手紙を書いて居た。

「否、兄が山鹿で冷遇されてるだらうと思ふて。」

熊次は嘆つた。

「今、心を散らす時でない。」

*

*

*

*

*

準備なしに獨立戦争をはじめた熊次は、先づ手許を切りつめる外はなかつた。夫妻は相談して、女中を出す事にした。

出たり、入つたり、最早一年の上も居る女中のおたよは、熊次夫妻が原宿に来て二番目の女中であつた。最初の黒いおもとは、おしやべりであつたが、朝々澁つて如何しても「お早ふ」が快く言へなかつた。それを言はすに、駒子が随分骨を折つたものである。彼女の母は繼母であ

んでは、上から滴る醬油の雫の冷やりに眼をさましたり、おたよが居ぬと家中を騒がして据風呂の中に隠れて寝て居たりしたものである。熊次が癲癩を起し、駒子がはらはらして居る時も、けらけら笑はずに居れぬ女であつた。書生の次郎さんが病氣をした。おたよが親切に介抱したものである。喜ぶ次郎さんはやがて彼女を戀する人であつた。おたよは小學校にも往つて居なかつた。次郎さんは彼女の教育をはじめた。物覚えがわるく、分かりのわるい彼女に、次郎さんは直ぐ肝癩を起した。同室の高山君が見かね、代つていろはから教へたものである。おたよは曲りなりに手紙も書けるやうになつた。戀さるる八百屋の娘は、修業中の男に吾儘の限りを言ふた。後で何が出来たつて仕方がない、今、今の中でなければと、風通をねだつたり、銀簪をねだつたりした。書を買ふの何のと姉に無心して、次郎さんはおたよに注ぎ込んだ。「おまへのやうな者は、着物でも好いのを着なければ」と言ひくしたものである。到頭二人は許された仲になつた。おたよは「淺田の姉さん」と成田詣などとして、界限の女達から「おたよさんはいまに奥様よ」と羨まれた。一緒に居ては勉強の邪魔になる、すべては卒業の後といふ事になつて、葛西家を去つて熊次の家に來たのであつた。「それは好い家だ」と云つて次郎さんは

頸にしがみつゝき、用人の口から妾にと彼女を所望した「御前」は、右の手に盃、左の手は人前構はす女の前に手をあてねば酒がうまくない公卿華族であつた。彼女は然し處女を持ちつづけて、最後に奉公したのが駒場農大の葛西博士の家であつた。夫人の名が同じくたよで、奉公中はもと名を更へさせられた。博士は知らぬが、夫人の名は熊次も聞いて居た。昔女學雜誌の記者をして訪問に往つた海舟翁から、「卿も女壯士かい？」とからかはれた婦人である。一葉花圃以外に多少名を知られた小説の作家でもあつた。博士は夫人の過去を嫌ひ、小説を書くなど喜ばなかつた。瀛車に乗るにも、自身は上等に乗つて、夫人は中等にのつた。二人の間の赤ン坊を博士は熱愛して、夫人が少し疎末にでもすると、口が利けない程怒つた。夫人は朝寢坊で、主人が出勤した後にやつと起き出でた。(駒子はそんな自由な身に一日になりたいものと思ふた。)時々「眼に一ばい涙を溜めて言ひ合ひつ事を」することもあつた。博士の家には、學生が一人ならず置いてあつた。學資一切を貸し與へ、成業の後年賦で返へさす仕組である。おたよが奉公中も、二人居た。一人は高山といふ地方出の青年、次郎といふのは兩親無し、一人の姉は淺田法學博士の妻であつた。眠がりのおたよは、博士の家に居ても、よく押入戸棚に入つて寢込

たが、終にさう言ひ言ひ亡くなつたさうである。そんな事からおたよは氣味を惡がつて居た。駒子はまあよかつたとも思ふた。熊次の平氣なのが悶かしく、「だつて、あなたの子と間違へらるるぢやありませんか」と叫んだものである。しばらく暇をとつて居た間に、おたよは次郎さんと小さな二階に間借り生活をして居た。一足先に卒業してしまつた「高山さんが、高い帽子をかぶつて、髭を生やして、澄まして、可笑しかつた。」とおたよは話した。「高山君に負けるもんか。」と次郎さんは勉強したが、ついあたりに色白の、ふわふわした、而して學問などには何の理解もない、無頓着なおたよを見ると、「邪魔になる、彼方に往つとれ」と追ひやつたり、買つてやつた銀簪をつん折つて投げ捨てたり、到頭また別居といふ事になり、おたよは二度目の奉公をまた先の熊次の家につづける事になつたのであつた。

「思出の記」が出た年の秋から來て、「黒潮」の新聞に出る間居て、去年の秋の夫妻の上方行の留守も一人でしたおたよは、物馴れた重寶な女中であつた。すべて手奇麗にするのが、駒子の氣に入つた。「雜巾で顔を拭けば愛嬌が出る」といふて、おたよはよく雜巾で顔を拭いた。それ程雜巾も奇麗にして居た。出すべき落度があるでなし、置けば次郎さんに一廉の加勢でもある。

安堵した。園藝熱心の熊次が過燐酸を欲しがつて居る事を聞いて、過燐酸を紙袋に入れておたよに持たしてよこした事もある。おたよの顔見に来る次郎さんと、門のくぐりをあけて出かける熊次と危く鉢合はせして、眼鏡をかけた五分刈の青年は苦笑したものである。おたよも熊次夫婦の家を住み好い處に思ふた。「葛西の旦那様と此方の旦那様ばかりは」とほめて居た。彼女の家は貧しかつた。宿入り歸りには、商賣物の小さな蜜柑などみやげに持つて來た。季の妹が寒中穿く足袋もなし、「おお冷た、おお冷た」と疊の上を爪先でびんびん刎ねるやうに歩く話をしたりした。それでも彼女の都合を慮つて、月給の前貸しなどしてやらうとすると、氣味を惡がつて尻込みした。直ぐの妹のお時は根性者で、亡い母のあとをしつかり世帯をもつて居る。

「時ちゃん、時ちゃん」と姉は機嫌をとるやうにして居た。それにはすでに好い人があるといふて居た。次の妹のおためには十五の淺黒い神經質で、おたよのかはりに熊次の家に來たり、また船津のお糸が嫁しての新世帯に女中をしたりした。

おたよが一度暇をとつて二度目にまた來た時、彼女は蒼い顔をして居た。塊の下り物があつた事を駒子は聞かされた。おたよの母は妊娠中ころんで流産し、「子供に濟まぬ」と言ひ暮して居

黒潮第一篇の切抜が手許にある。これの自費出版がすべての手始めであらねばならぬ。

原稿を携へて熊次は數寄屋橋近くのS舎に往つた。熊次の兄も自己の印刷工場を社内には有つまでは、雜誌新聞一切の出版物にS舎を頼むものである。「得意に對する禮儀を知らぬ。」と我無遮羅に鼻つばりの強いS舎の出やうを、毎々彼は嘖つた。熊次もS舎が好きではなかつた。然し比較的信用出来るものをS舎の外に彼は知らなかつた。機械と人のごたごたした中の少しばかりの空隙に椅子テーブルを据ゑた處で、熊次は後で舎長の甥と知つた若い洋服の舎員に來意を告げた。小説と聞いて冷笑を浮べた彼は、三千部といふ注文に眼を圓くした。初版二千、再版千部は、不如歸思出の記をM社で出す時の慣例であつた。黒潮もそれ位出るだらう、と熊次は思ふた。

直ぐ見積書が來た。半金前納の規定で、三百圓足らずの金が必要な事が明らかになつた。一昨

然し今の夫妻に女中は贅澤である。夫妻はおたよに因果を含めて暇をやつた。涙ぐむだおたよは、少しばかりの荷をまとめ、暇乞して出て往つた。頭から古いシヨールにくるまつて、カラ下駄音を立てて杉籬外を小走りに行く彼女に、

「左様なら」

と駒子が聲をかけた。

「左様なら、御機嫌よう」

と杉籬の外でたよの聲が叫んだ。

寒い風が飄と吹いて来て、一しきり白いものがチラチラ庭を舞つた。

最初氷川町に自分の家をもつた時のやうに、また返子のあらめ屋に越した時のやうに、熊次駒子は全くの素夫婦になつた。

た。株券を風呂敷包にして、熊次は日本橋のある仲買店に往つた。黒八の前掛をした番頭は、眞鍮の獅嚙火鉢をはなれて、熊次の差出す株券を一枚二枚と讀んで見て、

「端數ものは如何も出にくくて」

と澁つたが、

「これでは如何でせう？」

と十六盤を立てて見せた。四七と出て居る。四百七十圓——それだけあれば清人君を濟して、S 舎の殘金を拂ふに足りる。それは天から降つて來たやうな金である。熊次は言ひ値でさつさと株券を手放し、現金を內衣兜に藏めて、勇んで歸宅した。清人君の資金は缺なしに送られた。餘金は銀行に預けられた。程經て清人君からは熊次の獨立について懸念の手紙が來た。熊次は顧みなかつた。

黒潮の校正が日日來た。小説を讀み返へして見て、熊次は今更其まづさに冷汗を流した。此様なもので獨立の旗上げは全く氣恥かしい。然し今更如何にもならぬ。やはりこれを一本立の名刺にする外はない。M 社を出た彼は、他の新聞雜誌を借りる氣はもとよりない。友山君のやう

々年の秋以來月給をぬけて原稿生活を始めてから、稿料にはた印税に相應の収入はあつたが、それは日々の生活費になり、書籍代になり、旅行費になり、園藝道樂の資になり、一本立ちになつた今日、銀行の通帳にも、郵便貯金の通帳にも、十圓の金もなかつた。駒子の三菱の通帳には千四百餘圓の預金がある。然しそれは駒子の兄の大切な資本金である。それを借りるは心外である。然し差當つてそれを借りる外に策はない。駒子に談じ、清人君には事後承諾を求むる事にして、其中から三百圓足らずを二回に引出してS舍に拂ひ込んだ。而して清人君に手紙して、獨立の顛末を報じ、無斷借用のことわりを述べた。手紙が途中まで往つたと思ふ頃、清人君の手紙が來た。預金全部を引出し送つてくれ、といふのであつた。

熊次は泣き顔になつた。清人君には是非耳を揃へて送らねばならぬ。其金の出所がない。不圖小簞笥の中にうち込んである三池紡績の株券が頭に浮んだ。分家當時譲られた紡績株は壹千圓であつたが、藤原君が大阪の支店長時代株相場で大穴をあけ、お蔭で熊次の持株も約半減の憂目を見た。でも五十圓拂込濟の株券が十二枚、額面六百圓のものが手許にある。利子配當も一向ないので、紙屑同然にぶち込んで置いたものである。紙屑でもよい、賣らう、と夫婦は相談し

余が経験、思想、趣味、著作、（明治廿二年に初めてM社より出版せしブライト傳は、君自ら筆をとつて添削せり。明治卅五年にM新聞に載せ始めし小説黒潮の第一篇は、實に其一部のヒントを君に得たり）生活、乃至甚賤の虛名に到るまで、君に負ふ所の如何に多きかは、必しも言を費すを須ひず。狂愚の余を君は忍び、怯懦の余は君に庇はれ、斯くて余は君が翼の下に生ひ立てり。情義實に如斯。當に君に隨ふて地の端に迄も到る可きなり。而して余は君に別を告げ、十有四年の棲遲なるM社を去りK新聞と絶てり。何爲ぞ然る。他なし。余は久しき以前より我等の傾向の次第に異なるを氣づきたり。而して此相違は實に氣血と共に生れ出でたる先天的相違なるを認めたるなり。余は此が爲めに久しく煩悶せり。而して、姑息の情に絆されて自ら欺くは、決して皇天の賦命を全ふする所以にあらず、また君が恩義に答ふる所以にもあらざるを知りぬ。夫れ人の運命は已に胎内にあつて定まる。松子は松となり、

に獨立の雜誌を氣焰の吐き場所に造り立てる力は彼にない。然し小さくもまづくも、わが聲はわが家から出さねばならぬ。自分の立場を明らかにするには、劈頭出版の此黒潮の餘白を假らねばならぬ。熊次は卷頭に兄に對する告別の辭を書いた。それは最初新聞に出す爲に書いたものを、書き直し書き直ししたものであつた。

——家兄

初斯小説をM社より出す時君に献せんと思ひたり。今や余はM社を去りぬ。然も斯小説を献ず可き者は、竟に君ならざるを得ず。

余は君と胞を同ふして斯世に生れ出でぬ。齡は僅に五年の差、才は即ち千里の差のみならず。余が幼きや、君に手をひかれて、村塾に通ひたりき。十六に及びては、君を師として英語を學び、文章を習ひ、自由の大義を聞けり。君が東都に旗幟を樹^たつるや、余もM社員の末に列なり、君が指麾の下に立つこと、明治廿二年より明治卅五年に到りて、實に十有四年の久しきに及びぬ。

きに到らず。甚しきに到らずと雖ども、我等が趣味の傾く所、着眼の向ふ所、同情の注ぐ所、要するに其動機の相同じからざるものあるは、斷じて掩ふ能はず。

事態已に斯くの如し。余は恩義の重きが故に、何時までも君が旗下に逡巡す可き理由あるを見ず。假令君憐むで余が愚を容れ、余強ひてM新聞の一隅に寄居するも、終に是れ何の要ぞ。若し余が言にして君を累するあらば、君に背くなり。若し君が欲する所に従ふて余が言を枉げなば、余は自ら欺くなり。若かず相別れて、おの／＼其道を行かむには。兄弟牀を對するも、夢は東西に飛ぶ。烏鵲今宵一枝に棲むも、明朝は南天北地の身なり。骨肉は情なり。傾向は天なり。各賦命に従ふて、自己を發揮せむのみ。湘南の双親老い玉へりと雖ども、必ず不悌を以て余を責め玉はざるを信ず。

君が麾下には俊秀林の如し。君を誤解する者素より多しと雖ども、君が知已

櫛子は終に櫛とならざるを得ず。主義も同情も要するに自家發展の現象のみ。是故に強き君は自づから力に同情し、弱き余はおのづから弱きに同情す。複雑なる性格の君は、世に處して婉曲を辭せず。單純の余は偏に直截を好む。經世家として君は事功の上に立つ。折衷讓歩は事を爲す者の金誠、君が一隻眼は常に利理の抱合點を離れず、君が眼中より見れば文學の如きは唯經世の手段のみ。思想界に住む者は枉げざるを以て骨とす。文學に籍を置く余は自づから文學の獨立を唱へ、美を通じて眞善境に彷徨せざるを得ず。即ち經世の手段に於ても、君は國力の膨脹に重きを置きて、帝國主義を執り、余はユゴートルストイヅラ諸大人の流を汲むで人道の大義を執り、自家の社會主義を執る。余は決して君を非とし、自らはとせず。眞理の山には峰多し。君は彼峰に立ち、余は此峰に立つも、畢竟山外に立つにはあらず。されば君が執る所の道と、余が歩まむと欲する所の道と、其差未だ必ずしも黑白の甚し

謹 告

一、斯小説の第一篇は、もとK新聞に掲載せり。然も余は舊臘K新聞と關係を絶ちたるを以て、自ら貲を捐て、刊行せるなり。

一、當時斯小説の讀者諸君に事の由を宣べむと欲したるも、K新聞は余が告別の辭を陳ぶるを好まざりしを以て、余は是非なく黙々として今日に到れり。若しK新聞の讀者諸君にして或は斯冊子を手にせらるゝの日あらば、余が本意にあらざりし無責任を宏恕あらんことを望む。

一、第二篇は目下起稿中なれば、脱稿次第別に一冊として刊行す可し。

一、黒潮社とは余唯一人の社なり。存するも他の助を假らず、亡ぶるも他の責にあらず。余は他に累を及ぼさずして、思ふさま言ひたきことを言はんが爲めに、M社を去つて、黒潮社なるものを設けぬ。小説黒潮を始として、拙著は此處より出さむと

また天下に乏しからず。何ぞ闇弱なる一小弟の去るを惜まんや。余は何人の助をも求めず。孤立には馴れたり。寂寥は余が不斷の糧なり。神明上にあり。衷自信あり。身を天命に委ねて、斃るゝまでは行かむのみ。幸に以て念となすなかれ。

別に臨むで、再び顧みて世の眼前に山の如き君が恩義を謝し、敬意を表し、君と君が社中の健康を祈らしめよ。而して斯拙き一篇の小説を留別として君が机前に献せしめよ。

明治卅六年 一月廿一日

弱弟 蘆花生謹識

書を出すには、社名がなければならぬ。「黒潮」を出版する社——黒潮社——好、黒潮社とつけろ、と黒潮社とつけた。告別の辭に次いで、「黒潮社」の何ものかを明かにすべく、次の一頁を入るる事にした。

が二人を悦ばせた。

二月の二十四日に、黒潮の五十部が製本成つて、S 舍から届いた。熊次は其一本を手にして、わなわな震ふを禁じ得なかつた。

To my dearest wife,

"This is our first-born,

the dear offspring of

our new independent life."

と見かへしに書いて、駒子に齎らした。駒子も涙ぐむで書を手にとつた。四六版、十三行、四十字詰、四百二十二頁で定價四十錢。表紙の黒に白で「黒潮第一」とぬいたのも、氣もちが好かつた。

欲す。讀者幸に諒焉。

黑潮社に於て

明治卅六年 一月廿一日

識

校正が終り方になると、賣る事を考へねばならなかつた。熊次は青蘆集の巻尾についた、M社取引の書店の眼ぼしいところを擇んで、引札がはりのはがきを書いた。東京は早稻田の隅の寡婦が出して居る小さな書店にまでも届いた。數多いはがきを、駒子も手傳ふて書いた。小賣は定價、卸賣は七、五といふ事にした。黑潮社名がきまると、熊次は青山の通りで黄楊の印形を二つ彫らせた。

黑潮社
之章

東京赤坂青山原宿一七八
黑潮社

夫妻が書いた引札のはがきに、夫妻でべつたりと番地入りの印章を捺した。鮮やかな朱肉の色

熊次は車の蹴込に大風呂敷包をのせて、先づ出版届と共に内務省に納本を済まし、K新聞以外の新聞社に批評本を配り、ある新聞には日を期して發賣廣告を依頼した。誰もそれが本人である事を氣づく者はなかつた。逗子にも、青山にも、各一部を郵送した。

すでに「黒潮社」あり、看板がなくてはならぬ。懇意の大工に一尺に三尺の縦板を削らし、それを抱へて熊次は西隣の山本翁を訪ふた。

自號
碧巖

習ふ相當天狗の書家である。

「如何しましたね？」

と山本翁は看板を抱へた熊次をびつくりした貌で眺めた。

「本屋を始めました。」

だから一筆揮つていただきたい、と差出す看板を、山本さんは手を揮つて御免御免をした。熊次はむつとしたが、詮方なく持ち歸つて、自筆を揮ふた。大字は書きにくい。書き損ねては大工に削らし、また書きまた削り、三度目にまづいながら證めた。小杉天外の小説に、醫者の書生が看板を書き直し書き直して薄つべらな板にして了ふ一節がある。熊次は胸子とそれを言ひ

黑

潮

第

一

と訝られて、駒子はきまりが悪かった。熊次も後では爺さんに氣の毒ながら何卒紙幣にしてくれと頼むだ。紙幣一圓で銅貨が一圓五錢買へる事を熊次が知つたは、大分後の事である。爺さんはその五錢も遁さぬ人であつた。

黒潮の發行は、明治三十六年二月二十七日であつた。其日に熊次は車で市中を廻つて、容子を見た。神田あたりの書店には、肥後熊次の名を大書した大きな立看板が麗々と立つて、路行く人の手に黒に白ぬきの冊子を一再ならず見受けた。熊次は熱くなり、また冷たくなつた。何れにせよ骰子^{さい}は投げられたのである。

出でて興に入つた。「黒潮社」と墨黒々に書かれた大字の看板は、人目少ない原宿でも注意を牽かずに居なかつた。新しい看板の前に足音が立ちどまると、熊次は息を呑むだ。何と言ふかと體は總耳になつた。全くきまりが悪かつた。然し乗り出した船である。かうなつては、向ふに突き貫ける外はなかつた。

引札を配つた結果、第一番にやつて來たのは、神田のU書店の爺さんであつた。越後者で、金は決して銀行には預けぬ名代の頑固爺とは後で聞いた。少なくとも信用出来る手堅い爺とは、一目で知れた。卸賣は十部でも百部でもすべて七割五分と黒潮社主人は主婦と相談の結果きめて居た。然し最初に飛び込んで來たU爺さんの白髪に對しても、五分引かずに居れなかつた。次の日の夕方爺さんは現品受取に來た。六十爺が股引の尻からげして、大風呂敷をえいやつと背負つて行く姿を玄關に見送る夫妻は、涙ぐましい心地になつた。それを手始めに、爺さんは或は一人或は小僧を連れて、ある時は日に二度も來て百部二百部と持つて往つた。其都度爺さんは必ず銅貨で拂ひをした。信立袋に一ぱい銅貨の重荷を下げて、駒子はそれを預けに青山北町の郵便受取所に往つた。藥種屋に郵便受取所を兼ねる其處の係に、「如何して斯様に銅貨ばかり」

の謀叛は、彼等の好い武器であらねばならなかつた。寅一に對し多くの不快をもつ先輩は、熊次によつて溜飲を下げた。大阪基督教界の重鎮M牧師は、日曜の説教壇上に黒潮の卷頭辭を朗讀したといふたよりを熊次は聞いた。件の告別辭中に熊次は「余は何人の援助も求めず。」と書いた。高山樗牛の亡き後に雜誌太陽の評論を受持つた熱性のO君は、「近頃泣いたは不如歸一篇のみ」と會て書いた人である。黒潮が出ると、O君は「彼は親弟の告別辭を新聞に載するを拒みたり」と兄を罵り、「何方を援くる乎？」と大に弟の肩を持つた。熊次が尊敬する基督教界に狷介の名高い外山先生の同情ある手紙を受取つた熊次は、同時に兄弟仲惡しと聞く理學専門の其弟Tさんの好意に満ちた手紙に接し、擦つたい氣もちになつた。近い青山學院で篤學の名はかねて聞くB君は、子供の書いたやうな頗る下手な字の、然し水際立つて好い文の手紙を寄せ、黒潮の主人公晋にかねて同情して居た次第を述べ、黒潮卷頭辭を見て堪へ難い淋しさを感じるといふた。ある日、醉筆淋漓とした長手紙を熊次は絶えて久しい多良一抱君から受取つた。熊次が黒潮で飛躍を試みたやうに、文壇に久しく遠ざかつた多良君は、リットンの翻譯聖人欺盜賊欺で最後の飛躍を試みやうとして、其序文を熊次にも求むるのであつた。

黒潮の出版は、兎に角一の Sensation であつた。昔源平宇治の合戦に、橋桁に立つて花々しく打物ふるう筒井の淨妙が頂邊てうへんに手をついてひらりと跳り越した一來法師ならなくに、兄を踏臺にして弟の跳躍は見事に當つた。

黒潮出版の前日のY新聞は、二號見出しで蘆花氏K新聞を去ると特筆して、先づ世間を驚かした。毎日新聞では「情滿ち義盡く」と満腹の同情を黒潮の卷頭辭に寄せた。それが編輯長のK君である事を知つたは後の事である。早稲田伯から黒潮社へ使しての一冊買ひは、それ故と知られた。而して「君が文藝の眞義に猛進せらるるを祝す。匿名は御免」といふはがきをくれた人は、其筆跡から推して其新聞主筆のSさんであらねばならなかつた。其兄の出世作に署名して序文を書いたSさんは、其弟の出世にも匿名のはがきを吝まなかつた。「兄弟が兩端から敲たたくは佳い事である。」と書いた新聞評は大人らしい公平な見方であつたが、多く敵をもつ寅一に弟

以て一家七口を養ふこと久しかりし）大兄は平生儉勤、生活問題に於て憂ふるなしと雖ども、然しながら世波は荒らし。生の慙然たりし因も、此もまた一なりし。

大兄と兄長——君との上に就て、生は次ぎの月曜に於て一言（朝日月曜文壇）せんとす。これ公開書なりと雖ども、然れども眞實なり。（只今は書き度念如山。然し當日までには或は感些か減ぜん歟。）大兄諒せよ。

去月二十日頃のことなりし。生は矢野文雄を訪ふたり。更に大兄の寓をも訪ふたりし。大兄不在なりき。

さて大兄の恵まると恵まれざるとは別論なれども、生は大兄に一文を乞はんと欲したりしなり。（今回の譯書聖人歟盜賊歟の一篇に就て乞はんとするにあらず、大兄が小生に對する訓誨なり、一般文學に關する御意見なり、承はらんと欲したりしなり。）蘇峰君の文も龍溪君の文も、鷗外君の文も得たり。涙香氏の文も得たり。大兄一文を恵みたまはずや。長文切望、短文また可。萬言切望、一語また大幸。未刊行の印本お目^めにかければよきも、只今盡く出拂ひ居り候。座右に二三家の文を新聞に載せたるものあり。萬一の御參考にもと

御清健奉大賀候。萬事は措け、直ちに生の云はんと欲する所を云はしめよ。

本日午前博文館員長谷川天溪に用あり、行く。同子より讀賣新聞（本日）の記事の話を聞く。

歸途匆惶吾朝日社に寄り、讀賣を讀み、また黒潮を求めて讀む。讀み了て黯然たり。社の池邊吉太郎また深思する所あるが如かりし。

固より――大兄の前途はブライトなるべし。何の弱輩劣生の如きものゝ些かにても煩意するを須ゐん。斯く思ひつゝも、生は只だ黯然たりしなり。

生の不遇の如きは、みな――悉く己れの招く所、生能く之を明かにす。大兄の不遇に至つては、何の謂ぞや。生は大兄の美^びを知る、善^{ぜん}を知り、眞^{しん}を知る。同時にまた大兄の健康のデリケートなるを知る。アー生の大兄の爲めに憂ふる所はコ、なりし、黯然たりしはコ、なりし。

生は固より――己れ招く所なりと雖ども、生活の困難普ねく嘗め盡せり。（三十金の収入を

高文此の兩三日中にも賜はり度切望候也。

百拜百拜

余

蘆花先生

侍史

二月二十六日 夜十時認む

酒半樽は傾けたり。大兄には秘すべからず。

餘寒未だ除けず、御自愛々々々

黒潮の紹介を見てから序文を書かう、と熊次は謂ふた。「それは狡^すい」と駒子が曰ふ。そこで、

御目にかけたり。何れにも今回の譯書のみに限りにて御願申すにはあらず。生の困憊、衰墮、而かも保命せる上などに關し、何等の御意見御もらし下さらば大幸也。殊には御多忙中恐縮千萬に候へども、印板殆んど成り、此の十日頃（三月）にも發梓の都合、此の一兩日中にも尊稿御恵み下さらば、何等の幸慶ぞや。矧や今日此際先生の一文を得ば、感曷ぞ極まらん。惘望至囑々々。伏泣至囑々々。

性來の惡筆、殊に萬感胸に充ち（大兄の上をも感じ、吾上も感じて也）意激し情昂り文々を作さず、章々を爲さず。殊に文中長者に對する禮を失するもの有之、大兄海涵の容量御寛恕奉仰候。

ぜひ近日參堂高論を承はりたし。

『黒潮』社へ御寄贈相成りしも、小生も一部座右に置いて熟讀一言を呈し度、一本御惠投を得は幸也。

と書いた髪斗つきの一封が贈られた。裏に金壹圓と書いて、壹圓札が一枚入つて居た。熊次は妙な氣もちになつた。然しありがたく頂戴した。熊次の意氣込みの凄じさを見た父母は、如何様な形で兄弟の手切れがあらはになるか、心配しぬいて居たのであつた。黒潮の巻頭辭を見て、兎に角一安心したのである。母は云ふた。

「兄さんもさう言ふとらした、皆が兄弟で一緒に仕事をしとるやうに思ふとる、てち。」

熊次が公然離れ去つたからには、其様な買ひかぶりの不平は、要するに霽らされるわけである。父は黒潮社に壹圓の祝儀をくれた。母の心は如何であつたか。

河水の 彼方 此方に 分れても

澄みて流れん 事をのみこそ

といふ母の歌が、此際の述懐である事を、後で熊次は知つた。母はまた駒子に曰ふた。

「女といふものは、譬へばお米のねばりのやうなもの、とわたしは思ふよ。ほろほろした御飯

熊次は序文がはりに短い手紙を書いた。色々言ひたい事もあるが、「父母の邦を去りて日猶淺く、餘哀胸に滿ち、張胆明目大言壯語する氣にもなれ不申」と書いた。後で多良君の黒潮紹介が出た。それは六分四分の短合で兄弟を勝にかけ、頗優美で而して「弱き」と熊次を一こすりした。「弱弟」と自署する熊次も、他から「弱き」と云はれては腹を立てた。熊次の短簡は型の如く澤山の序文の中にまじつて、聖人欺盜賊欺の卷頭に出た。多良君は更にそれ等を新聞にのせ、其後しきりに翻譯文を出したりして居たが、其内田端の腦病院に入れられ、「自分は狂人視されて此處に閉ぢこめられて居る、助けてくれ」といふ意味の文言を書いたものを病院の窓から往來目がけて投げたりした噂を聞き、ついで亡くなつた事を後で聞いた。

友山君の獨立評論は、告別の辭の「君は彼峰に立ち、余は此峰に立つも、山外に立つにはあらず」の句を引いて、そんなに囃し立つる程の差異ではない、と斷定を下した。

逗子の父から、母の出京便に托して、

同情する由を傳へ聞いて、熊次は感謝した。彼女自身次男の妻で、大勢の學生を扱ふた経験から、男性各自に自己をのばさす必要をしみじみ知つた人である。同志社出の一青年が沼山の又雄さんに仲裁を勧めたら、

「彼兄弟は他のいふ言など聽く連中でない。」

と又雄さんが御免蒙つた話を、熊次は後で聞いた。

捨身でかつた黒潮は成功であつた。本文の小説は格別問題にもされなかつたが、巻頭の告別は確に目的を果した。彼は最早M社の肥後熊次ではない。獨立獨歩の

黒潮社主 肥後熊次

である。

S 舍から追々に荷車で届いた「黒潮」は、黒潮社の玄關から書生部屋の二疊に山と積まれた。其山は面白いやうに崩れて往つた。U 爺さんが三度も来る頃は、他の書店も追々に五十部百部と取りに來た。近い青山の書店からも、五部十部取りに來た。M 社と取引に馴れた多くの書店では、最初黒潮社なるものの出現を怪しむで、二の足踏むたのである。一部買ひの顧客も來た。門のくぐりがからりあいて玄關に人聲がすると、熊次は書齋から、駒子は勝手から、急いで出

は、うま味がない。男同志は如何様にはなれなくにならうとも、女はつなぎの和らか味にならねばならぬ。」

駒子も尤と思ふた。お安姉の珍らしいカルタとりの來訪も其故と氣づいた。然し駒子は夫を恐れた。かりそめの差出も、何様な恐ろしい結果を生むか知れなかつた。駒子は唯姑の言を心にしめた。

黒潮騒ぎの囂々とした中に K新聞は一言も言はなかつた。日曜講壇の「同情の範圍」の一文が、答の矢と云へば云はれた。熊次の家には、未だK新聞がもと通り日日配達された。

父は黒潮社の誕生を祝ひ、母は分離の止むなきを見た。血族縁者の態度は色色であつた。

「小説が賣れるさうですね。」

と笑止な貌をしたは深水の姉である。

「黒潮社——ほ、ほ、ほ」

と津森叔母は晒つた。熊本の伊倉伯母は、寅一の不人望時代にも、「わたしはさうは思はぬ」と信任を表した人である。兄に叛く弟を、熊本ではよく云はない者が多かつた。伊倉伯母が熊次に

版
△
潮 黑

著 △ △ △ △ △

黒潮の我岸を洗ふ如く人道の流れをして我邦を洗はしめよ。羅馬は一日にして成らず。我日本の前途は遠し。夫れ國民の成長は必ずや國民の解脫に伴はざる可からず。小説黒潮は今や渾ての方面に解脫をなさむとして苦悶せる我日本を主人公として聊其消息を傳へ其前途の命運を描かむと試みたるものなり。

全部六卷より成る。今第一篇を發刊す。幸に江湖君子の一讀を祈る。

發行所 東京 赤坂青山 原宿百七十八 黒潮社

て玄關に鉢合はせる時もあつた。時ならぬ繁昌に、去年から店を出した向ふ隣の八百屋のおか
みが眼を聳立てたものである。金錢の受取渡しに、駒子は銀行で見覚えのものに倣ふて、有り
合はせの竹の盆に藍の羅紗を貼つたものを造つた。それは直ぐふるもののやうになつた。

黒潮は二月末に出て、三月には初版二千再版千部を賣切つて、三版千部を出し、四月には四、
五、六版三千部を賣り切つた。初版の「黒潮」の表紙には、題名あつて著者の名がない事を氣
づいたのと、表紙のインクが手に染み易いといふ注意に鑑みて、再版から包紙をかける事にし
た。包紙の表には、

第十章

瀬戸を過ぎて

包紙の裏面には、六號で「黒潮の解」を刷つた。製本の遅い時は、自身製本屋に出かけて仕事振りを見たものである。戻つて來た落丁本をS舎に直しにやつたり、地方送りの面倒も見ねばならなかつた。小使兼務の社長は忙しかつた。駒子を手傳ひに荷造りして人力車で新橋へ持つて往つて仕出すも容易でなかつた。後では書籍運輸會社を利用する途を知つて、少しは樂になつた。最初小説と聞いて冷笑したS舎の係が、服を更めて原宿に挨拶に來る。同志社で熊次の一級下であつたH君が神田で活版業をやつて居て、注文を取りに來る。經濟上にも、黒潮は可なりの成功であつた。差當つての米鹽を缺く患はなかつた。

「まあ餓死せずに濟みさうです。」

來訪の青年文士の一人に、熊次は斯く言ふた。

で、それが直接熊次に送られた事を後で知つた。駒子と相談の上、熊次は金三十圓の禮を價格表記で大江に送つた。それで湯治が出来たといふて、「君が恵に腹鼓うつ」といふ歌を義兄はよこしたものである。熊次は近頃預つて居る娘を連れて、日本橋は小網町の安田銀行に往つて件の爲替を受取つた。「黒潮」で恐らく名を知る若い行員は、千餘圓の現金を手渡すに敬意を表した。生涯に初めて千圓といふ金を懷中した熊次は、其足で魚河岸を通つて三井銀行に壹千圓を預け、歸りに天賞堂に寄つて二十餘圓の兩蓋の銀時計を買つた。兄の洋行みやげにもらつた銀の片側時計をある不快の場合に微塵にして以來、久しく時計無しで居たのである。結婚當時金鍍の水晶指環をはめて居た駒子は、これもそれをこはして結婚十年いまだに指環なしで居る。熊次は駒子の爲に、指環を二つ買つた。鳩の母子に菜の花を刻した分厚なのが三十餘圓で、八圓のは單純に菊花を一つあしらつた清楚なものであつた。駒子は金の指環を二つも手にして、空恐ろしかつた。

ある日、呉服屋の若旦那といった風な蒼白い男が、原宿の玄關に音づれた。名は聞いて居る洋行歸りの新俳優Fさんであつた。Fさんは洋行中歐羅巴で駐外公使のM男爵から不如歸を見せ

暮地に獨立の瀬戸をかけぬけた熊次が、吻と一息ついて眼をあげた時、あたりは花の春になつて居た。

一生懸命の獨立を助くるかの如く祝ふかの如く飾るかのやうな出來事が相ついでやつて來た。譲られた資産の中、千圓の紡績株は半分になり其半分も賣つて黒潮の出版費に宛て、故山の葦北の四反二畝餘の田もとくになくなつて居たが、まだ熊本の郊外に五反二畝餘の畑が残つて居た。それが今度縣立中學校の敷地に坪六十錢で買収さるゝ事になつた、賣つてよろしいか、といふ手紙が熊本は大江の義兄から來た。さして氣乗りのせぬ熊次も、兎に角よろしく頼むと返事を出した。其結果、金一千若干圓の爲替が書留で送つて來た。「天の助たい」と父母は言ふたものである。青年の昔の失敗から、熊次は金にかけては大江の義兄に信用がなかつた。千圓に餘る大金を熊次に送るを危ぶむだ義兄は、それを寅一宛に送らうとした。姉の照子が口添へ

ものを駒子に縫つてもらつて、其縫ひぐるみを被て仕事は勿論、近所の散歩などしたものだ。最初は、駒子の叔母がくれた手織木綿のこりこりしたのであつたが、後では紺の厚いネルを買つて駒子がつくつてくれた。それを着てある正月に駒子とお君を連れて澁谷青山の通りを歩くと、随分人目にもついたものである。駒子が上京した十七の春、彼女の父が紺纏の厚綿入に尻からげして神田の通りを濶歩する後からついて往つた當時のきまりわるさを、彼女は夫に因つて再びする思ひがした。

東京座の不如歸は大當りであつた。招待に應じて見に行く勇氣が熊次になかつた。然し普通の看客として、駒子は見に往つた。未だ東京に留つて居た嫂の照子も、彈平を負つて駒子に伴ふた。駒子が歸つて芝居の印象を話した。浪子が淺黄の縮緬で蕨狩の場に出て來た時、駒子は冷やりとした。田舎の花嫁の出としか思はれなかつた。加之其縮緬の一隅羅で浪子が出幕を通したのに、全くうんざりして了ふた。最後の幕で、片岡中將が出て來ると、見物がわアと歡聲をあげた。幕切にF君が武男姿で、小説に感激して此芝居をするに到つた次第の大演説をして拍手喝采を博したさう。東京ではこれを手始めに不如歸は度々舞臺にかけられ、新派の獨參湯

られ、芝居にしては如何だと勧められ、歸途の船中で讀んで感激し、歸朝第一の芝居に不如歸をやるといふので、許諾と注意を求めに來たのであつた。不如歸は出版の年の末に一度、大阪で舞臺にかけられた。M社の落武者で大阪に居たY君が主となり、丸田君等も肝煎つて、新派がそれを演じた。相應に舞臺効果があつて、氣絶した婦人の看客があつたといふて、熊次さんに一度見に來ていただきたい、とY君から社長宛に言ふて來たものである。T君の片岡中將が殊に好かつたさう。好奇心は動いたが、大阪まで見に往く氣にもなれなかつた。後で脚本を見ると、「猪は食はねど猪食ひ猪食ひ」の幕開きなどで先づ興さめた。往かすによかつた、とさへ思ふた。然しF君が東京でそれをやると云ふに異存はなかつた。Fさんが浪子かと思ふたら、Fさんは武男で、浪子は大坂からKといふ若手の女形を呼ぶさうな。大坂でTが當てた片岡中將役は、Sといふのがするさう。熊次の快諾に、F君は勇んで歸つた。後でF君が書いたものを讀めば、此訪問の印象を書いて、原宿の其家は軒傾き、蜘蛛の巣かかり、あんな艶麗なものを書いた作者其人はと云へば、ツンツルテンの筒袖を被た武骨な男、といふて居た。熊次は服裝などにあまり頓着がなかつた。寒がり屋の彼は、冬は厚綿入の筒袖ともんべを一緒にしたやうな

「黒潮社つて、Office は何處なんだ？」

「黒潮社の Office? 即ち此處さ。此家さ。」

あからめもせず熊次は答へた。「黒潮社とは余一人の社也」と彼は黒潮第一巻の扉に書いた。彼はM社の向ふを張つて、似而非なやうな仕事をしやう氣は寸毫もなかつた。獨立の門戸を張れば、Officeなどは住宅の一室で少しも差支はなかつた。飽くまで一人で、仲間も子分もつくる氣はない熊次であつた。

黒潮の賣れ行きが鈍つた。それは最早飽和したのである。二ヶ月にして七千部も出たのを思へば、それは當然である。黒潮は賣れる。地所は賣れる。さし當つての生活の心配はなくなつた。黒潮第二巻を書くに何の障りもなかつた。然し熊次はちつとも第二巻を書く氣になれなかつた。大阪のKからは、自分の閱歴が小説になつたのを早く見たい、と毎々督促して来る。熊次はそれをうるさいものに思ふて、書く時は書く、と突つ刎ねた。熊次の獨立に第一の聲援を與へた毎日新聞のK君は、ある日原宿に眼鏡をかけた輕快精悍な筒袖姿を見せて、黒潮の續稿を毎日新聞に出してくれ、と依頼した。舞臺を假さうの厚意である。最初から一冊にして出すつ

と一時唱へられた。熊次はついぞ自分の書いたものを舞臺に映して見る氣になれなかつた。然し不如歸に引きつづいて金色夜叉が東京座に演ぜられた時、彼は一人で見に往つた。大阪から上つて來たTの荒尾は、確に好かつた。久米八の滿枝も流星にうまいものであつた。貫一のFにはあまり感心しなかつた。仕好い役でもあらうが、熊次はTに感心した。然し間もなくY君の紹介でTが面會を求めた時、熊次は彼の來訪を斷つた。

ある日二人の洋服紳士が熊次を晉づれた。藍鼠の服の一人は、同志社の同級で熊次より二つも三つも年下のS君であつた。彼は熊次に好意を寄せ、二十歳の暮に熊次が京都を飛び出す時、今出川の車まで送つてくれた四人の一人であつた。日清戰爭中の博覽會に舶來菓の廣告で京は東山を俗化して一氣に賣り出したM商會の養子に同級の一人がなつた關係から、S君も同商會に入つて今は鑛山部を受持つて居る。風をひいてハンカチで頻に鼻をこする黒服の一人は、技師であつた。熊次が京都出奔前しばらく籠つた清瀧の同級懇親會で松茸飯を十六杯平らげてしたたかに吐いた昔の面影さながらのS君は、獨逸語を使ふて熊次をまごつかせたりしたが、やがて細い眼を熊次に注いで、問ふた。

黒潮の成功は、熊次にある程度の自信を與へたが、彼はそれが兄の反射である事を氣づかぬ程うぬ惚れては居なかつた。彼は調子に乗る危険を慮つた。謙抑自制の必要を知つた。分れた以上、買はぬ喧嘩を押賣る必要がなかつた。熊次は成る可く息を屏^{ひそ}めて、人の視聽を聳やかす事を避けた。然し彼を利用する誘惑は頻繁に來た。其あるものを熊次は躲^かはしきれなかつた。

熊本で熊次が世話になつた江見牧師は、日清戦争後神戸から東京に來て、特得の意志と新境地を開拓する機轉を以て、帝大一高の青年を中堅とする地盤を帝都に築き、雜誌「新人」を出し、本郷教壇に立錐の餘地なく日曜毎に人を寄せて居た。しばしば促されて「新人」に責塞ぎの惡文を寄せた事もある熊次は、江見夫人お美枝さんが昔馴染のベビイ、今は中學生の鎮雄君に一昨年生れの少女を負はせ、親子三人で押かけて來ての頼みを斷はれなかつた。彼は本郷教會の婦人會に「一葉女史について」話す事を諾した。駒子は婦人會の演説に夫を頼みながら世辭に

もり、と熊次が斷つたので、K君は奮然自ら筆を小説に染めて、毎日新聞には「火の柱」が焰を擧げた。第二卷の催促が彼方此方から來た。熊本の伊倉伯母なども、上京する青年を紹介の狀に、「黒潮とやら、其つづきを世間にても待ち居候容子にて」と書いてよこした。然し熊次は書かうともしなかつた。彼の動力は獨立の旗上げに盡きて了ふた。旗幟が鮮明になつた今日、彼は大急ぎで矢つぎ早に著作を出す必要がなかつた。彼は凄じく水をはね飛ばして一回轉した山村の「ばつたり」の如く、次の水が盈つるを待たねば動けなかつた。T堂はM社の出版物を手廣く取次いで居る書店で、神田のU爺さんについては黒潮も賣つた店である。ある日、其主人が熊次を訪ねた。剃つて三日目位の鬚髯黒い物馴れた五十近い小男である。黒潮第二卷の消息をそれとなく問ふて、雜談一時間の後、歸つて斯くいふたさうだ。

「第一卷が賣れる内は、第二卷は書きなさるまい。」

誌の原稿など書きによく姉弟の家に泊る時があつた。其姉なる女學生にある大學生が戀をした。「私は最早處女ではない。」と彼女は泣いて自白した。こんな事を聞くと、自分は如何考へてよいか分らなくなる、と鴨志田君は演壇で叫んださうな。昔雑誌で「うかれ男、たはれ女」を罵り、「くされ卵」で姦淫を描いたサカナヤさんを「鶴が掃溜に下りたやう」と慨いたIさんを記憶する熊次は、今若い者の爲に前座をつとめさせらるるIさんの演壇の聲を控室から聞き聞き、如何にも空洞な其聲の響を聞き苦しく思はずに居れなかつた。

やがて熊次の番が來た。江見さんの借袴で演壇に現はれた熊次の姿を、Iさんは後で「風采粗朴、田舎漢の如く」と雑誌に書き、聽衆の海老茶の中に居た駒子の同窓の甲乙は、「もつとハイカラな方と思つた」と後で駒子に曰ふた。それは東京に來て十五年、初めての熊次の演説であつた。彼は脚氣を口實に、椅子に腰かけて話した。「一葉女史について」は材料乏しい、空疎散漫なものであつた。然し一葉女史には夙に感心し切つて居た彼である。彼が所持の一葉全集の裏に、彼は無平仄詩を書いて居た。

も妻を招かぬ江見夫人の不躰に腹を立てた。其日に自分も行きたかつた。然し熊次はつまらぬからよせと云つて、獨りでさつさと出かけた。信濃町から瀛車で、其演説を聞きに行くといふK新聞の俳句などをやるY君と同事して、飯田町で下り、壹岐殿坂の會堂に往つた。瀛車の中で、車の響を壓し殺すやうな初夏の烈しい雷雨が卒然と起つた。會堂前の「一葉女史について」の立看板は、雨にペラペラになつて居た。然し場内は若い男女の聽衆で一ぱいであつた。それを控室から指して、

「皆あなたを聞きに來とるのだ。」

と江見さんは曰ふた。而して夏羽織單衣の着流し姿を見て、それぢやいかん、と自身の穿いた袴を脱いで熊次に穿かした。控室には、當日の辯士の一人としてIさんも居た。女學の先達としてIさんの名はふるく、Iさんの家に寄寓して居た同窓の一人を訪ふた昔もあつたが、Iさんに面を合はすは今日が始めであつた。先輩の蹟きが如何に後輩をがっかりさせるかの一例として、鴨志田君がある時芝で演説したさうな。名高い基督信者の女學の先達がある。夫人は亡くなり、姉と弟で暮らして居るある家族を世話して居たが、自宅では仕事が出来ぬと謂ふて難

うに控室に引込むだ。

直ぐ誰やら演壇に聲がし出した。それは土佐に名だたる雄辯家の弟、「文學界」の同人で一葉女史と親交あるB君であつた。一葉女史が甲州生れでなく、東京生れである事實の正誤からはじめて、誤を正し、不足を補ひ、流暢の辯をB君は揮ふた。

「皆が満足したやうです」と江見夫人は曰ふた。「熊本時代の方が好かつたやうだ。」と江見さんは曰ふた。出なければ好かつた、と熊次は思ふた。

其處に眼ざしの異様な學生が刺を通じた。黒潮が出ると、異議を唱ふる手紙も多少は來た中に、眞剣に憤慨した一通があつた。弟として兄に無禮といふのである。醫科大學生で紀州の人、彼自身が兄であるD君であつた。高山樗牛の崇拜家で、冬の休に兄弟で龍華寺樗牛の墓に詣でて、紀念の寫眞を撮つたりした事を後で聞いた。其D君であつた。熊次はD君と話し話し、飯田町まで同伴した。これを縁として、D君は時折原宿に音づれた。原宿に同じやうな二階建を二軒並べて住む星亨の子分の二人の一人は、D君の親戚に當るさうで、D君は其處へ訪問のついでによくやつて來た。親戚の家の飼犬に噛まれたといふて、長い間注射に通つたりして居た。

妙齡閨秀才如花 形管都門聘盛名

秋風一夜催落葉 新墳墓上雨瀟瀟

彼は五年前の秋多摩川を溯つて甲州入りをした時、大藤といふ村を通り、それが一葉女史を出した地である事を甲府でY君に聞かされ、一人の感興を催した。此話をするについて、彼は築地の本願寺に女史の墓を訪ふたりした。熊次は女史の生涯を詳には知らぬ。然し吉原裏に小さな雜貨店を開いて、客があれば姉と妹と一時に出たりした逸事を、自分の新しい経験から同情し、弱身につけ込む書店が、次の作欲しい爲に前作の原稿料を滞らしたといふ不埒を怒つた。

然し眞珠貝が誤つて含む砂礫の痛さの故に吐く唾液が眞珠を造る、一葉女史の生の苦が一葉全集を造つた、と熊次は曰ふた。演壇下の多くの頭が頷いた。熊次は途中で話の筋を忘れて、袂からノオトを出して見たりして、兎も角も結末に達した。彼は一葉女史の墓碑に立つて、さう思ふた。女史は女史の使命を果した。時代は潮の如く動きつつある。次の時代は次の使命をもつ。第二の一葉女史が出なければならぬ。斯く結ぶと、滿堂の拍手を浴びて、熊次は遁ぐるや

濟まぬとあつて、ある日熊次の留守にM夫人は其女を連れてMさんの描いた一面の水彩を齎らし贈つた。熊次は數日それを留めて置いて、後でそれも返送した。Mさんは洋畫の老大家で、駒子の兄なども高商時代師と仰いだ事があり、熊次が嫌いな熊本の恐い眼の銀が内弟子なり僕なりに住み込んだ家が其Mさんの家であつたのも妙な感を熊次に與へた。Mさんの駒子は十五でなくなつた。母夫人が涙の記を熊次も「新人」で讀んで居た。父をついでしつかりした油畫を描く其姉のK子さんは、原宿の客間の貝欄に飾つた菜花の寺の熊次の淡彩スケッチを「意味が深い。」と眺め入つた、と駒子は告げた。買ひかぶられるも、好い氣もちのものではない。熊本での昔の事を銀が何も話さなかつたかしら、と熊次は思ふた。

沼山の又雄さんが到頭大阪を罷めて東京に歸つて來た。而して新に雑誌を出すさうである。相棒は樗牛の友人で、新歸朝の宗教專研のA博士。熊次にも一臂を假せと又雄さん自身來ての頼みを、熊次は無下に斷りかねた。「ありがたう」と禮を言はれて、熊次は氣の毒になつた。さうして何か書かうと思ふた。

雑誌の出資者は、小石川の教育書類を出版する書店であつた。前景氣は盛んで「屹度賣れる」と

熊次が演説を終へて歸ると、出迎へた駒子は紅い昂奮し切つた顔をして居た。一葉女史には駒子も同情もし嘆美もして居る。明治二十九年の秋氷川町で女史の訃を聞いた時、玄關前の大銀杏の一夜の風にはら／＼散り行くを見て、

一葉の 散りてさびしや 秋の暮

と悼んだものである。其「一葉女史について」話す良人の初演説も聞かされず巢守にされた駒子は、自分を無いものに扱ふ同性の侮辱に、胸の憤を抑へかねた。それが天に通じたかのやうに、良人が出て行くとやがて非常の雷雨になつた。烈しい稲妻、凄じい雷、物皆をさながら鞭うつ夕立、それは自然が彼女に代つて鬱憤を霽らしてくれるかのやうであつた。彼女は雷と共に座敷中をあれ廻つた。良人は今何處だらう、とちよつと氣になつた。而してそんな事を案ずる自分の跼甲斐なさ、また腹立たしかつた。昂奮がまた新に燃え立つた。其昂奮が良人の歸を迎ふるまでも彼女の顔を去らなかつた。

講演の禮に、本郷教會員のM夫人と文科大学生のO君が來た。熊次は菓子折をもらつて、封金を辭した。文を賣つて生活する彼は、舌を賣るのも異な感がしたのであつた。婦人會の方では

熊次は自己に楯籠つた。兄を助けぬ彼は、兄の敵も味方も援けなかつた。信州の新聞をやめて、友山君は専ら獨立評論に據つて居た。何か書いてくれを手はじめに、友山君の子分のA君は原宿にお百度を踏んだが、熊次は頑として一行も書かなかつた。

熊次の獨立は追々孤立となつて往つたが、昔から獨りぼつちに馴れた彼は、些もそれを意としなかつた。

江見さんなども云ふて居た。上野精養軒で盛大な披露會が開かれた。熊次は披露會にも出なかつた。一旦又雄さんに約束したものの、追々其雜誌に書く事がいやになり出した。何となくすべてが氣に喰はぬ。其書店から出した「烟湘日記」に、知人に障る事を其まま出したが聞かぬ、と寅一がK新聞で非難した。書店主人が日本新聞に其反駁を書いた。熊次は又雄さんに違約を詫びて雜誌に書く事を斷つた。又雄さんが驚いて來て熊次を宥め、Aにも會ふて御覽、好い漢だ、といふた。書店主が來た。教員上りの未だ若い、頸に白い絹の手巾などまいた羽織袴の男である。妾など圍ふて居る、と熊次は聞いて居た。K新聞との争が熊次の感情を害したと一圖に思ひ込んだらしい彼は、「私の人格が卑い爲に」とひたもの下手から詫びるのであつた。熊次は其誤解を正さうともしなかつた。最後に又雄さんの子分の一人で同志社出のY君が熊次を宥めに來た。Y君は大江の甥の益雄とも學生時代懇意であつた。兄弟喧嘩の仲裁を又雄さんに勧めた人である。熊次は又雄さんの評判通り「いふ言を聽かなか」つた。又雄さんとA君の共同雜誌は、華やかに初號を出したが、追々立消して了ふた。さながら熊次にけちをつけられたやうなものである。

といふと、許も待たず、おたよは縁から手をのばして沈丁花の小枝を折りにかかった。柔靱な枝は中々折れず、無理に折るとして幹に長い皮剥げをこしらへて了ふた。彼女が手持無沙汰に去つた後までも、生々しい皮剥ぎの痕を眺めて、熊次は苦々しく舌鼓をうつたものである。

江の嶋近い町の醫師佐久間さんに戀はれて妻になつたもと白石のおしんさんの肝煎で、其處の町長の十六になる惣領娘を預かる事になつた。玄關側の書生部屋を與ふる事にして、差配に云ふて其處の二疊の疊の裏返しなどさせて待ち受けた。期日におしんさんが娘を連れて來た。むら子といふその娘は、昨春上州に歸つた丈高のたづ子より一入高く、眼はきよとんとして、無表情な顔をして居る。たづ子にうんざりした熊次夫婦は、また此丈高娘に呆然とした。間もなく父の平岩さんが挨拶に來た。熊次と同年といふに、平岩さんの頭は禿げて、黒髯が長かつた。萬事よろしく頼み置いて、平岩さんが歸る時、熊次は曰ふた。

「御安心なさい、石部金吉といふ家ですから。」

言つてしまつて、熊次はいやな氣もちがした。

平岩さんは養子であつた。家附の娘は、あなたもお出になりませんかと東京へ誘ふおしんさん

淋しくもあり、手不足なので、少し餘裕が出来る、熊次夫婦の家ではまた女中を置く事にした。澁谷の農家の女で、十四になる夏といふのが來た。肩の濃い、肩の張つた、すんぐりした夏は、初奉公に可愛がられて、子供らしいおしやべりをしながら、喜んで働いて居た。

間もなくある日おたよが珍らしく音づれた。ちらちら小雪にふるいシヨオルをかぶつて出て往つた以來である。たよは昔奉公した家を彼方此方と一軒残らず訪ねあるいたさうである。其足で來たのか、と駒子はうれしく思はなかつた。次郎さんの消息を問ふた。腦が悪くて病院に居るさう。「寫眞も何もすつかり破いちやつて、爐にくべてしまひました。」といふ彼女を、何てひどい事をするのだらう、と駒子とはとむねをついた。「死に臭くて、死に臭くて、今年は何だか死に臭くて」とおたよは薄笑ひした。座敷の手水鉢下に熊次が植ゑた白沈丁花が盛りに咲いて居た。「まあ何て奇麗な——一枝いだけ下さいませんか。」

の、何だつけよう？」と覺束ない記憶を喚び起さうと努力する。齋らした新知識としては、大根で蛸をたたくと軟くなる、といふ弦齋料理の一節と、「嚙天下に三品漬」が其町の名物といふ噂に止つた。時々は發作が來て、二疊に寝たきり、顔が黃ろくなり、唇の色がなくなつたりして、夫婦を驚かした。少し加減がわるいと、「阿父に電報うつて！」と直ぐ彼女は申出た。これまでも何時も此手でいつたものである。電報をかけぬまでも、流石に心配していふてやると、かかり醫の佐久間さんが晒つて、「また例の、何有、大した事もありますまい」と云ふたさうである。庭の薔薇の名札を書かすとして、彼女が碌に自身の名も書けぬ事を知つたは、一の興さめであつた。然し縁あればこそ預けられて來た者である。夫婦は「叔父さま、叔母さま」と彼女に呼ばした。青山の姪の實子が來て見て、彼女の叔母を「叔母さま」と呼ぶ娘が居るを見ると、わたしの叔母さまと云ひ貌に犇と駒子に抱きついた。然し實子は叔父が公然手を切つた父の女である。而してむら子は、少なくとも其叔父の家に居附いて居る。

岩原のお君もいよいよ女子學院を卒業した。國許の祖母や親戚に暇乞して、それから布哇へ立つ筈であつた。四歳で父の郷里をはなれた女學生の歸郷は、先方にも遠慮が先に立つて、互に

に、赤ン目をして見する女であつた。子女は母肖であつた。面白くない平岩さんは、一時盛に遊んだ。酒も相應強かつた。今では考へ直して、評判の好い町長さんである。父の酒が祟つたか、むら子には時々脚に烈しい痙攣が來た。それは熊次自身にも覺えがあつた。平生は何ともないが、夜中などに不圖足の拇指にこぐらかりがすると思ふと、呀といふ間に全脚に及んで來る。其痛みに勿ね起きて、くの字になつた脚のまま、「痛、痛、痛」と叫んであるき廻はる。

駒子がはらはらしても甲斐はない。「阿父の酒だ。」と熊次は毎々舌鼓をうつ。(然し父にも脚疾があり、祖母にもあつた事を熊次は思はなかつた。)五分も過ぎると、忘れたやうに痛は去るのである。同胞六人、末子の熊次のみ此痛を負はされて居るのである。同じ症狀がむら子にもあつた。多くの父に見る通り、平岩さんは惣領娘のむら子を母にかへて秘藏した。むら子是我儘一ぱいに成長した。小學校にも碌に行かず、犬のジョンさんとはかり遊んだ。風ひいても轉地療養にやられ、ころんでも電報つかんで阿父が飛んで來た。熊次駒子は授けられた代物にいささかたぢたぢとなつた。東京の春寒に、駒子が強いて毛のメリヤスのシャツを着せると、窮屈がつて、「ああん、ああん」とむら子は身をもがいた。ものを問へば、斜に眼を見据ゑて、「あ

物を贈つてよこす素封家の女は、假令それが水平以下の娘であつても、自然お嬢さん格に扱はれた。十四の夏は、何時しか十六のむら子に押され、ある時主人の機嫌に觸れた彼女は、頭からバケツの水を浴びせられ、泣き泣き歸つて了ふた。また他の女中が來た。

嬉しいものではなかつた。原宿に来て見れば、叔父叔母の巢には風來の娘が入り込んで居る。少し話して見て、この素封家の娘が眼の開かぬ鼠の子同然であるのを見ると、お君は焦々する猫の手先を出して彼方へ此方へいぢらずには居れなかつた。牧師の娘は、學生時代原宿に来て、叔父の信仰復興を希ふ事を忘れなかつた。彼女は夜の十二時一時までも、質問にことよせて叔父に信仰を勧めた。叔父は、そんな事、分つて居るよ、と云ひ貌に直ぐ胸を眠つて了ふた。叔母が代つて相手をしたものである。お君が物質に貧しい事を知る駒子は、あの派手な人達の中にと同情して、わが着類の中で一番派手な紺襪をお君にやつたりした。「阿母さんは、學生の経験がないから、ちつともそんな所に氣がつかない。」と喜んだ。お君の布哇渡航には、萬事青山の世話といふ事になつて居た。原宿の叔父は、唯彼女に銀時計を贈つた。然し横濱で検査の結果、一時眼の療養をしに病院に入つたお君が駒子に来て下さいといふてやつた時、熊次は叔母をやらなかつた。

お君は布哇へ去り、青山の姪甥も次第に足を遠くし、熊次夫婦は追々單に痴愚な田舎娘の叔父さま叔母さまになつた。月々七圓の食料を納れて、甘藷の俵だの鎌倉塗の盆のとちよいちよい

文明の金鵄勳章なる綠綬褒章を君は受けぬ。

陰徳報あり。

尙將來の隆運を祈る。

謹んで祝す。

「自分の家業をしながら御褒美をいただくなんて」とあまり大江の婿を好かぬ姑は唸やいた。然し傍目もふらぬ堅忍の花が、大に大江の家に咲いた事は争はれぬ事實であつた。不幸にして、盛運の峠は破綻の下り口であつた。父子の争が大江の家に起つた。嗣子の益雄は工業學校出の新智識、才氣の走つた男である。津森伯父の末女おいそさんがF家に嫁してまうけた長女の安子を一昨年娶つて、若旦那夫婦は家業を一手に切りまはす用意は已に出来て居た。然し益雄の父は中々隠居しなかつた。新教育を受けて才氣の働く嗣子と、一徹に古之愚を守る父とは、自然に合はぬものがあつた。母の縁から肥後の家の者のやうにして育つた益雄は、父の爲には子ででないやうなところがあつた。益雄の母は永年の骨折に疲れ、隠居を欲した。誰の目にも綠綬褒章が隠居の汐時と見られた。益雄の舅は、軍人上りの一刻者である。酒の座で彼は益雄

四

思ひがけなく熊本から大江の義兄夫婦が上京した。益雄も同伴ださうである。大江の義兄は熊本藩の少祿の家に生れ、維新の初年すべてを抛つて織機業をはじめた。惣領の男の子をなくして葬式の金がなく、舅から金参圓を借りてやつと葬式を済ました。それ以來彼は決して借金させぬ決意をして、随分と苦しい中を精勵刻苦、今では熊本市外の大江の經緯堂と云へば九州にも響いた絹織物工場である。當年は創業三十年、殖産興業に功績不少とあつて其筋から緑綬褒章を頂戴した。祝文を書くも面倒、熊次は祝電をうつた。

勤儉是れ經、

刻苦是れ緯、

織り得たり、家國の寶。

刀を梭に更へて三十年、

を喜んだ。然し女學校の事となれば知らぬ貌する甥の心を解しかねた。「ああこやらしうさすのに」と伯母は照子にこぼしたものである。原宿に来て、朝顔の籬結ふ熊次に手傳ひながら、大江の姉は女學校寄附金の事を言ひ出でたが、熊次は煮えきらぬ返事しか與へなかつた。津森叔母は姉の募集ぶりを見て、「あんた、其様な事では出来はしませんよ」と哂つたさうである。「東京の人はデイトンな」と到頭囁る姉を熊次は見た。デイトンは熊本訛りの冷澹である。熊次は個人的情誼には兎に角、きまり切つた公共の出金を兎角好まなかつた。熊本女學校は熊本がはぐくむべきもの、と自然に彼は感じたのである。

熊次は益雄の顔を見なかつた。然し逗子では祖父が孝女、千代の掛物を掛けたりして、それとなく孫をさとしたさうである。孝女千代は、天明年間肥後葦北の津奈木村に居た百姓女である。父母をなくし、祖父母に孝行であつた。祖父母が見かねて老の身に心ばかりの加勢をすると、千代は悦んで其心に任せた。「其志を養ふ」と謂ふて、孝の至純なもの例にも引かれた。馬がないのを祖父が苦にして居た。千代は夜晩くまで木綿を巻き、馬市から馬を買つて来て、祖父を驚かし喜ばしたものである。肥後家中興の祖貞七といふのが津奈木の惣庄屋時代藩命によつ

の父に隠居を勧めた。人もあらうに、子の義父からの退位の勧告は、益雄の父を腹立たすに十分であつた。彼は烈しく刎ねつけた。父子の間は日に日に險惡になつた。そこで益雄の母は、良人も敬愛する逗子の老親や良人も一目置いて居る青山の弟の力を假つて、向後の處置をつけやうと、良人を勧め、益雄を連れて上京したのである。照子が大江に十八で嫁ぐ時、寅一は九歳であつた。嫁入仕度の機を織る場所が戸外にあつた。燈火をつけて夜姉が機を織ると、「若い女を一人で機を織らす」と幼ない弟は腹を立てて、姉が梭の手をやむるまで機の傍を動かなくかつた。「黒白を分くるは、寅一さんでなければ」と、姉はいつも此弟を力にして居た。

姉は他の用も帶びて來た。それは伊倉伯母の女學校の爲に寄附金を募る事であつた。熊本英學校は潰れたが、女學校は伯母の精神一つで生命を取りとめ、此頃ではやや苦境を脱しかけて居た。其苦境の最中に、助力を求むる協志會の刷物が熊次の手にも送られたが、熊次は顔を顰めて何の返事もしなかつた。大江の姉から、伊倉伯母の消息はよく傳はつて、病氣といつては知らせ、山羊に押倒されて怪俄があつたと云つては報じて來たので、熊次夫婦は其都度或は見舞狀に些少の金を封じ、あるひは好便にネルを送り手提を贈つたりした。伯母は甥夫婦の心入れ

と姉が諄々と子供を賺すやうに宥むる聲につづいて、

「仕方がないか喃、ああ、ああ」

と濕つた義兄の欠伸が聞こえた。

「貞一さんが可哀想なやうですね。」

と駒子が熊次に囁いた。

あくる日、大江の義兄夫婦は歸國の途に上つた。

其内、大江の次男直が、此春伊倉伯母の女學校を卒業した安永のおますと結婚した知らせが來て、大版の紀念寫眞が原宿にも届いた。それには新郎の父母、新婦の父母、春竹の叔父叔母、伊倉の直義さん、安永の養子誠君、益雄夫婦、妹のおきゑ、おとよ、耳の遠い新郎の養母、新郎の乳母などが竹籤の前に三列に並んで居た。伊倉伯母と、船津のお安姉はぬけたが、熊本親類の大一座であつた。其中で、昔ながらに鼻低の風采颯らぬ新郎は、後列、端から二番目に立つて、嶋田を結つた女相撲のやうに太つた新婦は、父を背に、母を膝下に、義姉安子を左に、義妹きゑ子を右に、さながら群の中心に据ゑられて居た。

て孝女表彰の碑を建てた。下げ髪に跣足の娘が馬を牽いて來ると、杖をついた老爺が喜んで居る畫幅に、藩の賢太夫長岡監物が

賤の女が 誠をうつす うつし繪は

千代も曇らぬ 鏡なりけり

と賛をした。逗子の掛物はそれであつた。熊次はそんな事でいきり立つた若い者を和らげ得ると考へて居る父に微晒を含むを禁じ得なかつた。

ある夕、大江の義兄夫婦は原宿に來て泊つた。青山の裁きで、事は姉の望むやうに運んだ。大江の義兄は要するに隠居し、益雄が局に當るといふのであつた。無理隠居の宣告を受けた義兄は、がっかりして居た。隣室の襖越しに寢られぬ彼の嗟嘆が夜すがら聞こえた。

「そりばつてん見なはり、△△なんか、ちゃんと年々月々何がいくら彼がいくらてち書き出して、報告するごつしとるばな。」

まだ親權主權が思ひ切れぬ義兄を、

「そうぢござりますばつてん、わたくしやかう思ひます。」

第十一章

花の夕貌

佳い電文である。熊次は悦んで手づから荷造り荷送りの面倒を見た。次の電報が來た。

「デントレ、二〇〇オクレ。」

電報爲替は三十圓であつた。熊次は二度目を送る事を躊躇した。而して第一次の殘額を請求した。K君から何の返事も來なかつた。博覽會の見物ついでに、熊次は殘額七十圓を取り立てて旅費に宛てやうと思ふた。

心齋橋通りの小さな角店、立看板の蔭には雑多な書を列べて、主人のK君は居なかつた。S君は居るさうで、二階に導かれた。倉づくりの薄暗い二階に、白い清げな面をした小柄の詩人S君と熊次は初對面の挨拶をした。信州は小諸の詩人S君をヨリ若くし、和らげたやうな肌ざわりの人である。初對面ながら、手紙の往復はして居た。小天地に寫眞を求められ、髯でも剃つたらと茶かした熊次の返事に、「髯は剃り玉ふとも玉はずとも、此方の求むるものは御額のあたり」とたしなめてよこしたものである。寫眞は到頭御免を蒙つたが、S君から可愛い詩集「ゆく春」を送られ、挿畫の苦情など云ふてやつた。今何を讀んでお出ですかと熊次の間に、S君はきまり惡るげに、ハルトマンを讀んで居ます、と云ふた。そんなものを熊次は覗いても居な

大阪に博覽會が開かれた。一昨年來上方に足が近くなつた熊次は、所要をかねて一人見物に出かけた。

茶代廢止を廣告して居る堂嶋川畔の小さな宿に泊ると、あくる日は心齋橋の狭い通りに書店B堂を訪ねた。主人K君を熊次は識つて居た。一昨年の秋上京のついでに原宿に來訪した。色の白い、物柔らかな、大阪辯丸出しの、笑ふと赤い齧と味噌つ齒を見せる若人であつた。時分で天麩羅蕎麥を出した。食前に厠に立ち、蕎麥は雫も剩さず吸ふて了ふた、と女中のおたよが後で惡口ついたものである。父の時代からの佛教書肆、K君自身俳句和歌をやり、關西の文士藝術家と交遊も廣いところから、追々文藝物の出版をしたり、小天地といふ雜誌を出したりして居た。小説黒潮が出ると間もなく、熊次はK君の電報を受取つた。

「ミタ、ウリタイ、三〇〇オクレ。」

S君の先導で、博覽會見物に往つた。カナダ館の農産物の飾りつけが、S君の所謂 Symmetry の美を見せて、したたか熊次の氣に入つた。黄ろい林檎のうまさうなのが、口水を誘ふた。冷蔵庫は見物の行列に恐れをなして見なかつた。美術館もさして感興なしに過ぎた。堺に往つて、水族館のかはりに妙國寺の蘇鐵を見、開帳の寶物の中に、

「思無邪 八歳秀頼書」

と幼ない筆の跡を見て、たまらなくあはれになつた。「元寇」が大分薄らいだ熊次の頭の中に、それは豊徳の過渡を歴史小説に書いて見たい念を喚び起さず居なかつた。逍遙大人の劇もある。他に鉄を入れたものも無い事はない。然し餘地はいくらもある。熊次はさう思ふた。

熊次は大阪に三日居た。一日は東西合併大相撲を見に往つた。

「東京の方と一緒だと、ども勝手が惡ふてならん。」

と棧敷隣りの土地の看客が笑つた。小兵の大阪方鶴ヶ濱が飛びついて足がらみで太刀山を倒したり、常陸山が悠々と大木戸を押し出したりした。東京方が負ければ熊次はやはり好い氣もちがしなく、大阪方が負ければ悪い氣もちはしなかつた。若嶋と荒岩の一番には眼を刮つた。立

かつた。小諸の訪問に刺戟されて、熊次は其後ハウプトマン、ズウデルマン、ハイゼなども追々英譯によつて読み、また彼の一盃機嫌の押かけ訪問の後で一度に着いたツールゲネフ全集の幾冊を購はぬかと云ふて來たM君に聞いて「ベラミイ」や「氷嶋の漁夫」なども読み、廉本のモウパッサン短篇小説集も得るに従つて讀むだが、心酔するものもなかつた。熊次はわが趣味を疑ふた。それは文藝の上ばかりでもなかつた。洋畫の展覽會など見ても、鴨志田君等が美しいと云ふ京の舞妓姿などが熊次には一向美しくなかつた。深水の太郎君が描いたモデルの女の疲れて眠つて居る畫を、深水君も腕を上げた、と鴨志田君等が嘆賞する。熊次は其畫の何處に美があるかを疑ふた。所詮他は他、我は我趣味で行く外はない、と詮らめをつけた熊次は、滅多に讀むだものの所感を語る事もなかつた。大阪に來てS君と少しばかりそんな話をした。ハウプトマンの「織工」は面白かつた。それはゾラの「芽立ち」を思はする。京都のT君もさう云つて居た、とS君が應じた。同じ人の「淋しき人人」は、結末の主人公の水死が唐突だ、と熊次が曰ふ。他に結びやうがあらうか、とS君は穩に諍ふた。詩壇の先進S君の詩を何と見る？

落梅集の詩人は、抱負を裏切る似而非謙遜が氣障、と浪華の詩人は謂ふのであつた。

三日目の午後は、丸田君S君が熊次の宿に來て話した。久しぶりに會ふ丸田君に、熊次は何の話もなかつた。丸田君の「理趣情景」に熊次は要されて序文を書いた。然し兄をはなれて熊次の獨立を丸田君が如何に看るか、それは疑問であつた。問はず、語らず、痛い處を避けての話は、氣ののらぬものであつた。二人の話を熊次は唯聞いて居た。彼の頭は焦々して居た。滯留三日、未だに一度も顔を見せぬK君が癪に障つた。S君等が去ると、やつとK君が忸怩とした顔を見せた。三日奔走したが、到頭金の調達が出来なかつた、と詫ぶるのである。さうか、出來ぬとならば、それまでである。何故最初から顔も出さず、事を曖昧にするのか？ さう叱つて、熊次はK君を釋ゆるした。

多分は其様な事であらうと、電報爲替は取り寄せて置いた。直ぐ其夜嵐軍で熊次は大阪を立つた。大津で女連れが大勢乗り込んだ。大きな紗の籠に、綠玉の夥しい明滅は石山歸りであらねばならぬ。涼しい螢火故に、熊次の頭はすっかり洗はれたやうになつた。

堺みやげの鉢を駒子は喜んだが、博覽會の即賣店から折角夫の買つて來た一重帶は、五十位の女がしむるにふさはしいあまりに地味なものであつた。

上りに荒が蹴手繰りに往つた。若嶋の六尺に餘る大兵が、兩手を伸して、ふらふらと土俵を泳いだ。

「あつ、ああいふ事をしよる。」と隣の看客が叫んだ。きまつた、と思ふたら腰の好い若が残した。荒が猛然と突きかけた。土俵際まで押つめた。今度は、と思ふたら、若がまた残した。土俵の真中で、東西の筋肉が入り亂れて、軟らかいもつれに、満場の息を吞ませた。それがほぐれた時、荒は土俵の砂の上に横はつて居た。これまでにすまへば、勝負は問題でなかつた。

一日は御靈の文樂座を覗いた。越路が攝津大椽と改名して、素袍烏帽子で高座におさまつて居る。上下姿の大隅が「師越路太夫事云々」と改名の口上を演ぶるも、面白い見ものであつた。人形は上手に使ふ。上手に使ふ程、人形は熊次に邪魔であつた。

熊次はまた一人で博覽會場を歩いて、新しく鑄られた天王寺の老大な鐘を見、同じ型の掌にのる程な小さな鐘を紀念に買った。子供になつて Water Shoot の冷やりした面白い感覚も味はふた。評判のカアマンセラ嬢の火焰の舞は、電氣を應用して美しいものには違ひなかつたが、市長が云云の噂で、彼女を賣笑婦の一人に看る事が感興を殺いで了ふた。

「恩人つて、誰です？」

「乃木閣下であります。」

卒直な若者は、軍隊言葉でさう答へた。郷里南部を出奔して、仙臺の師團長であつた將軍に身を寄せ、臺灣にも伴し、幼年學校から士官學校まで將軍の世話になつて居る。然るに、幼年學校の入學には優等第三席で、出る時は

「びりつこけでした。」

恩人の顔に泥を塗つてしまつた。何とかして其恥を雪ぎ、恩人の恩義に酬ひたい。材料を提供しますから、一篇の著作をして下さい。

かう云ふのである。

乃木さんか、乃木さんなら、自分も好きだ。日清戦争の出征先で、師團長がくれた分捕物の高價なかはごろも襦袢を傷病兵に被せて了ふた男、悴の先途を見届けん爲臺灣に参りますと皇后陛下に奉答して到頭臺灣の土になつた母、斯母子は好きである。外ならぬ其人を對象としてなら、書いて見てもよい。

原宿の夏が來た。唯遊ばして置いてもといふので、むら子には琴と茶の湯の稽古を始めさせた。茶の湯は師匠の許に通ひ、琴は樋口といふお婆さんが教へに來た。「さくら、さくら」からはじめて、むら子は中々覺えなかつた。お婆さんが笑止がつて、「あなたはまあ」と打つ眞似をしたものである。

夏はうるさい逗子に行く氣はない。ちつと原宿に一夏を過すも懶い。熊次は北海道行を思ひ立つた。兄は先年往つた。鴨志田君などは小十年も以前に往つて、「空知川の岸邊」は文藝俱樂部のガラクタの中に寶玉の光を放つて居る。K學士の「蝦夷秋花の譜」も熊次の興を嚇つた。尙其外にも北への誘因はあつた。此春の事である、ある日原宿の玄關に音づれた年若い軍曹があつた。軍人の來訪は珍しい。客間に請じて來意を問ふた。陸中の者名は篠原良平、當時陸軍士官學校に居る。所屬隊は北海道旭川の師團。所要は？ 恩人の爲に著作をしていただきたい。

堂に、事務長を主に日本食をとるかはりに、熊次は大抵甲板の簾の寢椅子に仰臥して、ボオイが持て来るトオストや珈琲で過した。船長、機關長、Hさん等西洋人組は別に食卓について、食事中は甲板から水夫の一人に紐つきの扇風機で煽がせて居るのが羨ましく見られた。Hさんと外人食卓につく美少年は、食後のビスケットなど持ち歸つては、高商生に傾つた。獨逸人は男色が盛んだから、Hさんも劍呑など彼は熊次に嘯くのであつた。美少年は名だたる英學者の男爵の甥で、乃叔の頭字を捺したスウツケエスを携へて居る。歐米を廻つて來た其ケエスにべつたり貼り散らしたさまざまの宿札が、熊次の心を遠く海外に誘ふた。

午を過ぎて横濱を出で、野嶋崎にかかるると盛に船が揺れ出した。甲板の簾寢臺に仰になつたまま揺られて居る熊次の側で、出港前したたか船の御馳走を食つた少年が散々吐いた。起てば此方も怪しいのでちつとしたまま居る熊次を、獨逸人のHさんが睨むものである。熊次とHさんの間に暗闘が起つた。Hさんは英語を話す。然し熊次は三日の船路に到頭一語も交へなかつた。九十九里の沖にかかると、鹽のやうな月が海から上つた。船房に寢に行くも惜しい月夜であつた。

熊次は快く篠原良平の頼を引受けた。而してゴルドン將軍傳を一冊取り出して來て彼にやつた。乃木さんには何處かゴルドンの面影がある。現にゴルドン將軍傳の序に、「將軍をして假りに我國に生れしめば、臺灣總督他に其人を求む可けんや。」と書いて居る。然るに乃木さんは臺灣總督も罷められ、四國の師團長すら辭して、今那須野に歟をとつて居るさうである。篠原良平が躍起となるも無理はないのだ。

年若い士官生徒は悦んで去つたが、其後ちよいちよい尋ねて來、時々斷片的に書いたものを送つてよこした。中には「惠山の岬」と題した北海道歸隊の感想もあつた。彼は未だ東京に居る。然し此秋には卒業して旭川に歸る筈である。

旭川——旭川まで往つて見やう。

八月初のある日、熊次は横濱から函館行の漁船朝顔丸に乗つた。一等船客は、北海道大沼に避暑に行くといふ學校教師で軍人かのやうにきりつとした若い獨逸人のH君と其連れの蒼白い美少年、休暇で歸省する外國航路の事務長夫妻、暑中休暇に行商に行くといふ吃り氣味の高等商業の學生、函館まで一人で行く十三四の社員の子、それに熊次だけであつた。蠅の多い一等食

北海道の第一日は、五稜廓を見たり、水産館を覗いたりに過した。熊次は此行にまた日蔭町から七圓の夏服を買つて、それで出て來た。獨逸人Hさんが麻の服で、白シャツに茜色のネクタイ、ちよつきもなくて黒い胴じめばかりの潇洒とした装が羨ましく、函館でせめて黒革の胴じめを買つたものである。其夜の船で室蘭に行き、室蘭から瀛車で旭川に向ふた。函館ではまだそんなでもなかつた。室蘭を出て、白老、苦小牧などアイヌ臭い名の驛を二つ三つ過ぎる程に、莽蒼とした北海道氣分が熊次を捉へた。山遠く、水ゆるく、鵬目すべてのんびりゆつたりして居る。北海道人の所謂内地本土のせせこましい氣分は少しも無い。地圖の上の北海道は嶋であるが、感ずる氣分は大陸のそれであつた。ここでは自然が平氣に自然で居る。びつくりするやうに丈高い女郎花、ナナカマド、虎杖いたどり、それ等の中に毒々しい赤い實の簇がる毒うつぎの眼を牽くヤチも、焼畑に黒い木の株の點々した開墾地も、最早本土のものではなかつた。岩見澤で本線に出た。美唄びばい、妹脊牛もせうし、名は特有のものながら、沿線の石狩平野は大分人馴れて、人家の籬に朱の色の花豆も美しく、八月中旬まだ小麥の收納をして居るも、珍しく眺められた。瀛車の上から見る神威古潭は、聞いた程でもなかつた。やがて指して來た旭川に着いた。

明くる朝は萩の濱に錨を下ろして居た。去る年駒子と來た松嶋も遠くはなかつた。

長休みした萩の濱を後に、金華山を出ると、東北の風が烈しく吹き出した。八年前の海嘯を思へば、不氣味な海である。北へ行く程烈しく、尻矢の岬をかはす頃は、甲板の日遮も吹き飛ばす勢である。風の響、波の音、轟々としてまた洪々とした中を、熊次は甲板の寢臺を動かかなかつた。「西洋人のやり方が皆然です。」とM社の伴君に似た外國航路の事務長がほめたものである。Hさんに代表さるるカイゼル髭のピンと上へ刎ねたのと著しい對照で、

「文士の髭は如何して皆尾が下つてゐるんでせう？ 紅葉山人のがやはりさうですね。」

と熊次の口髭を評した高商生は、甲板に頑張る熊次のさまに、

「文士平然たるものですね。」

と眼をまろくした。

逆風に船脚遅く、北海道を前に見ながら、見す見す日は暮れて、横濱を出て三日目に第一步を北海道の土に熊次が印した時、函館の港は山の上から水の上までイルミネーションの如く光に飾られて居た。

つた人だね。」と夫人にほめたり、「ビイルを持つて来てくれ」と女中に命じたりすれば、夫人は女客と相互の知邊らしい今春華嚴に身を投げて世間を騒がした青年の噂をして、「本當に思ひがけない事でしたよ」と話して居た。此方隣の一人室には、内務省から避暑兼帶の視察に來たSといふ若い參事官を、道廳の頭の禿げた役人が子供扱ひにして、「何しろ六千百里に人口が約百萬で、巡查一人で七方里受持つのですからな、は、は、は。」と笑つて居た。

北海道も日間は中々暑かつた。暑がりの熊次は、アイスクリーム、ラムネ、青林檎、グウスベリイ、季節おくれの櫻桃と、飲み食ひ散々に胃腸を虐待して了ふた。効果は靦面、札幌から小樽へ一時間の瀛車の中は、頭痛腹痛、今にも死ぬかと思ふ苦しさに齒を食ひしぱり眼をつぶつて、輕川の緑をよぐ牧場も、錢函の岩礁面白く白波散る海岸も、瀛車を遅しと過して了ふた。やつと小樽に着いた。車に乗つて、宿に着いて、二階へ上ると、帳つけに來た番頭の眼の前で、いきなり大口をあいて札幌以來の一切をさらげ出して了ふた。呆氣にとられた番頭を、「醫者、醫者」と追ひ立てた。醫者が來た。それは當然至極の腸胃加答兒であつた。熊次は此まま小樽の宿の二階で死ぬのかと思ふた。病をつとめて、駒子へ手紙を書きつつ、これが絶筆になるの

旭川は別に一天地の大きい上川原野に建てられた淋しい新開町である。あくる日、熊次は寒い雨の降りしきる中を、わる路に二人挽の車で近邊のアイヌ部落を見に往つた。酋長のおやぢ、斑白髯の長く垂るるモロフテの小舎に入つて、寶物を見たり、いつかは熊祭りの犠牲になる小熊の飼はれて居るのを見た。飯が小熊は好きさうである。ララコンナと名のるアイヌが刻んだイタヤのマキリの鞘を大小二振買った。歸途、篠原良平が秋には歸隊する第七師團の建物を門外から覗けば、薄ら寒い八月の雨にびしょ濡れたただつ廣い廣場に、木造の兵舎が愛想氣もなく並んで居た。

翌日旭川から引返へして札幌に往つた。停車場前のアカシヤ並木は綠葱々として、思ひ切つた街幅の濶さ、北海道の首都は明るい氣もちの好いところであつた。熊次は札幌に三日居た。多くの名士を出した農學校の榆の木蔭やクロヴアの芝生をぶらついた、郊外の林檎園に早生の青林檎をみやげに買ふたり栽培法を問ふたり、快い日を送つた。札幌一といふ山形屋の二階に、わが室の前にも黒札に白くわが名前の掲げられて居るも異な感じであつた。隣の廣間には早稻田大學長の日博士夫妻が泊つて居て、恐らく基本金募集の演説から歸つた日さんは、何某は分

て來た日さんと美少年は居るであらう、と熊次は眺めやつた。

其夕熊次は北海道を後に、青森に渡つた。夜半に大聲をあげてわめく西洋人が隣室に居て、熊次の眠を妨げた。耳を澄しても、何を言ふのか分からなかつた。獨逸人らしかつた。聞けば果して獨逸人、急遽の破産で氣が變になつて居るのであつた。獨逸縁の深い旅ではある。熊次は起きぬけに海邊をあるいて、紫の花芳しい玫瑰の數株を採收した。「ナシ、ナシ」と町の朝物賣の聲に、梨を求めて籠の中を見れば、茄子であるのも可笑しかつた。朝青森を出て、仙臺で暮れ、大宮で夜明け、二週間ぶりに原宿に歸れば、秋蟬鳴きしきつて、東京はまだ夏であつた。

か、と思ふた。翌日は唯少し弱つた肥後熊次に過ぎなかつた。熊次はやをら身を起して、小樽の市中をぶらつき、熊が好きといふコクワの饅頭、其他いろいろみやげ物など買った。

熊次は佐倉丸で小樽を後にした。「忍路高嶋」の追分に名高い神威岬の岬角は海から突立つて、後につつぐ熊が居さうな山は夕雲を帯びて居る。あの白波の打寄する岬角に、海を越えて西比利亞の天を望む瞻望の人を座わらせて、一篇の小説を書きたい氣にもなつた。喫煙室に居た髯長の外人は、日本にも斯様な白い膚の人の部落があるさうなが、何處か、とカフスを捲つて白い腕を見するのであつた。日本にも随分色の白い男女は居る。然し特に部落をなして居る處を知らなかつた。加答兒後の疲れた體を快く船房の搖籃に托して、熟睡の眼がさめた時、船はずでに函館の港に居た。

上陸した熊次は直ぐ大沼を志した。其處まで今氣車が通ふ。函館から上ること一時間にして、大沼に來た。山の上の思つたより大きな沼が大小二つもある。當面に駒が岳の尖つた頭が見下ろして居る。白樺の生えた大小の嶋々が浮いて居る。藻の花が白く黄ろく咲いて居る。鰯でも釣つて夏を過すに好い處である。西洋人當ての無造作な建物が兩三、何の家に横濱から同船し

わくらはに 訪はれてひらく 柴の戸に

待ち得て笑ふ 夕顔の花

母の歌。

老の身の 秋の夕を 慰めて

ゑみをもらせる 花の夕顔

熊次夫婦があらめ屋住居の頃に比ぶれば、父母の住居も容子が變つた。先に高低二つの屋敷の中央を通つた里道が東裏に變更されて、屋敷が一つになつたので、先の座敷から新に四疊半が築き出され、それが父の書齋になり、先の父の書齋が母の室になつた。母が初めて自分の室をもつたのである。兄の書齋であつた中二階が、父の新書齋と相對して鍵の手に移され、疊敷きになり、泊り客の用に宛てられた。それから縁側つづきに小さな階段を上つて、高台に新築の一

三

九月に入ると、熊次は駒子と北海道みやげを携へて逗子に往つた。避暑の賑合過ぎて淋しいところに珍しい夫妻の來訪は、父母を喜ばした。熊次の北海道行も逗子には初耳であつた。木心の落のステツキ、アイヌの彫刻した下駄、「頭にでもものせずば」と父が珍しがつたものである。去年の秋は、花夕顔の鉢を兄の家に居る父へ齎らし得ぬ不快に、其鉢を投げて微塵にした。今年は苗を送つて置いたのが無事にそだつて、熊次夫妻が來訪の其夕に、申合はせたかのやうに初花を開いた。父母の喜悅は一通りでなかつた。父が詩歌を作つた。

夫妻相伴歎柴關　倒履笑迎松竹間

碩種草花如有意　夕陽影裏徐開顏

濃厚なものを好むだ。熊次夫婦は母を山王下のもみぢに伴ひ、支那料理を賞味した。用意のタカチアスタアゼを懷中から取り出して、母は如何な馳走の前にもびくともする事ではなかった。

支那料理や鞆のよろこびをいふてよこした母の逗子たよりは、更に一つの吉報を添へてあつた。母の東京留守に熊本から船津のお安姉が末女を連れて上つて來て居たのであつた。船津の姉を東京に呼ぶ事は、熊次も曾て嘉一郎の北海道留守に若いおたよさんを一人置く懸念から嘉一郎の母を呼ぶ事を主張し、兄に説き、駒子を遣つて義姉の安子と共々兄に迫つたこともあつたが、其時は出来なかつた。それは熊次の獨立以前の事である。其内船津の家でも、多年頑張つた丁髷の老人もやつと「かたづき」、次男の修三も本家の婿になつたので、後の世話は彼に頼み、あたり淋しい逗子の老親を氣にする安永大江の妹達の心を帶して、偕は上つて來たのであつた。母の留守に、父が一人書齋で書見をして居ると、突然障子が開いて、五十許の女が突と入るなりわアと父の傍に泣き伏した。狂女かと父は思ふた。それは二歳で生みの父母を亡くした弟の忘れ形見の安子が、夫を先立て、舅を送り、子供を育て上げ、三十七年ぶりに今伯父なり養父な

棟は、西洋間が十疊、日本室十疊、一間幅の廻り縁、W・Cは廣く下駄をはいて下りるやうになつて居る。日本室の方には「惟仁者能好人能惡人」と大書した春畝山人の額など挂つて居るも、以前無かつたものである。高台の新築は兄の書齋で、平生も父は遠慮して居る。父母の廻子住居も最早八年、人は居つき、木はそだち、父母共に老健で、女中は父が氣に入りのつい近くの植木屋の實直な娘。これで肉親の附添が一人あれば、他に申分はなかつた。

一本立ちになつてから、熊次夫婦はわけて父母の身邊に心をつけた。父の書齋に敷く段通、窓にかける小簾、書類を入るる桐の小簞笥、何くれと心を配つた。父の身のまはりを氣にする駒子が見舞ふ日は、父は大急ぎで垢つかぬシャツに着更へて澄して居たものである。丸髻に結ふて、着物もあらめ屋の昔よりは都めいた姿を、「まあ、お若くお美しくおなり遊ばしたこと！」と饅頭屋のおかみがそやした。老人會毎に母が出京に携ふるズツクの鞆がふるびて居るので、駒子は母と銀座に往つて、唐草模様のシルケツト製の優美で便利な手提鞆を買つた。母が悦んで出京毎にそれを携へ、青山の甥の熊彦などが、「お婆さんのハイカラ鞆」と呼んだものである。後では父が取り上げて自分のものにしてふた。父は魚を嗜み、食物も淡泊を愛したが、母は

第十二章

來訪帳から

りの父に侍すべく歸つて來たのであつた。體が丈夫で氣質が素直な此姉が父母の傍近く居てくれる事は、熊次夫婦にもうれしい事であつた。

甥の嘉一郎は北海道で健康を害し、歸つて東京病院に尿道の治療を受けて居た。熊次が彼を見舞ふたは、北海道から歸つて直ぐであつた。嘉一郎につがへた言葉の上から、熊次は彼が留守に多少の氣はつけたが、格別の世話もしなかつた。青山に遠くなると、嘉一郎の留守宅にも遠くなつた。然しおたよさんは青山に不足をいふて、原宿を免したさうである。歸つて來れば、其入院費も然し嘉一郎は青山に仰ぐ外なかつた。

「寅一叔父さんば、輕節の如削つてばつかり。」

と嘉一郎も流石に苦笑した。然し退院しても、ぶらぶらして一向仕事に就かなかつた。布哇にでも出かけたなら、と熊次は謂ふた。

「あんた布哇さん往かにやならんばな。」

と情無ささうに彼の母は嘉一郎に云ふた。嘉一郎は苦笑して、相手にもならなかつた。

拂つた。其手は昔の放浪時代に實驗濟の主である事を客は知らなかつたのである。

弟子になりたいといふ客は珍しかつた。仙臺の高等學校に醫學をやりかけたMといふ若者、カ
ンニングばかりしてすばらな生活を送り、途中で學校もやめて了ふた。不圖思出の記を読み、
翻然悔悟、文學を以て身を立つる決意をした。Mを悔悟をさせた小説は那樣なものか、と仙臺
の宣教師Dさんが思出の記を読んださうである。熊次はDさんを識つて居た。宣教師仲間では
珍しく漢字が讀め日本文もちよつと書ける、いや味のない米人である。熊次が十九の夏、碓氷
先生の甥正義さんに伴なはれ比叡山に登つた時、訪問したのがDさんの天幕であつた。渴いて水
を欲しがる熊次の爲に、Dさんは手づからレモナードの一杯を作つてくれた。先方は忘れて居
やうが、熊次は覺えて居る。思出の記の中の、比叡山に天幕を張る宣教師ブラオンさんは、取
りも直さずDさんの化身であつた。其様な思ひがけない後援さへ帶びて、伏目勝に何も打明け
語るMの姿を熊次はつくづく眺めた。黒い長やかな髪、蒼白い潤い顔、象の眼をして唇に含羞^{はにかみ}を
見する、支那人のやうな感じの此青年を、熊次は好きであつた。彼は思案した。此可愛氣な若者
を如何したものであらう？ 折角の其志を無にしたくはない。然し彼れ肥後熊次は、一切の手

黒潮以來、出嫌ひな熊次の玄關にも、訪ねて来る人は可なりあつた。初對面の人にも、成る可く會ふ事にした。黒潮の景氣で、金乞ひも可なり頻繁にやつて來た。「奥さんに」と名ざしの客に、駒子が羽織を更めて玄關に出ると、ただの金もらひである事もあつた。もとはM社の事務員、氷川町の留守を二夏ばかり共にした事もある山村は、ひよろ高い體を客間の椅子にもたせ、齒のかけた口もとをもぐもぐさせながら、社の會計主任の田部が近頃素晴らしい桐胴の火鉢を持つて居る話をして臭いと匂はせたり、卷蓆をくゆらせながら黒潮の印刷製本費を差引いた純利の額を當の主の眼の前で暗算して、金借りたげな素振を見せたりした。「君壯健精勵、邦家の爲に大慶」と達筆に書いた手札を出し、「御兄さんにはさんさんお世話になりました。」今度はあなたの番、と言はぬばかりに取次に言はせて、斷られて憤然と歸る者もあつた。財布を落したといふ鹿兒嶋辯の男には、それなら電報をおかけなさい、と二十錢の郵券をやつて追つ

つた。熊次は彼の住宅が靈南坂町は恰も虞初子の隣家にあつて、其父がものを書くなら隣の虞初子に見てもらへと其子に曰ふた事を、ずつと後になるまで知らなかつた。間もなく其父の長逝を新聞の廣告で知つた熊次は、一書を裁して吊意を表した。熊次は此の三田に學籍を置いて何の屈托も無げな青年が、實はこみ入つた悲劇の中の人で、熊次の住居から唯一足のあの善光寺の墓地が彼の小説的閱歷に不思議な關係を有つ事を後で知つた。

早稻田出といふ、小作りな、口少なで、双の眼にぢつと人を見据ゆるMといふ青年に、熊次は取り止めもない話をした。後で彼は書いた。「蘆花は清いと人は言ふ。何、彼は兄の小さいのに過ぎない。」さうか喃、と熊次は思ふた。

同志社時代、わが食を廢して貧しい今の救世軍の勇將をはぐくむだといふYさんの來訪は異彩であつた。眼のきらきらした人である。祈禱をして書くか、とYさんは熊次に問ふた。其實熊次は祈禱をして居なかつた。況んや書くに當つて特に祈る事はなかつた。然し祈らぬといふも、業腹であつた。到頭彼は斯く曰ふた、私の書くすべては、不斷の祈の結果に外ならぬ。それはある意味に於て眞實であり、また譎でもあつた。Yさんはやがて志士の一面を熊次に見せた。

足縛ひを厭ふて最初から孤立の彼である。縛られたくない。また省みて自分を見れば、苟も人に師たる柄でない。熊次は到頭師たる事を辭した。Mが紅葉門下四天王の中でも絢爛濃艶なものを書くFの門下に參して盛に代作などやつて居る事を聞いたは、大分後の事である。

思出の記の手引きで原宿に來た者の一人は、三田の學生であつた。

「不如歸の著者にあらず、思出の記の著者として」

とわざわざ名刺にことわり書きしての面會の求めに、熊次は興味をもつた。游——といふ日本ばなれのした其姓も、好奇心を喚つた。それは山陽詩鈔で覚えある姓である。客間の卓を中に相對した其青年は、眼の大きく眉の濃く、息せきものを言ふ青年であつた。聞けば、果して長崎の通辭龍梅泉の裔である。丁度縁側で曝書をして居た。其中から熊次は山陽詩鈔を取つて、古賀穀堂の序文に出て居る其祖の記事を示した。青年は思出の記を再三熟讀し、比叡山にも其爲に登り、「思出の記踏査の記」といふものを書いて居た。其熱心に動かされ、熊次は其踏査の記を紀念にもらつた。次に來た時、熊次は玄關先で五分間の立話を交へた。彼は「青山白雲」を讀んで、女子學院長が熊次の叔母である事を識つたさうな。彼の姉は、女子學院の卒業生であ

である。永らく米國に居て後英國に渡り、其處で詩集を出版して一氣に名高くなつた事は、M朝報に出たNさんの英文日記で讀んで居た。先頃歸朝し、日本の現代文學につき外國雜誌に寄書する爲、材料取りの訪問であつた。文筆の收入を問はれ、熊次は包まず一切の事實を述べた。Nさんは驚いた顔をした。

「米國なんぞ、何十版と出る著者は、堂堂たる生活をして居ますがなア。」

貧弱な熊次が住居のさまをNさんは見廻はすのであつた。著作の態度について、國家の進運に鞭つ爲、といふ熊次の言明は、米國育ちの詩人を失笑させた。熊次は不快になつた。然しそれは彼の收入と同じく實際唯それ切りだから詮方はなかつた。

「五分間ばかりお邪魔をします。」

と斷つて、Nさんは縁に立ち出で、狭い庭をちいと見た後、辭し去つた。訪問の結果、Nさんが何と書いたか、熊次は知らなかつた。

逗子の隱宅で書家樵石先生に紹介された駒子は、東京に越してから通信教授で先生の手本を習ふた。熊本時代から書家樵石の名は高く、上京以來ますます圓熟して草聖の目があつた。父は

露西亞をYさんは睨んで居る。露西亞の對日態度は、最近ますます露骨になつて來た。Yさんはあたり見廻はし、聲を落して囁やくのであつた。露西亞の手は思ふにまして八方にのびて居る。日本で天災視するやうな事も、實は露西亞の仕打である事が多い。例へば先頃福井に大火があつて、輸出羽二重が大分焼けた。かりそめの火事と人は謂ふ。實は露探の仕業に違ひないのだ。Yさんはさう言ふて、ぢいと熊次の顔を見た。露西亞に對する關心は、日本人の一人として熊次ももつて居る。Yさんの臆測を馬鹿らしいとは、熊次も決して思はなかつた。然し彼は此熱烈な男の相手を何時までもさせられるのがいやになつた。もう歸るかとも見ても、Yさんの腰は中々椅子をはなれぬ。時分になり、時分を過ぎた。鰻井も天麩羅蕎麥も店頭客間に現はれなかつた。Yさんは空腹のまま立つを餘儀なくされた。斯くして熊次は永くYさんに一飯の債を造つて了ふた。

熊次がまだM社に居た頃、「ヨセミテ谿谷の記」を新聞に譯載すると、日本橋のある商家の主人から其弟のヨセミテで作つた英詩を寄せて來た。それから幾年、英語で歌ふ日本詩人として米英に名を揚げたNさんの來訪は、思ひがけぬ事の一つであつた。髪を長く分けて、物靜かな人

の書き損じといふて駒子がもらつた紀貫之大堰川行幸の記は、表装して時折床の間に掛けて居る。今年になつて、駒子はまた韓退之伯夷頌の一幅をもらつて來た。さながら獨立の祝かのやうに熊次はそれを喜んだ。秋霜烈日の辭、行雲流水の筆、と篤く先生に謝したものである。先生は學者でない。時々誤字を書く。淺草公園の瓜生岩子の銅像の銘は下田歌子の撰で、樵石先生の筆である。熊次はそれに誤字を見出した。伯夷頌にも、「武王周公者聖人也」と「人」の一字が餘計に書いてある。すべてを記憶から書く先生は、時々斯様な筆の滑りもあつた。それが却て名人の愛嬌でもあつた。

ある日、熊次夫妻は思ひがけなく先生を原宿の玄關に迎へた。先生は今年還暦を迎へ、門人一同の祝に對し、「幾千代もいよ榮へん水莖の跡を學びの友にひかれて」といふ自筆の短冊を一葉宛配り、賀庭の挨拶をした。其挨拶の文章を熊次に見てもらひたいと謂ふのであつた。恰も伯夷頌の幅を挂けた床の間近く樂椅子に請じて、火鉢をすすめると、ついだ土釜の火の粉が先生の仙臺平を目がけて盛に飛んだ。「ウン、ウン、フム、フム」と先生は飛んで來る火の粉の一つ毎に袴の膝をたたきたたき椅子をずらして逃げ身になる。はらはらしつつ、夫妻はやはり興

上京毎によく往訪しては、感に堪へて運筆の妙を稱へた。門人の手に向ふさまにとつて書かすに、些も無理がない、と驚いて居た。駒子の手は追々上つた。先生も駒子の假名書きをほめた。駒子の外出を嫌ふ熊次も、先生の宅へは年に一度の歳暮にはやつた。未だ電車も無い時代である。女中をつれて原宿から先生宅の麴町まで歩き、それから日本橋へ廻つて歳暮の買物などして歸れば、一日がかりでも樂ではなかつた。六時に歸れと云はれて、五分間おくれ、烈火の如く怒つた熊次に、食卓をひつくりかへされた事もある。名だたる書家の先生の宅は、麴町の谷間に小さく薄暗く、而して其客間に座はるお弟子も、一張羅の淺黄縮緬を黒に染め直しの羽織の肩が身動きする拍子にベリリ裂けてきまりのわるい思ひをしたものである。先生の嗣子は小學校で熊次の同級であつた。西郷戦争以來一度も會はぬが、早稻田文學によく春曙の名が出て居る。逍遙門下錚々たる劇の研究家、最近新派俳優のKが顧問として同道洋行した事も熊次は知つて居た。先生自身も口には其子を「うちのゴクダウが」と罵りつつ時には父子で仕舞など舞ふ事も知つて居た。先生は夫人を亡くし、年増の長女が主婦どころをやつて居る。時には揮毫の手傳ひをさせられ、上野の圖書館に書道の調べものにやられたりもするのであつた。先生

て、小聲で窘め窘め引き立てて歸る容子を杉籬越しに垣間見て、熊次は悦に入つたものである。西隣の山本さんは變つて居る。門は隅つこに義理ばかりつけて、平生はひっそり閑として居る。屋敷中樹木だらけで、まだ其上に植木屋に陀羅葉など蒔いた木を持ち込ませて居る。「親方！」と出戻りの娘が植木屋を追つかけて酒代をやつたりすれば、蒼白い其母は根つきのわるい木の容態を「どうも危篤で」と笑ふ。平家づくりの其家は、知人任せに無造作本位に建てたもので、座敷に床の間もなく、時代のついた長持などが座敷にまでもはみ出して居る。木かげの深い、薄暗い其處で、主翁は法帖を披き、唐紙を展べて、日半日は書道に凝つて居る。變り者の爺さんと熊次は追々心やすくなつた。まだ新聞に居た頃、何を書いて居るかと問はれて、「小説家たるを榮とする」筈の熊次が一寸返事に詰つた。「小説をお書きですか」と先方から救つてくれた。山本さんは永らく仙臺で法官生活をして、書道の方では「弟子が」と呼ぶ人も多くもつて居た。ある若者を勵まし、人の益になる仕事をせよと勧めた。其男が上京して書肆を始めた。N博士の英文 *Bushido* 其他一見識ある出版物をして、相應名を知られた——書房がそれである。時々來訪する其書房主人から、黒潮の賣行の目ざましかつた事なども隣の翁は聞いて居た。

に入らずに居れなかつた。そんな處にも名人氣質が出るやうに思はれた。先生は隣家の山本翁を知つて居るといふので、熊次は先生を伴ふて「午前謝客」と札を挂けた西隣の小門を潜つた。

熊次夫婦が家の角の櫻に山櫻でなく染井吉野でなく大嶋櫻に似た桐ヶ谷の白く大きく芳しい花が咲いて、黒い實が甘くなる頃は界限の子供といふ子供を樹の上樹の下に集へて雀の如く喧しい騒ぎを鬧する事もここに三年に及んで、兩隣の生活もほぼ腹に入つた。醫師の桑原さんは海軍軍醫上りで、看板は大きいが、玄關はいつもひっそりして居る。履物の三足以上あつたためしは滅多にない。主人の妹が縁づいて居るといふKさんは、穩田の向ふ岡に原宿から見ゆる宏壯な邸宅を構へて、現役の海軍將官級でも三番目を下らぬ司令長官中將の一人である。美しく着飾つた嬢達が時には伯父さんの宅に姿を見せる。義妹の出世ぶりに、桑原夫人は躍起となつて、いつも焦焦して居る。家には瀧雄といふ高等小學生と、民子といふ尋小の妹がある。勝手もとが杉籬一重で丁度熊次の家の座敷の眞前に當るので、何角があけすけに此方の耳に入る。主婦は甲高な鯛のやうに美しい聲の人である。W・Cをよこした、「また民子だよ」とソブラノで吐る。患者が來て居るに、近所へ遊びに往つて中々歸らぬ桑原さんを、自身迎へに往つ

通じて父を請じたが、父は笑つて終に往かなかつた。

黒潮以前の事である。A學院出でM社に入つたばかりのKと云ふ青年が、ある夜車で來て、ある雑誌に翻譯をのせるからと云ふてトルストイの英譯小品集を借りて往つた。卷中「ルチエルン」の一篇は、すでに鷗外漁史の譯がある事を懇々言ふて置いたに、彼は手紙で「ルチエルン」の事を聞いてよこした。耳をあけて居ぬ不注意を瞞つて、熊次は返事をしなかつた。Kは二度と來ず、書も歸つて來なかつた。大分後になつて、彼が肺病になり、郷里で死んだ事を聞いた。熊次はまたツウルゲネフの英譯小説二冊をS學士に貸した。帝大出の文學士、傑僧默雷を父にもつて、雷夢と名のり、佛家の出ながら雑誌「新人」などにも書いて居た。「一葉女史について」の講演から知り合ひになつたM夫人の唯一の男の子の早世を吊ふて、「天津國に水仙一もと咲き出でし其日と思へどかなしかり」といふS君の歌から、熊次は彼が好きであつた。びつくりする程大きな耳の持主であつた。

「あなたの耳は、随分大きいですね。」

とある時熊次は云ふた。

熊次は花夕貌の鉢を贈つたり、駒子と呼ばれて胡桃汁粉の馳走になつたりした。夫妻の眼の前に、翁は一幅の畫を掛けて見せた。極彩色の孔雀の一對に、すみれたんぼをあしらつた美しい畫である。「牝の頸を御覽下さい。」と翁が言ふ。「草花も寫生でよく出来て居ますこと」と駒子がほめる。畫家の名を問ふと、翁は「あつ」と掛物の前に一禮して、

「阿父です。」

と明かした。畫家は小田原の秋暉先生であつた。其頃珍らしい孔雀の一對が淺草に來たのを、毎日通つて存分に觀、然る後描いたのである。同時にやはり孔雀を見に來る若者があつた。それは同じく孔雀を志す彫刻家と分つて、互に意氣投合し、「一緒に吉原にしけ込んだりしたものです。」と翁は笑つた。亡父は畫に遊び、子は書に耽つて、靜に晩年を送つて居る。

山本翁は珍客を喜んで、酒を出し、歡待した。樵石先生は盛にカンデイの話をした。カンデイは漢隸の肥後訛りである。「ああたの行書ば一枚欲しいもんで」と云ふ先生の言葉に、忸怩とした翁の容子を見れば、書道の格は自づから分つた。斯隨分と高く自ら標致して居る翁も、駒子の師にはやはり一目置いて居た。其後翁は王羲之の拓本の刻の頗好いのを獲たからと熊次を

の贈物を、然し熊次は心から嬉しくは受け得なかつた。コロオは彼に物足らなくなつて居た。單純な自然の愉悅に熊次はそろそろ壓いて、彼はもつと人間味の饒いものを求めた。コロオよりも彼はミレエを愛するやうになつて居た。生涯獨身で恬淡寡慾、樹上の鳥のやうな氣分で畫筆を執つた仙人肌の「コロオの阿父」おとつさんより、妻もち子もち貧乏して、大地と其子等の悲喜汗淚を存分に體驗表現した、どつしりした二足獸の人間ミレエを、熊次はヨリなつかしいものと思ふたのであつた。

「ええ、道を歩いて居ると、自分ながら耳の影に驚く事があります。」

と雷夢さんは少し顔を赧めながら笑つた。いや味のない若者である。其中雷夢さんは亡くなり、熊次のツウルゲネフ二冊も雷夢さんと共に失せたが、少しも惜しいとは思はなかつた。

熊次夫婦が原宿へ越して來た後で新築された瀟洒とした借家の一つに、淺井君が越して來た。永らくK新聞に居た淺井君は、兄の紹介で大藏大臣秘書官を踏み出しに財政方面に入つて居た。早朝の散歩に門の名札を眺めて立つ熊次を、座敷の縁で顔を洗ふて居た淺井君が眼早く認めて、請じたものである。木の香、新疊、朝日の射し込む心地好い座敷で、熊次は淺井君が床の間から取り下ろした百名畫集の大冊に眼を刮るのであつた。泰西名畫の萃をあつめた版畫の中で、淺井君は殊にデュレルの「十字架より降下」と、コンステエブルの「牧草車」に熊次の注意を牽いた。淺井君は其内原宿から引越し去つたが、件の名畫集が羨ましくてたまらぬ熊次は、到頭自分も一本を買つた。それが病みつきで、彼は丸善に來る程の版畫集を、高價に拘はらず追々と蒐めて楽しむものである。熊次の其方の眼は次第に肥えて往つた。

歐米畫行脚の旅から歸つた御池君が、コロオの版畫を額仕立てにしてみやげに齎らした。折角

駒子の同窓の間には、「雁のたより」が續けられて居た。駒子の後では、熊次も讀むだ。大阪の同窓が「己が罪」の梗概を随分細かに書いて居るのを見て、「不如歸」が閑却さるるを熊次が不平に思ふたは、まだ逗子住居の中であつた。基督教近く住む駒子がある時信仰の要を書くとき、同窓の一人が茶かして「ああめん」と書いた。義務年限は蹂躪し、逗子の別荘で遊んでくらすとのみ思ひ込んだ彼女は、駒子にそんな皮肉を浴びせずに居れなかつた。不思議な縁は、彼女の妹をK新聞の編輯Mさんの妻にした。

「水波まんにやんなら、ぬーさーんーな——ア。」

とMさんが嘆息した噂を熊次は耳にした。同年の弟同志、寅一の弟が短氣な程久野さんの弟はゆつたりした巨頭大耳鳳眼の持主、共に文を愛して、殊に熊次の文をほめるMさんを熊次は好きであつた。漢文に邃く、麥丘と號して、俳句は堂に入つて居る。氷川町の夏を共に留守した昔もある。丑年にちなんだ應舉の畫はがき、牧童牛背に笛を吹き柳條垂るる畫面に「笛聲の和する如く、柳條の長きが如く」と書き、「原宿の舊郎」と署して祝ふたものである。其Mさんが駒子の同窓の義弟になつた。「ああめん」と茶かした彼女は、やがて新聞紙上黒潮を讀み、一道子入道

それは熊次の上方留守であつた。母は次男の家で老人會を開いた。尾崎牧師の話の後で、懇親會に移ると、駒子は老婦人達の何れも元氣なのに驚いた。あるお婆さんは手ぶりも妙に踊りを踊つた。而して「あなたは知りなざるまいが、阿母様は此が中々達者ですよ」と三味弾く眞似を駒子にして見せた。此家屋敷はお求めなすつたのかと問ふ人もあつた。麻布天文臺長の名だたる理學博士と、帝大に硬骨の名ある法學博士を子にもつお婆さんは、評判の氣嵩な老婦人である。食饌さびしい苦情が姑から出ると、次には二の饌付きで媳が皮肉をする、姑はむつとして茶漬で済ます、といったやうに旗鼓相當つたものである。其お婆さんが今日の主の刀自に向ひ、立派な御子方を二人もお持ちになつてと會釋すると、駒子の姑は、あの通り青山の方の倅も働いては居ますが、まだまだ私の思ふやうではありませんぬ、と答へた。何れ並々ならぬお婆さん達の中に、駒子はやはり夫の母を偉いと思ふた。

仙臺の義務年限を果して、お茶の水の幼稚園に來た平田の吟子さんを原宿に迎ふる駒子はうれしかつた。逗子時代、吟子さんを丸田君にと肝煎つて、不調に終つた。「土俵際で投げられ申候」といふ熊次への丸田君の手紙は、吟子さんの血統不良といふしらべに基づいて居る事が分つた。「俺が貰ふ」と熊次はいきまいたものである。吟子さんの先輩K女史は、吟子さんの雪冤の爲種々骨折つて國許をしらべ、吟子さんの父が松江侯に愛されたを嫉妬の輩が謔言の結果其様な血統不良の噂も立つた事と知れた。其後しばらく打絶えた駒子にK女史は手紙して、こんな事で絶交はよくないと忠告した。駒子が腹を立てて、絶交する氣なんぞ微塵もない、と返書した。原宿に吟子さんが來た時、駒子が其當時「俺が貰ふ」と夫のいきまいた話をする、「勿體ない」と吟子さんは叫んで、危く涙を落した。二人の交は新になり、吟子さんは心置なく往來する家を東京に獲たのであつた。吟子さんは國に老母があり、姉夫婦に甥姪の幾人が居るが、家道振はず、始終仕送りをして居た。幼稚園擔當の上に、自宅に暹羅の留學生四名を預つて居る。若い娘を預る吟子さんは、用あつて來る青年達にも袴着用を勵行したものである。女生を連れて、よく原宿にやつて來た。暹羅の娘達は、和服を着て海老茶を穿き、日本語を話し、唯

のところにて涙を流し申候」と駒子に書き送る人であつた。熊次は駒子が母校に近づくを嫌つた。然し同窓會が個人の宅に催さるる場合駒子の行くを否まなかつた。同窓の一人Sさんが、東洋汽船の桑港支店長となつた夫と米國に行く事となり、其送別の寫眞に駒子も顔を出した。多くは襷模様の縮緬づくめの中に、ふるい小紋の駒子は、「上等の襟をしてゐらつしやる」と熊次が京都みやげの襟をほめられ、「まあ、大きい鬘」と場末の髪結が結ふた野暮な丸鬘を注目され、赧くなつて寫眞に入つた。然し同級會を原宿の自宅に開いた事は、駒子にうれしい事であつた。其日は朝から小雨が降つて、はにかみやの熊次は客を^{かば}躲して出て了ふた。來會者は三四人に過ぎなかつた。それだけしんみりした友垣の隔てない會であつた。駒子は唯一の馳走に五目飯をつくつた。五目飯の出來をほめた客人達は、駒子の夫の案外バンカラである事、床の間の樵石先生の大堰川行幸の序の書は如何にも自在ながら手本には如何といふ事、何くれと心置きなく話した。氷川町の花嫁時代逸早く訪ねて來た事もある西村の鶴子さんが駒子に曰ふた。「あなたは引込んでゐらして、肥後さんの名がすんすん出ますね。あなたは隱君子——でなくて、隱夫人ね。」

高い頭を持した。ある時はがきが來た。妻は讀めて、夫は讀めなかつた。かな子さんは夫を見縊つて、到頭家を出て了ふた。而して上京し、今駒子を訪ねて來たのであつた。駒子が（熊次のさし金で）茗溪會にも入らず、義務年限も盡さぬ事を、かな子さんは聞いて居た。かな子さんはつくづく駒子を見て、

「駒子さん、あなたはなさう人格をお上げなすつたのね。」

と曰ふた。かな子さんの知つて居る駒子は、子供つぽく無邪氣にただ可愛い女學生であつた。それがこんなに進歩して居るのも、好い夫に連れ添ふからだ、とかな子さんは謂ふ貌かたちをした。だから私は夫を捨てて來たわ、といふやうにも見えた。

「宅は小説家ですから、よく人の心を見ぬきますよ。」

と駒子は言ふた。

かな子さんは顔の色を變へた。而して遽々と辭し去つた。

「奥様、美人のお客様がいらつしやいましたよ。」

と、ある日其頃まだ勤めてゐたおたよが駒子を驚かした。玄關の障子をあけた駒子は、

少し色が黒かつた。柿、林檎の皮を剥くに、鉛筆削るやう小刀の刃を外向きにして右へ廻はすのも珍しかつた。暹羅の風俗は、女も斷髪を普通とする。吟子さんは朝々四人の女生の短い髪を日本人並の束髪に結ふてやつた。學資も無駄に使はすまいと、着物なども三反で四人に間に合ふやうな裁ち方を工夫したのである。皆平田先生になつて、遠慮のない口をきいた。吟子さんの寫眞を見て、「先生が此寫眞のやうだと好いけれど」と言ふと吟子さんは笑つた。原宿に來た後では、みやげの水仙などはがきに寫生させ、片假名の禮狀を名々に書かす事を吟子さんは忘れなかつた。

卒業寫眞にひとしく顔を出して居るかな子さんの來訪は珍しかつた。鹿兒嶋では美人と名をとつた姉妹の姉であつた。眼が奇麗と駒子は思ふた。鹿兒嶋師範の出で、已に小學教師の経験もある人であつたが、お茶の水に來て、卒業間際に唯の小學師範に墮され、かな子さんは絶食して死ぬ覺期をしたものである。年下の駒子が見かねてさまざまいたはり、かな子さんも死を思ひとまつて、兎も角も學校を卒へた。然し誇を傷つけられたかな子さんは、茗溪會を脱け、義務年限も盡さぬ事を駒子は聞いた。かな子さんは神戸の商家に嫁いだ。士分の娘は町人の夫に

れ、旅行中も時間を定めて日課をきちんとやらされる。父親がまた母親を尊敬し、母に對する子の失禮など決して見逃がさず、しつかり詫びるまでは宥さない。だから咲子さんが鳥渡買物をして、七歳になる男の子が、私持ちましやうと直ぐ持つてくれる。日光で千圓ばかりの買物をして、やれ受取証の何のと店で騒ぐを、十萬二十萬の取引も、俺達^わは口約一つでする、と其子の父が笑つた。きまりが悪かつたの、と咲子さんは駒子に曰ふた。長い女學校住居の觀察から、咲子さんは此様な結論に達した。曰く、如何してもミスはよくない、ミスは女の半分ではない。流石に咲子さんだ、と駒子は思ふた。去年の秋京都の女學校で茶菓の馳走になつた女宣教師さんの面影が直ぐ駒子に浮んだ。咲子さんの同志社での師M君は、今日白の女子大學に教鞭をとつて居る。咲子さんが泊りに行くと、M夫人が好い顔をしなかつた。咲子さんは寢衣持參で原宿に来て、夫妻の心置ない歡迎に快くうちくつろいだ。熊次は時間がやかましく、デスクにも、客間にも、駒子の茶の間にも、大小の時計を置いて、午砲にきちんと合はせた。寢ながら時計の合奏に耳傾けた咲子さんは、

「きち、きち、きち——きち、きち」

「まあ、お珍しく。」

と叫ばずに居れなかつた。それは彼女を高等小學時代に連れ戻す人であつた。熊本の高小で自分より一年上のたか子さん。鹿兒嶋生れの身分のよい士の娘、熊本の師團でも高級な軍人の娘であつた。級が異つて懇意な仲でもなかつたが、ある時不圖たかさんの足袋の汚れを駒子が窃と注意してやつた事がある。熊本の大地震に、たかさんの邸の壁が凄じい龜裂の跡を、駒子は傷ましく見やつた記憶もあつた。駒子は忘れて居たが、たかさんに覚えられて、十三年ぶりに今突然訪はれたのであつた。駒子は遽々客をわが六疊に請じ、食卓を隔てて相對した。たかさんはやはり鹿兒嶋出身の軍人に嫁いで、今麴町に居る。駒子の姑と懇意なKのお婆さんの家族が隣同志の縁故から、原宿の住居を知つて訪ね來たのである。縮緬づくめの凛とした奥様ぶり、束髪の黒髪に金の珠の簪が美しかつた。其まるい簪の美しさに、後で駒子は十錢出して青い硝子玉の簪を挿したものである。

これも小學校友達の中田咲子さんはまだ京都に居た。世界漫遊の外人の家族に家庭教師且は通辯として上京し、日光などにも往つたさうである。商人さうなが、子供は規律正しくしつけら

前の玉川にきれ地を買ひに往つた駒子は、みどりさんが「それぢやないよ」「もつと好いの」と願で番頭を使ふ權式ぶりに驚いた。みどりさんはまだ獨身で居た。洋行前の新山君にみどりさんが近寄る素振りには、人目にも立つた。新山君が歐洲留學から歸ると、みどりさんはわざわざ風月堂に誂へて、「祝御歸國」と型でうち出した見事な洋菓子の新山君に贈つた。人前に「顔に泥を塗られた」と新山君が憤慨したさうである。新山君は歸朝早々春畝山人の秘書になつて、目ざましい立身をしたが、其内迎へた新山夫人はみどりさんではなく、春畝侯の舊友、子爵の嬢であつた。新山君を手から漏らしたみどりさんは、然しひるまなかつた。髪の毛の薄いを氣にして食養専門醫を訪ふては蓮根を喰へと勧められ、「あの、蓮は私嫌ひで」と口を手をあてる仕形話をして佐久間のおしんさんが笑つたは大分前の事であつたが、原宿に來て泊つた朝も、臺所から鍋墨をとつて來て、日半日駒子の鏡臺を占領し、丹念に眉を描いたり、額を直したり、徹底したお洒落ぶりに家を舉げて愕然としたものである。「でも、おみ足が眞黒で」と女中が後で笑つた。其内いつもに増す笑顔でみどりさんが来る日が來た。縁談が整ふたさうである。相手は永年露西亞に居て露西亞通の外交官Kさんといふ事である。仕立下ろしの黒縮緬の羽織で來

其音を口眞似して、喜んだものである。

駒子が熊本時代、英國の女宣教師さんに可愛がられて其塾に通ふた頃、今小山夫人とめ子さんと最上級に居たきん子さんに、十幾年ぶりにばつたり此原宿の通りで出會ふた事は、思ひがけぬものの一つであつた。熊次と連れ立つて居たので、駒子はしみじみ挨拶する隙もなかつた。同じ原宿の住居で、Y夫人である事を確かめただけであつた。軍人であるらしかつた。あの日の新聞は、思ひがけない事を報じた。Yさんが自殺した。理由は分からぬが、きん子さんの良人はまさしくわれとわが生命を絶つたのである。駒子は胸を轟かした。きん子さんの心の中が氣の毒でならなかつた。往つて問ふも憚らるるやうで、つい其まゝになつた。其後再び原宿で顔を合はす機會はなく、きん子さんの上は駒子に永い氣がかりの一つであつた。

原宿に越して以來折ふし顔を見する女客の一人は、素木のみどりさん。みどりさんは相變らず女子學院に寄宿して、英語の出教授をして居た。西洋人の通辯などに行くと、着物が粗末ではお伴に見られると謂ふて、深水のおいさんなどの晴着を借りたりする話は聞いて居た。佐賀侯や郵船會社の副社長の家に出入りする彼女は、權高に身をもつ事も心得て居た。善光寺門

それは記憶におぼろである。玄關側の千本格子の内に代診書生が居て、浅黒い婀娜めいた年頃の娘が其格子に外からもたれかかるやうにしてじやついて居た光景が、熊次の記憶にあつた。それがおのぶさんの姉のおとくさんであつた。件の代診とおとくさんが駆け落ちした話を聞いたは其後の事で、其代診がおとくさんを捨てた噂を聞いたは又其後の事である。熊次が十八の春、沼山の又雄さんが今治から熊本に傳道に來た。母が信者求道者の人人を肥後家の二階に集へた。中に母が「おのぶさん、おのぶさん」と呼ぶ二十歳左右の色黒の男のやうな娘が居た。それが松堤老の次女、おとくさんの妹のおのぶさんであつた。熊次は又雄さんについて今治に往つた。又雄さんの母者、熊次の叔母より先に沼山先生について居たかあやんは、松堤さんの昔をよく知つて居た。醫者も上手であつたが、恐ろしい色好みで、妻の外に妾も幾人か持ち更へた。「松堤が今度の妾は、三百日出したてちいふこつばい。」と沼山先生がかあやんに言ふたさうだ。妾もある上に、まだ其上に寡婦に關係したりした。ある夜、松堤さんの門前に赤子の啼き聲が起つた。生れて幾程もない赤兒を捨ててあつた。赤兒は白木綿の着物にくるまり、それには紅筆で「すてこ」と書いてあつた。寡婦の所爲であつた。熊次は其赤兒の成行を知らぬ。

たみどりさんは、羽織の紐なしに居た。これから年始廻はりをするといふに、羽織の紐なしでは、と駒子が見かねて、自分のとつて置き羽織からはづしてやつた。やがて花簪をかざして凜とした花嫁姿の寫眞が送つて來たが、新夫婦揃ふてのそれは見るを得なかつた。兎に角久しい游星が落ちつく所を得て、熊次夫妻も一安堵したのであつた。

相良のおのぶさんが同じ原宿に住んで居やうとは、駒子にも熊次にも全く思ひがけぬ事であつた。夫妻の住居は、原宿でも南の端近く、おのぶさんは青山四丁目に近い寺のほとりに住んで居た。肥後寅一の家では、行儀言葉の比較的上品な華族女學校に長女も次女も通はせて居るが、男の子は附近の師範學校附屬小學に通ふて居る。青山の惣領貞雄は、相良の嗣子と同級であるさうな。そんな事から原宿の住居も知つて訪ねて來たのであつた。年上のおのぶさんを熊次も識つて居た。阿父さんの宮原松堤さんは、熊本のふるい蘭法醫で、沼山社中格の關係から父とも懇意で、脾弱い子供の熊次は始終松堤老の世話になつた。熊本郊外の熊次の家から、畑道を三丁餘も往つて、灌漑用水の流れを渡れば、直ぐ市内の白川町で、松堤さんの家は其町を西へ切れ込む所にあつた。長屋門を入つて、玄關にかかるのだつた。松堤さんの白い頭、赤い顔、

から後備になり、轉々して一時鎌倉にも居た。姉妹が母はいまだに生きて、姉の家に居たり妹の家に居たり。昔ながらの根性で、女等を手こずらして居るさうな。

久しぶりに駒子に會ふおのぶさんは、話の盡きる時がなかつた。不如歸によく女の心もちが出て居るので、あなたの手の跡が見られるやう、と駒子に曰ふた。然しある女の人が

「蘆花さんの小説は、皆奥さんへ書くに

といふたので、まさかそれ程でもあるまいと、辯疏した話もした。

十八年ぶりに會ふおのぶさんの熊本辯、頭の好さを示すはきはきした應對は、熊次に快く響いた。豊かな醫家に生れたおのぶさんは、今以て金錢に淡かつた。祭禮の寄附とりに來た若い衆に、小錢がなくてツリをもらうつもりの十圓札を出したら、持ち逃げされた話をして、おのぶさんが金を駒子に借りに來た時も、熊次は笑つて快くそれを許したものである。

然し根性惡の妾が、正妻をいぢめ殺した事は聞いて居る。其時は流石の松堤老も妾をひどく叱つたさうである。叱つたが、出しはしなかつた。それが銀三百目の妾であるや否、熊次は知らぬ。然し妾は本妻に直つて、女子を二人生んだ。おとくさんも、おのぶさんも妾上りの其妻の所生であつた。松堤さんは死に、おとくさんは墮落し、昔の邸に母子二人ぐらしのおのぶさんに熊次の母は同情して、信仰に導かうとして居たのであつた。熊次が今治へ往つた翌年の暮、肥後一家東京へ引出づる事になつて、おのぶさんは同情者の重なる一人を失ふた。淋しく落魄しきつたおのぶさんを拾ひ上げて、知邊の戸山學校出の陸軍中尉に嫁がせたのが駒子の母であつた。相良さんは神奈川縣の生れ、當時熊本の師團附になつて居た。相良さんも貧しかつたが、花嫁も殆んど着のみ着のままの婚禮であつた。駒子はおのぶさんが一張羅の絞りの浴衣姿以外の姿を思ひ浮ぶる事が出来ぬ。駒子が持つて居る相良一家の寫眞は、それから數年を経て、朴訥姿の相良さんは和服で麥稈帽をかぶり、丸髻で子供を抱いたおのぶさんは、其昔松堤さんの玄關側に見た姉のおとくさんに肖て居た。代診と父母の家を逃げたおとくさんは男に捨てられ、横須賀に勤むる兵曹の妻になつて、鎌倉に居る。日清戰爭にも出た相良さんは、其後豫備

第十三章

ゆく秋に

んは南清の遊から歸つて間もない程の事で、白い毛糸で作つた支那の花簪を駒子にみやげに持つて來た。艶つばい昔の波瀾はもう小十年前の事、二人並んで客間の椅子にかけた處は、しつくりと似合ひの夫婦である。一人で主役する熊次は照れて困つた。客間の話聲を聞きつつ、何と云ふても駒子は顔を出さなかつた。Sさん夫妻の來訪は、歌學の雜誌に何か書いてくれと頼みの爲であつた。檜舞臺には、熊次は斷つた おみきさんは三角欄に飾つた硝子球入りの小さな京人形をお世辭にほめた。熊次はSさん夫妻を連れ、狭い後庭のフレムに咲いたヒアシンスの花など見せて歸へした。直ぐ南清風俗の畫はがきで禮を言ふてよこしたSさんは、ある夜十時頃門前に車をとどめて、更に寄稿の事を懇々頼むだ。然し熊次は好い返事をしなかつた。其内おみきさんの阿父比志嶋さんが病氣で亡くなつた事を熊次は新聞で知つた。比志嶋さんも、一粒種のおみきさんはSさんに取られる、勸銀副總裁の位置に大分長く居て總裁缺員中は實際總裁どころをやつて居たに、其後總裁が外から入つて來たりしたに腹を立てて、肝癪まぎれに辭職してしまつた後は、南米貿易など計畫して自身智利へ往つたりしたが、まだ六十といふ齡で到頭燦くすんだ生涯を終へてしまふた。熊次は勿論葬式に顔を出さなかつた。而してSさんの雜誌

去年の夏は、Yさんの「新社會」が出た。今年の夏には秋水君の「社會主義神髓」が出て、續々版を重ねた。今日の帝國主義を向ふに廻はして、明日の社會主義は鬱勃と若い心に萌えつつあるのであつた。「自家の社會主義を執る」と黒潮卷頭の告別の辭に宣言した熊次である。

ちつとは眞面目な研究も積まねばならぬ。彼は丸善から赤表紙の英文社會主義叢書を兩手に抱く程買ひ込んだ。然し彼はそれを讀むでもなく、紙も切らずに了ふた。理論のこちたきを厭ふばかりでなく、彼は文藝に盛つた社會主義にも眼を曝さなかつた。英吉利の基督教社會主義者キングスレエの諸作も、ベラミイも、トマスモオアも、買ふには買つて、ついぞ讀まなかつた。讀まぬ彼は、書かぬ彼であつた。書くは唯日記、讀むは新聞雜誌か軽い英文の讀み物。餘の時間は、大抵園藝に過ぎて、閑なやうな、忙しいやうな日が日の後につづいた。

歌學のSさんがおみきさんと夫妻うち連れて原宿を音づれた。それは此春の事であつた。Sさ

鹿兒嶋から熊次を肥後の水俣まで呼び戻してくれたは岩城の叔父で、叔父の頼みで熊本から水俣まで熊次を迎へに來てくれたのが、大江の義兄と岩城のKさんであつた。熊次が熊本に居る内、Kさんは突然咯血して、すでに死の宣告を受けた。「安心して天國に行け」と友人に言はれた彼は、莞爾として頭を掉り、「否、否、未だ中々死なぬ。」と笑つた。熊次が上京する時、彼は病床のまま故山に歸る事になつて居た。「馬喰ばくろをしとるてち」と父が顔を曇らしての話を熊次が耳にしたのは、上京後しばらくたつての事である。其後長崎に移つたと薄々聞いて居た。誰やら手紙で其窮狀を報じ、看過しにすると非難した話を、兄から聞かされた事もあつた。其當人から突然左の手紙を受取つた時、熊次はうら羞かしい氣もちがした。獨立の事は長崎にも響いたものか、封筒の宛には「黒潮社にて」とあつた。

絶えて久敷御無音に打過ぎ、頻りに御懷かしく存居候。承り候得ば、愛兄には、愈々天佑の下に靈腕を揮ひ、婉曲にして迫らず、優美にして若かも犯すべからざるの妙筆を以て社會の渴仰に應じ、斯文の缺を充たし、大に間接の傳道を御試し成され居候由。實に欣賀措

には到頭書かすにしまつた。

十五年ぶりで従兄岩城のKさんのたよりに接した。それも此春の事であつた。それは宛ながら墓の中からのたよりであつた。岩城の惣領に生れて、六尺近い堂々とした體軀のKさんは、氣のやさしい、藝術家肌の人であつた。早く母を亡くし、肥後伯父の家に成長して、寅一熊次等とは兄弟同然にそだつた。西郷戦争前に東上して、横濱で宣教師バラの塾に居、洗禮も受けて居た。其後歸國して伯父の社中の共立學舎に居、また従弟寅一の塾に教師と學生とをかねて居た。熊次はKさんに文章を直してもらつたり、日本外史を教はつたりした。Kさんは小説を書いたり、印刻をしたり、文人畫をかいたり、風流自ら喜むで居た。熊次が小説好きを知つて居て、ある時Kさんは窃と机の抽斗から一冊の稿本を取り出して熊次に見せたものだ。それはKさんが何時か書くつもりの小説の骨組を書いたもので、馬琴風に二行題を並べ、百回もつづく大小説であつた。年下の寅一に始終壓されがちのKさんは、塾に居て所を得ず、到頭はなれて其郷里に歸つて居たが、熊次が京都を飛び出し熊本に一先づ落ちついた頃は、Kさんは熱心な基督信者に復かへつて、妻子をもち、熊本新聞主筆の傍ら英學校を興したりして居た。放浪先きの

愛兄御傑作の「不如歸」并に「想出の記」等は逐一拜見いたし、覺へず袖を相絞り申候。特に「思出の記」に至りては、萬感實に極りなく、往事を追懷して歷々見るが如く、我にも幾度か舊夢を喚び起さしめ申居候。尙ほ此上ながら我等は深く愛兄の靈にも肉にも愈々御健全ならん事を一心に特禱仕候。以上。

紹介狀持參のM生は、人吉生れの長崎東山學院出、今は白金の學院に研學をつづけて居る體のずんぐり口のねんばりした切口上の意地者らしい青年であつた。其話によれば、從兄Kさんはある篤志家の勸に任せ、病床に寢たまま舟で長崎に移り、これから今まで寢たきりでゐる。それで長崎に来てから嗣子をさへもうけた。病苦貧苦の中に晏然として、聖人と目され、青年子弟湯仰の的になつて居る。病間に隨感錄を書いてゐるさう。熊次は從兄に手紙を書いた。「摩上の貴兄は却て靈界を濶歩し、頑健の生等は塵土に踟躕す」と書き、隨感錄の出版を勧めた。書を得てKさんは喜び、病の間々に其稿を續けた。十月五日に稿を終へて、病勢急に進んだ。危篤の電報が原宿に届いた。出版書肆に談じて、といふ名義で二十圓長崎に送つた。届くか届かぬ

く能はざると共に、甚だ御美ましく存上候。二に小生事も御熟知の通り明治廿一年の年頭に於て、既に死の宣告を相受け候らひしも、全能者の特感殊遇に由り死一等を減ぜられて十有六年の間爰に食裡の俘囚と相成り居申候。去れど險しき峻坂も、攀ち登りて絶巔に達すれば、風光明媚の勝地ならざるは無きが如く、人世行路の艱難も、踏破し來れば又實に愉快なる者にて、今正に小生が置れたる場所も、天門近く紅塵遠き眼界萬里の境に御座候得ば、此義は幸に御安心可被下候。

(中略)

尙ほ小生が當時の状態は、萬事M——氏より御傳承被下度、且又御兩親様方へは呉れく宜敷仰せ上げ被下候様、是又偏に願上候。何も先は右要用迄、勿々不備。

三月五日

蘆花詞兄

知不足軒生

悟下

尙々

さんは困つたやうであつた。而して「日本の曉鐘」は到頭緒論だけで、續稿は送つて來なかつた。然し白人跋扈の憤慨を漏らし、基督教によつて日本の國格を上げるといふ岩原さんの精神は緒論に盡きて居るので、岩原さんの所志は果されたわけである。

長崎で従兄のKが死ぬ。直ぐ十月二十五日熊次の三十六誕辰が來た。一週日たたぬに、紅葉山人の計が傳はつた。齡は熊次より唯一つ上、然し山人の仕事は終へて居た。熊次は山人に唯一度會つた記憶をもつて居る。K誌の原稿取りを一時させられて居た頃、牛込は横寺町の二階に山人を訪ねたものである。明々と日の射した二階の書齋に、山人は几の座をば横向きに、手づから苦茗をついでくれた。卷苴をつまんだ右の手の甲で頻に二皮眼の眼尻を摩つて居た。相對して氣もちの好い人であつた。山人は忙しくて、熊次の原稿頼みは成功しなかつた。然し彼は無駄足踏んだ事を少しも悔いなかつた。山人の數ある著作の中で、「心の闇」と「多情多恨」は殊に愛讀したものである。二六新報に山人の胃痛が發表された時、熊次も胸をうつた一人であつた。然し青山の葬儀に彼は顔を出さなかつた。葬式歸りの鴨志田君は洋服、詩人K君は羽織袴姿で原宿を訪れた。鴨志田君には去年の春まだ黒潮が新聞に出て居た頃、逗子歸りに鎌倉は長

に、死去の電報が届いた。十月二十一日である。享年四十三。最初咯血して死の宣告を受けてから十六年彼は病床に生きたのであつた。熊次の從兄に致す志は、唯其遺稿の出版のみとなつた。

黒潮獨立に會心の笑を漏らしたらしい布哇の岩原の義兄から、「日本の曉鐘」といふ小冊子の原稿が届いた。それは海外から日本を警醒する一大論文の緒論で、布哇渡航の體驗から、米人宣教師が自分一等の航海に、日本人の傳道師は亞細亞三等に乗する不埒をはじめ、白人の跋扈黄人の卑屈について燃ゆるやうな憤慨を漏らし、基督教によつて日本を建て直さぬ限り、黄人の頭が上る時はない、と切言したものであつた。兩親の後趁ふて布哇へ往つたお君なども淨寫を手傳ふて、一大警世の著たるべき意氣組のものであつた。黒潮社以外は御免、是非黒潮社から出してくれ、と岩原さんは書いて居た。熊次は甘えたやうな其口吻が嫌であつた。「黒潮社は余一人の社」で、自分のもの以外を出版する所でない。ゴルドン將軍傳を出したK書店に談じて、同書店から出す事にした。四六版にして何程もない小冊子、K書店も異議なく引受けた。小冊子は直ぐ出来上つた。それを布哇へ報ずると、少々ながら書店に債務があつたらしい岩原

新墓を訪ふた。ついでに不如歸のヒロインの墓も見舞ふた。黒潮が煽つたり、新派の芝居が廣告したりして、不如歸はまだ盛に版を重ねて居る。而して其女主人公の墓は、頻に好事の人に見舞はれて、墓のまはりの木柵は鉛筆の樂書きで眞黒になつて居た。

紅葉山人の墓に詣で、浪子の墓を見舞ふたりした者は、熊次のみでなかつた。士官學校をいよいよ卒業して旭川に歸隊する篠原良平が暇乞に來た。今青山墓地から來たといふのであつた。時局が追々切迫して、軍隊に居る身に其暇があるや否や分からぬが、お頼みする小説の原料は、最初からまとめて書き直したい、と云ふので、熊次は追々に受取つた或はペン書き、或は鉛筆書きの斷片的感想記を一先づ彼に返へした。乃木閣下に寄生した緣故で、題名を

「寄生木」
やどりぎ

としやうかと思ふといふ彼の提議に、熊次も「それがよからう」と同意した。返へしてもらつた一括の原稿を衣兜にしまひ、立關先で舉手注目の禮をして、篠原良平は北海道に去つた。

去る者は去り、逝く者は逝き、あたりは頻に動いて居る。追々闌くる年と共に、人の浮沈を伴ふ氣流の動きが急速になつたかのやうである。女中のおたよが死んだ。瘡せこけた父の八百屋

谷の其浪宅を訪ふて大佛餅の馳走になつた以來である。其前にはニイチエ熱を排する「馬骨人言」が讀賣に出て居た頃、原宿に来て、それが逍遙大人の筆である事を話したり、樗牛の友の一人などは「ニイチエをやるんだ」と盛に耽溺する話などをした。熊次はツアラストウラの英譯も見て居なかつた。T君などはとくに讀んで、まあ讀んで見たまへ、と一冊を鴨志田君に齎したさうである。鴨志田君は人に頼まれたといふて其時M君やT君の筆美はしく書き流した扇を持つて居た。M君の「夢のいつはり」といふ歌を、野狐禪だなど云ふてやつたと笑つて居た。これから妻の事でも何でも構はず書くのだと謂ふT君の創作態度の轉機について話しても居た。それから鎌倉落ちが約一年もつづいて、此頃は出京して原宿のY先生と近事畫報を経営して居る事は、熊次も聞いて居た。鴨志田君は熊次が文壇大家に最後の禮義も盡さぬ吾儘を詰り顔に熊次の顔を見た。葬儀は非常に盛大で、眞摯であつたさう。「I君の顔など見ては居れなかつた。」と故人の親友の一人の名を鴨志田君は云ふた。逍遙博士などは到頭卒倒したさうである。熊次は話をそらしてしまふた。人の顔を見たくも見られたくもない彼は、そんな場合に顔を出す事を避けた。然し一しきり死の騒ぎが濟むだ頃、ある日熊次は青山墓地に山人の

次は駒子に云ふて彼女を出す事にした。彼女の詫も聽かなかつた。お秋は泣き泣き、しらべて下さい、と自分の行李を持ち出した。馬鹿、其様な疑ひ故に出すと思ふか、と叱つて、到頭出して了ふた。彼女は園藝好きの主人を宥むべく、山からこいで來たらしい木の芽生など藁苞にして持つて來た。お秋が出た後、それは長いこと臺所の口に其ままうちやつてあつた。

が、彼女の死を知らせに來た。おたよは井に身を投げて死んだ。「死に臭い、死に臭い」といふて居たが、彼女は到頭死神の贄になつて了ふた。四月の來訪は、暇乞のつもりであつたのか。奉公先を一軒一軒残らず訪ねて廻つたのは、告別であつたのか。何處かに生命の綱を探がし當てて生きたい心もあつたらうに、何も爲す與へずに彼女を死なして了ふた。熊次は駒子と相見て黯然とする外なかつた。次郎さんは如何なつたか？ 消息はさつぱり分からぬ。白沈丁花の裂け目に残つたおたよの手の跡が、いつまでも夫妻を哀ませた。

おたよが去り、水浴びせられてお夏が去つた後で、栃木生れのお秋が勝手もとに働いた。姉は惻發者、父母の烈しい喧嘩最中、「痛、痛、痛、——指が折れた。」と叫んで、兩親の注意を喧嘩から引さらふ程機轉の利いた女さうな。妹のお秋は濃い眉をびくびくさせて氣任せの吾儘者、中々素直に言ふことを聽かなかつた。彼女は一度戀はれて横須賀の兵曹の妻となつた。髯の長い柔かな男で、士官達にも愛され、耶蘇信者で、常に小形の美しい聖書に讀み耽つて居たさう。涙と共に彼はお秋を諭したが、お秋は到頭切れて了ふた。彼女を戀する他の水兵が彼女を誘惑したのであつた。お秋は奉公後も時々家をあけた。三度目は約に背いて三日も歸らなかつた。熊

第十四章

英譯不如歸

に過ぎて了ふと、最早只是濟まなかつた。釜山から京城へ朝鮮を貫ぬく鐵道の工事は、夜を日に
ついで急がれる。陸軍第一の頭腦源太郎が參謀總長に任ずれば、日清戰爭に沈勇果斷を見せた
平八郎が常備艦隊司令長官に轉補する。御親閱の第十師管の陸軍大演習も、時節にふさう眞劍
味が溢れた。師走に入ると、雲行ますます急になつた。當局の腹は案外据わつて居た。然し局
外の眼に當局はいつものろくさい。帝大の元氣な博士が七人、主戰論を提げて奔走し出した。
民間志士の躍起運動も目まぐるしくなつて來た。帝都の新聞の調子は日に日に戰を以て燃えは
じめた。明治三十六年の師走は、押詰つた、息苦しい昂奮が路行く人人の顔顔に漲り、足音さ
へもただならず胸に響いた。

去年の暮、黒潮の獨立戰に覺えある武者震ひを、熊次は今年の暮にまた大きく再びする時が來た。日露の間が險しくなつた。

遼東還附から已に九年、露西亞側では西比利亞鐵道は全通するし、旅順の背面要害も大抵出來上つた。日英同盟が結ばれて、日本の腰も据わつて居る。今年六月に露西亞の陸軍大臣クロボトキンが日本の容子を見に來た。參觀に來た長劍三尺見上ぐるやうな露西亞の將軍を目掛けて、陸軍幼年學校の健兒共が銃劍の尖を揃へ、石垣を攀ちて突貫した氣勢にも、彼は十分に日本の意氣を讀んだ。非戰に傾いて彼は歸つたと傳へられた。然し露西亞は戰ひの墮力に駭られた。傲岸なアレキセエフが極東總督として旅順に腰を据ゑた。朝鮮に嵩にかかる。拳匪以來の駐屯兵を引揚ぐる公約を無視して、却て續々滿洲に増兵する。外交上の押問答が夏以來もどかしく日露の間に往復する間に、双方の準備は公然押進められた。最後撤兵期日の十月八日が平氣

た。母も父を奈何ともする事は出来なかつた。到頭益雄は長崎へ逃げ出した。益雄の母は、悴を一人手放すを懸念して、媳の安子に益雄の後を趁はせた。益雄夫婦は長崎から大阪に、大阪から東京に来て、早速青山の叔父を訪ふと、叔父は臍甲斐ない彼を喚つて面會しなかつた、悄悄原宿の叔父を訪ふと、叔父は留守であつた。

益雄は可愛い伶俐な子であつた。熊次が十代の昔は六つ年下の此甥を弟の如く愛したものである。熊次が今治京都と家を離るるに及んで、益雄はさながら熊次の空巢に入つて祖父母に愛され、肥後の一家が熊本から東上する時も、益雄はせがんで東京について來た。熊次が京都から夏休に東京に來た時、隱宅の女中が配膳するにも益雄を上、熊次を下にしたのを、熊次は怪しからず不快に思ふたものである。それから叔姪こもごも各自の途をとつて自然に疎くなつた。此前の上京にも彼は原宿に顔を見せなかつた。然し青山の叔父に刎ねられて途方に暮るる若夫婦を、熊次は流石に氣の毒に思はぬわけには往かなかつた。熊次は直ぐ拾圓封入した手紙を手に持たせて、夫婦が居るといふ赤坂一ツ木の寺にやつた。留守に來て氣の毒した、氣永に職を求めなさい、と書いてやつた。眞實うれし涙で書いた返書をよこした益雄は、あくる日原

國は國と爭ふ時、家の中にも戰爭は已まぬ。今年の始めには、弟が兄に叛いて獨立の旗を擧げた。年の暮には、父に闘ひ負けた子が東京まで落ちて來た。ある夕、外出から歸つた熊次は、大江の甥益雄が留守に訪ねて來、不在と聞いてすごすご上らずに歸つた事を駒子から聞かされた。

夏の初、青山の叔父の裁判で父を無理隠居させ、氣を負ふて歸國した益雄は、十分に勝ちおぼせたつもりであつた。益雄の父は家業の外には酒を飲む事と惡詩を作る事と二つの道樂がある。益雄は閑暇になる父の爲に、詩韻の書など澤山買つてすすめたものである。然し機織が生命の父は、専ら風月に老ゆるを欲しなかつた。東京でこそ青山の義弟に壓されて一時忍び難いを忍んだものの、歸れば主であり父である。益雄は一向隠居せぬ父、昔のままに自分を使用人の一人の如く追ひ使ふ父を見出した。東京での約束に違ふと嘆つても、父は物の屑ともせなかつ

三

明治三十七年が來た。神武紀元二千五百六十四年、西曆は一千九百〇四年。年といふ年の中にも、分けて今年は日本にとつて建國以來の一大事の年であるべく何人にも感ぜられた。日清戦争以來十年、一大試練が日本に臨む年に相違なかつた。帝都の空氣は凜々と引きしまつた。元旦の松にきほふ國旗の日の丸も、赤熱した血塊の色に見られた。陸軍始の觀兵式の人馬のつく息にも、喇叭の響、砲車の轟きにも、身の毛立つものがあつた。血のめぐりの遅い大男と、氣早な小男の間に、外交上の往復はまだもどかしく續いて居た。然し公法の儀禮を越えて、戦機は無遠慮に熟した。破裂は最早單に時日の問題であつた。去年の正月自家の獨立戦に昂奮し切つた熊次は、今年はまた更に全身心を揺り撼かす昂奮を感じた。布哇の岩原さんに熊次が書いた戦争の止むべからざるを報じた年始狀を讀んで「體が震へる。」と駒子は涙ぐんだ。

同志社以來、熊本以來の浦田君は、さきに米國留學から歸つて來て、一昨々年の春創立された

宿に顔を見せた。何か口はありますまいか、代數か幾何の教師でもと曰ふた。數學は得意で、織物の紋様の工夫なども彼は巧みであつた。數學教師の口は一寸なかつた。然し熊次は駒子と相談して、益雄の妻の安子をむら子の家庭教師に來てもらふ事にした。午前の内二時間で、一回五十錢といふ事にした。始めて見る益雄の妻は、名さへ同じい青山の義姉に肖た、さらさらした女であつた。ずんずん熊次のデスクに寄つて來ては、叔父を後退させたものである。彼女は朝々一ツ木の寺から原宿へ來て、物覺の甚しくわるい女生に讀書算術を教へた。其内益雄の大阪の知邊から其地の興信所に口を見つけたといふ知らせがあつた。仕事の擇り好みをして居る場合でない。益雄夫婦は早速大阪へ立つて往つた。

遽ただし、穩やかならぬ年の暮であつた。

米國に書き送した。

Tokyo, Jan. 21st, 1904.

Dear Mr. Turner——

To speak the truth, I am rather unwilling to have my story "Hototogisu" translated and published in America. I do not speak this from false modesty, but you have chosen a poor specimen while there are much finer productions here which would have more suited your purpose. But then, you tell me that the matter has gone too far. Well, let me hope that this will be a forerunner to herald the worthier ones to come.

You ask me how I came to write the story. Well, it is based on a fact. I was much moved and so the story grew. It is true divorce law securing in some degree the right of women and tending to uphold the holy tie of marriage has been promulgated since then, and the ideas of humanity, truth and justice are day by day taking their roots in the place of the worn-out Confucian ethics. Yet I regret to say that the old devil does not die so easily, and there are much shedding of tears in this age of transition. In truth, it is the age of emancipation. We are struggling to throw off the thousand fetters

目白の女子大學に今は同窓の親友M君、A君等と教鞭をとつて居た。浦田君が滯米中懇意にしたボストンのTurnerといふ男が、書肆を創むるについて、何か日本の小説の翻譯を出したいと謂ふ事で、浦田君は熊次の不如歸を推薦し、オペリン大學に英文學を研究して居るSといふ日本留學生が翻譯を引受け、最早脱稿して居るさうで、浦田君を介して熊次の承諾と寫眞と序文を丁君から要求して來たのは、舊冬の事であつた。熊次は一向氣のりがしなかつた。これが日本の小説と外國人の眼の前に出すに、不如歸では氣がひける。翻譯も氣づかはれる。煮えきらぬ返事を浦田君にして置いた。浦田君は案外らしかつた。不如歸の著者は、人の來訪を拒まぬが、自分は人を訪はぬ人である、と先方に書き送つた。それから寫眞の要求については、髭でも剃つたらと茶かしたので、丁君の催促狀には、肥後さんは未だ髭を剃らぬと見える、と書いてあつた。其内年が明けた。露西亞を相手の必死の決闘がもう眼の前に迫つた。日英は同盟して居る。が、米國の好意は繋ぐに努めねばならぬ。一介の駄小説が此際米國に翻譯出版さるるも、ただ事ではないのだ。熊次は腹をきめた。事後の承諾は已に與へたし、寫眞は到頭送らなかつたが、明治三十七年一月二十一日の日附を以て、減多に書かぬ英文で、左の序文を熊次は

親愛なる　　タアナア君足下

實を云へば、自分の小説不如歸が米國で翻譯出版さるる事を小生は寧ろ望ましくは思はぬ。似而非謙遜ではないが、日本には足下の望に叶ふもつと立派な産物があるのに、足下は貧弱な標本を擇んでしまつた。然し足下の言によれば、事がもう大分進んで居る。よろしい。それでは此を先驅として、もつと貴重なのが續々出る事にしたい。

如何して此小説を書いたか、と御尋ねですが、左様、ある事實に基づいたものです。小生は随分感動させられた。そこで小説が出来たのです。勿論其後離婚法も發布され、婦人の權理も幾分か確保され、結婚の聖締もやや保持さるる事になり、老朽した儒教倫理に代つて人道、眞理、及び正義の念が日は一日と根ざして來つつあるは事實です。然し残念な事には、古い惡魔は容易に死なず、斯過渡時代に流るる涙は少くない。

and bondages, which however cost much tears and many a victim falls in its course. The present story is the superficial picture of one. You ask me whether I have written with the purpose to reform. Well, yes and no. Perhaps I wished to be more novelist than social reformer. But then, you know, to expose an evil is sometimes to depose.

It is said that one half of the world does not know how the other half lives. If this insignificant story—and many more significant ones, I hope—may serve to acquaint you who live on the other side of the Pacific with the manner we live, how we feel and what we think, what struggles we are passing through, and so tend to tighten the bond of sympathy between us, I think it will be a service to the cause of humanity. Lastly, let me avail this opportunity of appearing in your public to thank the generous sympathy which you have always shown toward us, and which is especially gratifying to us now as we stand on the eve of the great national trial.

Yours truly,

K_____

的大試練の夕に立つ今、殊に悦ばしい諸君の豊かな同情に對し、ここにあらためて感謝を表したい。

一九〇四年 一月二十一日

東京に於て

小説
富士
第三卷 終

實に今は解脱の時代です。我々は千百の桎梏束縛を刎ねのけやうともがいて居る。従つて流るる涙は多く、途中に斃るる犠牲も多い。此小説は皮相な描寫の一つなのです。足下は改良の意圖を以て書いたかと御尋ねですが、然とも云へ、否とも云へます。恐らく小生は社會改良家より小説家たる事を欲したでしやう。然し、御存じの通り、惡弊の曝露は、往々にして惡弊の廢止です。

よく云ひませう、世界の半分は餘の半分が如何して生活するかを知らぬ、と。若し此つまらぬ小説——而して願はくはもつとつまる多くの小説——が、太平洋の彼岸に住む諸君に、我々が如何な生活をして居るか、如何様に感じ、何を考へて居るか、那樣な争鬭を経過しつつあるかを知らせ、斯くて御互の間に同情の紐を引きしむる一のためよりもならば、それは人道の爲の一奉仕であらうと思ふ。終に臨み、小生は貴國公衆の面前に立現はるる此機會をもつて、諸君が毎に我々に表する、而して我々が國民

昭和二年一月十二日印刷
昭和二年一月十五日發行

小富士第三卷並製

定價貳圓

版權所有

著者

東京府北多摩郡千歲村粕谷

德富健次郎
德富愛

發行者

東京市京橋區南金六町九番地

福永良一

印刷者

東京市京橋區堀山町五番地

渡邊吉郎

版元

東京・銀座尾張町

福永書店

旅費口屋東京四〇四六六番
電話銀座一六九九番

第四卷 續刊

大正十四年五月出版

小説
富士
第一卷

製並 製特

| | |
|---------------|--------------|
| 四六判九ボイント組六百六頁 | 日光色鹽瀬表紙三方金箱入 |
| 定價 五圓 | 送料 廿六錢 |
| 四六判九ボイント組六百六頁 | 月光色リンネツト表紙箱入 |
| 定價 貳圓 | 送料 廿錢 |

徳徳

富富

健愛

次

郎

著

いと小さき夫妻が結婚生活史、やがてまた

新世界の創造史。第一卷は明治二十七年か

ら明治二十九年にわたる。

第四十一版

東銀 京座 福 永 書 店 振四〇四 警六六 東六六

昭和二年一月十五日 初版

昭和二年一月十五日 二版

昭和二年一月十六日 三版

昭和二年一月十六日 四版

昭和二年一月十七日 五版

昭和二年一月十七日 六版

昭和二年一月十八日 七版

昭和二年一月十八日 八版

大正十二年四月出版

竹崎順子

四六判・九百頁・折革式天金箱入
濃茶綿琥珀表紙・三枚短冊石版七度刷
肥後略圖石版壹葉・日記拔萃二色版
凸版各一葉・特撮寫真版十三葉
定價四圓五十錢
送料書留廿七錢

徳富健次郎述

山に阿蘇、海に不知火、永劫に燃ゆる火の國肥後に、擇まれた「女」の家がある。矢嶋と云ふ家である。主婦の鶴子は、百年前の新しい女であつた。鶴子の腹から男の子二人、女の子七人生れた。七人女は鶴子の七變化である。七人七様の異つた生涯を渡つて、女の種種相を見せた。「女」の完成の爲にさまざま努力された貢献である。中に就て、堅實な父と潑刺とした母との尤もよく調和された體現が、七人女の三番目、竹崎順子である。

百〇一年前肥後の片山里に生れ、日露戰爭當時八十一歳で世を去る時、自傳の起稿を甥なる著者に托した。十八年目に著者は其遺托を果して此書を成した。小説富士を讀むにも、缺ぐ能はざる参考の一書である。

東銀 京座 福永 書店 振替 〇四 東六 京六

大正十五年二月出版

第十九版

小説 富士 第二卷

特製並製

四六判九ポイント組四百五十頁
日光色鹽瀬表紙三方金箱入
定價五圓・送料廿六錢
四六判九ポイント組四百五十頁
オリーブ色リネット表紙箱入
定價貳圓・送料廿錢

徳徳

富富

健愛

次

郎

著

「富士は今覺めんとすなり。

今覺めぬ。

見よ、嶺の東の一角薔薇色になりしを！」

——（自然と人生、「此頃の富士の曙」から）

小説富士の第二卷は、

『富士』の目ざめの卷である。

第二卷は明治三十年より明治三十三年にわたる。

東銀 京座 永福 書店 振替 〇四 東六 京六

大正三年十二月出版

小説
黒い眼と茶色の目

三六判洋布装天金箱入
定價二圓三十錢
送料書留二十錢
第三十一版

徳富健次郎 著

身邊を包む五色幕を切つて落して、青天白日赤裸に立現はれた著者青春の自畫像はこれである。十九、二十歳の著者は斯く生き斯く戀した。其戀はかりそめの戯れかのやうに起つて著者の一生に甚大に影響し、著者を驅つて人生の裏小路に追ひ込むだ程深刻に、譬へば氷山の水面に顯はるるはさもなくして眼に見えぬ水中は恐ろしく根深いにも比す可きものであつた。本書は其告白である。

小説富士に對して、小説「黒い眼と茶色の目」は、楔子又序曲である。

* * *

* * *

東銀 京座 永福 書店 振替 〇四 東六 京六

大正七年四月出版

新 春

第六十六版

□□—□□
三六判四四百六十頁
綠金裝羽二重表紙
定價二圓三十錢
送料——金二十錢
一著者スケッチ色刷二葉
特撮寫眞版五葉
□□—□□

著 郎 次 健 富 德

龍舌蘭は六十年で花が咲く。著者は人生五十年にしてやつと「新春」に到達した。それ程彼が負荷は重く、束縛は強く、苦闘は長かつた。彼が「新春」の歡喜の深大なる所以である。

本來の面目、赤裸の自然に復へつた一のアダムの一つのイヴと天人の前に啼れて一になる時、其處に新天地が開かれる。醒めたる一對の増すに従つて世界的イルミネーションは次第に點火される。爆裂彈にあらず、砲銃火にあらず、一切の強制を須ひぬ眞の革新は、其處から生れねばならぬ。

「過去」の抑壓に苦しめられ進出の路を容易に看出し得ぬもどかしさに焦躁し或は自棄する青年男女に向つて、老少の下壓上壓の中間にはさまれて苦しまぎれの冷笑若くは妥協に通るゝ中年男女に向つて、若い生命の上壓を苦しみ妬む老年男女に向つて、「新春」は胸を開いて語る。彼は已に六萬五千人に語つた。

彼は更に一人もヨリ多くの人に語りたい。

何故なれば、「我は復活也、生命也、我を信する者は死ぬるとも生くべし」と著者の身を假つて宣するは即ち自然の聲で、自然は一切を愛するからである。

東 銀 座 京 福 永 書 店 振 替 四 〇 六 六 京

明治三十四年十二月出版

ゴールドン將軍傳

第九版

四六列三百頁
定價一圓五十錢
送料二圓十錢

徳富健次郎著

*

*

*

主人公は著者の好きな男の一人、楽しんで

で書いた傳記の一つである。打算的の英吉

利に、飛びはなれた東洋的色彩を帯びた快

男兒の面目は、潑刺として眼前に跳る。

*

*

*

振替五
東三

警 醒 社 書 店

東 銀
京 座

大正二年三月出版

みみずのたはこと

四六判七百〇六頁箱入
濃茶綉琥珀裝天金
挿畫寫眞版八葉
定價三圓五十四錢
送料書留二十錢
第百一十二版

徳富健次郎著

「みみずのたはこと」は、著者が齡四十にして初めてしかと大地に脚を立てた最初の生活記録である。大正二年の出版で、年を経る十四、版を重ねる百十二、十萬餘部を出して、いまだに凛々と生きて居る。それは土に注がれた愛のしたゝりで、土は所謂地久、而して「愛は何時までも墮つる事がない」からであらう。前版は縮刷六號であつたが、復活版は最初に復へつて四六型五號とし、挿畫を新にし、卷末に著者の最近消息を報する一長文を添へた。「みみずのたはこと」に著者のつく奥印である。

東銀 京座 福永書店 振替 四〇六 東京 六六

明治三十九年十二月出版

順禮紀行

菊半裁判四百八十頁
定價一圓八十錢
送料書留十八錢
第二十一版

德富健次郎著

露西亞に闘ひ勝つて然も衷心勝利の悲哀を感じた純眞な日本の靈魂は、身を順禮に甞しつつ、遠くパレスチナに耶蘇の足跡を尋ね、喧嘩相手の露西亞其ものにすらトルストイを訪ねた。ヨリ大なる日本を生まんが爲である。其意味に於て、一卷袖珍の順禮紀行は、新日本文學に於て永劫に輝やく寶玉の一である。

* * *

* * *

東京五
管振三

警 醒 社 書 店

東京座

明治三十六年二月出版

小説

黒

潮

四六判三百九十頁
佛蘭西式紙裝釘
定價一圓五十錢
送料書留十八錢

第三十四版

徳富健次郎著

* * *
日露戦争前に著者は此小説を書いた。日露戦争終るやがて一

度、大正二年の夏に尙一度、著者は其續稿、若くは准續稿を書

きかけて止めた。中心がよくつかめなかつたからだ。中心がつ

かめて、小説「富士」が初めて書かれた。地質學者の言によれ

ば、富士の裾の愛鷹山は、富士よりふるい噴起であつた。愛鷹

も美しい山である。

* * *

*

*

東銀
京座

警 醒 社 書 店

振五
替五
京三

大正十三年九月出版

太平洋を中にして

第四六三十八頁
定價一圓五十錢
送料書留十八錢
第六版

德 富 健 次 郎 編

太平洋を中にして、日米の在らん限り、日米問題は根本的に解決を要する。それについて提出された答案は無數。然し編者の所論のやうに徹底的なものは斷じてない。それは人情自然の立場から下された永久性の斷案である。内治も國交も人情が支配し、自然が裁く今日、「太平洋を中にして」を差措いて、日米問題は言はれない。

*

*

*

*

*

*

振替 東京 一五五

文 化 生 活 研 究 會

東京 銀座

明治四十二年十二月出版

小説
寄生木

四六判一千百餘頁
總洋布裝美本
定價三圓五十錢
送料書留廿七錢
第六十五版

徳富健次郎 著

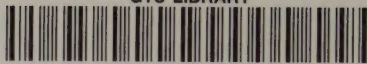
乃木神社が建ち、人として愛し苦しんだ乃木さん夫妻は、神にまで祀られる。献げらるゝ供物は多い。然し乃木さんに愛され、乃木の寄生木となつた青年士官小笠原善平の『寄生木』程貴重なものは少ない。日露戦争に戦死した乃木二令息に後るゝ四年、乃木大將夫妻の自刃に先立つ四年、彼は情義の八重がらみに身一つを扱ひかね、故郷岩手で短銃自殺を遂げた。彼は死んだ。然し死ぬ前に『寄生木』を書き遺した。多情多恨の彼が二十八年の生命を打込んだ留魂録『寄生木』、それを遺囑によつて著者が永久に活かしたものが『小説寄生木』である。大震の火に紙型も灰になつたが、新に凸版に附して第六十五版を發賣する。

警 醒 社 書 店

東 京 銀 座

振 替 五 三 京 東

GTU LIBRARY



3 2400 00559 9802

[illegible]

PRINTED IN U.S.A.

GTU Library
2400 Ridge Road
Berkeley, CA 94709
For renewals call (510) 649-2500
All items are subject to recall.

